カクレアソビ／幕間

――――――呪え。

壊れた管楽器のように細く歪な鳴き声が聞こえる。

おそらく何年と変わらぬ田園。地中から這い出た蛇のようにくねり曲がった砂利道。それ以外の未来が無いと告げるかのような一本の道。

その道を歩くしか、ない。どこへもいけない。

周囲は森。城壁のように村を包囲する山々の腹の中は、どこへ出るか分からないほど深く、邪悪な色に染まった樹海。四方は閉ざされている。救いを求めるように仰いでみたけど、空は、手で掬えないほど粉々に砕かれた宝石をちりばめた蓋を被されて、無限に増殖する卑怯な夜の闇で封をされていた。

匣だ。

匣は静かに閉ざされ、けれど匣の中は生ぬるい息を吐きながら残忍を嘲笑し、血と肉が腐る匂いが充満するのを、今か今かと待っているかのように恐々とした狂気の群れを孕んでいるのを、私は知っている。

村の大人達は、私が子供だから無知だと罵る。

どんな事実も、私が口にすれば、絵空事だと馬鹿にする。

子供だからという、そんな些細な事で無知だと蔑む。

大人だからというだけで、子供より優れていると盲信している。

そして、本当に馬鹿な子供は、そんな馬鹿な大人の真似ばかりして、厚顔無恥な姿を倣う。だから誰一人、私の声を聞いてはくれない。

私は、知っている。

妃真河の村には、鬼がいる。

私は、知っている。

この匣の中には鬼がいるのだと知っている。鬼達は私の大切な人を奪った事を。私の大切な人を殺そうとしている事を。この道の先にいるのを知っている。だから、私はこの道を辿って鬼達から、大切な人を取り返すんだ。

だけど、私は理解していた。

きっと、私は殺されると。

鬼は人を喰う化け物。子供の私なんかきっと一瞬で手足を千切られて喰われてしまうのだろう。殺されてしまうかもしれない。……いや、必ず殺される。私は無力だから。大切な人を鬼から取り戻すことも、もう一度会う事さえも出来ないほど、私は無力だから、このまま鬼達のもとへたどり着いても何も出来ないまま、ただ殺されてしまうだけ。

私も生け贄なんだ、と気づいてしまったら、私に許された歩みさえも打ち砕かれて、細く甲高い夜鳥達の鳴き声が、無様に膝をついた私を、取り囲んでは嘲笑った。震える喉に涙と嗚咽を押さえ込んだけど、道端のか弱い草花さえ靡かない微風が触れただけで、私はただ吠える事しか残されていない獣のように、泣きわめいてしまった。

私は、知っている。――――大切な人は戻らない。
私は、理解してる。――――きっと殺されてしまう。
私は、無力なんだ。――――泣きわめくしかできない。
もしも、祈れば神様が願いを叶えてくれるのなら、私は喉が爛れて溶けてしまおうとも、願いが届くまで叫び続けられるはずなのに。空は閉ざされ、世界は閉ざされてしまっては、匣の中からの声はどんなに清らかでも、どんなに響こうとも、決して届かない。
ならば、私はどうすればいいの――――？
私は、ただ泣くことだけしか出来ないのだろうか。大切な人を助けることも、大切な人を奪った鬼達を斃す事も、それらの願いを神様へ届ける祈りさえも出来ずに、すべてが終わってしまうまで、ただ泣いて暮れるしかないのだろうか。
私はそんなにも、無力で無意味な存在なのだろうか。
だとしたら、ああ――――なんて、無様。
認めよう。私は、無力だ。
認めよう。私は、無意味だ。
認めよう。私は、無価値だ。
認めよう。私は、不要だ。
認めよう。私は、無様だ。
木霊する夜鳥達の鳴き声が心の裡で囁き響く。

それは、曰く――――諦めよう、諦めてしまえ、諦めよう、諦めなさい、諦めよ、諦めるのだ、諦めて諦めて諦めて、何もかもを諦めてしまうんだ、そうすれば――――大切なものは返らぬが、オマエの心は鈍く醜くも生きていける。
私は、ついには歩くために身体を支えていた足をも地面につけた。そして跪くように嗚咽をこぼし涙をこぼして、自虐的に叫んだ。そのまま、朝霧に溶けて綺麗に消えてしまいたいと願った。
だが、私の幽かな願いは、
「――――呪うが良い」
鉄槌のような重みを背負った声に潰された。
闇から、闇に響く声。
「歩みを止めし者よ。されど願いがあるのであろう。ならばなぜ嘆く。面をあげよ。伏せていてはその声、――――届かぬぞ」
八方の闇より聞こえた声は、不思議な魔力に満ちていた。私の顔を、掌握してつり上げる。目の前に無数の小さな闇が寄り集まり増殖して濃度を増した闇の群れ。声は、闇から聞こえる。
「理想を成就するならば、それ相応の力が要りよう。願いを叶えたければ、それ相応の力がなければ叶わぬは至極当然。もし、己に力がたらぬのならば、他から持ってくるしかないのだ。奇跡を」
厳粛な鐘に似た声で、
「汝は弱い」

私を断罪する。

「だが、分不相当な望みを持つ事もまた無理からぬ事。届かぬ望み願いほど、美しいものよ。――――違うかね」

その魔力に満ちた響きに、私の涙は、闇にすい込まれたように止まった。そして、闇が開く。闇から抜き出た闇は、煌めく星々の幽かな光を収束して人の形を成して私の眼前に現れた。

それはまるで、鴉。

幾重もの黒が染まった着流しに同色の羽織。けれど帯だけが幾星霜も染まり続けた紅葉のように深い赤色。頭髪はやや白髪がまじりで老人であるようだが、その目は、褐色の錆びを装いながらも油断を与えてはくれない禍々しいほど鋭い刃のような眼光を煌めかせていた。

そして、黒い匣を大事そうに抱えている。

私の心臓は、その闇に磔にされた。

目をそらすことなど出来やしなかった。

耳を塞ぐことも出来やしなかった。

闇は言う。

「自身で成し得ぬ願いならば、神々に祈るも良し。だが、ここには願いを聞き入れてくれる神などおらぬ。それは汝も重々知っておろう。この界隈にいるは、鬼だけと」

闇の老人は、死神めいた濃厚な死の空気を纏って語る。

だけど、私は不思議とそれが怖いと感じなかった。むしろ、それが私には、なによりも力強く感じ、唯一の望みのように見えた。

老人が問う。

「叶えたい願いはあるか」

私は涙に溺れた声で、はいと言った。

「叶える力は、あるか」

私は折れそうな心を必死にとどめて、首を振った。

「叶えたいか」

闇は問う。

私は頷く。

「分不相当な望みの成就は、ついには己を破滅へ導くぞ」

闇は厳しく叱るように言う。

それでも私は、叶えたい望みがあった。

だから私は、それでも構わない、と吠えた。

闇が言う。

「ならば――――呪え」

老人は呪文を唱える。

「自身には力がなく、奇跡をもたらす神はおらぬ。孤立無援の願いを抱え嘆くのならば、その声、その願い、呪ってしまえば良い。

さすれば――――あるいはその呪い、届くやもしれん」

頭上から降り注がれる魅惑の声。

差し出された手。
それはきっと死に神か魔の手なのだろう。その手は、私を幸せにはしてはくれない。だけどその手は私を救ってくれるだろう。破滅によって、私を救う。
私は、死に神の手を取った。
それが契約であるかのように、邪な雫が私の喉を潤す。死に神の鎌を授かったように、私から恐怖と不安は一切闇に消え、虚ろな力が裡に満ちていく。どんな絶望さえも刈り取ってくれる力に満たされる。もう、私には鬼達への恐れなどありはしなかった。殺されるという卑屈な不安など、この手を取った瞬間に姿を変えた。
それは、そうだ、今ならばと私は、
――――死んでしまえ、と。
闇に満ちた匣の中で、叫んだ。
深い、深い森から夜鳥達が喧騒と鳴き喚く。その声さえも、生まれ変わった私を祝福しているかのように聞こえる。天蓋の夜空から不吉な輝きを見せる三日月が、使い古された断首刀のように朱く染まる。まるで私がそうであれと呪ったように、匣の中の世界は狂おしい終わりの色へと染まっていく。
黒い。
私の呪いは、届いたのだろう。
闇色の老人は、世界中の絶望を背負ったように顔を歪めながらも頷き、しかと届いた、と囁いた。そして私の願いが叶うように、祝詞を告げるように厳粛な響きを下した。
「さぁ、行くがよい。汝の呪いの行く末、あれが導こう」
闇の老人は半身をずらし、道を示した。
私が歩いていた道の先、鬼達がいる屋敷はもうすぐ、それまでのしばしの道のりを示した。
闇色の老人と私しか、この道の上には居ないはずだったのに、今、私の行く先には、初雪よりも白い衣を纏った子供が、翼をはためかせる鳥のように歩いていた。
白い子供は、散歩でもしているように私の死地へ赴く。
老人は言う。――――呪いは完了した、と。
私は尋ねた。――――貴方は誰ですか、と。
老人は答えない。
私はそれを追求せず、先を行く白い子供の後を追って歩き出した。
それでも振り返って、お礼を言おうとしたら、老人の声に遮られた。
「人を呪わば穴二つ掘れ。呪いは神仏によって成就するものではない。呪った者が人であるならば、その呪いを成すもまた人である。汝の呪いが誰彼によって成されるかしかと見届けよ。それが、汝に破滅を与えし者ぞ」

闇に溶ける老人が最後に残した言葉の意味を私は理解できなかった。
けれど、その言葉はきっと忘れないだろう。
いつかその意味が分かる時まで。
そして、闇に満ちた道を行く。
その先にある世界すべてを、不吉な声で鳴く夜鳥達と共に呪いながら、
大切なものを取り戻すために走った。
穿(うが)たれた管楽器の音に似た夜鳥達の鳴き声がとり憑く。
それが、いつまで続くか知れない悪夢の始まりであり、
終わりを決めた夜のことだった。

第二幕　黒い呪い

１／九月十五日（水）

「きゃ――――――！」

木霊する悲鳴。

白昼堂々と悪漢に襲われて逃げ惑う少女のように、それは生命を奮い立たせるような悲痛な叫びだった。

「きゃ――――――！」

白昼の民家の一室に、乙女に悲鳴が響き渡る。今まさに乙女の危機だと正義の味方に助けを求めるような悲鳴だ。

畳敷きの小部屋。退路なき壁に追い詰められた乙女は、命声をするかのように、それを見上げて叫ぶ。一時前は外の竹林から小鳥のさえずりが聞こえる穏やかな午後だったはずなのに……あぁ、なんと儚きかな人生と、乙女は祈るように手を握りしめて、一際大きな悲鳴を上げ、それを見つめた力一杯叫んだ。

「きゃっ――――――かわいーいーっ！」

と、まぁ黄色い悲鳴だ。

「きゃーきゃー、かわいいかわいいっ、テラキュン！」

私、一之宮小夜子は内心とは裏腹に非常にハイテンションに浮かれていた。もうこのまま大気圏まで行きそうなぐらいの勢いで浮かれていた。ちなみに『テラキュン』とは、通常の胸がキュンとする状態をバイト単位にしたら、テラギガバイト相当だという感情表現だ。

「小夜子……これ、新手の拷問？」

拝むように見つめている私を、あらゆる蔑みを込めたような冷たい視線を下すのは、我が同志の奥津城絵馬嬢。百年の恋も一瞬で百年のトラウマに変えてしまうほどの威嚇の眼差しをむけて、それが中々堂に入っているといういか、様になってる棘の強い女だけど、今はどんな脅迫を受けてもまったく恐ろしくはない。

だって、

「似合ってる。すっごく似合ってるよ絵馬、メイド服が」

そう、どんなツンツン女も、あれ可愛くない？　と世の青少年を惑わして止まないコスプレ界の四天王メイド服を着ているのだ。

鎖骨から半月状に大きく開いたフリル付きの胸元、腰下二十センチのふわりと膨らんだミニスカート、黒を基調にしたデザインの服に清楚感が溢れるシルクのフリルエプロン、ワンポイントのカチューシャには黒猫耳をあしらい、小悪魔な雰囲気を醸しだし、しかもトンガリシッポ付き。絵馬の性格を可愛く演出した世界に一点しかない試作品なのだ。これで萌えなきゃ思春期じゃない。

「ねぇねぇ、お帰りなさいませお嬢様って言って」

一瞬、訝しげに眉を顰めた絵馬だけど、すっと姿勢を正し営業スマイル全開で慎ましく、
「お帰り下さいませ、お嬢様」
謀反を宣言しやがった。
「うわっ、なにそれ。全然メイドじゃない。っていうかストライキか、それとも下克上？」
「そうよ。昔の偉い人は言いました。いつまでも、続くと思うな主従関係。いつの時代にも下克上があるって事よ。分かった？　っていうかこれ、脱いでいい？　ものすごく恥ずかしいんですけどっ」
「え、脱ぐの？　裸になる方が恥ずかしいと思うんだけど、しかも、こんな真っ昼間から。私、明るいところでするっていうのはちょっと……」
「変態！　普通の服に着替えたいって言ってるの。まったく、見た目は女子高生でも、中身はエロオヤジと一緒ね、小夜子は」
「あっあっ、ちょっと待って。写真撮らせて、ＨＰ用に。おねがい」
エプロンを脱ぎ出そうとする絵馬を制止させて、鞄からデジカメを取り出し、シャッターを切る。連続撮影。ローアングルから激写。バイトの月給全てつぎ込んだ最新型のデジカメは、素晴らしいショットを見事に納めた。ついでにいくつかポーズを要求。四つん這いでちらりと下着が見える、少年漫画雑誌に載っているようなグラビアポーズ。しかし、少年雑誌なのに、どうして少年のグラビアがないのかな。不思議だよね。
「ＯＫ。ありがと絵馬。これでまたヒット数が跳ね上がるわ。そして私の広告収入が増える。お礼に今度、ピンクのナース服持ってきてあげるね」
「結構です。私、小夜子の着せ替え人形じゃないのよ。そんなの自分で着ればいいじゃない。私を巻き込まないで」
「巻き込むって、何言ってんの？　私達は似たもの同士。同じコスプレマニアの同志じゃない」
「っう。それはまぁ……そうだけど」
四つん這いのメイドが困惑している。奥津城絵馬にとって、それを否定するという事は自分全てを否定する事だ。なにせ、絵馬も私も筋金入りのコスプレヤなのだから。
だから私達の出会いは必然だった。私達は同じ町に住んでいて同じ高校に通っているごく普通の女子高生だが、私も絵馬も、世間の目を欺いてキャリアを重ねていたコスプレヤだった。だから、今まで互いの趣味を知らなかった。のだが、それは今年の春。初めて同じクラスになって席が隣になった時の事だ。私は直感して、絵馬に尋ねた。
「あなた、ネコ耳派？　うさ耳派？」
素人ならば首をかしげるか意味不明の質問にこの子は、
「小悪魔派」
即答でオンをアンダーで返して来たのだ。そして私たちは一瞬にして互いの心の闇……もとい、心の萌えを見抜いたのだった。それが、私と絵馬のファーストコンタクト。

出会うはずのない、隠れコスプレヤの私達がこうして出会ったのだ。しかもこんな身近に同志がいるという、南極で北極熊に出会ったような気分だったのだろう、私たちは急速に親しくなった。いまでは月に二回は、こうして絵馬の家で秘密のコスプレショーを開くまでに発展。昔の偉い人はこう言った。恋いに時間など関係ないのだよ、と。

「小夜子、もういい？」

「あ、いいよ。サンキュ」

絵馬がエプロンを外そうと手を後ろに回した時、玄関から呼び鈴がなった。絵馬の動きが止まる。

「絵馬。お客さんよ」

「分かってるわよ」

「出ないの？」

「出れるか！」

声を押し殺して怒鳴り、人差し指を口元でたてる。どうやら黙ってろ、というジャスチャの様だ。私として、そのメイドの格好で出て行ってくれた方がものすごく面白うなのだが、実にもったいない。

向かい合って座り、玄関から人が立ち去るのを聞き耳を立てて待っていると、玄関の戸を叩く音がして、しばらくすると、女の子の声が聞こえてきた。それはすごく聞き覚えのある声、っていうか知ってる奴の声だと私も絵馬もすぐに気づいた。

「え、うそ……」

驚きを隠そうとせずに絵馬は慌てて立ち上がって部屋から出て行った。そしてその直後、派手に転ぶ音が私には聞こえた。

数秒の沈黙がこの武家屋敷を覆う。

そして、絵馬の叫び声と乙女の悲鳴が聞こえた。

私はじっと待っていた。部屋の外で何が起きたのか概ね想像できた。なにせ、絵馬の格好があれのままだもん。来訪者は驚き、絵馬はパニックになったに違いない。

しばらくすると、たった一二分で富士山を往復してきたように疲れ切った表情のメイド様が部屋に戻ってきた。そして倒れた。

「誰だった？」

項垂れ倒れたメイド絵馬は譫言のように、あやめ、とだけ答えて死んだように畳に顔を埋めた。

「あぁ、榊か……。それはなんていうか、ご愁傷様」

猛者である絵馬もこんなにまで打ちのめした相手は、クラスメイトの榊あやめ、らしい。別段格闘技の猛者という訳でも魔法使いというわけでもない、どちらかというと小動物みたいな女の子らしい女の子で、よく私と絵馬に苛められる可愛い友人。交友範囲の狭い絵馬には数少ない親友ではないだろうか。もちろん、それでも絵馬のこの趣味は知るはずがない、つい一分前までは。

「あぁ……どうしよ、見られた、見られてしまった。直視されて凝視まで された。……もう、ダメ。私、立ち直れない」

項垂れるメイドは、まるでご主人様の大切な花器を屋敷ごと壊したかのように落ち込んでいる。友人として慰めるべきか、それとも記念写真を撮るべきか悩める私。
「まぁ、いいじゃないの。退屈な日常にちょっとしたスパイスが加わったと思えば、楽しくなるって、ね」
残量一枚に、項垂れるメイドを納めながら私は絵馬を慰める事にした。なんて仲間思いなのでしょう。
「楽しめるわけないでしょ。あぁ……二日続けて一生の不覚を連発するなんて……。やばい、私、明日にでも死ぬかもしれない」
「車には気をつけることね」
「ええ、そうするわ」
そう自己完結して、絵馬は立ち上がって乱暴にメイド服を脱ぎ捨てて普通の私服に着替えだした。この切り替えの早さこそが、きっと奥津城絵馬の武器なんだるな、と私は観察しながら眺めた。
「さて、小夜子。次はあんたよ」
復活した絵馬は、押し入れをごそごそと漁って、ものすごくモコモコとした衣装を取り出した。なんていうか、鯉のぼりじゃないのですか、みたいな。
「私にあんな羞恥プレイさせたんだから、小夜子にはこれぐらい着て貰わないと」
「えっと、あなた、ちょっと怖いわよ。っていうか、それは何のコス？」
「私がメイドやったんだから、小夜子は当然、くの一」
そして絵馬は、その布きれを広げた。
「ちょっと待って。それなんか違う。それ布じゃん、っていうかものすごく露出度高いんですけど、なにそれ、フンドシって奴か！」
絵馬が持っているコスは、衣装というより布きれそのものだ。まだバスタオル一枚の方が面積はあると思うというぐらい細い布。ベストのようにとりあえず胸は隠しておきましょう、の申し訳程度しか幅がない。しかも下は現代では絶滅していたと思われる白フンドシだ。これは有名な格闘ゲームの、くの一キャラのコスが原型だと思うが、こんなの着て外に出たら、猥褻物陳列罪（わいせつぶつちんれつざい）で現行犯逮捕されてしまう。
「いや、絵馬さ……私、別にそのキャラ好きじゃないし、それにほら、胸、足りないしね……」
「大丈夫。パットならあるわよ。ノープログレム」
「いや、それでも、キャラを理解せずにコスプレなんて、私のコスプレ道に反するっていうか、それ、アンダー出るよね」
「問題なし」不敵な笑みを浮かべて朱い布きれをヒラヒラとはためかす絵馬。今更だけど、こいつ絶対にサドだ。
ハレンチコスを持って焦らすように迫る絵馬。そして私は畳の上を後退り。しかし逃げ切れるはずもなく、壁際に追い詰められた私を、絵馬は絵本に出てくる魔女のような不気味な笑みを浮かべて、さぁさぁ、と毒リンゴのコスを差し伸べる。

「さぁ、お着替えの時間ですよー、小夜子ー」
迫り来る乙女の危機。
「きゃーーーーーーーッ」
木霊する悲鳴。
白昼堂々と悪漢襲われて逃げ惑う少女のように、それは生命を奮い立たせるような悲痛な叫びだった。
「きゃ――――――」
悲鳴は続く。
白昼の民家の一室に、乙女に悲鳴が響き渡る。
今まさに乙女の危機だと正義の味方に助けを求めるような悲鳴だが、正義の味方は現れることなく、私のプライドはずたずたに、布きれのように引きちぎられてしまった。
バッド・エンド。

◇

黄昏が目に染みるぜ。
「って、まだサンサンとしてるんだけどね」
一人ツッコミ。空しいな。なんでうら若き乙女が自転車に乗りながら一人でツッコミなんて入れてるんだろう。しかもさ、人の往来もある公道の真ん中で堂々とさ。恥ずかしさ通り越して、警察官に職質されないか恐ろしいや。
「ふぅ。疲れた。っていうか、すごくダイエットか」
性悪陰険絵馬の魔の手によって、くの一のコスを着てしまった。これすごく目立つよね絶対忍びじゃないよね、というぐらい自分の身体の目のやり場に困るほどの露出。おまけに写真撮影もしてしまった。
しかもかなりポーズも入れたな。これは新手の羞恥プレイだ、と私は心に、藪をつつけば蛇女が出る、と刻み込んだ。つまり、絵馬を苛めて楽しむは命がけだ、という教訓だ。
奥津城の武家屋敷を出て、ボストンバックを荷台に縛り付けて自転車で逃げるように走り出した。閑散とした住宅街と人情溢れる賑わいを見せる商店街抜けると、大きな鉄橋にたどり着く。伏木町は、絵馬の家がある自然保存地のような朽木村と、急速に発展しようとする人工物の楽園のような伏糸村の二つの村によって成り立っている。二つの村は、大河を境界線になっていて、私が今渡っている大鉄橋で結ばれている。

赤い鉄の橋。吹き抜ける風は、歩道の側を法定速度無視で走る車のように、私の身体を微動さして謝罪の言葉もなく過ぎ去る。

車道を行き交う車と歩道の往来の数の増加を見て、みんなお家に帰るのね、と呟いた。行き交う人は疲れを滲み出しながらもどこか足早で、車のスピードも免停ものだ。

そんなに急いでまで家に帰りたいのかね、と冷ややかな私は他人事にため息をついてしまった。行き交う人々はみな善良であり、私の人生に無関係な赤の他人だというのにだ。だけど私は、その見知らぬ他人の群れの中から、見覚えのある顔、もとい同級生が目に止まったから、ペダルをこぐ足を止めた。

「よう」

私がわざわざ自転車から降りて近づいてくるのを待ってやった相手は、そんな不躾なほど短い挨拶を、粘性のない声で言った。

「もう少しましな挨拶はないのか。っていうか、なにその格好。ジャージじゃん。まさか、走って帰ってるの」

「ああ」

鏡が無くても分かるほど顔を顰めながら訊くと、ジャージ姿の青年は、息ってるとしか思えないほど短く答えた。

「呆れた。まさかそんな特訓を毎日してると。さすが礼慈ちゃん」

私は、自分の心理状態を表示する意味を込めて大きくため息をついてみせた。

ちなみに、現地点から私達が通っている私立神楽高校まで、バスで二十分はかかる。最短距離を通っても十キロメートルはあるはず。ちなみに彼の家は、ここから更に三キロメートルはあったはずだ。

そんな一人マラソン大会を毎日一人でやっていると平然と言ってしまう辺り、目の前のジャージ男、もとい、鳥居礼慈の運動能力と精神力には、呆れて頭が下がってしまう。

「すごいね。ほんと、さすが我が部が誇る鉄人部長」

「どうも」

一応今のは嫌味のつもりで言ったのだけど、陸上部部長は、それさえ気づいていないように素っ気なく返しやがった。これは彼の器の広さと取るべきか、ただ愚鈍なだけと取るべきか二秒迷って後者を取った。

これ以上の会話が思いつかず、私が黙ると自然と沈黙が訪れた。橋の中間で立ち往生。まるで今から牛若丸と弁慶よろしく、決闘でもしようか、というぐらい妙な緊張感を私は覚えた。

背中が痒くなる沈黙に耐えきれず私から、じゃあね、と終止符を打って自転車に乗り込んだ。そして、そのまま一人マラソン大会をする鉄人部長とすれ違う。その間際、呼び止められた。

まさか呼び止められるとは思わなかった私は、驚きで裏返った声で振り返った。

「いや……。女の子、なんだな」

「はぁっ？」

意味が分からない言葉に、漏れた私の声は上ずっていた。躊躇ったように籠もった声が、妙に耳の奥でくすぐったい。その原因がなんなのか聞き返そうとする前に、

「じゃあな」ぶっきらぼうな口調で、それだけ言い残して礼慈は走り出した。

何を言おうとしたのか気にはなったけど、それは十秒とせずに消える。それよりも、彼は三文字以上はしゃべれない呪いでもかかっているのではないかと考えた方が面白かった。口べたなのか、それとも女の子の前だと緊張して口ごもってしまうシャイな奴なのかもしれない。それだとあの無愛想にも、少しは可愛らしさが見いだせそうだ。

再びこぎ出したペダルは快調に回る。

鉄橋を渡りきり、小さなヘッドライトの流れから、慎ましい外灯の列に沿って河川敷を走る。ヨーロッパの町並みに似せようと作られたような煉瓦畳みの小川の小道には、犬を連れた子供やジョギングをしている老人がいる。見通しもよく障害物もない整地された平坦な道で、私は陸上部の脚力を存分に発揮して加速した。といっても、マネージャなんだけどね、と一人呟きながら。

しばらくしてペダルの回転を止めて坂道を慣性で下ると、オモチャのブロックのような建物にたどり着く。

塗り壁みたいな飾り気のないマンションとはひと味違う集合住宅。

マンションの周囲は申し訳程度の人工林と芝生が敷かれた公園とまるで絵の具のように緑をちりばめて、その真ん中に真新しいマンションが三棟連なって立っている。一階のロビーはガラス張りで外から丸見え、ついでにどの階もベランダから川が丸見え。

自転車から降りて、非常階段の近くにある駐輪所に止めた。小川を挟んで向かいの岸にはガラス張りの高層ビルがあって、オレンジ色の夕日を研ぎ澄ましてて水面とマンションの外壁を彩る。

裏口からロビーに入って、エレベータホールへ。どんな理由か知らないけど、部屋数の割に入居者が少ないこの第三区のマンションのロビーは、夕食時だというのに楽しげな賑やかさなんて聞こえてこず、しんと静まり返っている。私の予想ではあと十年もしないうちにゴーストマンションになると思う。

ボタンを押して数秒。最新式のエレベータは静かに到着して扉を開けた。乗り込んで、ドアを閉めようとボタンを押そうとしたとき、正面玄関から、待って、と叫びながら走ってくる女の子がいた。

「早くしな。しめちゃうぞー」

一所懸命に走る子供の姿に、頬が緩みながらも、ちょと意地悪な気分になってしまう。

女の子は全力疾走でエレベータに駆け込んで、息を整えながら私をじっと見つめた。睨んでいる訳ではないと思うのだけど、こう、なんていうか無垢な眼差しって威嚇的だと私は思うんだよね。

「お姉ちゃん。ボタン、押してくださる？」
呼吸を整えた女の子は、まるでどこかのお嬢様のように気品に満ちた振る舞いで、澄ました口調で言った。それをただ単に、ボタンに手が届かないだけ、と言い方片付けるには無粋なぐらい可愛らしい。
「あいよ。何階でございましょう、お嬢様」
「お姉ちゃんと同じ階よ」
もう何十回と繰り返しているこのやりとりだけど、ついつい付き合ってしまう。
静かな音で昇って、七階に到着してエレベータから出ると、女の子は手を振って左側の通路を走っていった。そして私は、女の子が部屋に入ったのを見届けてから、反対側へ歩いて、鍵を取り出して、自宅に入る。
「ただいまー。……って、誰もいないけど」
小さな玄関。そして無駄に長い廊下が無人の我が家の静けさを誇張している。まっすぐ廊下を歩いて硝子戸をあけてリビングへ。
閑散と微かに生活の散らかりをちりばめられた、わりと綺麗で広いリビング。大人が二人ならんでマット運動が出来るぐらいの広さはあると思う。
入り口の左側にはカウンター付きのキッチン。冷蔵庫から牛乳パックを取り出して、そのままロにつけながら、ぐるりと回ってカウンター前のダイニングテーブルへ移動。四人分の席がある大きな机の上には、いつものようにカレーパンが数種類置かれていた。これが私の夕食なのね。
何時だったか、私がカレーパンを美味しいと言ったらしく、以来、ママは、カレーパンを常備するようになった。きっと今でも私がカレーパンが大好きで、わーい嬉しいーと思ってると信じているのだろう。飽きる、という言葉を知らないのか。カレーパンなんか、今では嫌いな食べ物殿堂入りなのにさ。
仕方がないので、カップラーメンを食べる事にした。
広いリビングで一人ラーメンをすする女子高生。なんてとも絵になるな、と慣れた一人きりの夕食の原因である両親の部屋を睨んでみた。
リビングの入り口右側に両親の書斎兼寝室があり、いつも扉は閉じている。当然のことながら、両親は不在。リビングを見渡せば、そこそこ大きなテレビに、そこそこ座り心地の良いソファ、そこそこふかふかの絨毯と、センスが悪い調度品と、まぁ、入居時に備え付けられていた家具がそのままで、中流家庭がちょっと上流嗜好を真似たような家庭だ。
だが、我が家の個性と言うべきか、両親は共働きなのだ。ただの共働きではない、二人とも筋金入りのワーカー・ホリックス。仕事中毒。仕事が人生、仕事が趣味、仕事が生き甲斐、仕事を取ったらただの人、みたいなどうして結婚なんかしたのと本気で疑問に持つほどの仕事人間。
帰宅するのは日付が変わってからか、帰ってこないか。だから、普通に学生生活している私とは生活リズムが合わず、週に一度でも両親の顔が見られたら、それはまさに四つ葉のクローバーを見つけたのと同じぐらい奇跡的なのだ。

すごいぞ、これでも同じ家に住んでるのか、と思える。
まぁ、私がこうしてカップラーメンを食べられるのも、娘の顔を見る暇なく働く両親のおかげだと感謝しつつ、残り僅かの牛乳パックを空にしてゴミ箱へ叩きつける。
それからリビングを出て脱衣所に行ってシャワーを浴びるために、服を抜いている時だ。ふと洗面台の鏡に映った自分の姿に、二度見して、硬直した。
私の頭に、ネコ耳のカチューシャが付いている。
寒気がした。
頭の中で、時間が逆行する。
私は、これを、つけた、まま、天下の往来を通ったのか……。
「マジか……っは。礼慈に、見られた……。あぁっ、だからあいつ、あんなことを」
脳内で鳥居礼慈のセリフが蘇る。
『女の子、なんだな』
純情寡黙青年は、照れながらそう言ったのでした。
「こんちくしょーーーーッ！」
ネコ耳をむしり取り、渾身の力を持って床に叩きつけた。
「絵馬かっ。絵馬の奴が……。クソッ」
脳裏に浮かぶ、絵馬の不敵な笑顔。
まさか私にエロコスさせるだけでは飽きたらず、こんな羞恥プレイをさせるなんて、なんたる外道。恐ろしい。あの女が恐ろしくて、怨めしいぜ。
臨界点で落とし蓋されたような怒りは、熱いシャワーで流し捨てても、まだ収まらなかった。
洗面台の鏡に映った湯上がりの私の顔は、バトルロワイヤルに参加中のように殺気立っている。耳にも眉にもかからないぐらいに乱雑に切りそろえられた髪。眼鏡をかけないと自然と目つきは、威嚇しているように細く険しくなってしまう。頬の肉も少なくて、笑顔をつくってもまったく可愛げがない顔だから、あと眉がもう少し太ければ、男にも見えるだろう。実際、何度か男の子に間違われた事もあるし、学校でも、もう十回近くそんな経験がある。
「私、間違って生まれたのかな……」
男っぽいとか男勝りだの逞しいだのと言われるのも慣れたし、絵馬なんかオヤジとか言う始末だから、そういうキャラで通した方が楽だというのも学習した。それでもやっぱり、私だって女の子なんですから。
『女の子、なんだな』
あんなセリフを、しかも真顔で言われたらそりゃ腹も立つさ。そうか、この収まること無い苛立ちは、礼慈が原因なんのか。
原因が判明した事で多少はすっきりとした。濡れた髪を軽く拭いてそのままにして、廊下へ出て玄関に一番近い部屋へ移動。

そこが私の部屋。乙女の秘密のお部屋。

「まぁね、そりゃ学校じゃあ全然女の子っぽくないでしょうけどね、だからって何アレ。あ、そういえば女だったんだな、って感じの再確認みたいなセリフ。悪いかっ、私がネコ耳してそんなに悪いのかっ。悪かったね全然女の子っぽくなくて。っは、私だって女の子らしいところだってあるんだからね」

ハつ当たりにドアを近所迷惑覚悟で乱暴に閉める。そして、真っ暗な部屋に明かりを点けた。

ぬいぐるみに埋め尽くされた壁一面。ピンクのハート柄の絨毯。メイド服を着たマネキン。ロココ調の大きな化粧台に、オレンジ色のＭａｃ。似非（エセ）シャンデリアと、天井を埋め尽くす星のシール。そして極めつけに、天蓋付きのお姫様ベッド。それらがこの部屋を構成する乙女要素。

「ま、これは乙女というよりも、箱入りお姫様って感じね。うわ、やだ。あたしは病気か」

実は私はウルル星から来たウルル姫なの、とはさすがに口走ったりはしないけど、深入りすると危ないかもしれないな。成人するまでにはマトモになろう。

化粧品は一切ないパソコンデスクとなった化粧台の前に座ってＭａｃを起動。立ち上がるまでに鞄からデジカメをとってマックに接続。オモチャのようなロゴが表示されすぐにデスクトップが表示された。

本日の戦利品を読み込んで整理してから、ＨＰに掲載出来るようにサイズを変えてフォトショップで加工する。ネットアイドル達の写真は、私の見立てだと九割はこうしてフォトショップなんかで加工されているはず。コントラストや光の加減に濃淡、酷いものは、それ原型とどめてないでしょ、と思えるほど加工されたものがある。世の青少年達は、こうして女に騙される練習をしているのだろうと思うと、とても微笑ましいわ、ウフフ。

「さて、これでアップ」

ＨＰを更新。私が立ち上げたＨＰはオリジナルオンリのコスプレを公開していて、今日みたいにコスプレ報告や、実際にコスを着た写真なんかかなりあるからサーバーが重い。ちなみに今日アップした写真は、絵馬のメイド様だけ。そして、そのメイド服の作り方を簡単にまとめたレポート。コスはすべて手作り。部屋にあるアンティーク風の足こぎミシンで夜更かしをして作ったのだ。

絵馬からすれば、私が裁縫なんて想像できないだろうけど、実は、一番の特技だったりする。どうよ、女の子度が高いだろう。

「さて、次はやっぱりメイドときたら、次はナースか巫女かな」

次のコスの構想を練りながらメールをチェックしていたら、うちのＨＰの常連からメールが届いた。内容はチャットのお誘い。時間を見ると後十分ほどだったから、そのままブラウザを立ち上げて、いつも使っているチャットルームへ飛ぶ。

「うわ、もう入ってる。さすが、早いないつもこの人は」
まだパソコンを初めて半年ほどの私は、まだまだ慣れないブラインドタッチで、カタカタと文字を打つ。
ハンドルネームは『一夜』と可愛げがない。

＞ こんばんは。お待たせしました。早いですねレイヴェンさん。

＞ こんばんは、一夜さん。全然待ってませんよ。
＞ HP見ました。新作はメイド服だったのですね。
＞ いつもながら細かいところまで丁寧ですね、
＞ あのカチューシャはオリジナルですか？

＞ お褒めの言葉、感謝です。
＞ はい、あれはモデルに合わせて作ったんですよ。
＞ ちょっと意地悪な雰囲気を作りたかったから。

＞ すごいですね。モデルの方に雰囲気がよく似合ってますよ。
＞ 一夜さんは人を見る目がありますね。
＞ モデルの方をよく知っていないと、ここまでハマリませんよ。

私はキーボードから指を離して腕を組んで、暫し思いを巡らせた。

「モデルをよく知ってる……私が、絵馬を？」
私が知っている奥津城絵馬の情報を思い浮かべてみたけど、ただ同じ趣味をもつクラスメイトでお友達程度のことしか知らなかった。誕生日だって知らないし家族構成とか、絵馬の好きな人とかもまったく知らない。知ってると言ったら、絵馬はとても傍若無人で陰険な似非お嬢様、というぐらいだったけど、それぐらいなら、榊や礼慈だって身をもって知っているはず。
「うーん、知らねぇな。ま、知りたくもないし」

＞ それはもう、大親友ですから（笑）

だけど心とは裏腹な事を言ってしまうのが乙女心なのよ、と自分に解説しながら打ってみたものの、ちょっと気持ち悪かった。自分から、大親友です、と書いてしまう辺りがとてつもなく恥ずかしくて気持ち悪い。
「女同士の友情か……、男同士の友情より爽やかよね」
私の偏見かも知れないけど、男同士の友情ってなんだか汗と背徳の匂いがプンプンしてヤラしいのよね。見てるだけで、どっちが攻め？　どっちが受け？　って考えてしまう。あぁ、なんて危険な関係なのかしら。

＞ 次回作も期待してますよ。次はどんなコスを作るんですか？
＞ もう決めているのですか？

〉 まだですよ。でもちょっと大物を作ろうかなって思ってます。

〉 大物？　ドレス系とかですか？

〉 ドレスもいいですね。

〉 ゴシックな感じのロリータっぽいのを作ってみたいなって。

〉 なんだかすごく可愛い感じがしますね。

〉 だったら、完成するまで時間かかりますね。

〉 そうでもないですよ。作り掛けがあるからそれを完成させます。

〉 それに、私暇人なんです。毎日、退屈しています（笑）。

ディスプレイには表示される言葉の羅列は、どこか楽しげな口調で話しているようだけど、キーボードを打つ私はまるで楽しくはない。笑、と打ってはいるけれど微笑みさえ浮かばないほど、私の頬は怠け者だ。

毎日退屈、それだけが事実。それがとても空しく感じる。

毎日、同じ事の繰り返し。微細な変化も繰り返していくうちに色褪せて見慣れてきて、まるで呼吸するのと同じぐらい感動もなにもなくなる。

平穏だとか平和だとか、それはそれで大切なものだと分かるし、尊重して守っていくものだとも思うけど、その素晴らしき穏やかな安全安定も飽和状態になってしまったら、酸化して鈍感にもなっていく。

つまり、堕落だ。

〉 なんか派手な事でも起きないかなって、思っちゃうんですよね。

〉 もう、人生変えるような出会いとか（照）

「ま、実際そんなもの、あるわけないんだよね、現実は」

そうだ。現実は小説より平凡なり。妄想するような素敵出来事やドラマチックな感動もなければ、白馬に乗った王子様なんてイギリスぐらいしかいやしない。せいぜい片思いの男の子に、実は俺も好きだったんだ、とか告白されるぐらいしか現実ではあり得ない。……まぁ、それすら起きていない私の人生ってのも、かなり山場のない退屈なものだなってへコむわけよね。

背伸びの要領で腕を伸ばしてリモコンを使って、背後にあるテレビをつけた。視線をマックのディスプレイに向かったまま、テレビから流れる芸術的なまでにセンスのない音声に耳を傾ける。聞こえてくるのは、ニュースというエンタテイメントで、だからそれらから聞こえる悲惨な事故や事件は、どれも虚構の物語のように現実味がない。

「死体発見ね。ま、よくあることよ、そんなの」

テレビから聞こえてきたニュースは、どっかで白骨死体が発見された、というものだった。それを面白可笑しく、猟奇殺人かと脅されても、興ざめなのよね。

バラバラ殺人だとか白骨死体とか通り魔殺人とか言われても、興味が沸くわけがない。もうウンザリ。猟奇事件と謳うならせめて、ゴジラが立ち食いそばを無銭飲食した、ぐらいでないとダメダメ。

＞ でも一夜さん。

数分の間をおいて、書き込まれた一行。

私はそれに返信を書き込まずに、言葉の続きが更新されるのを待った。

＞ ストーカー、されてますよね。

表示された一行に、私はため息をつきながらキーボードから指を離した。言葉の羅列からは心配しているのか分からないけど、嫌な事を思い出させてくださいましたね、と私は内心、毒づいた。

チャットを中断して席を立ち、部屋を出る。そしてリビングに戻り、カーテンは締め切られた薄暗い部屋を横断して、カーテンを少し捲って窓ガラス越しに外を覗いた。

眼下には、くねり曲がった煉瓦の並木道と、都合良く木の枝に隠れる位置に設置されたベンチ。オレンジ色の照明が平面をえぐるように照らし、うごめくような影を作り出しているが、見える範囲に人はいないようだ。それを確認して、足早に部屋に戻った。

＞ 今日はいないみたいです。もう止めてくれたんでしょうかね。

＞ 簡単に安心したらダメです。油断したらダメですよ。

＞ だってそのストーカーって、

＞ ずっと一夜さんを付け狙っているのでしょ？

忌々しげに舌打ちが鳴る。

レイヴェンが言うことはもっともだ。

鬱陶しい存在が頭の中で、嘲笑うように浮上する。

半月程前、その存在に気づいた瞬間には恐怖を覚えた。

ストーカー。

最近にテレビで耳にするようになった単語。アイドルなんかの熱狂的なファンや陰湿な変質者を指す言葉らしいけど、まさか、そんなテレビの中のキャラクタが私の身近に表れるなんて、驚きを通り越して、恐ろしかった。

学校からの帰り道、そして、夜。そいつは遠くから私を見ている。姿は確認できない。影と同化しているようだ。明確な実態がないようだけど、そいつは確実に私の周囲に居て、息を潜めて、じっと見ている。

最初の頃は、それだけだった。ただ尾行して監視しているようなもので、鬱陶しいと感じていたけど、大した実害はなかったから、今のところ放置している。どうせ、すぐに飽きるだろうと思っているからだ。

私も、そんな環境に飽きてきているし。

「まぁ、気持ち悪いし鬱陶しいんだけどさ。もうちょっと分かりやすいぐらい積極的なストーカーなら、警察に捕まえて貰いやすいんだけどな。……オチとして、実は、私の自意識過剰な被害妄想でした、なんてことだったら、末代までの恥よね、はははは」

ストーカーらしき奴は、ただ見ているだけ、それ以外は尾行してくるぐらいだから、これって罪なの？　と戸惑って警察にも通報できない現状が、どうも歯痒(はがゆ)い。だから、こうして見知らぬチャット友達に愚痴ったりして、少しストレスを発散するぐらい。絵馬に相談してみたところ、私ならヤラれる前に狩るわね、と言った。

＞　何かいい手、ないですかね。

＞　誰か分からないから、対処のしようがないんですよ（泣）

顔も名前も分からない、それどころか相手は幽霊みたいに実態が稀薄で姿すら確認が取れない。しかも、非常に用心深くて粘り強いと来ている。だから、ストーカーの証拠なんて出てこないだろう。法的には、無罪ってやつなんだろうね。

でも、こちらの感情として、鬱陶しいから近づくな馬鹿野郎！　とぐらい言ってやりたいのよね。

見知らぬチャット友の返信を、ぼんやりと待つ。

この現状が一発で解決するような方法があるとは期待はしていない。どうせ、無害な慰めや一般的な励ましぐらいしか返ってこないだろうな、と思っていた。だけど、返信は思わぬ言葉で示された。

＞　呪ってしまえば良いのです。

ディスプレイに表示されたのは、意図が読み込み難い一行だった。それを唖然と見つめ、そして、思わず的外れな言葉に笑ってしまった。

「なにそれ。呪いって……冗談？」

どう考えても言葉通りの意味で捉えてしまったら、あまりにも頭が悪い。きっと何かの例えか、隠語かもしれない。どういう意味なのか質問した。返信は、瞬時だった。

＞　言葉の通りです。呪ってしまえば良いのです。

＞　一夜さんを悩ませる、そのストーカーを。

返信は真剣な模様だ。それだけに、私にはふざけているのか、馬鹿にしているのかとしか思えなかった。

「やばい。この人、アホだよ」

まさかオカルトに熱狂する頭の悪い学生か、妖しい教団の回し者かとさえ思えた。

だとしたら、すぐにチャットを止めて、この人とは二度と連絡を取らないようにするが安全だ。だけど、このレイヴェンと言う人とは、名前しかしならないクラスメイトよりかは、信用できる。それだけの関係を、今まで築いてきたのだ。だから一応、最後まで話を聞いてみようと思った。

＞ 呪いなんて、迷信ですよ。

＞ いいえ、呪いは本当にありますよ。

＞ でも、呪ってストーカーが居なくなったら、

＞ 誰も苦労しませんよ（笑）。警察も探偵もお払い箱ですって。

＞ 呪うのは簡単じゃないから、警察も探偵も必要なんですよ。

＞ でも、今の状況がずっと続くよりは、楽だと思いますよ。

＞ それは確かに、呪ってこの状況が打破できるなら、

＞ 私だって藁人形を釘で打ち付けますよ、部屋中に。

＞ 試してみる？

ディスプレイから離れる。

点滅を繰り返す画面に、まるで遠くから呼びかけてくるような言葉が、それだけ不思議な文字で綴られたように、私に語りかけてくる。

魅力的な言葉だ。

「試すって……」起こりえないと分かっていても。

「呪うの……」もしも、という妄想の甘美な匂いは魅力的だ。

「それで……」

鏡の国のアリスを夢見るほど私は子供じゃないし、常識的な平凡な女子高生だから、呪いなんて信じられる訳もなく、そんな私は心の中で嘲笑っている。だけど、私は奇跡を信じているのも確かだった。

「いや……まさか、ね」

＞ やめときます。私、呪いが出来る超能力少女じゃないんで（笑）

＞ そうですか。一夜さんには、素質があると思ったんですけどね。

後に糸を引くような粘性を漂わす言葉が表示され、そこで会話は中断した。そろそろ終わりにしようか、と私は背後のテレビから聞こえてくるバラエティ豊かな音を聞きながら思った。。

ネットの料金が気になって来たから、そろそろ落ちますね、と手早く打ち込んだ。すると、今度は、中々返信が無かった。

それをあまり気にせず、私はマウスを動かしてカーソルをチャットルーム退室ボタンに合わせてクリックしようと思った。

だけど、その直前。

＞ でも一夜さんはすでに呪ってますよ。退屈を。

その一行が一瞬現れ、不気味な正体が明確な姿を表す前に、朝霧の潔さに似て、すぐに画面は白紙に戻った。

一時部屋に充満した不思議な空気も霧散して、腐敗した生活の匂いにまた汚染される。それほど日常は厳格で勤勉な優等生のように頑なだから、夢に近い話なんて一晩を超えることなく掃除されて、どこか、きっと夢のもとへ捨てられてしまうのだろう。

マックをシャットダウンさせて、お姫様気分が敷かれたベッドへ。お気に入りの漫画を広げて、私はただ虚構の話に埋もれた。この時だけだ。好きなものに埋もれているときだけ、鬱陶しいものから解放される。

つまり、幸せ。呪いなんて必要ない。

２／九月十六日（木）

鳴き声が聞こえた。

ニワトリよりも早起きな蝉の鳴き声に起こされ、クシャクシャになった毛布と髪の毛が睡眠を貪りたいと私にすがるが、私は冷酷無比な早起きの女王。健康的なオタクである私に、二度寝なんて言葉はない。

残暑の余熱が燻る長い廊下を渡りリビングに入ると、ソファには投げ捨てられたようにパパの背広とママの鞄が、持ち主の関係を如実に表すように、離れず付かずと中途半端な場所に置かれていた。それで、昨日は二人共帰ってきたんだな、と確認すると、私は極力音を立てずに冷蔵庫から新しい牛乳を取り出して、コップに注いで一杯飲んだ。

時刻は六時を過ぎた頃。登校までは十分余裕がある。だから朝食でも作って自分用の弁当でも用意する時間は十分ある。だけど私は冷酷無比なコンビニの女王。料理なんて残酷なこと、私にはとても出来ない。魚を捌くなんて恐ろしい。嬉々として魚や肉を捌いてフライパンで焼いたりできる人間がいるなんて思うだけで、恐ろしくなる。そんなの、死体をバラバラに解体するような殺人鬼と同じだ。神経がどうかしてるに決まってる。

両親が目を覚ます前に家を出る。そして鍵を掛けて、爆発寸前の妙な静けさが漂う朝の空気に身体を馴染ませながらマンションを出て、疎らな人波を憮然とかわしながら学校へ。

学校に近づくにつれて朝練組がちらほらと見えてくる。ちなみに私も一応は陸上部のマネジャー。誰よりも早く登校して朝練の準備をする優秀なマネジャーでもあるのでした、マル。

欠伸(あくび)をした口が塞がらないような大きく開け放たれた正面門。そこからはやはり誰もいないグランドが見渡せる。登校してくる生徒も片手で数えられるぐらい。みな体育会系クラブの朝練組。中には体操服姿の生徒までいる。その中、私は思わず足を止めて、それを凝視した。疑問と疑心がわき上がり、それを払拭するためにそれに近づいた。

「おは、絵馬」

「げっ、小夜子……」

友人に向かって開口一番に“げ”とは流石だ。

「随分だな。げ、で爽やかな朝の挨拶を済ますなんて」

「そうね。おはよ。じゃあ」

簡素に挨拶を済ませると、絵馬は足早に校舎へ去った。呼び止める暇なんて与えてはくれない。さすが、本物の冷酷無比のお嬢様はひと味違うぜ。

「でもあいつ、なんでこんなに早いの？」

私が知る限り奥津城絵馬が、朝練組と同じ時間帯に登校してくる理由なんて有るわけがない。なにせ、朝は機嫌と髪型が悪いことで有名な奥津城絵馬だ。きっと何か裏があるのだろう。

たとえば、学校中のドアを釘で留めて開けなくするとか、屋上から『みんなメイドになっちゃえ！』という垂れ幕を吊すとか。

つまりは悪戯目的。教室に入る時はドアに黒板消しやトラップが仕掛けられていないか確認してから入ろうと、私は心に刻んでクラブハウスへ向かった。その途中、無人かと思ったグランドで、一人走っている青ジャージ姿の生徒を見つけた。

部室に荷物を置いて体操服に着替えてグランドに出ると、やはりというかウンザリしてしまうほど当然のように、部長がすでに一日の練習量を軽くこなしていた。

「病気でしょ、あんた」

トラックをで走った後なのに規則正しく呼吸をしながら柔軟体操をしている鳥居礼蕊という強者は、まるでキシリトールの塊でも噛んだように顔を歪めて私を睨んだ。

「どういう意味だ、それ」

「他意はないよ。よくやるねって褒めてるの」

「そうか。そりゃどうも」

嫌味で言った私の言葉を、まさかそのまま受け入れたのかと疑ってしまうほど素っ気なく、礼蕊はアキレス腱を伸ばしながら手を振った。

「あのさ、礼蕊ちゃーん。君、もしかして筋肉バカ？」

「俺、オマエより成績は上だぞ」

「うわぁ、今さらりと嫌味言われたよ私」

「嫌味じゃない。事実だ」
「だからそういうのが嫌味だっていうの。覚えときな、要らぬ恨みを買うよ」
「ああ、覚えとくよ」
絶対あと三秒で忘れるだろ、というツッコミが喉まで出てきたけどかみ砕いて我慢した。
「まだ七時前だっていうのに、どうしてそんなに元気なのかね。っていうかさ、礼蕗。なんでそんなに体力が有り余ってるわけ？　尋常じゃないよ。どうせ朝も走って来たんでしょ。それで部員が集まる前に既に練習メニュー終わってるし。おかしいよ、あんたの身体、もしくは神経」
まるで禁欲的に生活し修験者のような荒行を行う無口な男子高校生十六歳にインタビュー。その体力と精神力とイカレ加減の秘訣は、と尋ねてみたら礼蕗は爽やかに、普通だろこのぐらい、と言い放った。驚きに鳥肌が総立ちしそうになって不気味ささえ感じる。
「いや、普通じゃない。礼蕗異常。マジ病院行った方が良いよ」
「なんだよ。人を化け物みたいに」はぶてたように唇をややとがらせながら、グランドの端にある砂場を指さした。
「あいつだって同じメニューやってるぞ」
礼蕗が指さした方向には、一人砂場で走り幅跳びの自練をしている、神籬（ひもろぎ）がいた。
理科室にある骸骨（がいこつ）の標本みたいに細い長身。ピノキオみたいに滑らかさのない助走からバネ人形のような跳躍（ちょうやく）を見せる、我が部が隠す陰のエース神籬安良（あんら）。
「あぁ……。ごめん、言い直す。君たち異常」
もうどうかしてるよね、アレが。
「失礼な奴だな。……寝不足か？」
不機嫌そうな憮然とした表情そのままで礼蕗は言う。
「はぁ……。別に私は至って普通。寝不足で人格が変わるなんて、絵馬じゃあるまいし」
「別に人格が変わる訳じゃないと思うが」
「あっ。そうだ。っていうか聞いてよっ。私さっき絵馬に会ってさ、こっちが挨拶したらなんて返したと思う？　げ、よ。酷い奴だ。しかもこう……五臓六腑（ごぞうろっぷ）も凍りつかすわよ、みたいな目で睨むんだぜ、こえー。絵馬が私と同じ時間帯に登校してるだけで怖いっていうのに、なんなんだろうね。どう思うよ礼蕗ちゃーん」
「奥津城、もう来てるのか？」
私の悲痛な訴えを爽やかに無視してくれる礼蕗。それでも、衝撃の瞬間を目撃したように目を見開いているあたり、礼蕗もこの異常事態を理解してくれているようだ。驚愕を分かち合えて私は嬉しい。
「そうそう。きっとなにか不吉な事が起こる前触れだね。きゃー、こーわーいーっ」

「奥津城が来てるってことは、さ、榊も……、一緒か？」
「ツッコンで来いよ！」この胸にドンと。
私は胸の奥で叫んだ。早朝からグランドの真ん中でボケを叫んでこれだ。一気に興ざめだ。
「いないよ。絵馬だけ。榊はいつも通りじゃないの？　それか、夜更かして映画みて寝坊してるとか」
「へぇ……榊、映画が好きなんだ」
そうっか映画ね、とぶつぶつと呟きながら腕を組んで礼慈が瞑想し始めた。露骨なまでに態度の変化。その理由が分からないほど、私は鈍感じゃない。分かっている。分かっているからこそ、加虐的なざわめきが沸々と煮えたぎる。
「知りたい？　榊の事」
「え？」
私の存在を完璧に失念していたように驚き、やや高い声をだした。
「い、いや……別に……」
否定しない。正直な奴だ。
これじゃあ、どんなに鈍感な奴だって分かってしまう。礼慈が、榊のことが好きだって。
「そう？　榊が誰が好きとか知りたくないんだ。ふぅん、だったら教えない」
「えっ、あ、っちょ、おい」

無様にも狼狽える礼慈。普段の毅然さなんて欠片もない。ただの、頼りない男の子みたいだ。
頃合いを見計らったように、校舎の方から他の部員が張りいい声で挨拶しながら、こちらに駆けってくる。神籬も大きな歩調で集まってくる。
それに紛れるように私は苛立ちを包む声で、
「一人で悩んでろ……ばか」口の中で霧散するような呟きをついて、弛緩しきった顔の礼慈を見たくなかったから、その場を離れた。
ふと見上げた雲模様は、淡い雲に覆われた優柔不断な天候だった。まだどこか静かで燻るような賑やかさが潜んでいる。腹が立つほど平穏な空気が充満して腐っている。
だから、そうだ、私はちょっと機嫌が悪いんだと思った。
朝練が終わって教室に入ると、どうやら空気がおかしいと感じた。まるで窓を閉め切ってストーブを回し続けたように、咳き込みそうな淀んだ空気。
不思議とそれが不機嫌さが原因ではなく、同じクラスの絵馬から、露骨に周囲を拒絶する雰囲気を、放っていた。
「一之宮さん、お願い」
そして四時限目が終わってお昼休みなってすぐに、クラスメイトの榊が、雨の中、路上に捨てられたトイプードルみたいな、つぶらな瞳を潤ませながら、私のもとへやってきた。
「どちたの、榊？」

「えっと、あのね、絵馬ちゃんをね、誘って欲しいの」
両手で可愛らしい柄の袋に入った弁当箱を持って目線で、天下分け目の関ヶ原の決戦を指揮する武将のように険しい目つきで今まさに席を立って出陣しようとする絵馬を指していた。
「誘えば？　いつもみたいに。一緒にお弁当たべよって」
何をそんなに緊張しているのだろうか。毎日のように三人で、プライベートエリアのような屋上で仲良く、まさに青春だね、みたいな感じでお弁当を食べているのに。榊が、まるで片思いの男子に告白を躊躇(ちゅうちょ)しているように見えてしまうのが、理由を中々察し難かった。
「だって今日の絵馬ちゃん。……すごく怖い」
「ああ、たしかに……」
謎はすべて解けた。榊の動物的勘が都合良く働いたのだろう。確かに今日の絵馬は、すごく怖い。当社比で三倍強ほどの恐怖度だ。これなら榊みたいな小動物が声をかけるのを躊躇うのも分かる。下手するとパックンだもんね。
しかたがないから私が、教室を出ようとした絵馬の肩を捕まえて引き留めた。振り返った時、絵馬の視線がすごく寒かった。
「屋上行くよ、絵馬」
「私、今日はパス」
「パスじゃない。付き合えってんだっ」
強引に腕を掴んで連行。絵馬は抵抗したが無視。その抵抗も、教室を少し離れたら静かになった。そして私と絵馬の後ろには、怯えるように榊が付いてくる。
屋上を上がった頃には獰猛(どうもう)だった絵馬は大人しくなったから、私も腕を放していた。いつものようにフェンスに寄りかかるように、閑散と殺風景なアスファルトと芝がない真っ青の空を眺めながら、無言でランチ。
たまに風が吹く、それはすこし湿っぽくて生ぬるいけど、私たちのテリトリーに入れば無味乾燥と殺伐とした空気に生まれ変わって未練たらしく周囲に漂う。
すごく窮屈だ、雰囲気が。
いつものように面白楽しくお喋り大盛りの食事だというのに、今日はどうしてだろうか、まるで不治の伝染病が蔓延(まんえん)した病院の待合室のように、重苦しく沈黙と緊張が密封されているようだ。息苦しくて窒息死してしまいそうだ。
「いやぁ、今日はとっても良い天気だねぇ、残暑もなくて残念でざんしょ……なんちて」
沈黙。箸の音と無情な微風。
「あ、榊、かわいいね、リンゴのうさぎちゃんじゃん。あ、そうそう、リンゴと言えば。夏休みの陸上部の合宿で、神籬が一発芸でさ、片手でリンゴを握りつぶしたんだよね。もう、食べ物を粗末にするなってんだよ、ね、は、はは」

沈黙。
箸を動かす音と榊の同情的な空笑いが響く。
「……犬も歩けばボスに当たる……」
沈黙。
突き刺すような自己嫌悪。
沈黙。
静かな屋上に降り注がれる陽射しが、まるで私を嘲笑っているようだ。
滑稽か？　そんなに私が滑稽なのか！
誰だ、こんな不穏な空気を発声している奴だ。
「小夜子。うるさい」
ぽつりと呟いた絵馬。
おまえか！
「あーーっもう！　暗い。ジメジメ暗い。何？　何かあったの？　今日の絵馬すっごく暗いし、正直とっつきにくいよ！」
我慢の限界。臨界点突破。隣で悠然と箸を動かす絵馬に怒鳴りつけた。でも、ふて腐れたような無愛想な表情を変えず、食べかけの弁当を畳んで立ちあがりやがった。
一息、睨み合う。
「うるさい……。ほっといて、私は独りになりたいのよ」
高飛車で人を見下したような冷めた口調で言い放つ。一瞬、返す言葉が詰まって絶句した。本気でぶん殴ってやろうかとさえ思った。

怒りに震える私の拳。それを綺麗に無視して、絵馬は歩き出す我が侭全開っぷりに、私の喉が一気に加熱した。
「何だよ。だったらずっと独りでいればいいじゃん！」
食べかけのパンを叩きつける勢いで立ち上がり、
「絵馬なんか独りになっちまえ！」
怒りをまき散らすように叫んだ。
その声にさえ、絵馬は何も返さず屋上から出て行った。取り残された私と榊。行き場を失った怒りをかみ砕くように、私は座り直してスティックパンを叩き割った。
「ちくしょう。なんだよ、あれ。もう絶対お昼誘ってやんない。榊も今は絵馬に関わらないほうがいいぞ。あの勢いだと声かけただけでハつ当たりに何されるかわかんねぇ」
「で、でも……」
「そうしな。絶対にその方が良い」
「うん。でも、それだと……絵馬ちゃん、本当に孤立しちゃうよ。それは……」
普段は従順な榊が頑なに反抗的だった。素直に、うんと頷けば良いのに、模範的なほど良い子だから、それが私には少し苛っとしてしまった。

◇

「絵馬が傍若無人なのは今に始まったことじゃないけど。でも、あの態度はあんまりだと思うんだよね。せっかく気にかけてやってるっていうのに。……なんかさ、おかしいよ。理不尽なぐらいおかしい、色々と今日は。特にさ、か弱い私がこんな雑用せなならんわけ？　ねぇ、どうなのよ礼蕗ちゃーん」

「知らん」

無愛想な口ぶりで淡々と受け流す礼蕗。

せっかく同じ部に所属して、こうして一緒に雑用をしているのだから親睦を深める意味でコミュニケーションを率先として図ろうとする私の思いやりを、彗星の速さで無下にされた。

「何が腹立たしいって、なんで私がこんな重労働せにゃならんのよ。これ、殺人的な重さなんですけど部長。何が入ってるの？」

放課後の部活開始早々に任された雑用というなの重労働。鉄アレイや鉄板やら筋トレグッズが満載された段ボールやコーンなどの用具の運搬作業。一箱は軽く３キログラムはあるだろう荷物を校舎入り口から二百メートルほど離れた体育倉庫に運ばなければならないのだが、どう考えても、か弱い女子がやる仕事ではないよね。黙々と筋トレグッズを箱に詰めて、軽々と抱えて歩く礼蕗と神籬。我が部のツートップはなんとも逞しいではないか。

「だからさ、これ、絶対無理だって私の細腕じゃ」

「大丈夫」

一ピコも説得力もエネルギィもない礼蕗の励ましに、当然のごとくなんの効力はなくて、私の腕は細いまま。日々尋常ではないほどのトレーニングを積んでいるはずの礼蕗でさ、段ボールを一つ持ち上げるのに苦渋の表情を浮かべているのだ。それを見たら、もし私がこれを持ち上げたら肩が脱臼してしまうのは明白だ。犬でも分かる。

「ねぇー礼蕗ちゃーん。これ、運んで。お・ね・が・い」

我ながら惚れ惚れするほどの甘えん坊口調を都合良く目覚めさせ、上目遣いで礼蕗を見た。イメージとして、冬の冷たい雨の中、道端で段ボールの中に捨てられた子犬がお腹をすかせクゥークゥーンと泣きながら目をウルウルさせているようなものだ。これで良心が動かない奴は悪魔だ。

「……がんばれ」

野郎は悪魔だった。

「なんだよっ、困ってる女の子を見捨てる気か。この薄情者！　部長なら可憐なマネージャーを労れ！」

「小夜子に可憐は似合わないだろ。オマエなら大丈夫だ」

「え……？」

まったく思いやりの無い言葉を残し、礼蕗は段ボールを抱えて体育倉庫へ向かった。重たい箱の前に座り込んだ私は、その憮然とした背中を刺すように睨んで、俯いた。

ショックだった。言った本人の鈍感さも、悪意のなさも、嫌と言うほど分かっているけど……、だから、それが素直な言葉だからこそ、酷く鋭く心を刺したのだ。

しばらくすると足音が近づき、一人で大丈夫か、と少し低い声が聞こえた。倉庫から戻ってきた神籬が、常識的なほど優しい気遣いで声をかけてくれたのだろうけど、生憎と今の私は、うるさいあっち行け、とぐらいしか乱暴に言うことしか出来なかった。遠ざかっていく神籬に心の中で、すまん、と謝って立ち上がる。

段ボールを睨みながら、台車でも借りて運ぼうか後輩を言いくるめて運ばせようかと考えた。そして辺りを見渡していると、校舎から良い鴨(かも)が現れた。

「待って、榊。ちょっと待って！」

校庭を抜けて帰ろうとする、榊あやめを捕らえた。

「榊、今から帰るの？」

「うん。そうだけど……。一之宮さんは部活？」

相変わらずおっとりと、人の二倍はスローで生きてるような口調。

「そう、部活。でね、でね、榊、今暇？」

「別に忙しくはないけど……何？」

ヒット。

このいかにも嫌とは言えない小心者の日本人的で受動的な言い回しに、私は確信を得て心の中でニヤリと笑った。

「実はね、ちょっと手を貸し欲しいなーって思って。お願い。ちょっとあれを運ぶの手伝って欲しいの」

そして私は、重さ三キログラムはあろう段ボールを指さした。それを倉庫まで運んで神籬にでも渡しておいてと、矢継ぎ早に伝えると、曖昧(あいまい)な了承をしたから、それを聞いて逃げるように私は校舎に向かった。

榊には、先生に呼ばれてるからと言ったもののそんなものは当然ない。用事はないけど悪意はある。グランドが見渡せる廊下の柱に身を潜(ひそ)め、じっとグランドの方をのぞき見た。

あぁ、私はなんていけないことをしたのでしょうか。ちょっと苦痛だからと、親友を騙して押しつけるなんて、そんな悪いことを……。でも神様、お許し下さい。私は、親友とこの苦しみを分かち合いたいだけなのです。ええ、すぐにでも親友のもとへと駆け戻ります。だから、今暫くお許し下さい。アー(に)メン(や)(り)。

「あぁあ、やっぱり泣きそうになった。無理だよね、あれを運ぶなんて、うら若き乙女には」

榊が、段ボール相手に悪戦苦闘して持ち上げようとしているのを見て、これ以上は可哀想かなと思って、そろそろ戻ろうと、玄関まで戻って、私は立ち止まった。

後ろに倒れそうになる榊、それを背後から支えるよう肩を抱く礼慈。

二人の姿を突きつけられた。

頭を垂らすような位置からの西日は、甘く蕩けていそうで、その輪郭もない濃密な陽射しに照らされて、その二人の境界線も曖昧に溶けてしまってまるで、熱を持ち過ぎた水飴が溶けたような密着は、二人を一つのように、私に見せつけた。

お人好しの礼蕊が、困っていた榊を助けただけだ。

微笑ましくて、私が唖然と立ちつくすような場面ではない。礼蕊の性格を知っているなら、珍しくも奇妙なものでもなく、やっぱりショックを受けるような事なんて、あり得ないはずなのに。

私は、どうしてだろう……今、すごく胸が痛い。

泣きわめいた方が楽になれる気がするほど、悲しくなった。

大きなガラスで隔たれた校舎の内と外。誰かに見られるのが嫌だった。急に恥ずかしくなった。私は、本当はきっと誰も私なんて見てるはずはないのに、姿のない他人の視線から、廊下の端、非常口近くまで逃げて隠れて俯いて、座り込んで密かに、瞼を思いっきり閉じた。

押し出されて流され零れた涙に、私は同情しない。

同情なんかするもんか。

悔しかった。

訳も分からず、ただ、悔しかった。

悔しくて。なぜ悔しいのかが分からなくて、また悔しくなって、その繰り返しが痛くて、痛くて我慢できずに涙になって、その涙がまた私を苦しめる。

さめざめと泣くなんて似合わない。私はそんな涙になんか、同情してやらない。落ちて散って朽ちるだけの涙のために、私は一滴だって泣いてはやらない。

「……バカみたい」

心底、自分をそう思った。

「誰がバカみたいなのさ」

「え……」聞き手なんて考えてもいなかった独り言に返す声に、驚きで無防備にも顔をあげてしまった。

「ひ、……神籬、なんで……」

「オマエこそ、何やってんだ。こんな所でさ」

美術館に展示されているブロンズ像のように直立不動で私を見下ろし、飄々とした口調でそいつは、

「泣いてるのか？」私を馬鹿にしているのか心配しているのか分からない声の調子で訊いてきた。

「そうよ。なんか文句ある？」

まだ頬に涙の水っぽさが残っているまま顔を上げたのだ。ここまで来て逃げも隠れもしない、開き直ってやろうじゃないかの精神だ。

「いや、文句はない。ないけどさ……」

「なに？　やっぱり文句あるってぇの？」

「いや。文句はない」

「だったら何？　何が言いたいの？」

「そう、それだ。部活、そろそろ切り上げろってさ」
「……どうして」
「ニュース観ろ」
「だから、どういうこと」
「帰れって事だとさ」
「そう。……神籬、一緒に帰ろっか」
「……はぁ？　なんでさ」
私は屈伸するように立ち上がって、目の前のブロンズ像にしては厚みが足りない針金人形のような男子の腕を掴んで言った。
「私のボディーガード」
だが、頼りないボディーガードだなと、人選に一秒で後悔した。

◇

まだ西日ががんばる夕方少し前。汗も流さず部活を終えた私は、頼りない杖のようなボディーガードを伴って、人の群れを避けるように、まだ鬱蒼と青葉が生い茂る並木通りを通って下校中。
「殺人、じけ、ん？」
「そう、箱入り死体が発見されたのさ」
帰りまでの暇つぶしに、神籬が口を開いてしゃべり出した話題は、とても青春とかとストロベリィメモリなものではなく、血なまぐさい上に胡散臭い殺人事件だった。
「今朝、駅の近くの繁華街の路地裏で、箱に詰め込まれたバラバラ死体が発見されたって、ニュースで大々的にやってただろ。観てないのか？いや、観てなくてもさ、周囲の騒ぎ様から察することはできるだろ」
覇気も根気も真剣みのない口調で語るものだから、聞いている私もまるで現実味もなければ興味が沸く訳もない。
「まぁ、なんか変だなと思ったけどさ。それは絵馬が原因かなって思いこでたから、他の事なんて考えなかったな。……それにさ、そういう、なんていうか、狂気殺人事件？」
「猟奇殺人のことか」
「そう、そういう猟奇的な事件って、別に珍しくないじゃん。ニュースなんかで聞く度にさ、またか、って思うわけ。小説なんかでも散々やったでしょ、猟奇殺人って。もう、お腹いっぱいで吐き気がする」
「虚構と現実の話は、違うと思うけどさ」
「一緒だって。どっちにしたって、ちゃんと犯人が用意されてるだろ。小説なら、美形探偵と解説のおまけ付きで。謎はすべて解けた！　ってあっという間に犯人逮捕。それで猟奇殺人って言う割には下らない動機なんだよね。愛情だ怨恨だ復讐だ現実逃避だ、あげくに殺したかった殺したって、なんだそりゃ！」

「毒舌だなオイ」
「いや、別に悪口じゃないよ。ミステリィ小説嫌いじゃないし。それに引き替え現実の猟奇殺人って、ほら、なんか地味じゃん。死体をバラバラにしただけで猟奇殺人だ！　とか子供が親を殺しただけで猟奇殺人だ！　とか儀式仕立てで理解できない異常殺人だ！　ってすぐにマスコミが食いついて騒いで盛り上げて持ち上げてさ、他人の不幸を暴こうとしてるだけじゃん。全然、猟奇でも異常でもないって。多いよね、そういうの。なんでかな、世紀末だからなのかな。どう思うよ、神籬」
「そうだな。とりあえずだ一之宮。女子高生が公道のど真ん中で、そんな血生臭い批判を展開するのは止めた方がいい、と俺は思う」
関係者ではありませんの距離を取って立ち止まった神籬は、冷ややかに目を細めて、どこか芝居かかった口調で言った。
「先に話振ったの、おまえだろ」
「そうだけどさ、まさか、そんなメディア批判するとは思わないだろ、普通さ。意外だった。一之宮ってさ、結構好戦的な性格してるんだな」
「えっ。……そう、かな？」
「ああ、分かるさ」
虫も殺さぬ平和主義者だと自負してきた私には、その評価でさえ、わりとショックだった。
「なんで分かるの？　なんか秘密でもあるの？」
どうせ当てずっぽうだろうと思って尋ねてみると、頬が痩けた顔を微かに緩ませて神籬は不敵に笑った。
「そうさ、秘密があるからだよ」
どろりとした濃霧に覆われたように真意が見えない言葉を、一瞬妖しい一面を見せて、善く響く声で言う。
一瞬、言葉の意味を探ろうと呼吸が止まった。呼吸の機能が停止した一瞬の間に、神籬が親密過ぎる程の距離まで近づけた。
「秘密を持ってるだろ、一之宮」
耳の辺りに寒気を囁いた。
「隠してること、あるんだろ」
「な、なに、言って――――」
いるんだ、と言い返そうとする前に腕を捕まれ、密着した状態のまま神籬の長い歩調で進んだ。もたつく加速で小走りになりながらも、私は神籬にエスコートされるように歩みを続ける。
「ちょ、ちょっと待った、なに、急にッ」
混乱が適切な対処法の選択を阻む中でも、怒りを込めた抗議を放つと、神籬は急に進行方向を変え、直角に曲がって道沿いの公園へ入った。
慣性によって身体が弄ばれる。
「ちょっ、神籬、いい加減怒るぞ！」
内心既に怒りの沸点を超え破裂寸前。だから、神籬の手を振りほどいて蹴飛ばしてやろうかと思った直前。

「尾行されてる」
覗き見するように微かに振り返り、低く押し殺したような声で呟いた。
「え、うそ」
驚き、それでも身体は、それが本当かどうか確かめようと振り返ろうとしたが、やめとけ、と止められた。
「い、何時から……い　たの？」
気づけば、私の唇はやや震えていた。
「学校を出て、すぐだな。薄い鼠色の地味なスーツに地味な革の鞄。歳は……若いな、三十半ばぐらいか。一見ただの帰宅途中のサラリーマンみたいだけど、こっちに気づかれないように常に人の流れに紛れて見失わないように距離を保ってる。……プロの探偵か刑事か、それともただ慣れてるだけか……。一之宮、心当たりあるか」
背後を意識せず前を向いたまま、自然な振る舞いを装いながらも、神籬はさっきまでより一オクターブ低い声で、尋問するように問う。
心当たりがあるかなんて、考えるまでもない。
「……神籬。それ、巻けれない？」
私の右腕を握る神籬の手を左手で握った。
「それは出来るが……その前に、一之宮」
「なに？」
「あれを巻いてやるが、文句は聞かん」
神籬の声が、加速した。
瞬間――――神籬に包まれ、視界が揺れた。
急に身体が軽くなる。
発作のような悲鳴があがる。
視界が放物線を描くように揺れ動く。
そして、一瞬の出来事を理解した時……、公園の小径を緩やかに曲がり、木々の影に入った瞬間、濃い影が潜む木々と草薮の群れの中に。
神籬が、私を抱えて瞬時に飛び移ったのだと理解した時には既に着地の際に屈んだ体制から立ち上がり、木の幹の影へ密着したまま滑るように運ばれていた。
「ひ、ひも、ろぎ……あんた、意外とすごい、んだね」
驚きと悲鳴の動悸を抑えながら、我が部が誇るジャンパーを見た。
神籬は至って冷静な表情、いや、どこか緊張感が足りない表情で、口元で人差し指を立てて静かにと囁いた。
神籬は慎重に幹の影から公園全体を覗き見ていた。
私にはそんな余裕なんてなく、じっと正面を向いて、乱れた鼓動を鎮める事に努めた。
「……もう、大丈夫そうだな。ま、しばらくここで隠れてれば見つかる事はないだろ。……自然豊かな公園で良かった」
冗談なのか本気なのか分からない口調で神籬が呟くと、私はやっと深呼吸をして大きくため息を吐くことが出来た。
「とりあえず、サンキュ」

返事はなかったけど、神籬は呼吸程度に頷いたから、こちらの感謝の気持ちは伝わったのだろう。

頭上の小枝が微風に軋む度に、私たちの間に沈黙は明確な形を成していくように、語る声は無かった。

礼慈もそうだけど、神籬も寡黙な奴だ。こちらから何か尋ねれば必ず何かしら言葉を返してはくれるけど、自分からは話しをふる事を中々しない。べらべらと馴れ馴れしく軽口をたたくのは、その場では楽しいけど、それが続くと鬱陶しい。その分、寡黙なのは、相手からの情報発信がないから正体不明な感じが漂ってしまう分、息苦しい沈黙が辛い。

そう、今、そんな感じ。

なぜだか、私の周りの男子にはこういう寡黙なタイプが多い。もしかしたら、男の子って基本的には無口な生き物のなのかな。

「一之宮」

「え、あ、はい、なに？」

順応しつつあった沈黙を突然破られた。

寄りかかっていた木の幹から離れて神籬は、堂々と小径へ出て行った。きっと、もう大丈夫だから出よう、という言葉を神籬は、私の名前で省略したのだろう。

神籬の後を追う。

「さっきの奴なんだけどさ」

さっきまでの緊張感を忘れさるような緩い声。後ろから見た神籬は、眩しい夕日と影によって、カカシのように見えた。

「あれ、一之宮を狙ってただろ。知り合いか」

躊躇（ためら）わずそんな事を訊く神籬。一体どんな根拠があるのだろうか。見事当たっているのが癪（しゃく）だったから、根拠は、と聞き返した。

「俺はさ、誰から追われたり尾行されて素性調査されるような、後ろ暗い事はない。清廉潔白（せいれんけっぱく）だ。だから、おまえしかいないだろ」

ふてぶてしい程まで遠回しに、一之宮は品行素行共に悪いと言った。

「喧嘩、売ってるなら地獄行きの切符で買ってやるよ」

私も遠回しに、オマエ最低地獄に落ちろ、と言ってやった。

「ん。違うのか」

素っ気なく拍子抜けするほど間の抜けた緩い表情で振り返った神籬を見て、こいつも遠距離射撃は通じないか、と舌打ちした。

「……知り合いじゃないけど、心当たりはある」

苛々すのが馬鹿らしくなるほど毒気が抜けて、力まで抜けそうだ。私は近くにベンチに深く座って、両足を投げ出した。

「言っておくけど、私に非はないから」

五メートルぐらい歩いてから私が座ったのに気がついて、神籬は引き返してきてから、私は続きを言った。

「あれ、多分……ストーカー、だと思う」

躊躇いながらも言ってみた。

すると神籬は不思議な笑みを浮かべて、
「それ詳しく知りたいな」と言った。
生憎、私とストーカーには詳しく語られる程深い関係はないので、先月辺りから尾行されたり、マンションの辺りをうろついたり、部屋を監視してる、という被害報告を、神籬に愚痴のように話した。
「なるほど。実害は、ないんだな。今のところ」
「う、うん。まぁ、今のところは」
私が語り終えると、神籬は腕を組んで考えにふけながらそう呟いた。意外にも、真剣に私の事を心配してくれているようで、少し見直した。
「本当に付きまいと監視だけなのか」
「だと、思うけど」
「家に不法侵入したり盗聴盗撮や、私物がなくなったりとか、ないのか」
「ちょっと止めてよそれ。気持ち悪いじゃん！」
「ああ、そうだな。すまん」
「いや、別に……、ごめん」
萎むように会話は沈黙へ。
神籬が、口元を手が覆い細い目をさらに細めて宙を睨む。
「何か手は打ったのか」微動だにせずに神籬が問う。
「ううん。警察に言っても無駄だし、被害無いから。それに、もしかしたら勘違いかもしれないしさ……、放置してる」
打てる手があるなら打ってる。
警察が本当に助けてくれるなら、今すぐにでも駆け込んでやるさ。けど警察が、たかが付きまとわれているだけで動いてくれるような慈善組織じゃないことぐらい、私にだって分かる。
探偵にも頼んだら、それなりの成果はあるだろうけど、お金がもかかる。無償で、毎回毎回事件を直感で解決するような名探偵が居ないことぐらい知っている。
「親には、相談したのか？」神籬の質問は、あまりにも正し過ぎる。
警察だの探偵だのと頼む前に、まず親に相談すべきだろう。それが当然だと思う、常識的かつ健全な考えだと思う。だって、家族だもん。
学校でも、家族は互いに助け合って暮らす、扶養って言葉を習ったのだから、困ったときにまず、泣き込むのは警察でも探偵でもなく、愛すべき家族だろう。
でも。
「言ってない。っていうか、そんな時間ないし、それこそ言ったところで何も変わらないよ。だってあの人達は、娘よりも仕事の方が大好きな仕事中毒者なんだから……さ」
頼りたいけど、どう頼ったらいいか分からない。
今まで、本当に頼ったことなんてないんだもん。
家庭としては破綻していなくても、
家族としては機能していないのだ。

「基本的に放任主義なのよ。だから自分のことは自分で何とかしろって、無言の躾じゃないのかな。はは」

影が背伸びをして周囲の照度を落とすから、私は明るい声で言ってみたけど、その分、私の心に影が入り込んで暗い気持ちになってしまった。

好きじゃない、強がりなんて。

気持ちとは裏腹な表情ばかり繕っても、ギャップが軋みをあげて、私の心を少しずつ傷つけて、痛くなるだけ。

それでも、私には似合わないから。

他人に見せる一之宮小夜子には、落ち込むとか弱音とか、しおらしく泣いてる姿なんてまるで似合わないから。

いつも、強がってしまう。

だから、

「強いんだな、一之宮」

当たり前のように、そんな言葉だけを貫ってしまう。

あぁ……、まただ。

また、こうして強い私が捏造されていく、私以外に。

「でもさ、無理して強くあろうとするな」

「え、――――」

初めて聞いた。

「辛くなるほど強がる必要ない。弱いなら、頼ればいい」

初めて、私の弱さを見透かしてくれた。

微風のように緩やかな口調は、きっと自然と口にしたから。強い風が吹けば折れそうな細身が、今、私には鋼で出来ているように見えた。

あぁ、こいつ良い奴だ。

「ありがと」

だから、私もその一言が自然と口から出た。

神籬が曖昧に頷いて、腕を組み直して、再び瞑想するように目を細めて考え出した。そしてしばらく沈黙して、険しい表情で言った。

「やっぱり放置はよくない。今は実害ないかもしれないが、言い換えれば、いつ害が及ぶか分からないという事だ。それは危険だ。一之宮にとってはもちろん、一之宮の周りの人間にとっても危ない事だ」

「はぁ、……私の周りもって。家族にも危害が及ぶって事？」

「そうだな。その可能性はある。もちろん、家族以外も、時間が経つにつれて、相手の出方によっては……危険だろう。でも、やっぱり一番危険なのはおまえだよ、一之宮」

神籬は周囲をゆっくりと見渡しながら続けた。

「あれが一之宮をストーキングするなら、最優先対象は一之宮だって事になる。今は尾行したり監視するだけでも、もし、より積極的な接触があるとすれば、真っ先に影響があるのは一之宮本人だ。そして、副次的にその累は周囲にも及ぶ」

まるで読経するような低く響く声を鳴らして、神籬は威嚇するような目つきで私を見下ろす。

まるで、私の不手際を叱っているようだ。……いや、きっとそうなのだろう。

言われてみれば、確かに私の放置という選択は、余りにも浅はかだったと思う。こうして、もしもを語られると、自分ばかりか関係のない人達にまで迷惑がかかると理解出来る。

「言い方は悪いがさ」

そう前置きして、

「今、一之宮は呪われている。

オマエを中心に呪いは拡大して、一之宮から不幸に見舞われる」

鋭すぎる声を鳴らした。

「私が、呪われてる――――？」

「そうさ。だって、正体不明の何かに狙われている。それは呪いと一緒だろ。一之宮がストーカーを放置し続けるなら、確実にオマエは不幸になる、危害が及ぶ。そして一之宮に危害があれば、少なからず周囲にも影響はある。ほら、呪いの某とかと一緒だ。呪いは、呪われた本人だけで終わるなんて事はない。波紋のように広がっていくんだ」

何もしなければみんな呪われる、と神籬は言う。

するとその響きが波紋のように広がり、周囲の木々に隠れている鴉達が共鳴するように嘎れた鳴き声を広める。そして、不気味なほど、公園が千切られた折り紙のような影に飲み込まれて、暗澹とした。

だから、呪いが、現実に姿をちらりと現した。

「そんな……、呪いなんて」

寒気が過ぎる。

思い出せ。私はつい最近、それを嘲笑ったじゃないか。そう。そうだ、昨日。呪いなんて迷信だって、私ははっきりと否定したんだ。

ただ、呪いに、すこし希望を見たのも確かだったけど。

「呪いなんて……はは、まさか」

「呪いはともかく。……ストーカーは実在している。それをどうにかした方がいい。少しでも早く、対処すべきだ」

「だったら、神籬がやっつけてくれるの？　あのストーカーを」

「いや、それは……」

意地悪な質問に、神籬は仏頂面で呟きながら考え出した。

どう答えてくれたって構いはしないのに、この男は馬鹿みたいに真剣に、そしてきっと善良な答えを考えてるに違いない。

「いいよ、そんな考えなくても。自分の事は自分で何とかするって。神籬に心配されるほど弱くはないぞ、私は。なめんなよぉ」

ひょいとベンチから飛び立つ。不気味な影がスポットライトのように強烈な夕日にかき消されていた。そして、存外に活躍をしてくれたボディーガードの肩を、つま先を立ててポンポンと、ご苦労様と叩いて背を向けた。

「ま、気持ちだけ貰っとくよ。あんがと」

「一之宮、送っていく。まだ……」

「ノー・サンキュー」
振り返らずに手を振って、私は公園を抜けた。
やっぱり送ってもらった方がよかったかな、と強がってしまったことをちょっと後悔した。

◇

「お姉ちゃん、ボタン押してくださる？」
マンションに到着してエレベータに乗ると、昨日と同じように、また近所の女の子が乗り合わせた。まだ小さなこのお嬢ちゃんのために、私はボタンを押した。行き先は同じだし、何より、このちょっとませたしゃべり方が、実は好きだったりする。
人の気配が当然ない我が家に帰宅。昼間の残暑が淀みを作り上げて、それに何か目に見えない小さな生き物が悲鳴を上げているかのように、耳鳴りを伴う静けさが籠もっている
ぼんやりとリビングから食料を確保して、ついでに両親の不在を確認して自分に部屋に戻る。制服を叩きつけるよう脱ぎ捨てて、私服に着替えるとそこでやっと大きく息を吐いて、気分が変わる。
Ｍａｃを起動させメールとブックマークの巡回を済ませて、テレビもつけずに作りかけのコスの制作に取りかかった。
ミシンを使い、細かな装飾に黙々とこなしていると時々、一瞬ふと今の私を離れた場所から見ている私が呟きかけてくる。
「なんか女の子してるって感じね」とかか「宿題が沢山出てるでしょ、やらなくて良いの？」とか「これを着て、それを誰に見て貰いたいの？」などなど、野次馬な囁きが、私の集中力をかき乱す。かき乱すんだ、そんな事考えたくない、こうして何かに没頭しているとき、それらを忘れられるから好きなのに、日常を忘れる事をきっと許さないのだろう、常識的な私は。
カッコーン、とＭａｃから面白みのない電子音。メールが届いた。作業を中断して新着メールを見てみると、レイヴェンからのチャットのお誘いメールだった。
否応なしに昨日のチャットの内容が脳裏を過ぎる。
呪い――――という単語が浮かぶと連想して、公園での神籬との会話が再生した。そしてストーカーの存在が私の思考に踏み込んできた。
部屋を出て、リビングへ。一日中閉められているカーテンの隙間から、窓越しに外を覗く。陽射しに反射して、外は橙色に染まりきり不明瞭。窓ガラスをあけて、公園のように細い木々が不規則に植えられた庭園を見て、私はぞっとした。
僅かに身が退く。掴んでいたカーテンを引きちぎりそうになった。

ベンチに人が一人、座っている。それだけなら良かった。
そいつは、見ている。
そいつは、私を、見ている。
固定されたように顔を上げ、天体望遠鏡を人の形にしたように微動だにせずに、一直線に眼差しをこの部屋、ここ、この私へと向けている。
急いで壁を作るようカーテンを閉めた。そうしなければ、汚れてしまうような気がした。さっきまで夕日に照らされて、艶やかな光沢に濡れていた窓ガラスが、すごく、汚らしく醜いものように思えて、それに触れていた自分の手が汚れてしまったように感じた。
再びメールの着信音。レイヴェンからだ。

＞ 大丈夫ですか？

たった一行だけ。それでも悪寒がした。
視線を感じた。
私は急いでブラウザを立ち上げって、いつものチャットルームへ移動。ログイン。入居者は二名。すでにレイヴェンは入っている。そして先に慣習的な挨拶を打たれ、それを返してすぐに私は本題を書いた。

＞ メールありがとうございます。私は、大丈夫です。

＞ それはよかったです。まだ、ご無事で。

＞ まだ、ってどういう意味ですか？

＞ それは一夜さんも了解していることでしょ。

なんだろう。私は不意に、挑発的だなと感じた。まるで私の手札を探ろうとしているような緊張感が、画面越しに伝わってくる。
でも、それは錯覚だと次第に分かった。

＞ 一夜さんはストーカーに狙われているのですから、
＞ いつ危害が及ぶか不安です。
＞ それなのに何も手を打ってないと仰ったのですから、
＞ 大丈夫かな、って心配になりますよ。

やんわりとした言葉の羅列。　無機質なディスプレイから心遣いの温もりがほんの僅かでも伝わって来そうだ。

＞ ご心配かけました。ありがとうございます。
＞ 今のところ大丈夫ですけど、今日、ちょっとヤバかったかも。

〉 え！　なにがあったんですか？

私は簡単に下校中の出来事を簡単に説明した。

ついでに神籬の活躍をたたえるように多少の誇張を加えてみた

〉 それで、レイヴェンさんと同じような事を、

〉 その友達からも言われました。ちょっと説教されて凹(へこ)んでます。

〉 きっとその友達の方も一夜さんの事が心配なんですよ。

〉 だって、一夜さん。

焦らすように途切れ、

〉 呪われているのと一緒ですから。

不吉な言葉を紡いだ。

「あ、――――――」

その文字、その形が表示された途端、寒気を感じた。

室内の空気が畏(かしこ)まって停止したように冷たく感じた。

同じだ。

まただ。

また、呪い。

神籬と同じ事を、この人も言う。それは偶然？

偶然だ。そうに違いない。……でも、なぜ偶然が起こるのだろうか。

偶然？　本当に偶然なのか。

そんな疑問が巡る。脳裏を巡る。思考を巡る。巡る度に増幅していく。

回る度に、まるで綿飴のように膨らんでいく。

〉 そして一夜さんも呪ったのよ。

〉 ほら、昨日言ったでしょ、毎日退屈だって、

〉 だからあんな事件が起きたのですよ。

まるで生きているように画面が変わり、

〉 箱入り殺人事件は、あなたの呪いの産物ですよ。

苛烈(かれつ)な光彩を放ち、血を纏う様な文字を突きつけた。

マウスを持つ手が震えてプラスティックが軋むほど強く握りしめ、身体全体が軋むように震えだしているのに気づいた。喉が乾いて、否定する言葉が出ない。

そんなの偶然だ。

私のせいじゃない。

偶然が重なっただけだ。
そんなの、偶然に、決まって、いる……。
でも……こんな偶然が、あるの？

＞ 偶然じゃないですよ。

私の心を見透かしたように表示された言葉に、一瞬心臓が跳ねた。
そして、自動的に次ぎの呪文が現れる。

＞ この世に起こる事すべて、必然なのです。

その文字には力が籠もっていた。
人の心を惹きつける引力が。
妖しげな響きをもたらす魔力が。
思考を停止させる摩擦力が。
だから、それは呪文。

＞ 一夜さんが呪ったから、必然に退屈な日常は壊れだしたのですよ。
＞ そして、一夜さんには呪いの素質がある。
＞ 良いですか一夜さん、考えてもみてくださいよ。
＞ 常識的に考えて、こんな偶然、ありませんよ。
＞ だからって本当に呪いが効くとは……。
＞ でも、願いは叶ったでしょ。

「あ……」
キーボードを叩く指が止まった。口の中で声が凝固する。
確かに、事件が続けば退屈なんて言ってられない。
もちろん、私は殺人事件なんて望んでない。人の命を退屈だからという理由で、奪うような考えなんて全くない。私が望んでいたのは、そう、楽しいものだ。漠然と、祭りのような賑やかなものだった。
でも、望みの形は違うけど、願いは叶った。

＞ 祈りは神様には届きません。でも、人には呪いは届きます。
＞ ……もし、一夜さんが、それでも偶然だと思うのでしたら、
＞ どうですか、その偶然に賭けてみては？
＞ 賭けるって、何を賭けるんですか？
＞ 当然、願いですよ。
＞ 今、一夜さんはストーカーの存在を鬱陶しく思っていますよね。
＞ だったら、呪いましょう。

＞ それでもし、偶然がまた起きてストーカーが居なくなれば、
＞ 喜ばしいとは思いませんか？

魅力的な言葉だった。
もし、呪っただけで全てが上手くいくなら、それはとても良いことだ。
本当に、それであの汚らわしい視線を駆逐出来るなら、私は……。

＞ 嬉しいですけど、どうすればいいか……。
＞ それに、私なんかがやって効くかどうか……。

常識的な私は抵抗している。
呪いなんて偶然に頼る事を躊躇（ちゅうちょ）している。
でも、私の大部分はすでに、呪いを受け入れている。それがもっとも簡単な方法だ。リスクがない。ただ呪えばいい。誰にも言わなくてもいい。両親にだって相談する事も、警察にすがる事も、ましてや探偵になんて大金を出す事もない。私一人で、全て片付けられる。
その上、偶然なんだから、ストーカーに報復される恐れなんてない。
誰にも知られず。誰にも見られず。誰にも迷惑をかけず。誰も傷つかず不幸を知らず、呪った相手だけがいなくなる。
それはなんて――――、素晴らしい。

＞ 大丈夫。呪い方は私が知っています。
＞ そして一夜さんには、呪いの才能がありますよ。
＞ それでも不安でしたら……そうですね、
＞ 今日、誰かの悪口とか言いませんでしたか？

＞ 悪口ぐらいなら多分。でも、それが何か関係あるんですか？

＞ はい。悪口も簡単な呪い方です。
＞ もしその悪口を言った相手が、一夜さんが願った通りになったら、
＞ 自信を持っても良いと思いますよ。私の呪いは本物だ、と。

書き込みが表示された途端（とたん）、レイヴェンはチャットから落ちた。まるで呪いを残すように、その言葉を置いて。
いつの間にか闇に侵された部屋の中で、鮮烈（せんれつ）な光を突き刺す画面を食い入るように、私は眺めていた。
そして唐突に、言葉を思い出した。

――――絵馬なんか独りになっちまえ！

私は大事な友達を、呪ってしまったのかもしれない。

３／九月十七日（金）

「一之宮。ちょっと付き合ってくれないか」

四時間の授業という荒行で疲れきった脳を、襲った驚愕の言葉の主は、礼蕊だった。

何が驚いたって、礼蕊から声をかけてきた事もだが、何より、付き合えって辺りが、なんとも何故だか背徳的な臭いがして、私を半ば放心させる威力があった。

昼休みの賑わいが沸点に到達する前の微かな静けさの中、礼蕊に連れられて屋上へ。礼蕊は無言だった。私も何も言わなかった。だけど心の中じゃ、けっこうドキドキしていた。だって、礼蕊がわずかに緊張しているのが伝わっていたから。もしかしたら、愛の告白かな、なんて事も妄想し始めた頃に屋上に到着した。

するとそこには、絵馬が待ち受けていた。

「え？　……なんで？」

高まりかけた気持ちも、熱もすべてが一瞬で冷めた。

完全に出鼻を挫かれ、調子も狂わされたせいで、私は絵馬と対峙形のまま停止してしまった。息苦しい雰囲気となって、私の周囲で固まる。

絵馬が私を見て、苦虫を噛んで、こっちにまで聞こえるぐらい露骨に舌打ちした。

「悪い、待たせた」

礼蕊が停止した私を置き去りにして、絵馬の側に歩みよる。

それが無性に腹立たしかった。

五歩分ぐらい離れた場所で、二人が小声で何かを話している。絵馬の表情は不機嫌そうで、目つきは威嚇しているように見えるから、言い争うでもしているようだ。

私は、出方をうかがうように黙っていた。

すると突然だ。

「一之宮。奥津城に何か言うことあるんじゃないのか」

礼蕊が険しい表情で、咎めるように私に言った。

「……はぁ？　なに、どういう意味？」

分からない。

絵馬に言う事なんて、あるかもしれないけど、それをなぜ礼蕊から聞き出されなければいけないんだ。なぜ、礼蕊がそんな厳しい表情をしているのか分からない。まるで、私がいじめっ子みたいじゃないか。

「あの噂のことだ」

礼蕊の声が低い。

「あの噂。流したの、一之宮なんだろ」

礼蕊が、ためらうように、けれど厳しい口調で言う。絵馬は、やはりどこか冷めた目をして私を……いや、目の前を眺めていた。

「なによ、噂って……」

前へ踏みだす。
「私が……、何してっていうの」
自然と声が大きく、
「噂ってなに！　それがなんだっていの！」
挑発的な物言いになっていた。
荒々しくなる私の声。
対照的に礼蕗の声は、
「……八年前の事件の事だ」
悲痛なほど冷静だった。
「八年前の事件……？　なんのことよ」
好戦的に傾いた身体を正して訊くと、礼蕗が訝しげに表情をやや曇らせた。惚けていると思ったのか。でも私は、礼蕗が何を言いたいのか、何をそんなに怒っているのか分からない。何一つ、私は知らない。
沈黙が浮遊する。黙って、二対一の状態でまるで睨み合いだ。
「八年前の事件と今起きてる事件が……」
ためらう礼蕗の言葉を、
「全部、私が原因で起きてるっていう、下らない噂よ」
絵馬が攻撃的な口調で遮って言った。
おい奥津城、と庇うように止める礼蕗にお構いなしに続ける。
「八年前の事件も、今起きてる事件も、うちの神社の祟りだ呪いだって生徒の間で流行してるのよ。知らなかった？」
冷めた口調。見下すような口ぶり。
絵馬は明らかに、敵意を向けている。
私に、挑発的に言葉を突きつける。
「し、知らないわよ！　そんなの私、関係ないじゃん！」
押し倒されてしまいそうな言葉に、負けじと踏み出して言い返した。
絵馬と礼蕗の視線が、どんどん冷たくなっていく。
押し返した私の言葉が瞬時に散る。
沈黙の中、二人の視線が鋭さだけ増していく。
その視線が、語る。
「まさか、その噂を流したのが私、だって言うんじゃ……」
沈黙のまま、視線だけが肯定する。
礼蕗が半身、絵馬を庇うように前に出る。
「……噂は、おまえ達のクラスから広まってる。それに、噂をしてる奴ら何人かに、誰から聞いたって問い詰めた全員……」
「アンタの名前をだしたんですってよ」
またためらう礼蕗に割って入って、絵馬が言い捨てた。
「言いたかないが、八年前の事を知ってる奴は限られてる。奥津城と小学校が一緒か親しい奴なんて、この学校だと俺か、一之宮ぐらいなんだよ。だから……」
迷う口調の割に、真っ直ぐと私を突き刺す視線は揺らいでいない。それは、確信しているんだ、きっと。

馬鹿馬鹿しい。
そんな昔の事なんて知らない。
噂なんて今聞いたばかりだ。
それにそんな噂流す理由、私には……。
「もしかして、昨日の仕返し？　あんな事ぐらいで、こんな下らない事するなんて案外、安い女なのね。小夜子って」
無慈悲に突き放すような絵馬の言葉より、
「おい奥津城ッ」
礼慈があくまでも絵馬を庇おうとするから、
私の中で、何かが外れた。
「いい加減にして！」
飛び出した。
叫びが。
一際、痛い静寂を作った。
「さっきから……何よ、人を悪者にして！」
踏み出した。
一歩前へ。
一瞬、心の中で何かが壊れた。
「ウワサウワサって、何が祟りよ！　何が呪いよ！　そんな下らない噂ごときで何マジになって、馬鹿みたい！」
踏み出す。
一歩前へ。
「一之宮！」
止めようとする礼慈を振り切って、
「悲劇のヒロインにでもなったつもりッ、そうやって傷ついたふりして、礼慈やみんなにかまって欲しいんでしょ！　どうせその噂だって、自分で流したんでしょ！」
叫んだ。
ありったけの憎しみを込めて叫んだ瞬間、
「やめろ――――――ッ！」
礼慈が私の頬を打った。
耳鳴り。静寂。
打たれた頬が熱く、刺々しく痛む。
陽射しに曇ったレンズ越しに、礼慈の顔を見た。
まるで私を呪うような目だ。
頬の熱が全身を侵す。
頬の痛みが心を侵す。
痺れが身体を震わす。
私は口を開けたまま。
何か言いたがっている。
何か叫びたがっている。
でも、何も言えなかった。

喉が震えて、声が出ない。
顔が熱くて、涙が出そうで、
でも、声を出したら、すべて惨（みじ）めな声になりそうだった。
そんなの堪えられない。
惨めな声なんて聞かれたくない。
醜（みにく）く泣きわめくなんて、今、絶対に嫌だ！
だから、逃げ出した。
飛び出すように逃げた。
背後から礼慈の声が聞こえた。
無視して走った。ドアをぶち破るように屋上から逃げ出して、階段を
一気に駆け下りた。
止まらない。
止まりたくない。
止まってしまったら。
今、走っていないと。
今、止まってしまったら、きっと、泣いてしまう。
そんなの嫌だった。
あふれ出そうとする涙を、風圧で押し込めて、
あふれ出そうとする声を、呼吸を止めて塞いで、
あふれ出そうとする弱い私を踏みつぶしてでも、
走って、走って、逃げ出して、

とにかくどこでもいいから、逃げ出したくて走った。
階段を駆け下り、
廊下を走り抜け、
すれ違う生徒をはねとばし、
群がる生徒から顔を背けて、
校舎の端まで、校舎の外へと
走って、走って、走って、
救いのような非常ドアを開け放ち、
外へ飛び出した。
途端、
――きゃッ！
衝突。
反動。
浮遊。
落下。
衝撃。
目眩。
「つわぁッ！」無味簡素な無様な悲鳴を上げた。
「い、いたたたた……」
いきなり地面に尻餅をついてしまい混乱する頭で、何かにぶつかった
らしいとだけ分かった。

そして、それを確認するとめに顔を起こして目の前を見ると、一人の女子生徒が、私と同じ姿勢で地面に座っていた。
「っご、ごめんなさい！　あの……大丈夫ですか？」
人身事故だ、と慌てて近づくと、その女子生徒は、大丈夫よと手を振って微笑んだ。
よく見ると制服のリボンの色が私とは違う。目の前の生徒のリボンの色は三年生のそれだった。
「っあ、あの、ホントにすみません、私っ」
麻痺した頬と喉が、上手く機能してくれず上手くしゃべれない。
「大丈夫よ、だから、そんなに慌てないでね。危ないから」
柔らかくて優しい声だった。
上級生に問答無用で正面衝突くらわしてしまって、あわわあわわと慌てふためく私に、ふんわりと、羽毛を連想してしまうほど柔らかく軽やかに微笑みかけてくれた。そして、あなたは大丈夫？　とまで訊いてくれた。
この人、聖人君子か。
「大丈夫です。私、頑丈ですから。それより、ホントにごめんなさい！」
「いいのよ」
あぁ、まるで聖母だ。まさに信仰に近い眼差しで、私はやっとその人の姿を見た。

ぶつかったせいでやや乱れた制服、だけど綺麗に結ばれた青色のタイ。細い輪郭、はっきりとした眉ときりっとした目元、肩の辺りで切りそろえられている栗色の髪。全身から委員長オーラが放たれているような優等生の雰囲気が漂っている。
私は、見惚れていた。
「あの、大丈夫？」
放心していた私に、その人が心配そうに声をかけた時だ。
「大丈夫か？」
別の方向から、まったく違う声が聞こえた。
放心が解ける。私と、その上級生の視線が、その声のもとを辿った。
「サイが人身事故起こしたみたいな音がしたぞ」
そいつは、そんなつまらない事を言いながら、聖母のような上級生の背後から、初めから居たかのように現れた。
私は、そいつを見て、少し驚いた。
「立てますか先輩、それと一之宮」
そいつは、まだ座り込んでいた私たちに手を差し伸べて、一人で二人同時に軽々と立ち上がらせた。
「はい、ありがとう」柔らかな口調で、上級生は言う。
「さ、サンキュ……神籬」
それに比べて、なんてかわいげのない物言いなのかと、自己嫌悪してしまう。

「……一之宮」
上級生と小声で一言二言言葉を交わした神籬が、なにやら珍獣でも見るような好奇な眼差しを私に向ける。
あまり愉快な視線ではないから、なによっ、とやや喧嘩口調で返した。
「泣いてるのか、もしかした」
「え？　……っはぅ！」
言われて、私は記憶を取り戻したかのようにさっきまでの自分を思い出して、慌てて顔を背けて目をこすった。
「そういや、昨日も……。泣き虫なんだな、おまえ」
抑揚のない、馬鹿にしているのか分からない声に、うるせぇッ、と文句を言おうとして振り返ると、
「誰かに泣かされたのか？」
神籬は、慈悲深い神父のような穏やかな表情をしていた。あまりにも慈善的な顔と優しい声に、私の文句なんて一瞬で消え失せて、ちょっと恥ずかしくなった。
「べ、別に、そんなんじゃ、ない」目線を合わせる事が出来なかった。
そうか、と余韻を残さないぐらいあっさりとした声。
私が振り向くと、すでに神籬は先輩と何か喋っていた。
「先輩。さっきの話なんですが……」
「そうですね。ではまた改めてお願いしますから、考えておいてくださいね。私、本気ですからね、神籬君」
「答えは変わらないと思いますが、考えるだけなら」
「ええ、それでも結構です。必ず落としますから」
なにやらずいぶんと親しげな会話だ。そして、先輩は私の方を向いて、もう廊下を走っちゃだめですよ、とまるで幼稚園児に言い聞かすように優しく言って、これまた丁寧に挨拶までして校舎の中へ入っていった。
その後ろ姿を、私はまだ若干放心気味に見届けていた。
そこで私は、自分の手に何かを握っている感触に気づいて、それを見てすぐに、先輩の物だと思って呼び止めた。
校舎に半身入った先輩に近づき、手に持っていた赤い巾着袋のような物を渡すと、先輩は一瞬目を見開いて声を震わせながら、礼を言い残し走って行った。
そして、私と神籬が残った。
「一之宮は、いいのか？」
「え？　何が？」頭の中が未だ緩みきって混雑状態のせいだろう。間の抜けた声で、間の向けた返答しか出来なかった。
「何がって、どっか用があるんじゃないのか？」
「え、あ……あぁぁ、用、用ね」
なんでこんな所に居るんだ、という神籬の疑念の視線をかわして、思い出そうとするように腕を組んで目を瞑ること数秒。
用事なんて思い出す以前に、無い。でも、正直に言うのも何だか癪だったから、適当に理由を言うとしたが。

「そう！　神籬。あんたを探してたんだよ！」
「は？　俺を？　なんで？」
「なんでって、オマエに用があるからに決まってるだろ」
「だから、俺に何の用が？」
考える暇も無く駆け抜ける様に、
「神籬。今日の放課後、ちょっとツラ貸せ」
なんだか、とんでもない事を言っちゃった。

◇

頭の悪そうな音楽が夕暮れ前の喫茶店に流れている。
アニソン。アニメの主題歌だった。歌詞が馬鹿っぽい。まさに知人友人の前では、知らぬぞんぜんの赤の他人ですと、無表情を決め込んでしまいた歌だ。
だからか。
「一之宮。嫌そうな顔するぐらいなら、誘うなよな」
向かいの席に座るマネキン人形のように長身な男子生徒は、細い目を一層細めて訴えた。
「あぁ、いやね。この曲が嫌いなだけ。ムカツクぐらい陽気じゃない？」
その人を小馬鹿にしたような曲も終わって、次に流れた曲もやっぱりどこか緩い曲だった。
「一之宮。何か嫌な事があっただろ。……奥津城と何かあったんじゃないよな」
陽気な音楽を押しつぶすような陰鬱（いんうつ）な声を目の前の男が発した。
見透かしたような目だ。
開放感に浮かれた賑わい漂う小さな喫茶店の窓際の席だけが、その店内の賑わいも窓越しの往来の雑音さえも一瞬、かき消すように空気を展開した。展開したのは間違えなく、目の前の男だ。
「どうして……」分かったの、とは言えなかった。
神籬は、まるで私の反応を予想していたように静かに頷いて、真っ白のマグカップにゆっくりと口をつけた。
「ここに来て、もう二杯目だ。なのに、おまえは何も言わないし、何も訊かない。だから、俺から勝手に話す」
簡潔に、事務的な口調でそう言うと、机の上に肘を立て手を組んで、ゆっくりと話だした。
「一之宮。おまえが俺をこうして誘ったのは、訊きたい事がるからだろ。何か当ててやろうか。……今、流行ってる噂の事じゃないか」
その声は静かに、でもそれは銃弾のように私を貫いた。
心臓が怯えるように震えたのが分かった。
狼狽（ろうばい）して頬が緩んでしまったのが悔しかった。

私の反応を見て、神籬が確信を得たように微笑んだ。
「やっぱりな。結論から言う。俺は、その噂を知ってる。誰が流したかってのも聞いてる。そして誰がその噂を知ってるのかも、大体知っている。……礼慈と奥津城も、知っているな」
問いかけた。でも、答えなんて期待していない目だった。神籬は真っ直ぐ、私を見ていた。なんて無機質な目。は虫類かマネキンだったら幾分気持ちが落ち着くような、人に似合わない目だ。
「噂の内容は、奥津城個人と奥津城の実家……神社を誹謗中傷する内容。しかも殺人事件と絡めた悪質なものだ。そして、噂をしている奴らのほとんどは、一之宮から聞いたと言う」
最後に神籬は鼻先で、挑発するように笑った。
「私じゃない！」叩いたテーブルの上でカップが踊る。
周囲が一瞬静まり視線が集中する。
でも、そんなの構うものか。
「私は！　……私は、そんな、そんなこと絵馬に……」
絶対にしない。
それを、言いたかった……絵馬に。
「あぁ、分かってる」
冷静な神籬の呟きを、
「……、神籬……」
期待していなかったから、
「一之宮はそんな事しないさ、絶対に。……だろ？」
嬉しかった。ただ、嬉しいと感じた。
「そもそも、一之宮が、八年前の事件を詳しく知っているのが合点がいかない。……俺もそうだけど、一之宮も引っ越し組だろ」
神籬は三杯目のコーヒーを注文して、中学の頃だろ、と尋ねた。
「うん。私、この町に越してきたのは中学にあがった頃だから、八年前の事なんて知らないし、絵馬からも聞いたこと……ない」
思い出してみれば私はこの半年、絵馬と急速に親しくなった。それはもう十年来の親友のような気がするほどだと思う。何度か絵馬の家に泊まりに行って、朝まで恋愛の話とか趣味の話をしたりもした。たくさん、色々な事を私達は話をした。伝え合って、受け止め合った。
だけど、……そうだ。
私は、奥津城絵馬の事は詳しく知っているけど、奥津城という家の事は何も知らない。
絵馬は話さない。絵馬は、自分の事は話しても、自分の家の事になると煙に巻いたり曖昧な答え方をして、語る事を避けていた節がある。それは、八年前の事件とやらと関係があるからか……。
「神籬、八年前の事件って……？」
「知らない。俺も中学になってから引っ越してきたんだ。だから八年前の事件は知らない。礼慈は知ってるみたいだけど、アイツ、口が堅いから。でもさ……」

そこで一度区切って、運ばれてきた三杯目のコーヒーを一口飲んで、仕切り直すように話し出した。

私はいつの間にか、吸い込まれるように前乗りになっていた。

「でもさ、事件は知らないけど、八年前、この町で何が起きていたかは、知ってるぜ」

神籬はそこで周囲を見渡して、声の調子をわずかに落とした。まるで誰かに監視されていないかと、警戒しているように見えた。

「俺は、近くの町に以前住んでいたからさ、当時の伏木町の様子っていうのは、わりと詳しく聞いてたし、それに、忘れられなかったよ、怖くてさ」

「怖い――――？」

「そう、怖いね。一之宮はさ、幽霊やお化けの類を信じるか？」

「え、幽霊？　そうだね……いるんじゃないかな、って程度かな。腐るほど沢山の人が見たとか言ってるし、科学では解明できない事ってあると思うし、だから、幽霊やお化けなんかが居ても、不思議じゃないかな。もちろん、不思議だと思うけどさ」

あまり深く考えずに答えると、神籬は同意するように頷いて、幽霊は怖いか、と続けて訊いた。

「そりゃ、出来ることなら遭遇してくないね。怖いじゃん。訳わかんないものに、怨めしやーとか、因縁吹きかけられて祟られたんじゃ、堪んないよ」

「怖いんだな」

「怖いよ、なんか文句あるの？」

「ないさ。俺も同じ気持ちだったんだからさ」

「どういう意味？」

神籬はそこで一息ついて、善く通る低い声で言った。

「八年前、伏木町は呪われていた」

恨みを込めたような、重厚な声。

私の呼吸に一瞬、淀みが紛れた。

加速する。

「殺人事件があった。何人も死んだ。殺された訳じゃない。いや、それすら分からない。犯人はまだ捕まってない。それどころか、殺人か事故か、それすら不明なまま八年が経っている」

「なにそれ。殺人か事故かも分からないって、そんなことあるの？　殺されたんでしょ、何人も。だったらそれは殺人じゃ……ないの？」

「だから通常、考えられない死に方だったのさ」

神籬の口調が早まる。

「複数の人間が、ほぼ同時刻に心臓麻痺や老衰で突然、死んだんだ。刃物で刺されたり切られたり、銃で撃たれたり、もちろん毒を飲まされたとかじゃない。病死や自然死の類で、みんな死んでいるんだよ。しかも、同時に、多発に」

神籬の口が閉じられた。

私の口は開かないまま。
放心しているのに近かった。
その私を置いて、神籬は続ける。
「偶然で片付けられない、かといって人為的では起こりえない。複数の人間が同時に自然死させた殺人犯なんて、どんな名探偵にだって解明できない。警察だって捕まえようがない。もし、そんな奴が本当にいるとしたら、そいつは人間じゃない。幽霊か妖怪か、はたまた神様さ」
神籬にしては珍しいく、確信的で不敵な笑みを浮かべた。
「確かに事件は怪奇的だったし悲惨だった。まるで怪談話の類さ。でも、本当に怪奇的で悲惨な出来事は、事件の後に起きたんだよ。……一之宮は、奥津城の実家が、鳥の森神社の神主だって知ってるよな。事件の舞台がその神社って事もあってさ、その神社の神様の祟りじゃないかって、当時、爆発的に感染していったんだ」
「ヤタガラス様の祟り――――――だとね」
神籬の声が、呑み込む。
私の呼吸。周囲の音。微かな陽射し。甘い香りを。
突き刺さるような悪寒が過ぎった。
歯を食いしばって口を閉ざした。少しでも開いてしまえば、悲鳴を漏らしてしまいそうだったから。

神籬は、陰鬱（いんうつ）な口調で続けた。
「まだこっちは開発途上だったし、俺達みたいな余所者（よそ）ばかりだったけど、向こう側の――――朽木村の方は酷かった。あっちは、昔からの住人が多いし、鳥の森を神聖視してる奴が多かったせいもあるんだろう。祟りを信じていたんだよ。それこそ妄信的に、狂信的に。
家屋にしめ縄やら御札やら、そういう儀式めいた装飾を施したり、犬や猫を殺して、それを鴉に喰わせたり、終いには人柱だとか生け贄とかで、殺人事件まで起きたって話だ」
神籬は密かに溜息をついて、間を置いた。
「信じられるか。今時、祟りが怖くて人まで殺すんだぜ。文明が未発達だった百年や二百年前ならまだしも、今はそんな時代じゃない。魔女狩りめいた殺戮も、人身御供なんて馬鹿げた妄想も、とっくの昔に絶滅してきたはずだ。それなのに、そんな事が平然と、当然のように行われていたんだよ、たった八年前のこの町で！
想像してもみろよ。一つの町の半分は、祟りの恐怖で気が狂った連中で、残り半分は冷静気取った常識人。常識人はさ、やっぱり祟りなんて迷信だ、祟りなんて起きないとか言って、町の平穏を取り戻そうとしたらしいけどさ、そんな常識が通じるわけないんだよ。なぜって、祟りを信じてる奴らは狂ってるし、祟りを信じてる奴らにとっては、祟りは絶対にある、それが真実なんだからさ。それに、理性的な常識人なんかより、狂った奴の方が強いんだよ、心は。

だからさ、その狂気って奴は、感染していった。それこそ風邪のようにさ。この伏木町はもちろん、近隣の町までヤタガラス様の祟りは感染した。俺が住んでた村にも、その影響はあった。でもさ、実のところはやっぱり、祟りなんて起きてなかったんだよ。少なくとも、祟りを畏れていた連中には、祟りは起きなかった。それでもなんでそんな異常な現象が感染して拡大して浸透していったかというと、それはもう、ヤタガラス様の祟りっていう呪い、だとしか言いようがない」

「祟りは起きなかったが、呪いは確かに人々を狂わせた」

リン、とどこかで澄ました鐘が鳴った。

神籬が口を閉ざす。その後もしばらく声だけは響き続く。繰り返して、繰り返して、呪うように響いた。

私に響いた。

脳裏には嫌が応にも浮かぶ、異様な町並み。まるで悪魔祟拝者達のサバトを思わすような血生臭くて、淀みきった狂気に染まった空気。家畜の死骸を持って、虚ろに、人々が徘徊する。虚ろな瞳は、黒い黒い鴉を祟める。理性や人間の尊厳とか、高尚な精神を荒縄でくくり、家に押し込めて御札で封をする。

そして人が人を追い詰め、人が人を虐殺し、人が人から『人』を強奪して、人が、在りもしないモノのために、同じ人だったものを差し出す。

すべては、自分が助かりたいから――――――？

「はは。まさか、そんな……う・そ、だよね」

私の口から出た言葉は、

「何が嘘だと思うのさ。同時変死か、祟りか、住民の異常行動か、それとも呪いがか？　何が嘘だろうと、惨劇が起きたのは事実なんだから、嘘だろうと、その時この町ではそられらは真実だったのさ。呪いが、どんなに非常識だろうと、この町では呪いは確かに存在するんだよ。それはきっと、今でもさ」

神籬の呪文めいた言葉に、無効化される。

語られる言葉すべて、力がある。

それは形となって、私に届くようなプレッシャーすらあった。でも、その形は見えない。姿が見えない何かが私を取り囲む。それは恐怖でもあった。

「一之宮が気にしているのは、奥津城の事だろ。どうして奥津城個人が今、周囲から邪険にされているか、それが知りたいんだろ」

「え、……あ、うん。正直、今の話聞いて、八年前に信じられない事が起きてたってのは分かったけど、やっぱりそれだけで、どうして絵馬がって……」

言ってみたものの、八年前の惨劇を想像すると、その発端となったのが、絵馬の実家にある神社が舞台となっていた事を考えれば、理由なんていくらでもあると思った。

それでも、私は私自身で答えを見つけるのが怖かった。誰かから答えを押しつけられた方が、楽だと思ったから黙っていた。

ズルイ奴だ、私は。

「理由は簡単さ」

神籬が言ってくれる。

「それは『ヤタガラス様の祟り』という呪いを産んだのが、鳥の森神社だからだよ」

分かり切った答えを、ハッキリと容赦なく口にした。

「事の始まりは鳥の森神社から。そして、鳥の森神社は八咫烏（やたがらす）を祀（まつ）っているし、その周囲の樹海には、妖怪の類がいるっていう昔話が沢山あるし、それになにより、あそこがもっとも呪いに適した場所だからだよ」

「呪いに、適した場所――――？」

私の思考が、その一言だけ拾い上げた。

「そうさ。知ってるか？　呪いは、運ぶものなんだ。ただ藁（わら）人形に五寸釘を打つだけじゃ成立しない。祈りだってそうさ。ただ祈るだけじゃ神様には届かない。届かないんだよ、呪いも祈りも。だから誰かに運んで貰う。呪いは、精霊とか妖怪とかが運んで、初めて、呪いが相手に届いて成功する。鳥の森神社はさ、そういう呪いを運ぶモノに事欠かない場所なのさ。神社にはヤタガラス、樹海には鳥の妖怪。ほら、鳥ほど運ぶに適した動物居ないだろ、どこへだって運んでくれる。だから、昔から誰かを呪いたいなら鳥の森へ行けってのが、古い住人には有名らしいぜ」

だから、と言って、神籬は姿勢を正し胸を張った。

「八年前の惨劇は、鳥の森神社の神主である奥津城が真犯人であり、再び起こった惨劇も矢張り奥津城が犯人に違いないだろう、という事さ」

言葉にしてみれば実に馬鹿げてるけどさ、と神籬は嘲笑うようなため息をついて、カップを手に取った。

私は、まだ不快な緊張に呑まれたままだった。神籬が放った空気がまだ停滞している。頭の中で交錯する妄想と想像の渦が激しく回る。その渦の中でさえも、僅かに、冷静な私がいた。その私が、もっとも気にしていたのは、親友の絵馬の事でも八年前の町の事でもなければ、今起きている事件の事でもない。

呪いに適した鳥の森神社の事だった。

呪いが本当に在るのなら、その神社で呪えば確実に成功するなら、もし呪いが成功したら、もうあの鬱陶しい奴は消える。それはなんて、喜ばしい。

親友を心配しているのも確かだ。

だからこうして深刻な顔をしているんじゃないか。親友の境遇に自分を重ね合わせて、同情に心を痛めてもいる。悲惨な過去に恐れて、平静な今に驚き、平穏な未来を祈っている。八年前に理不尽にもその凶事に巻き込まれた人の恨みも憎しみも想像できるし、歯がゆさも分かる。それを一身にうけた絵馬に、私が投げつけた数々の言葉を、今では恥ずかしくも思うし、親友だから力になってあげたいとも思っている。

それは確かに、心底そう思っている。
だけど、
親友よりも、やっぱり自分の事が何よりも最優先だ。
それが、普通でしょ？
「神籬。その……呪いって、どうやるの？」
だから、私はそれを口にしていた。
悠然としていた神籬が戸惑い聞き直した。
だから、もう一度言ってやった。
見つめていたコップの中で、氷の均衡（ぎんこう）が崩れた。
その小さな音さえ耳障りなほど、静寂。
私と神籬の間は、嫌になるほど静か。
「誰か、呪いたい相手がいるのか」
神籬が、可笑しいほど怖い声を出す。
「いや……だた、興味があるだけよ」
可笑しかった。吹き出しそうな笑いをかみ殺した。
「だって、呪いとか、そういう不思議なものって、ロマンチックでしょ」
本当に、どうしてだろう、可笑しかった。
何が可笑しいかさえも、分からないほど可笑しくて何も考えられない。
まるで、私じゃないみたいな喋り方をしている。
だってこの人達が見ている一之宮小夜子は、そんな乙女ちっくな言葉は言わないのだから。

ロマンチックだって……。ホント、可笑しいな。
もしかしたら頬が緩みきっているかもしれない。
そんなの恥ずかしく顔をあげられない。
でも、神籬の顔をちらりと盗み見ると、
「一之宮。それは――――――」
なぜか悲しそうな顔をして、それだけ言って黙ってしまった。さっきまでの饒舌（じょうぜつ）が嘘のように。怯えるように彷徨（さまよ）う視線。
私は、決して逃がさない。
沈黙のシールドを展開しても、私は決して退かない。
神経を逆なでするような周囲の雑音にも、私は決して負けない。
空気の流動さえも停止してしまったかのように、じっと硬直して沈黙し続ける神籬。
周囲はうるさい。けれど、私達は痛いほど静かだった。
だから、その声は突然現れた。

「みーつけ、た」

背後。聞き覚えがある声が、唐突に降ってきた。
神籬の視線が私の頭上へ。私も振り返った。
するとそこには、昼間の先輩が立っていた。
神籬が狼狽（うろた）えながら声を出してようだ。

私はその声を言葉として聴けなかった。
私は、その先輩をじっと見ていた。
この先輩は確か――――――――。
「明神（みょうじん）、先輩、？」そんな名前だったはず。
「あら」と上品な声。先輩は私を見てにこりと微笑んだ。
「ごめんなさい、デートの途中に」
そこに、悪意や邪心を疑う余地が無いほど、綺麗な笑みだった。
「い、いえ、全然、デートじゃないですから、お構いなく」
まるで一気に夢から覚めてしまったように、気持ちが冷めていく。眠気のようなもやもが頭の中から、私の周りから消えていく。血の気が引いていくように、何か私から落ちていく気がした。熱も失せる。
「そうなの？　だったら、彼を、少しお借りしてもいいかしら？」
明神先輩は、微笑みを絶やさず、私に訊いた。
「はい。私は、もう用は済んだので、ごゆっくりどうぞ」
口調が落ち着かない。自分でも不思議なほど動揺が収まらずにいる。慌てるように席を立ち、先輩に席を譲（ゆず）る。
「そう？　だったら、お言葉に甘えて」
先輩は、私が座っていた席に座った。
私は、ありがと、じゃあね、と神籬に言って、レシートをもっとレジへ向かおうとした。
神籬が慌てて私を呼び止める。それに私は足を止めない

「ありがと。またね、一之宮小夜子さん」
でも、柔らかな先輩の声に、私は驚き振り返った。
「どうして……私の、名前を……？」
学年が違う先輩に、しかも今日がほぼ初対面の人が、私の名前を知っているのに驚き尋ねると、先輩は、曖昧な微笑みを浮かべただけだった。
店の外へ出た。
そして硝子越しに、神籬と先輩の姿を見た。
その時だ。神籬と目が合った。
それは一瞬だった。
その一瞬に神籬は、

――――鳥の森へ　行け。

力強い視線で語った。

◇

ロビーに大理石。夕日が侵され橙色に染る。
怯えるように上昇するエレベータ。箱の中。
「お姉ちゃん。……こわいよ」
小さな女の子が、私を見上げてそう言った。
「え？　そうかな？　お姉ちゃん、怖い顔してた？」
自分の頬の筋肉の動きを確認するように、表情を作りながら訊いてみると、女の子は、うんと頷いた。
気づかなかった。
「何かあったの？」
「ううん。別に何もないよ。ほら、ニィー」
笑顔を浮かべた所で、エレベータは止まった。
女の子は上手な笑顔を浮かべて、私とは反対側へ走っていった。
ふと、どうしたらあんな無垢な笑みが出来るのかな、と思って、私もあんな笑顔を浮かべていた事があったのかな、と思い出を探ってみても、結局は、自分の表情なんて思い出すことなんて出来なかった。私の笑顔は、私の思い出はないのね。
ルーチンワークのように鍵を開けて家の中へ入り、リビングで向かって、もはや部屋の一部となっているカレーパンを一瞥(いちべつ)して、冷蔵庫から食料を得て自分の部屋へ。

カーテンは閉めきられ暗く、密封された昼間の余熱は煙たく、生活という悪臭はむせ返ってしまいそうなほど強烈だけど、一分としない内に私の身体は、それを受け入れてしまう。
ベッドに制服を脱ぎ捨てて、着替えながらＭａｃを起動。
そして、パソコンデスクの化粧台の前に座って、やや乱れた髪を、誰に見られている訳でもないのに気になって整える。
メールソフトを起動。メールが一件届いていた。着信時間を見ると、つい一分前。届いたメールを開くと、それはレイヴェンからだった。

＞　こんばんは、一夜さん。
＞　まだ、ご無事ですか？

メールはたった二行しか書かれていなかった。
「まだ、ってどういう事よ」
そのたった二行の中で私は『まだ』という二文字に引っかかった。
これではまるで、私に何か起こるのを、今か今かと待っているようじゃないか。
私はすぐに返信を書いた。
思った事を、そのまま。
すると返事はすぐに届いた。

〉ごめんなさい、言い方が悪かったですね。でも今の一夜さんは、
〉いつ何が起こっても不思議ではない状況にいるのは確かです。
〉だから、私は心配なんです。もしかしたら明日、一夜さんが、
〉ストーカーに襲われてしまう のではないかと。

背筋に寒気が走った。不安が肩に触れる。
振り返って、私以外に誰か居ないか見渡した。
誰もいない。だけど、気持ち悪い視線を感じる。
「や、止めてよね……。そんな、冗談」
私以外、誰もいないのに、私はディスプレイに向かって叱るような声を出していた。メールには、続きがあった。

〉だから一夜さん。
〉決めて下さい。
〉このまま何もせずいるか、それとも、呪うか。
〉一夜さんが決めて下さい。
〉ストーカーされているのは一夜さんですし、
〉ストーカーに襲われるのも一夜さんですから。
〉呪いますか、呪われますか。
〉さぁ、どっちですか！

声が響く。
部屋に響く。
私の頭の中で響く。
響く。
反響を繰り返す都度に、激しさを増し、肥大化する。
――呪いますか、呪われますか。
選択が迫る。激しく響いて、頭が割れそうなほど乱暴に響き続ける。
共鳴するように心臓が高鳴る。寒気は、いつしか熱を帯びて脳を溶かすほどにまで身体に染み渡って広がっていた。
その乱暴な響きの中、
『祟りは起きなかったが――――――』
怖ろしく冷静な声が、蘇る。
『呪いは確かに人々を狂わせた』
その言葉の静寂（せいじゃく）が、乱暴な響きを握りつぶす。
その瞬間、脳裏に過ぎった光景。
八年前、祟りに呪われた人々の凶行。不気味なほど現実味がなく、寒気がするほどの狂気。血なまぐささが沸き上がる。狂おしいまでの悲鳴が聞こえてくる。日常が崩れる手触りに鳥肌が立つ。常識や道徳や人の尊厳とか、積み重ねてきたもの全てが砕かれ、剥がされ、削られ、荒らされて、残り残った醜いモノが、まるで鬼のように人を殺す。
それらすべて、私の想像だ。

でも、それらは同時に、私の身に降り落ちる、未来の形に見えた。
――――イヤだ！
狂いたくない。
犯されたくない。
壊されたくない。
イヤだ！
大切なものを奪われるのは、イヤ。
心をを犯されるのは、イヤ。
メチャクチャに狂わされるのは、イヤ。
想像した。
私には、好きなことがある。
私には、これからやりたい事が沢山ある。
私には、しなきゃいけない事が沢山ある。
私には、大好きな人がいる。
それらすべて、
たった一人のせいで無くなってしまう――――。
そんな事を想像したら、
すごく悲しくて、
すごくそいつが憎い。
殺してやりたいほど、すごく憎い。
だから、心底、思った。

――――死んでしまえ、と。
震える手でキーボードを叩いた。
返信はたった一言。
＞ 呪います。
呪うと決めた。
返信はまるで用意されていたかのように早かった。
メールには、二つの事が書かれていた。
まず一つは、私が呪うと決めたことへの賛辞。
そして、注意事項のようなもの。
＞ 安心してください、私が全力でご協力します。
＞ 難しいことはありません。
＞ 昔からの方法、今まで何人の方が実践し成功させた方法があります。
＞ あまりにも有名ですが、簡易的な儀式とはいえ、
＞ ちゃんとした作法と形式を守らなければ、呪いは効力を発揮しません。
＞ だから私が、お教えする事をきちんと守ってください。
＞ そして、決して誰にも言わないでください。
＞ もちろん友達にも家族にも、呪いの方法は秘密です。
＞ 誓えますか。

まるで悪魔の契約書のような雰囲気を醸し出している。契約でも誓願書でもないのに、これはとても怖いものだと感じた。決して、遊びではない、と言っている。

覚悟は出来ている。

秘密を守る。

だからためらうことなく、はい、と二文字だけ返信した。

私の誓いが送信される。

送信完了が表示されると、私は大きく息を吐いた。

長い間、口を塞がれていたような気分だ。

自分の呼吸が乱れている事に驚いた。

まるで質の悪い風邪にかかってしまったように、頭がぼんやりとして、身体が熱くなっていくのが分かった。でも、それはとても悪いことじゃない。むしろ、心地よく爽やかな気持ちのようにさえ感じた。

メールが届いた。

急いでメールを開く。

そのメールには、呪う方法が書かれてあった。

一読して、呪いの作法には色々と厳しい制約があるのが分かった。服装だったり、時間帯だったり、手順だったり。用意しなければならない物も幾つかある。でも、それらは障害でもなんでもない些細(ささい)な事だけど、メールの冒頭の言葉に、私は愕然とした。

＞ 呪いに必要なモノ。

＞ 呪いたい相手の『顔』と『名前』が必要です。

＞ それら二つを、知っていなければなりません。

＞ どれか一つでも足りなければ、儀式は無意味になってしまいます。

立ち上がった拍子に椅子が倒れた。それに目もくれずに、リビングへ急ぎ、窓際へ急ぎ、カーテンの隙間から外を見た。

いつもの場所。マンションの庭園。ベンチの後ろ。木々の間。影の中。そこにやはり、置物の様に、じっとこちらを見上げる男がいた。

そいつを、呪ってやりたい。

顔はいい。

顔は今までだって何度か、ちらりと覗き見る程度だけど確認している。今だって、双眼鏡で、どんな顔をしているか確認できた。

だから、顔はいい。

「名前……名前名前名前名前、名前！」

分からない。

名前が分からない。

顔が分かった。

けど、名前なんか知らない。

「どうしたら……どうやって知ればいいのよ！」

手に持っていた双眼鏡を床に叩きつけた。

弾んで私の足にぶつかった。
それが無性に痛くて、無性に腹が立つ。
イライラする。
イライラする。
ムシャクシャする。
ムシャクシャする。
腹が立つ。
腹が立つ。
腹が立つ。
「くそっ！」
手を伸ばせば、ご褒美があるのに、目前で取り上げられた気分だ。
「ちくしょう！」
目の前にあるんだ。
目の前にあるのに、邪魔をする。
あいつがまた私を、邪魔をする。
「――――やる」
悔しい。
悔しくて、悔しくて、すごく憎い。
私を邪魔をする奴が、すごく憎い。
「――――って、やる」
こんな屈辱堪えられない。

この悔しさは忘れなない。
こんなに苛々するなんて、
こんなに腹立たしい事は、
こんなにまで憎く思う事、
すごく怨めしく思う事は、
きっと――――――――、
「――――呪ってやる！」
生涯で初めてだ。
私は、誓った。
誓ったからには、果たす。
どんな事があろうと、
どんな手を使っても、
どんな犠牲を払っても、
必ず私は、あいつを――――――。
「絶対に、呪ってやる！」

４／九月十八日（土）

爽やかな朝陽は残虐なほど鋭利な眩しさで、無不足の脳を突き刺して突き刺して、身も心もバラバラにしようとしているようだった。

それでも身に刻まれた生活サイクルは容易（ようい）には崩れず、心身ボロボロの状態で陸上部の朝練に参加するために家を出た。

私が気づかない内に帰宅していた両親の顔は、さて、何日見ていないのかな。

優秀なマネージャだから、朝練の準備のために、いつも他の部員より早めに登校。クラブハウスで着替えて、ストップウォッチや記録用紙が入った箱を持って、今にも倒れそうな状態でグランドに出ると、待ちかまえていたように、礼蕗が立っていた。

直立不動で、一直線に私を見つめる視線。その態度は自信に満ちた横柄なものではないのは、すぐに気づいた。

私にしてみれば、その真っ直ぐさは痛い。邪な思いや秘密も、私のすべてを剥き取るような刃のように真っ直ぐさだけは、私は苦手だ。

それが今なら、なおさら。

「一之宮……」覇気のない礼蕗の声。

私は無視して礼蕗の脇を過ぎ去る。

今、礼蕗の顔を見ることさえ怖かった。

でも礼蕗が無理矢理、私の腕を掴んで、過ぎ去る事を許さなかった。

「一之宮、待ってくれ、話が……」

「離せよ！」

弱々しい礼蕗の声。乱暴に私は腕を払う。

「話って何！　昨日の続きでもやろうっていうの！」

今にも疲労感で倒れそうなのに、不思議と声だけは暴力的に荒々しくなっていた。

「ちがう。違うんだ」

対照的に礼蕗は温和（おとな）しく、

「……ごめん。本当に、ごめん」

やはり、嘘偽りなんて微塵も感じない声でそう言った。

ごめん、と繰り返し言う。

「おまえを疑ったり、その……叩いたりして。本当に、ごめん。だから……」

礼蕗が真面目な顔して、私をじっと見つめる。

そしてそのまま静止。何かを待っている風にじっとしている。それが何を意味しているのか分からなくて、なに？　と訊くと、

「殴ってくれ、思いっきり。そうじゃなきゃ、フェアじゃないだろ」

そんな事を真面目に答えるものだから、私は気を失うそうになった。

比喩ではなくて、本当に一瞬気絶したかもしれない。礼蕗が咄嗟（とっさ）に腕を掴んで引き留めてくれなかったら、本当に永眠しかねないほど破壊力のある、くそ真面目な脱力系のセリフだ。

「あんた……バカだ」
嘘偽りなくそう思ったから言ってやった。
「殴ったから殴り返せなんて、バカじゃないの？」
「いや、俺は真剣だ」
ああ、そうなのでしょうね。
私の目には、真剣な表情の礼蕗が映っているんだもん。
「だから、気が済むまで殴ってくれ」
さぁ殴ってくれと言わんばかりに頬を向ける。
「やめてよ、そんなバカな真似。……いいから、もう、いいからさ、許してあげるから」
許すとか許さないとかの問題じゃないんだもん、最初から。ただ、苦しかっただけなんだ。礼蕗に、裏切られた気持ちで、すごく苦しかっただけだから。だから、礼蕗を叩いたところで何も変わらない。むしろ、痛みが増すだけ。
「でも、それじゃあ俺の気が済まない」
だけど、そうなのようね。
この男は鈍感なんだから、私の気持ちなんて言わなきゃ当然気づいてくれるはずがない。
「そんなの礼蕗の我が侭(わがまま)でしょ。……礼蕗が気が済もうが済むまいが、私には関係ないわよ」
「でも、それだと……」
声も表情も萎(しぼ)んでいくように弱々しくなって、俯(うつむ)き気味で、苦虫を噛んだように表情を曇らせながら悩んでいる。それはもう、真剣に。痛々しいほど、真面目に。
単純な奴。ハッキリとした形がなければ、安心できないのかもしれない。私が許した証が、もしかしたら欲しいのかもしれない。きっとそれがなければ、いつまで、礼蕗の中で罪が残り続けるから。そういったものがあるのが許せない、聖人君子な善人なんだ、この男は。
なんて羨ましい奴。
なんて可哀想な人。
「わかった」だから私が、手を差し伸べてあげよう。
「殴るのは無し。そんなことしたら変な噂がたって私もイヤだからね。その代わり、礼蕗。今日の放課後、付き合いなさい！　礼蕗のおごりで遊びまくる！　これで許してあげる。どう？」
私の出した要求に、礼蕗は目をしばしばとさせ、口をあんぐりと開けて驚いたが、それも一瞬、すぐに真面目な表情にもどって頷いた。
「ああ、分かった。……ありがとな、一之宮」
礼蕗が、満面の笑みとは言えない曖昧な笑みを浮かべた。まるで子供のような笑みに、生真面目で眉間に皺を寄せている礼蕗の顔が、すこし幼く映った。
しばらく、その微笑ましい姿を、見ていた。

他の部員も集まりだし、各々が勝手に準備運動をして、朝練には顔を出したことのない顧問の到着など期待もせずに、一年副部長の指示にしたがいながら、グランドで走り込みをしている中。私は、ベンチに座ってみんなの記録の整理という事務作業に汗を流した。そして、珍しいことに私の隣には、部長の礼蕊は座っている。一人だけサボっているようにも見えるが、誰ひとり文句を言う者はいない。なぜなら、礼蕊はみんなが来る前に、一日の練習量をすべて消化していることは、部員なら誰もが知っている事だからだ。

「ところでさ、神籬は？」

私はバインダーに挟んだ記録用紙に視線を固定したまま、となりで握力をアップをしている礼蕊に尋ねた。

グランドで走り込みをしている部員の中に、頭一つ抜き出た骸骨（がいこつ）みたいに細い奴がいなかったのが不思議だった。

神籬は、礼蕊に負けず劣らずの特訓マニアなのに。

「神籬なら、多分、弓道部に。……明神先輩が連行していった」

さらりと取りようによっては凄い事を言った。

「え、明神先輩って、あの？」

礼蕊へ視線を向けながら尋ねたみたものの、この学校に明神先輩は一人しかないない。しかも弓道部のとなれば個人は特定されている。これは、信じられない、という私なりのジェスチャだ。

「我が校が誇る超人四天王の？」

「なんだよ、その四天王って。初耳だぞ」

「知らないの。色々な意味で超人的な生徒四人のことよ。私も全員知ってるわけじゃないけど。三年には、絵に描いたよう完璧超人の明神先輩と、魔性の秀才の蕪木（かぶらぎ）先輩がいて、あと、天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）の熾天王寺先輩で」

「あぁ、熾天王寺……さん。あの人か……」

礼蕊が珍しく人様の名前で露骨（ろこつ）に嫌そうな表情を浮かべた。でもそれは、礼蕊特有の反応ではない。きっと全校生徒、教員共通だ。

「ちなみに、二年では今のところ礼蕊が最有力候補だから」

そう呟くと、礼蕊はため息をついた。

「あのさ礼蕊。神籬って、明神先輩とどういう関係なの？」

私は昨日から少し疑問に思っていた事を訊いてみた。昨日、明神先輩と神籬の接し方はどうも先輩後輩というより、親友かそれ以上の関係に近い親しさが感じられた。先輩が後輩に親しげに接するのは分からないでもないけど、無愛想な礼蕊のあの親密さ加減は、驚天動地（ぎょうてんどうち）に値する。そして私には二人の接点がまったく分からなかった。

礼蕊は首を傾げ、少し考えて答えた。

「神籬は、一年の一学期まで弓道部だったんだ」

「知らなかった……。でも、そんな数ヶ月いた元弓道部員が、なんで？」

礼蕊はまだ首を傾げたまま、弓道場がある校内の端、雑木林の方を眺めながら言った。

「神籬は二ヶ月ぐらいしか弓道部には居なかったけど、アイツ、センスはよかったけど、急に弓道部を辞めて、陸上部に入ったから、明神先輩にすれば、弓道部の期待の星になんとか戻ってきて欲しいんじゃないか。今年は手嶋はいるから、なおさら。神籬は、普段はあまり自分の事を話さないし、謙虚だから気づかないかも知れないけど、実は、けっこうすげーぞ、あいつ」

まるで自分の事のように誇らしげに言う礼慈。

瞼を閉じて思い返してみると、目立たないけど影の実力者を彷彿させるような神籬の活躍がありありと浮かぶ。実のところ礼慈より神籬の方が四天王の最有力候補ではないだろうか。ダークホース。

さらに思い返してみれば一年ぐらい前に、弓道部には天才がいる、という噂が有ったのを思い出した。

「あっ、そうだ」電光石火の勢いで立ち上がった礼慈。そして目を輝かせて、私の正面に立つ。「どうせだったら他にも誘おう。大勢の方が楽しいだろ。神籬と、それから……榊とか」

礼慈の声が、最後辺りで裏返った。

口にしている本人はまったく気にしていない様で、自然体を装っているのかもしれないが、瞳孔が広いて頬がだらしなく緩んで手振りが大げさになっているその挙動の意味が分からない鈍感な奴は、いやしない。

「そ、そう、だね」

努めて冷静に返事をして、密かに出口の無い怒りを奥歯を鳴らした。

◇

朝練が終わると、私は教室で授業が始まるまで仮眠を取ることにした。昨夜はろくに眠る事ができなかったから。何が原因か、あえて言うまでもないが、そのせいで私はの自覚できるほど機嫌が悪い、情緒不安定だ。追い打ちをかけたのは、礼慈だ。それでも放課後まで少しは心落ち落ちつかせなきゃと仮眠を取っていたら、登校してきた榊が声をかけてきた。

返事を億劫。でも顔をあげると、保健室行く、と榊がいうのだから、どうやら顔色がそうとう酷いらしい。

榊が声をかけて、周囲でヒソヒソと蠢くような雑音を鳴らすクラスメイトの存在に気づいてしまった。そのせいで、放課後までろくに仮眠がとれず、断続的に、意識が点滅するような不愉快な状態が続いてしまった。

三時限目の授業が終わり、ＨＲが終わると足早に教室から抜け出すクラスメイトの騒がしさに目を覚まして、私も出なきゃ、と眠たいと哀願する頭を振って席を立つ。

「一之宮さん。大丈夫？　具合悪そうだけど」

まるで朝の焼き回しのように榊が目の前に現れて、そんな安い心配をかけてくれた。

「あー、大丈夫。へーきへーき。心配無用だって」

笑みを繕えながら手を振ると、それでも榊の表情は曇ったまま。

もしかして本気で心配してくれているのなら、この子は将来マザー・テレサのような人物になれるのではないかと、ぼんやりとした頭が妄想した。天然の善人かもしれない。

「大丈夫だから、子供は早くお家にお帰りなさい」

気怠く榊を見送る。

何か忘れているような気がした。

でもそれを思い出すのが面倒だったから、深く追求せずに教室を出ることにする。その時、ドアへ向かっていると、床に朱い財布らしきものが落ちていた。目立つ色。反射的に拾って、誰の物かと確かめるとめに三つ折りの財布を開いた。

瞬間、激痛が奔(はし)る。

「あ、ぁ――――――――――」

写真が一枚。楽しげな家族写真。

家の玄関の前で、笑顔を浮かべている。

「は、……」

見覚えのある顔が二人。

赤いワンピースを着た女の子――榊あやめ、だ。

「くっ――――――」

女の子の隣のはおばあさん。

その後ろには、きっとお母さん。

そして、その隣には、

――ストーカーが幸せそうな顔で映っていた。

「ふ、ふふ――――――――」

噛(わら)った。噛み殺した。。

破裂しそうな嘲笑(ちょうしょう)を口の中で噛み殺した。苦しい。お腹がなじれそうなほど可笑しいかった。それは歓喜よりなにより、ただ可笑しかった。そして腹が立つほど滑稽(こっけい)で、怒りで溺死しそうだ。

「っは。……榊、か……」

馬鹿馬鹿しいほど、間抜けな関係だ。

私を苦しめていた奴が、まさか、こんな身近にいるなんて。

それにまったく分からずに、今まで怯えていたなんて。

すごい、屈辱。

「へぇー。榊。ねぇー」

狂ってしまいそうなほど可笑しい。でも、私の理性はそれを押し殺して冷静を保って冷笑を浮かべている。

赤い財布の中の写真。

そこには友達と、私の敵が映っている。

おそらく榊の親父が、私のストーカーなんだろう。

あぁ、なんて可哀想。

簡単だ。顔は分かった。素性だって概(おおむ)ね分かった。榊に関係している人間なら、榊に訊けばあっけないほど簡単に、名前だって分かる。

そうしたら、ようやく呪える。
ゴールが見えてきた。私の未来に輝きが増す。
私はその財布をもって、榊を追いかけた。
声を掛けると、階段を下りようとしていた榊が、おっとりと振り返った。私はそれに追いついてまず、拾った財布を返した。
「あ、ありがとう」
財布を受け取った榊。慌てた表情が気が抜けるほど安堵に満ちていく。
なんて、単純なんだろう。
「ねぇ、拾った拍子に見えたんだけど、その写真って家族写真？」
「うん。そうだよ」
誇らしげに財布を開いて写真を見せびらかす。
そして丁寧にも、写真に写っているのが誰なのかも教えてくれた。
やはりその男は、榊の父親だった。
「へぇ、家族なんだ……。いいね、家族との写真なんて、うちにはあるかどうかも怪しいな」
緩みそうな頬を歯を食いしばって、当たり障りのない会話を続ける。
「あるよ。きっと……」
適当につくろえた私の言葉には、不思議と榊が真剣な眼差しをむけて返してきた。
力強い声に、一瞬狼狽えてしまったがそんなことで崩れたりしない。
「どうかな。うちの両親、共働きのうえにワーカ・ホリックスだから。私が寝る頃に帰ってきて、私が家を出てから起きるっていう、生活のリズムがまったく合わないんだ。だから、そうだな、一週間ぐらい顔をあわさない事なんてザラなのよね、狭いマンションに住んでるのにさ」
愚痴のように私がそんな笑い話をすると、榊は今にも泣きそうな表情をしていた。
どうして……、という疑問が過ぎる。
同時に、榊が哀れむような瞳で私を見ているのに、腹が立った。
そして思い知った。
あぁ――――この子は、幸せなんだ。
満ち足りた幸福に包まれて、些細（ささい）な不満でしか不幸を実感できず、単純な幸せしか知らずに育った、色々な面で子供（餓鬼）なんだ。
だから自分の幸せでしか、他人の幸せを計れない。
自分が幸せだと思うことは、他人も幸せだと思いこんでいるんだ。
この子は幸せなんだ。
だから、自分の幸せの形以外のものすべて、不幸だと勘違いしてる。
その事にさえ本人は気づいていない、救いようのない馬鹿なんだ。
イライラする。その同情するような眼が、腹が立つ。
「もう、この話は終わりッ」
感情を押し殺して、この場、この制服での一之宮小夜子を演じる。そんなのこ簡単な事だ。

誰もが、服装(見た目)で勝手に人を想像して演(信じて)じているから。
私は演じた。榊が見ている一之宮小夜子を。
冷静に。慌てず。友達としての言葉を口にする。
「ねぇ、榊。これから暇よね。暇でしょ。暇だ！　間違えない！」
榊の肩をがっしり掴む。意図せず爪を立てていた。
「遊びに行こう」
それが榊あやめの友人の、一之宮小夜子として自然な言葉だ。今にして思えば礼蕊の提案に感謝しなきゃ。こうして遊びに誘えば、ストーカーの名前を聞き出す機会は増える。あくまでも、気づかれずに知らなければ。その方法は、ゆっくり考えればいい。
榊がなかなか、うん、と言わないから私は強引に榊の腕を引っ張って正面玄関まで走った。何度か榊がつまずきそうになったが、それでも引きずってでも、止まろうと思わなかった。正面玄関まで行きさえすれば、榊は帰るなんてしないはずだから。
そして正面玄関まで行くと案の定、礼蕊達がすでに待っていた。だけど、神籬は私達に気づくと、まるで逃げるように去っていった。呼び止める暇もない。
「あれ、神籬も一緒じゃないの？」
榊の腕を放して尋ねてみると、礼蕊は頷いて神籬の後ろ姿を見送った。
「ああ。あいつ、大事な様があるって。……」
そして礼蕊は視線を、私の背後で息を切らしている榊に向けた。
その瞬間、礼蕊の頬が緩んだのを私は見逃さなかった。
気づかず、奥歯を鳴らしていた。
「っさ。……行くよ！」
溢れかえりそうな苛立ちを踏み殺すように声を上げ、二人の腕を掴んで校舎を出る。
勢いよく学校を出たのは良いが、スポンサの礼蕊が優柔不断だからプランが纏まらず、とりあえず、昼食でも摂りながら考えようと言うことで、繁華街の喫茶店に私達は入った。
昨日と同じ店。人の入りようは流行もせずに、こぢんまりとして静かで、何より昨日のように頭の悪い音楽が流れていなかったのが良かった。それでもカウンターでは、私たちの注文分の仕事を終えたマスターがテレビを店中に聞こえるぐらいの大音量で流しながら観ていた。それでも料理が上手いから許してあげよう、と思えるほど、私の心は随分と落ち着いてきていた。
「礼蕊。何か良い案ある？」
食事も済ませてこれからの予定を考える。
まずはスポンサの意向を尋ねてみたが、礼蕊はない、と言って私に押しつけた。仕方がないから、榊にも尋ねてみたが、髪が乱れるほど大げさに首を横に振った。
「なんだよ。消極的なカップルだな」

嫌味をぶつけると、シンクロしたように二人が咽せて、息を合わせたように抗議してきた。本当に、見ていて嫌になる。
「ああ、絵馬がいたらこのポディションも楽なんだけどな」
こういうジメジメとしたイジメは絵馬が得意とする所なのだから。
「今日休んでたよね、何かあったのかな……絵馬」
窓の向こう、ゼンマイ人形のように行き来する似通った人の群れを眺めながら、そんな事を呟いた。
そういえば今日は絵馬の姿を見ていない。
昨日の事は、やっぱり事情を知らなかったとはいえ、私も少しは悪いと思っているから、会ったら一言ぐらい謝っておきたかったのに。
こんな改心は、自分にしては珍しい。
「大丈夫だよ」
榊が、慈悲に満ちた笑みを浮かべながらそう言った。
「榊。今日、絵馬に会ったの？」
「ううん。昨日、絵馬ちゃんのお家に泊まったから」
「え。……一緒に寝たの？」
「うん。だって、泊まったんだから」
「うわぁ！　聞いたか礼慈ちゃーん。残念だったな。榊はそっちの趣味らしいぜ」
今、私の中に絵馬の邪悪な思考が乗り移った。そして絵馬のサディスティックな気持ちが、少し理解できつつある。

「え！　え、えぇ！　ちょっと一之宮さんそれ違う。違うよ。違うからね鳥居君」
店中に視線を集めるほど大きな声を張り上げて必死に誤解を解こうとしている榊。公衆道徳がなっていない奴め。
「ガチ百合だよ。残念無念また来世だね、礼慈ちゃーん」
狼狽える榊をを尻目に、私は身を乗り出して礼慈に耳元で囁いた。
「もう！　私は違うんだって！」
榊が今にも泣き出しそうな顔で、私と礼慈を引き裂いた。
その反抗的な態度が、また癇に障る。
「私は？　じゃあ絵馬がそうなの？」
追い打ちをかけようと言った言葉に、榊はぴたりと凍ったように動きを止めた。そしてなぜか礼慈まで顔を背けて静止した。
誰も反論しない。
もしこの場に疑惑の本人が居れば、きっとこの分厚いテーブルを蹴り飛ばして、ふざけんな、とでも叫ぶだろう。
私だけが愉快な想像に浸っている間。沈黙してしまった目の前の二人。その沈黙を押し流すように、カウンターの方からマスターの咳払いと共にニュース番組の大音量が押し押せてきた。
少し耳を傾けてみると、それは例の連続通り魔殺人のニュースだった。けど画面隅には赤々とした文字で大きく『現代の祟りか！？』と頭の悪いテロップが貼り付けられていた。

「へぇ、また出たんだ。毎日よくやるよね、祟ってる神様も」
どちらかと言えばこんな情報しか扱わないメディアを揶揄した言葉だ。画面の向こうでは、スーツを着た常識人ぶった大人が、殺人はいけない、信じられない悲惨な事件だ、みたいな事を言っているけど、あきらかに番組を作っている人間達が、事件を悲惨な物に仕立て上げているし、殺人はいけないと言いながらも、その恩恵を間違いなく受けていて、どちらかといえばもう少し続いてくれた方が喜ぶはずだ。
もちろん、そんな事をおおっぴらに言える訳もないから、ああして常識的で偽善的な画や言葉で、本音を隠しているのだろうけどね。
本当に、微笑ましいほど必死になって秘密にしている。
もちろん、私も。
「どうせ祟るなら、もっと世の中のためになるやつを祟って欲しいな」
本当は『私のため』なのに『世の中のため』と言っている辺り、私も本音や本心を言葉で隠している。秘密が多い人間の一人なんだ。
そして、きっと……。
「……奥津城」
礼慈がテレビ画面を見つめながら呟いた。
釣られて私もぼやけた焦点を合わせたが、テレビ画面には連続殺人事件と祟りとの関連性を強調しつつ、住人の異様な行動について放送していた。家にしめ縄を飾ったり、集団でお百度参りをしたり、延々と読経を唱えたり、そんな事が流されていた。
礼慈の横顔を覗き見ると、不思議な表情をしていた。歯を食いしばりながら、怒りとも悲しみとも取れる眼差し。それを見たとき、今、礼慈に中には絵馬しかいないのだろうと、私は思った。
突然、榊が立ち上がった。
「あ、榊どうしたの？」
いち早くそれに気づいて声をかけると、榊は慌てて鞄からお金を取り出して、それを机に乱暴に置くと逃げるように店の外に出て行った。
礼慈が榊を呼び止めるも、止まらない。
突然のことに呆気にとられてしまったが、私の頭の片隅で、このまま帰られたらマズイ、と警告を発した。
「礼慈。後頼む」返事を待たずに、榊を追いかけて店の外へ出た。
榊は店の前の路上で、ガードレールに寄りかかり座り込んでいた。俯き、質の悪い風邪にでもかかったように身を小さく丸めて、肩を振るわせていた。
「どうしたの、急に飛び出して……」
優しく声を掛けながら榊の背中をさすった。すると伏せていた榊の顔があがり振り向いた。
「うん。ごめんね、ちょっと気分が……」
笑顔で、大丈夫だと言うが、榊の顔は真っ青で、今にも倒れそうなほど衰弱していた。

肩を貸して立ち上がらせても、まるで骨が抜けてしまったように足もとが覚束ない。小柄な榊が、私一人では支えきれず倒れそうになると、会計を済ませて出てきた礼慈が、咄嗟に榊を支えた。そして、まるで決めセリフのように、大丈夫か、と言う。榊が弱々しく、ありがとう、と言う。

――――羨ましい。

零のような感情が零れた。

既視感を覚えるほど、少女漫画によくあるシチュエーション。押し花のように漫画に挟んでしまいたいほど、この二人ならお似合いだろうな。そう思っても、その先にあるハッピーエンドを認められない。

「私……、やっぱり帰るね」

礼慈に支えられながら、悲劇のヒロイン役が朦朧とした声で呟いた。

まずい。

まだストーカーの名前が分かっていないのに、榊に帰られたら今日、聞く機会がなくなってしまう。

密かに舌打ちが鳴る。

礼慈が心配そうな顔をして、まるで止めようとしない。それどころか、送っていこうとさえしている。

今、私が榊を引き留めるのは変だ。

なら、どうしてら……。

ああ、簡単じゃないか。

「榊。一人じゃ心配だから、家まで送ってあげる」

優しく手を差し伸べる。

疑うことなく、安堵の微笑みを浮かべながら榊は手をたった。

私も笑った。

にやり、と密かに。

駅前のバス停から、バスに乗って二十分ほど。見慣れた大橋を渡り、万華鏡のように陽射しを反射する水面のを見下ろしながら、私の頭の片隅では、どうやって名前を聞き出すか考えていた。

不自然さを感じさせず、違和感を覚られず、思惑にきづかれず。

バスは長閑な光景を背に走り、だだっ広い公園の前で停車した。榊がそこで下りると言うから、私たちも下車した。

バス停がある公園前。そこから公園を一望できた。遮断物がなく、公園内のブランコや滑り台などの遊具と、ベンチが数脚あるぐらいで、公園というより広場に近い。公園を囲むように住宅が密集していた。

榊の案内で、私たちは歩き出した。

榊の家は、どうやら住宅街にあるらしい。

道中、私と榊は、礼慈より少し先を一緒に歩きながら、どうでもよさそうな話をした。とても平和で、普通の話。

話をしている最中にも、榊はちらちらと背後を気にするように、黒目がちの円らな瞳を動かして礼慈を窺っていた。

表情はどこか弛緩して、だけど眼は挙動不審なほど落ち着きがない。
さっきまで真っ青だった肌色は、ほんの少し赤みを帯びだして、ずいぶんと回復したようだ。
「あ、そうだ。礼慈」
歩みを緩めて振り返る。妙に落ち着き払った礼慈がいる。
「あんたさ、来月の大会出るよね」
「俺、部長だぞ」
礼慈がふて腐れたように半眼で睨むから、
「私、マネージャーだぞ」
私も真似てみた。
「実はさ、榊が応援に行きたいってさ」
ちらりと隣の榊を見ると案の定、驚いて口を大きく開けて、それでも小声で私に抗議してくる。けど私はそれをわざと無視。
「別にいいよな部長」
遠距離攻撃すると、礼慈は榊と違った戸惑いをみせた。
「べ、別に、かまわないよ」
まるで私と喋る時とは別人のように、少し高い声で、榊に向けてそう言った。
それを見て、私はなんだかバカみたいだと思った。
隣にいる榊を盗み見る。

私がちょっと絵馬の真似をしてカラカウと、面白いように狼狽える。
熱っぽく赤くなる頬を両手で隠そうとする仕草や、言葉につまりながら、助けを求めるように上目遣いに私を見る、潤った瞳。微かに漂う柔らかな匂い。陽射しに撫でられる綺麗な黒髪。水飴のように、とろりと甘そうな声。無垢な笑み。
それらすべて、可愛らしい女の子、そのものだった。
羨ましいほど――――いや、憧れてしまうほどの女の子の姿だ。
そして、礼慈はそんな子が好きなんだろうな、と私は今更そんなことで、自ら再確認するような事をした。
嫌になる。
自分で自分を傷つけるような事をするなんて、馬鹿みたい。
それを望んでるように、二人と一緒にいるのだから、被虐的にもほどがある。
これじゃ、まるで私は惨めな邪魔者じゃないか。
そんなの堪えられない。
早く、この状況から脱出したい。
「……榊の家ってまだなの」
声の調子を崩さず尋ねると、
もうすぐだよと軽やかに、榊は先頭を行った。
ふと見上げると、電柱の上と電線に鴉が数羽停まっていた。

特別な光景ではないのだけど、私にはその鴉たちが、まるで嘲笑うような視線で私たちを見ているように見えた。
そして、鳴いていないのに、鳴き声が聞こえる。
幽かな鳴き声。
それは遠く。
そして近づく。
私は少し歩くペースを緩めて、礼慈と並んだ。
「……礼慈」
意味もなく、急に彼の名前を呼びたくなった。
その囁きが、潰される。
鳴き声だ。
鴉の鳴き声が、押し押せてくる。
いや、私たちが向かっている。
その津波のような鳴き声の群れへ。
「ここを曲がったら――――――」
先頭の榊が、角を曲がる。
二三歩遅れて私たちも曲がる。
すると、榊が止まっていた。
指さしながら止まっていた。
その上げられた腕、
小さな指が指し示す方向には。
――――鴉に埋め尽くされた家があった。
掠れた鳴き声が合唱する。
哀れみを含む音が木霊する。
可聴領域を擦り切るような鳴き声の渦に、
数秒、呼吸をするのさえ忘れてその家を見た。
焦げ茶色の屋根は、初めからそうであったように鴉の黒に埋め尽くされ、家を囲むブロック塀には門番のように鴉が整列。飛び立つ鴉、その羽音に呼び寄せられて、それを超える数の群れが降り立つ。
生活の営み一色だった住宅街というキャンパスに、その家はまるで異色の染みのように他の家屋とはまったく違う雰囲気を、それは廃墟に近い殺伐さと異様さを顕わにしていた。それは露骨に、誇示するように、強調するように、不快感さえ感じるほどに。
その異色の空気は、一滴の染みだとしても、
その一滴は周囲を浸食して呑み込むほど怖ろしく貪欲だ。
異様。異常。狂気めいていた光景。
だけど、そんな異様な光景よりも、
私の眼はたった一点を見逃さずに探り当てた。
玄関先、ブロック塀の端に表札があった。鼠色のブロック塀に張られたそれは、一目で分かる栗色のプレート。そのプレートには『榊』と書かれ、ご丁寧に家族の名前までわざわざ通りすがりの人々に教えていた。

『　榊　ヨネ
　　祥妃
　　宗一郎
　　あやめ　』

四つの名前。その中から一つだけ攫う。
「あぁ――――――」
息が漏れる。
ふ。
ふふ。
「榊、宗一郎――――か」
ふ。
ふふ。
ふふふ。
「なんて――――馬鹿な人」
呆気ない。
拍子抜けするほど、簡単に手に入った。
聞き出すことも、お願いする事もなければ、危険を冒すまでもなく。
策略を巡らせていたのが馬鹿らしいほど簡単に簡単に手に入るなんて。
その無害な無警戒さと無防備さが、哀れなほど愚かしくて、私は歯を食いしばって堪えるように顔を伏せたけど、

「っふ……は、ははははははははぁ！」
破裂するように嗤った。
共鳴するように鴉たちの羽音も、私と一緒に嗤う。
そうだ、と合唱するように鴉たちも、一緒に嗤う。
腑が捩れる。
眼が割れる。
喉が破れる。
声が暴れる。
溢れる。
漏れる。
爆ぜる。
飛び散る黒い羽根。
舞い落ちる黒い羽根。
飛び立つ黒い塊。
呪いを詠う。
鴉が嗤う。
私も嗤う。
嗤いが止まらない。
だって、可笑しくて、
とても、楽しくて、

すごく、愉快なんだもの。
壊れる。
私を見る榊の表情が、ひび割れた人形の顔のように壊れる。さっきまで幸せそうに頬を赤らませて、幸せに潤ませていた瞳も乾ききって、やわらかな声が枯れ、そして密かな恋心さえ群れる鴉たちに犯されて、今にも泣き叫びそうになっている。
それが哀れにも、すごく可笑しかった。
可笑しかった。
私の未来を思い描いて、可笑しくなった。
顔も名前も手に入った。
あとは、呪うだけ。
呪えば、解放される。
やっと、あの憂鬱から解放される。
私を苦しめる者が、居なくなるんだ。
こんなにも、簡単に。
嗤いが止まらない。
痛いほどに、可笑しい。
さぁ、帰ろう。
帰って呪おう。
準備は万全だ。
後は、呪うだけ。

もう、ここにいる理由はない。
「榊――――」
壊れかけた少女が縋るように振り向いたら、
「バイバイ」
私は夢のような少女を、見捨てた。
背後から喝采するような鴉の鳴き声。
あの黒い鳥は、私の味方だ。
遠ざかる。
足早に去る。いつしか走っていた。
道順なんて覚えていなかったけど、自然とバス停がある公園まで行き着くことが出来た。
そこで私が足を止める前に、呼び止められた。
振り返る。そこには、怖ろしく無表情な礼慈が私の腕を掴んでいた。
「一之宮、おまえ――――」
礼慈が何かを言う前に、
「あれでも、まだ榊が好き？」
私は首を傾げながら訊いた。
礼慈はたったそれだけで、腹が立つほど簡単に表情を緩ませた。
分かっていたことなのに、
「おまえ、何言って、そんなこと――――」
「知らないとでも思ったの？」

礼蕊が何を言おうとしたのか分からない。そんなことない、そんなこと一之宮には関係ない、それともそれ以外の事か分からないけど、私は知っている。
「知ってるのよ。礼蕊が……、榊のこと好きだって。私……」
ずっと知ってたんだから。
分かっていたんだから。
いつも、見ていたんだから。
そんなこと、分かるよ。
「でも見たでしょ！　あの異常な家！　あれが榊の正体よ！
どう考えたってあんなの普通じゃない、狂ってる！　狂ってるのよ榊は！　気が触れてた異常者なのよ、あんたが好きな奴は！　それでも、それでも礼蕊は榊が――――」
好きなの、と問うまでもなく答えなんて分かってる。
きっと礼蕊は、
「ああ、好きだ」
すごく落ち着いた涼しげな声で、やっぱりそう言うんだ。
分かってる。分かってる。分かってる。
でも、
「それでも俺は、榊が好きだ」
なんでそんなに気持ちを隠さず言えるのか――――。
「わかんないよ！」
攻撃するように叫んでいた。
「わかんない！」
叫んだ。
「わかんない！」
駄々をこねるように、
「わかんないよ！」
何も考えられず、
真っ白な頭で、
「なんで私じゃないのよ！」
初めて私を、彼にさらけ出した。
その瞬間、世界が停止したように静かだった。
そして白熱した空っぽの心に、
「俺は、一之宮じゃなくて、榊が――――」
彼のそよ風のような声が、
「榊が、好きだから」
暴風となって私の中に入って響く。
「どんなことがあって、それはきっと変わらない」
逃げたかった、彼の前から。
でも私の前から去っていったのは、礼蕊だった。

◇

夏の生き残り。ひぐらしが鳴いていた。

殺風景な公園の片隅。脚は錆び、プラスティックの板もひび割れたベンチに、私は半ば放心して座った。

顔を横に動かせば、百メートルぐらい離れた所にバス停が見える。さっきまで――――時間の感覚なんてわからないけど――――私と礼蕊は、あそこで向かい合っていた。

どれぐらい時間が経ったのかな。腕時計もなければ、寂れた公園には時計もない。

逃げ出したい思いだった私よりさきに、礼蕊が私の前から去ってから、二度バスが通り過ぎた。それを私はここから眺めていたようだ。

何時だろう、もう夕方なのかな、だとしたら四時間近くこうして無駄に時間を消費していた事になる。

影が伸びる。

浴びれば溶けてしまいそうだった陽射しは、深い色合いに変わりつつ衰えだしているのに、ひどく、暑かった。

いや、枯渇しそうだ。

不意に、喉の渇きに気づいた。

立ち上がって自動販売機を探そうかと腰を上げようとした瞬間、頬にとても冷たい物が触れた。

「ひゃぁ！」驚きで飛び出すように立ち上がる。

「ミイラになるぞ。新手のダイエットか？」

振り返ると、飄々とした神籬がいた。

「あ、あんた、なんで」

停止状態から急発進したような頭では、そんな事しか言えなかった。

しかし、そんな事さえ神籬は答えようとはせず、手に持っていた缶ジュースを私に渡した。抵抗する気すら起こらず受け取ると、よく冷えたコーラだった。

「面白いな、一之宮ってさ。なぁ、毎日泣いてると干からびるぞ」

軽口を叩きながら神籬は、さっきまで私が座っていたベンチに座り、隣を指さながら、座れば、と言った。

隣に座って、とりあえずお礼を言ってから缶のフタをあけた。

コーラを一口飲んで、辺りを見る。

「今日は、一人なんだ」

「今日も、一人なんだ」

沈黙を嫌って尋ねたら、嫌味を返されてしまった。

「……あの熱心な明神先輩は一緒じゃないの？」

「……あの賑やかなお友達は一緒じゃないの？」

仕返しの言葉さえ、神籬に飄々と無関心げに返す。

こいつ、絶対に性格悪い。

「なんで神籬がこっちにいるだよ。あんたの家はあっちだろ」

「なんで一之宮はこっちにいるんだ。オマエの家もあっちだろ」
まるでオウム返しだ。これは何も訊くなという意図なのか、
それとも、
「からかってるの？」そうとしか思えない。
すると神籬は臆することなく、そうだよ、と肯定して笑いやがった。
思わず、持っているアルミ缶を顔面に向けて投げつけたくなった。でもまだ半分も飲んでいないから、もったいなくて止めた。
私から話かけるのが馬鹿らしくなったから、神籬が何か言うまで黙っていることにして、乾いた喉をコーラの刺激にならすようにゆっくり飲みながら、今にも息絶えそうなひぐらしの鳴き声を聞くことにした。
「さっき、礼蕗に会った」
「え――――？」
何の脈絡もなく神籬は、今もっとも聞きたくない名前を出してきた。
「大橋でばったり会った。……大変だったみたいだな、一之宮」
意地悪な微笑みを浮かべながら神籬が、私の顔を回り込むように見る。まるで何もかも見透かして、それでいて嘲笑うような挑発的な視線。
「まさか……。礼蕗から聞いたの？」
長時間陽に晒され熱した背中に、缶ジュースの冷たさが移ったように寒気を感じた。
「聞いたよ、色々と。だから一之宮が、一人で泣いているんじゃないかなって思ってさ、水分補給にやってきたわけさ」

ミイラは目覚めが悪いしな、と言って神籬は空になった缶を十メートルほど先にあるゴミ箱へ、狙いを定めて投げた。
空き缶は綺麗な放物線を描くことなく、まるで弓矢のように一直線にゴミ箱の中へ。
「ついでに、面白いモノを見ることも出来た。あれは、何なんだろうね。異様だったな」
まるで私を慰めようとしているように思えた。
神籬が言った『面白いモノ』とは、榊の家の事なんだろう。あれを面白いと言える神経はどうかと思うが、異様なものなのは同意できる。
「変だよ、絶対。おかしいよ、榊の家は！　なのに……それでも礼蕗は、榊が……」
残ったコーラを一気に飲み干し、私も空き缶をゴミ箱めがけて投げた。けど、空き缶はゴミ箱に当たる事もなく地面に落下。
「なんで……、なんでだろうね」
私は震える唇を噛んだ。そうしないと、繰り返してしまえばまた泣いてしまいそうで、それが悔しかった。
寂しげに転がった空き缶を拾うために立ち上がろうとして、先に神籬が片手で私を制止して、立ち上がった。
「まぁ、恋は盲目という格言があるからな。理由なんて考えるだけ損さ。どんなに正論や合理性を説こうがさ、そんなの今は届きはしない。いわば、今の礼蕗はさ――――」

前屈の要領で空き缶を拾い、神籬が無慈悲に無関心にそれを投げ上げ、振り向きシニカルに笑った。

「――――呪われているのさ」

空しいベルを鳴らすように、孤独だった缶は群れの中へ帰っていった。

「憑かれていると言ってもいい。礼慈の心は、今は榊に囚われてしまっているのさ。礼慈にとっての最優先事項は榊であり、榊は絶対的な善であり判断基準や関心事項も『榊あやめ』との関連性によるところが大きいということ。行動、思考の前提がまず『榊あやめのため』ってぐらい、礼慈にとって榊の存在は支配的なんだよ。詩的に言えば、礼慈のハートは榊に盗まれているのさ」

だから、と接続詞を告げる間に、吹き抜けたそよ風がひぐらしの断末魔を舞い散らす。最後の絶叫が絶え、神籬は静かに紡ぐ。

「だから今、礼慈に何を言っても、常識的で合理的で論理的な倫理を釈迦の如く説いたところで、その言葉は礼慈には効かない。だってそれらは、榊あやめとまったく関係のない言葉なんだからさ」

饒舌な針金人形は、飄々と語りながらも一言一言を矢のように真っ直ぐ私に放つ。

「だから一之宮の言葉なんて、届かなかったのさ」

その矢は一言たりとも私を外さない。無慈悲なほどに傷跡を射抜く。

数分前は私を慰めに現れた男は、今では悪魔のように私の傷を開いて容赦なく射抜く敵となっていた。

「孤軍奮闘したところで、惨敗は必至だ」

目の前に立ちふさがり、影を落とす神籬。

強敵だ。言葉でまくし立てても勝てる気がしない。こいつ、私よりも陰険で、絵馬以上の意地悪だと直感してしまったから。二対一じゃ勝てっこないよ。

いや、気づけば私は独りだ。

友達と呼べる人達はいつの間にか、私の味方ではなくなっている。絵馬も榊も礼慈も、そして今では神籬さえも私の味方では――――。

「だが希望はある」

陽射しを遮る男の眼が、

「なぜなら、オレは一之宮の味方だからさ」

影の中で妖しく煌めく。

それはとても小さく弱々しい光りだけど、不思議と強く輝いているように見えた。

「なんで――――？」あんたは私の味方をしてくれるの？

呆気に開いた口が問うと、神籬はシニカルに笑って、

「一之宮が心配だから、それだけじゃダメか」

力強い声を響かせた。

響く。その声が私の胸に低く響いて、心臓の鼓動と同調していく。

どくん。

「どうしたんだよポカーンとして。そんなに嫌か、オレが」

「う、ううん。そんなこと、ない」
息を呑む。密かに呼吸を整える。
「ありがと」
そして、なんだか初めて口にしたようにそう言った。
「それで――――どうすればいいの？」
「礼蕊の呪いを解く方法か？」
私は深く頷いた。
言葉は、どこか童話に出てくる魔術師のようだったけど、不思議と違和感がなかった。それはきっと私も感じていたからだろう。礼蕊のあの異常なほど榊に対する執着は、まるで、呪われているとしか思えない。
「簡単なことさ」
魔術師は呪文を唱えるように、
「榊あやめの悪性を暴(あば)けばいい」
善く通る低い声を響かせた。
その一瞬、ひぐらしも風も不明なざわめきも沈黙していた。
「悪性を、暴く――――？」
反芻(はんすう)するように繰り返す。
「そう。一之宮は礼蕊に、榊の家の異常さを訴えたんじゃないのか？あの家は異常だ、その家に住んでいる榊も異常なはずだってさ」
細身の魔術師はまるで占い師のように、私の心を覗く。
そうだけど、とただ答えることしか出来ない。
「そうだとやはり効果は薄い。いいか、それは間接的だ。言っただろ、盲目になっている礼蕊には『榊あやめ』がもっとも影響力のある言葉だ。榊の家じゃない、榊あやめだ。だから、もし異常を訴えるなら、榊の家族ではなくて、榊あやめ本人ではくては効果は薄いんだ。だが、だからといって『榊あやめは異常だ』と言った所で礼蕊は多分揺らがない。そんなの解釈次第でどうとでもなる。周囲との差異が即ち異常という訳じゃない。その他大勢と違っていても、それは個性とも言える。個性ならば、いくらかは美化出来る余地がある。今の礼蕊にとって『榊あやめ』以外の人が言う『榊あやめの異常』は『榊あやめの個性』と、礼蕊にとって善い物へと解釈されるかもしれない。だから榊の家がどんなに異常だろうと、榊あやめがどんな異常嗜好(しこう)を持とうが、礼蕊にとっては全て『善』になってしまうんだよ。むしろ、榊をそんな風に言う奴に敵意さえ持つかもしれない」
まるで舞台役者のように、神籬は細長い手を大きく振って、抑揚(よくよう)を明確につけて語る。本当におとぎ話の魔術師さながらに、魅了の呪文を唱えて、私の眼を釘付けにする。
だけど語れる呪文は、絶望的な香りが漂い、喉から波が引いていくように寒気に塗られる。
「だったら、どうする事も出来ないじゃない。それどころか……私が言ったことって、逆効果だったって事じゃ……」
「ここまではな。だから、暴けと言っているんだ」

その声が、ひどく冷たく感じた。同時に、暴力的なまでに圧倒的な圧力を持っていた。
「暴くって、何を？」
「悪性だ。榊あやめの悪性。簡単に言えば黒い顔か」
飄々と言い、その顔が能面のように無感情なものへと変わった。
「この世、人の世において絶対の善人なんていやしない。人は必ず善悪両面孕(はら)んで存在している。善い面があれば必ず悪い面がある。だけど、実際はどうだ。善悪両面、あるいは悪性だけを積極的に晒(さら)して、善性を潜ませる奴なんてのは希だ。そんなの、少し社会や周囲との人間関係を理解している奴なら当然の処世術なんだろ。自分の悪い面ばかりを全面的に出していたら、社会の中では生き難い。
本音では反社会的な事を、金はないけど欲しいから盗みたい、誰彼がムカつくから殴りたい、憎いから殺したいと思ったとしても、実際にはそんな好き勝手しない。それを許容してしまったら自分が困るから、社会で法律という約款(やっかん)を繕って牽制(けんせい)し合っているのさ。あたかも、俺も我慢してやるから、オマエも我慢しろ、でないと俺が迷惑する、みたいにな。でも誰もが誰も、その決まり事を馬鹿みたいに遵守してはみ出すことなく生きているとは限らない。大なり小なり反社会的な、悪の面を発露しているもんさ。密かに、だが、必ず。普段は悪戯みたな悪性だが、環境さえ整えばその悪性は肥大化し本性を投影し現実に現れる。悪魔のようにな。

その環境っていうのは、普段とは違う、日常性が欠けた、異常な出来事が起きている場所なんだが、言葉にすればひどく曖昧で抽象的だが、それは身近にあるんだ。
たとえば、そう――――八年前の朽木町と今の榊家が、まさにそだ」
能弁な魔術師が、陰のある笑みを浮かべた。
私の心臓を弄ぶように、手を差し出す。
まるでその手の平には禁断の果実があるように。
呑み込まれていく、そんな錯覚が渦巻く。
「一之宮。榊の家は今、普通か？」
魔術師は問う。
私は首を振った。小さく、鈍く。
「今この町には殺人鬼がいる。ヤタガラス様の祟りが蔓延(まんえん)しつつある。そして祟りの恐怖に呪われた人々がいる。この町は今、異常か？」
魔術師は神託を告げるように厳かに問う。
私は呆然と不敵な笑みを見つめ、操られたように頷いた。
「ああ。悪性が育つには良い環境だ」感慨(かんがい)深げにそう言う。
「いくら盲目的に、榊あやめに恋をしていたとしても、礼慈は社会常識を知っている理解している、正義感が強い故に、度を超した悪を榊あやめが犯していたのならば、葛藤はあれ必ず礼慈は正義を取るさ。認めざるおえないほどハッキリと悪を突きつければ、礼慈はそれを許さないよ。断言してもいい。だから――――」

呪文を唱える準備のように、神籬はゆっくりと呼吸をした。
「礼慈を取り戻したければ、榊あやめの悪性を暴くしかない」
呪文が風を起こす。
風は葉音を鳴らす。
葉音は不協和音を生む。
不協和音は私の心を触る。
ざわつく手触り。
不安が生まれ影が生まれ、魔術師に従う。
私は息を吸った。ゆっくり、生きている事を確かめるようにゆっくりと呼吸をした。頭の中の不純物を吐き出すように息を吐いた。
神籬の言葉の渦に呑み込まれそうになる心を、焦るなと呪文を唱えるが、口は開く。
「どうすれば、いい――――の？」
膝の上で握り合う両手。
だけど気持ちは今、手を伸ばして何かを掴もうとしている。
簡単さ、と神籬は笑う。
「秘密を暴くんだ」
心底楽しそうに、それを抑制したように神籬が笑う。
どこかで悲鳴にも似た声が聞こえた気がした。それはひぐらしか鴉か分からないけど、きっと私が心があげたものだろう。
「いいか、悪性なんてものは隠すもんさ。勿論、秘密の全部が全部、悪性であるとは限らない。限らないが、それを隠すだけの理由が本人にはある、知られたくない理由がある。暴かれたくない秘密ほど必死になって隠し、それが暴かれた衝撃たるや本人は夢にも見たくもないだろ。そういう秘密を暴くんだよ。殺人と遅刻の二つの秘密のうち、どちらを暴かれたくないかと言えば、圧倒的に殺人だろう。複数の秘密があるなら悪性の高いものほど、社会を知り社会で暮らす者なら至極当然さ。故により強固に匣に閉じこめられている秘密を開けば、醜い悪性が現れる。探せ、秘密を隠した匣を！」
叫びと共に神籬が横へ流れる。
同時に、隠れていた夕日が私の眼を射る。
眩しさに片手で眼を覆い、指の隙間から覗くと、神籬の姿は魔術師さながらに消えていた。
「匣って何よ　どこにあんのよ！」
姿が見えない魔術師に問いかけると、
「匣は何かを入れるもの。家も人を入れる匣さ――――」
詠うような声が、私の背後から聞こえた。
「家？　それって榊の家？」
私は立ち上がった。
神籬の声はもう返ってこない。
結局堂々巡りではないか、という疑問が過ぎる。

だけど魔術師の呪文によって、何かが変化した気がする。
だから立ち止まらない。
私は、魔術師を演じきった神籬に敬意を払い、振り返って背中を見る事はせずに走り出した。遠くで鴉の鳴き声が聞こえる、その場所へ。

◇

染まる。
錆びた赤色に染まっていく。
空。アスファルト。電線。草。風。飛び立つ鴉とその鳴き声さえも、染まっていく。ただ、影だけが染まらない。
息を切らしながら慣れない住宅街を走り、戻った。
鴉がいる。型抜きされたような家々が並ぶ中で、ただその家だけに朱色に染まった鴉が群がり、孤立の影を作り上げようとしていた。
遠巻きにその家を、軽蔑の念を含んで見る人々が数名まだいた。ただ、時間を消費している愚鈍な人達だ。
まったく関係ない態度で通り過ぎる。
そのまま勘を頼りに榊邸の裏へと回る。
ぐるりと囲む塀。有るかどうか不安だったが勝手口があった。
周囲を見渡し誰もいないことを三度確認して、私は素早く庭へ入った。
身を屈めた。そこで一度深呼吸。すると悪臭が漂っている事に気づいた。とても生臭い。ハンカチを取り出し口にあて、極力呼吸を抑えた。
家の裏側。見上げると広い出窓があり、左手にはドアがあった。
私は身体を屈めたまま這うように、右へ回って角を曲がった。庭には洗濯物を干すための物干し竿や物置、それから花壇があった。家の壁はほとんどが硝子戸。
そっと音を立てないように気をつけながら、その硝子戸の前まで進む。そして、硝子戸から中を覗こうとしたけどカーテンによって目隠しされている。中を覗くことができないだろうかと、辺りを慎重に窺(うかが)っていた時、家の中から音が聞こえてきた。
硝子が砕けるような音。身体が絞め殺されそうになった。
「　　」
声が聞こえた。何を言っている分からない。
それは声というより叫び。ヒステリックな叫びだ。
そして叫び声と共に何かが壊れる音が響く。
その度に私の身体は、ビクリと微動する。
それが何度か。まだ慣れない。気持ちが落ち着かない。動悸(どうき)が激しくなるばかり。そんな時、ふいに聞こえてくる刺々しいヒステリックな叫び声が、子供が駄々をこねているように聞こえて、私はある女の子の姿を連想した。

カーテンが張られた硝子戸。中は見えない。けど、カーテンとカーテンとの僅かな隙間を見つけ、私はそこから中を覗いた。

家の中は暗い。まず目についたのはソファの背。そして天上の照明と床に散乱した小物の数々。そして、人影が白い壁に張り付いて、羽ばたくように激しく動いていた。

影は、小さい人の形。

中腰になって視野を上げる。

すると影を作りだしている人が見えた。

「こうしなきゃダメだったのよ！　だから！」

一際大きな叫び声。手を触れた硝子が怯えるように震える。

「私だけにせいにするの？　全部、全部私が悪いっていうのお母さん！」

険しい叫びをあげているのは、女の子だった。

私はその姿を見て、ひどく気分が悪いほど違和感を覚えた。

榊あやめが、叫んでいた。

攻撃的に、相手を罵るように刺々しく暴力的な声をあげている。攻撃性は言葉だけには留まらず、ハつ当たりのように、辺りのものを手当たりしだい投げては壊している。

まるで何かに憑かれ狂ったように。

その姿に私が見ている榊あやめの面影はなかった。温和しくて可愛らしい小動物みたいに、ちょっと弱々しいけど、私が思う女の子の理想像みたいだったのに、その理想像も、木っ端微塵に砕かれようとしている。

母親だろうか、怒りまかせに暴れる娘をなだめようとしている。けど、その母親を振り切って更に叫ぶ。

「これでよかったんだよ。もう家族の幸せを邪魔する人はいなくなったんだから……。こうするしかないってお母さんだって思ってたんでしょ！

だからこれでよかんたんだよ！　家族のために、しかたないかったんだよ！　それなのに……それなのに、お母さんは全部私に罪を押しつけるっていうの！　私が全部悪いっていうの！　こうするしかなかったんのよ！　こうしないとみんなダメになっちゃうから、みんなバラバラになっちゃうから！　みんなのために私が――――――」

――――お婆ちゃんを殺したんだ！

悲鳴。

「あっ――――――」咄嗟に口を塞ぐ。

私と榊。それは静寂を伴う悲鳴だった。

筋肉が衝撃で弛緩し、視界が落下する。

するとソファの側に、何かが倒れているのが眼に入った。それは影に包まれ輪郭だけ、毛布を丸めた物のように見えただが、西日が入り込み、私の眼が闇になれ、影を暴く。

あれは、人だ。

ソファから抜き出たように、小柄で白髪の老婆の上半身が床に倒れている。そして、頭の辺りの絨毯（じゅうたん）が黒く染まっていた。それが血だとすぐに分かった。倒れた老婆の顔がこちらを向いたまま、だらしなく口を開いて、中途半端に開いた目で、私を睨んでいる。

長く、それを見ていたくなかった。

「死、んでる……」

口を塞いだ手の間から漏れた囁きが、震えていた。震えが広まる。冷たい震えに犯される。

硝子が震えた。

「道具箱持ってきて、それから……匣も」

聞き慣れた声が、ひどく響いた。

そして、ずるずると、横たわっていた老婆の姿が消えていく。何か引きずる音が絶えない。その様子に見入っていると、近くで音がした。そして人の気配。

ビクリと驚きながら私は慌てて隠れなきゃと思い、花壇に生い茂る大きな植物の中へ身を潜めた。その直後に、ここだと簡単に見つかってしまうと後悔した。そして、恐る恐る植物の影から様子を見る。

家の裏手から出てきのは、長い黒髪の着飾った女性だった。まるで今から出かけるような装いだけど、その振る舞いは慌てて臆病なほど挙動不審。直感だが、あの人が神あやめのお母さんだと思った。

その人は、慌てて用具入れをあけ、そこから工具箱らしきものだけ持って急いで家の中へ戻った。数秒して再びドアを閉める音。

私はあまり音を立てないように花壇から抜け出し、なんとか見つからずにすんだ安堵に息をついて、泣きわめくように騒ぐ心臓の鼓動を抑えるように左胸を握りしめた。

頭上から降り注ぐ黒い羽音。

嘲笑う鳴き声。

降り積もる気味の悪い空気に、頭が締め付けられる。

早く、ここから出たい。

忍び込んだときと同じように中腰に庭を抜ける。そして家の裏側まで戻って、呼吸を抑えながら一息に、この不気味な空気が溜まった家から抜け出そうと裏口へ走り出そうとした時、家の中から、叫び声が聞こえた。

「あやめ！」という悲鳴。

それが聞こえた時、距離感が掴めない声に、私は引き寄せられるように足を動かしていた。

裏口から入って左側へ。角の辺りで、一際騒がしい物音がした。何か金属がぶつかるような音。壁に耳を当てて家の中の音を聞いてみたけど、分からない。別の方向から、壁から家の中を窺おうと角を曲がって、さっき居た庭とは反対側の庭へ出た。

「っう――――――」

角を曲がると腐敗臭にぶつかった。咄嗟に口元を抑えないと吐いてしまいそうなほどの生臭さ。すぐに俯き、呼吸を抑え、眼を瞑って異臭に堪えながら、手探りに壁を伝って中からの音を探った。

声が聞こえる。

見上げると格子付きの小窓。そして白い長方形型の室外機が壁に付いている。この向こうは浴室かもしれない。

背伸びをして、窓を覗こうとしたけど届かなかったから、室外機に足をかけ格子にしがみつくようにして、小窓の隙間から中を見た。

見下ろすと真下は浴槽。そして床のタイルの上には小柄な老婆が仰向けに倒れていた。……いや、倒れているのではない。流木のように無造作に置かれていた。

タイルの上には、ノコギリや鉈が散らばっている。

それを足下に、見知った女の子が立っていた。

表情が見えない。トレードマークのようにいつも両側で丸めている髪が解けて、何日も手入れしていないように乱れて広がっているのを見ると、憔悴しきっているように思えた。

「あやめ！　やめて！」

浴室の入り口辺りで、榊のお母さんが顔を歪めて叫んでいる。

「やめて！　お婆ちゃんなのよ！　お婆ちゃんを！」

身を引き裂くような悲鳴は、同時に切実な哀願のように聞こえた。

聞いている私まで、胸が痛む悲痛な叫び。

それを榊は、

「静かにして！」

押し殺し、握りつぶすように一喝した。

「ご近所に聞こえるでしょ、静かにしてお母さん！」

押し殺した声が響く。

それがとても、私が知っている榊から出た声とは思えないほど、荒々しく不気味な声だった。まるで悪魔の声。

聞いているだけで、頭が馬鹿になりそうな甲高い声。

入り口辺りに立っていた母親は、唖然と萎むように尻餅をついて座り込んだ。それに一瞥もくれず、榊はタイルの上に散らばった工具の中からノコギリを手にとって、横たわる老婆の横で屈んだ。

ノコギリの刃が、老婆の細い首に触れる。

「あ――――――」息を呑む。

眼が凝結してそらす事が出来ない。

ノコギリの刃が、ゆっくりと引かれる。

「あ、ぁ、ぁ――――」痺れる。

ノコギリの刃が、蝕むようにゆっくりと動く。

引く、押す、引く、押す、引く、押すを繰り返す。

不気味な音が響く。

柔らかな水っぽい音と歯を擦り削るような音。

響く度に、私の骨と共鳴して、寒気が吐き気を呼び起こす。

「っうぅぅしししししし」
片手で口を塞ぐ。かみ合わせた歯が震える。
共鳴する。
ノコギリを動かす榊の手が止まって、毒ガスを吸い込んだように激しく咳き込んで吐いた。咳が止まらない内にまたノコギリを動かし、そしてまた吐いた。まるで何かに取り憑かれて様に、機械的にノコギリを動かす榊あやめ。
狂ってる――――そう思った。それは正しい直感だ。
苦しんで吐き出して、胸を掻きむしりながら、それでもノコギリを動かして、人を壊してる。
まともじゃない、異常だ、狂ってる！
そこには私が知っている榊あやめはいない。
榊あやめの姿をした悪魔がいた。
とても、まともな人間のやることじゃない。
引く、押す、引く、押す、引く、押すを三度繰り返した。
そして、黒い血で濡れたノコギリを投げ捨てて、
鉈を両手に持って振り上げ、
そして、一息で無骨な刃が落とされた。
その瞬間、榊あやめは叫んでいた。
その瞬間、榊あやめは顔をあげて、
――――噛っていた。
「ひぃ――――――ッ」
その妖艶（ようえん）な笑みに、心臓を咬み千切られる。数秒死んだ。弛緩する腕。格子から離れて、地面から生えて無数の手に引き込めれるように、私は、落下した。
その間に、誰かの無言の悲鳴が聞こえた。
「っうぅつ――――――」
落下の衝撃で蘇生。同時に、凶悪な寒気と吐き気に犯され、私は泣きながら吐いた。
横の壁から、壊れたラジオのような悲鳴が聞こえる。
頭上から、地面に這いつくばる私を罵るような鴉の鳴き声。
塀を隔てて、たった数メートル先から普通の生活の音が聞こえる。
様々な音が渦巻き、濁り、毒となって私を犯す。
痛い。喉が、鼻の奥が、眼が、胸も頭も身体が痛い。
耳が拾う。壁隔てた向こうから聞こえる断末魔。
悲鳴が聞こえる。誰かの悲鳴が聞こえる。たしかに、聞こえたんだ。
朦朧（もうろう）と溶けてしまいそうな頭をふるって、立ち上がる。足が頼りなくもたつく。壁を支えにしようとした腕が痙攣（けいれん）している。吐き出した自分の息の生臭さに頭にくる。不鮮明な涙に濡れた眼が愚鈍な動きで辺りを見る。

背後で、不吉な羽音が鳴った。
振り返る。
夕日が慇懃無礼に庭を照らすから。
「い、い――――――」
軋みを上げて瞼が開き、嫌が応にもそれを直視してしまった。
散乱した小岩が、明かりを受けて正体を晒す。
生皮を剥がされた犬や猫の黒ずんだ死骸が無数。
散乱したゴミ屑が、明かりを受けて正体を晒す。
無惨に虐げられ遊ばれ、捨てられた肉片が無数。
厚い影に覆われた庭が明かりを受けて正体を晒す。
生肉を嘴でつつく鴉。
巻き散らかされた死骸。
傷跡のように残った黒く変色した血と死臭。
不吉な黒い羽根が、優雅に舞い落ちる。
狂気に取り憑かれた笑い声が、蝕むように聞こえる。
そして、
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁぁあっぁっぁあーーッ！」
絶叫を抑えていた理性が、音を立てて壊れた。
『匣に閉じこめられている秘密を開けば――――――』
走った。
どんなに無様でもとにかく足を動かし走った。
走って逃げた。
逃げたかった。
この、
『――――――醜い悪性が現れる』
狂気に満ちた匣の中から逃げたかった。
自分の身体が有ることさえ分からないまま逃げ出した。
とにかく、ただ怖かった。
匣の中に入っていた『悪』が、純粋に怖くて、
私はその匣が閉ざされないうちに早くと、走った。
生きるために走った。
走るために生まれたように。
無人の家が、今は、すごく恋しかった。
――――――ヒューヒュー……――――――ヒューヒュー……。

◇

寒気がするほどの静けさを保ったまま、日付が変わった頃。ようやく私の身体は、安らぎを得たように震えが止まった。

深夜。暗闇に占拠された部屋。ベッドから抜け出し、眼鏡をかけて準備をした。メールをチャックして、必要な道具などをプリントアウトして、いつもコスプレの衣装を入れているバッグに道具を入れて、静かに部屋を出た。

長い廊下で一度深呼吸。家の中の音を探るように耳をすませると、私以外の生命の音はしなかった。玄関には私の靴しか出ていない。パパもママもまだ帰ってきていない、もしかしたら今夜は帰ってこないのかもしれない。いつものことだ。

泥棒のように音を立てず家を出て施錠する。エレベータを使わずに非常階段から、冷ややかな対岸のビルを眺めながら地上に降りた。そして、駐輪場に止めてある自転車に跨り、夜の街に走り出る。

湿っぽい空気。肌について重りになる。

外灯の明かり。蕩けた道しるべ。

すれ違う人は今はなし。過ぎ去る車は疎ら。

乱れる呼吸さえ止めてしまえば、川のせせらぎが聞こえる。

闇を突き抜ける。闇に喰われる。闇に濡れる。

ただそれだけのために生まれたように、車輪を回す。

回して、回して、越えていく。

朽木と糸伏、二つの町を繋ぐ大橋を越える。

不実な静寂に隠れた住宅街を越える。

森は近い。

過ぎ去る景色を振り返るほどの愛着はない。

車輪を回す。そして徐々に時代を遡るように変化する町並みは他人事。

他人の歴史なんて興味はない。

遡る。回る。越える。

どれぐらい走ったか、私は身を投げる潔さでペダルを漕ぐ足を止める。

静けさと闇の濃度は、ここにきて臨界点に達したからだ。

見上げると、黒い森が視界を埋め尽くしていた。そして正面には、この世すべての闇を吸い込もうとする門。樹海に風穴を穿つように参道が延びている。

自転車を目立たない所に適当に停めて、バッグを背負って私は参道を歩いた。

人工的な明かりない。天体の光りも森の木々にほとんど喰われてしまっている。闇に慣れた自分の眼だけが、貪欲に闇の中で、せわしなく動く。

小さな鳥居を潜り、長い石段を登る。

壇上に昇る役者に野次を飛ばすような鳴き声が、森から聞こえる。

視線を上げると、境界線のような白い鳥居が見えてきた。そこから世界が切り抜かれたように闇。

一息で駆け上がる。すると、本当にそこは別世界。
寒いほど清んだ空気が、琴の弦のように張り詰めた緊張を荘厳に奏で、乱れるもの全てに、静粛を告げているようだった。
拝殿まで一直線に敷かれた石畳、その脇には灯籠、そして森に半身隠れてしまっている立派な舞台。ここにあるもの全てが、この清浄な空気を作り出している。
息を呑み、同時に不安が過ぎった。
この汚れのない聖域で、呪いが成就するのか、と。
頭を過ぎった疑念が肥大化する前に、私は邪念を振り払って参道を突き進んだ。
拝殿を回り、その奥にある小さな社のような建物の後ろへ。そこからはもう無数の木々の生息地だった。まるで生きているように、葉を擦り鳴らし、ざわめきを奏でている。そこでようやくバッグから懐中電灯を取り出して足下だけを照らした。
山道はない。獣道ですらない。ただ鬱蒼と生い茂る細い木々と大木、そして隙間を縫うように密生する竹林を潜り、迷わないように時々振り返って、境内の建物が見える所まで、あまり深く入り来まいないように注意しながら進んだ。何度か苔の生えた岩で滑りそうになったり、隆起した地面に足を取られて挫けそうになったけど、止まることなく歩き、適当に開けた場所で立ち止まった。
きっと百メートルぐらいしかい歩いていないはずなのに、私の呼吸器官は壊れたように酸素を過剰摂取する。
それが回復するまで、少し空を見上げた。
背の高い大木の枝と葉のせいで、満天の星空が虫食いにされている。降り注がれる星の輝きは確かに美しい、けどそれは今はどうしても素直に受け入れない。その美しさの裡には、醜い狂気が潜んでいるのではないかと思えた。
深呼吸を三回繰り返して、地面に置いたバッグから道具と衣装、それからプリントアウトした紙を取り出して、呪いの準備に取りかかる。
上着を脱ぎ捨て白衣に身を包み、白い帯で縛る。飾りのない鏡を懐に。黒い下駄はいて、一本の老木の前へ行き三方に蝋燭を立てて火を灯す。
木々の息づかいが聞こえる。
とても静かで穏やかな音。
まるで寝息のよう。
時計を見る。午前二時を越えた。
草木も眠る丑三つ時。
心穏やかに、恨みを灯す。
最後に、呪う相手の名前を書いた紙を埋め込んだ藁人形を、老木に押しつけ釘を刺す。
そして、金槌で打つ。
カコン、と響く。

乾いた音が響く。
頭のない釘を、藁人形に打ち刺す。
鋭利な音が響く。
胴を打つ。
顔を打つ。
頭を打つ。
足を打つ。
腕を打つ。
呪いの言葉を打ち鳴らす。
四十と九本の釘を刺す。
逃げ場なんて無くなるほど、打ち尽くす。
恨みの言葉を打ち鳴らす。
一針に――――死んでしまえ――――と、一心呪う。
呪いを打つ。
呪いが響く。
呪いを打つ。
呪いが響く。
呪いが打つ。
呪いが響き続ける。

5／九月十九日（日）

一日中惰眠を貪っていたい欲望がピークに達したお昼頃、事前の連絡もなく、奥津城絵馬がやってきた。
「やっほ。相変わらず無愛想なツラしてるわね。はいこれ、おみやげの今川焼き。あまりものだけど、おいしいわよ」
押し売りセールスマンも脱帽の傍若無人な振る舞いで、ずかずかと我が家にあがりこみ、寝不足で頭が回らない私を玄関において部屋に入り込んだ。タイムラグ三秒。
「ちょ、ちょい待て！　おまえ何しに来た！」
慌てて部屋に入ると、まるで自分の部屋のように机の上におみやげを置いて、足を投げ出し堂々と鎮座して、私に、お茶ちょうだいと要求を出してきた。
この暴君ぶり、まさに私が知っている奥津城絵馬だ。
しぶしぶペットボトルのお茶を用意して、絵馬の向かいに座る。そして勧められるままに、今川焼きを食べる。これではどっちが部屋の主だか分からない。
理不尽な襲撃者を、慎重に見る。
墨で染めたような長い黒髪は艶やかな光沢を放ちながら綺麗なカーブを描いて垂れている。肌は髪とのコントラストで白さが際だち陶器のように滑らかな色をしていた。

水色のシャツの上に短すぎる白いワンピ。裾からちらりとジーンズが見える。確か玄関には、どんな美的センスをしているのか分からないけど、ウエスタンブーツが脱ぎ捨てられていたっけ。

見た目はとても軽く爽やか色合いだけど、油断するな。この女の内面は暗黒だ。

「それで、何しに来たの？」

二つ目の今川焼きを食べ終えて、目の前での女に直球で問いただした。

「それにしても、あれだよね。小夜子の部屋ってファンシィというか乙女チックというか、可愛いわね」

絵馬は、質問を綺麗に無視して、紙コップ片手に部屋を見渡す。

太々しい態度は絵馬らしいが、どこか変だ。

「私たち、喧嘩してなかった？」

絶交と言っても良かった思ったけど、絵馬の顔をじっと見据えて真剣な声で言うと、絵馬は間の抜けた脱力したような声を出した。

「え？　そうなの？　なんで？」

「な――――――――ッ」

人を小馬鹿にしたような返答に、私の両手は無意識に机を掴んで、ちゃぶ台返しをやりそうになった。が、冷静な私が机の上の今川焼きとお茶による被害をシュミレートして緊急停止信号を送った。

「別にあんたと喧嘩した覚えなんてないけどなぁ」

頬を膨らまして人差し指で押さえる。

私かわいいでしょアピールに、抑えかけていた両手が震えだした。

「喧嘩した覚えがないって……。金曜の昼休みのこと、まさか忘れたわけじゃないでしょ！　私が濡れ衣着せられて、絵馬になんて言ったか、本当に忘れたの！」

机を投げ飛ばすエネルギーが声に変換され叫ぶ。もしこれでもまだ不思議ちゃんぶるなら、本気で机を絵馬の顔面に投げつけてやろうと思った。けど、絵馬の表情は一変して、

「覚えてるわよ。あんたがなんて言ったか。絶対に忘れてやらないから」

静粛（せいしゅく）を奏でる鈴のような澄んだ声でそう言った。

威嚇するような容赦のない鋭い視線に、私の身体中の力が萎縮（いしゅく）した。本当に、容赦なく追い詰めるような危ない眼だ。

「でもね、私は別に怒ってる訳じゃないの」

射抜くような視線が和らぐ。

「あんなの昔から飽きるほど陰で言われてるから、むしろ面と向かって言ってくれた方が爽快ってもんよ。だから私は別に、小夜子のことを恨んでるわけでも、怒ってるわけでもないの。喧嘩してるつもりはないわよ。もしそう思うなら、相手が違う。あんたの喧嘩相手は礼慈でしょ。私もどちらかといえばアイツの思いこみの独走暴走に巻き込まれたんだから、いわば私たちは被害者の会。その件なら礼慈と解決して仲直りしてちょうだい」

まったくあの寡黙妄想バカ、と毒づきコップにお茶を注いで一気に飲み干し、びしっと人差し指で私を指す。
「それとも、ここは青春グラフィティ的に殴り合って仲直りする？　それか私に、一方的に往復ビンタさせてくれたら、許してあげてもよろしくてよ、小夜子さん」
眼を細め拳で口元を隠しながら、オーホッホッホと高笑いを上げる、あまりにも嵌(はま)っていて、違和感がきわだつ絵馬お得意の似非お嬢様。
こんな技を出されたら私は、お嬢様に付き合うしかない。独りで怒っているのがバカらしくなってしまうもん。
「いや、そんなバイオレンスな仲直りしたくないって。誰の入れ知恵だよ、このどエスお嬢が」
「誰って、もちろん礼慈だけど」
そう言って絵馬の表情が緩んだ。ニヤニヤと意地悪な視線と三日月のようにつり上がった口元。加虐的な笑み。
私の第六感がタイミングを読まずに目覚めて、寒気がした。
「え、絵馬……オマエ……まさか、礼慈と、会った、昨日？」
愚問だと思い、違っていてくれと願いながら、呼吸をとめて聞いてみたら、絵馬は満面の笑みを浮かべて頷いた。
もう、感動して泣きたくなるほど慈悲に充ち満ちた笑顔が、無慈悲なトドメを刺した。

「昨日っていうかさっき。今朝来てたのよ。まぁ、私にじゃくて、神社に参拝しにきたって感じかな。なんか思い詰めた雰囲気でさ、落ち込むって分かってて来たからしょうがないけど、今にも樹海に入って首吊りそうだったから捕まえて色々話したてね、聞いたわ。……全部ね」
そこで絵馬は軽薄そうな口を閉じて、
「小夜子のために、一発ぐらい蹴り飛ばしてやった方が良かったかしら」
そう囁くように優しく言って、これまた優しい微笑みを浮かべた。
彼女は時々、とても優しく微笑む。だから実は根は良い奴なんじゃないかなって思えてしまう。
力なく項垂(うなだ)れる。
その私を、上品に笑って、絵馬は部屋を物色するように眺めた。
「あ、あれ新作？　へぇ、あれがゴシックロリータってやつか、なんか怖いわね」
作りかけのコスを指して言っているらしいけど、私はまだ立ち直れずにいるから、絵馬の様子を見ることができなかった。
「私思うんだけどさ、白とか黒って狂気を孕(はら)んでると思わない？　白一色や黒一色だと、なんだか囚われてるっていうか、憑かれてるっていうのかな、怨念が感じるのよ。それこそ病的で、気が狂いそうなほど凄まじいほどにね。ほら、真っ暗闇って怖いじゃない？　それに世界が白一色になったらきっと狂って壊れちゃうわよね、きっと。そう思うと、ずっと暗闇の世界でマトモなまま生きるって……、すごく悲しいわよね」

思い浸るように独白を詠う絵馬。
ちらりと見たその顔は、何かを愛おしげに想う女の子の顔だった。
けど、それは錯覚だったように、絵馬はその後ひたすら実りのない無駄話をマシンガンの如く集中豪雨の如く浴びせつづけて、ちょうど今川焼きとペットボトルが空になった頃、やっと立ち上がった。
「そろそろお暇するわ。人とあう約束すっぽかしちゃってるし」
えへ、と舌を出して可愛らしさを現して、まったく悪びれた風もなくそう言った。私はその約束をすっぽかされた人にほんの少しの同情をしつつ、絵馬と約束するのが悪いと思った。
玄関を出て、そこで見送りするつもりだった。だけど玄関から顔を出すと、エレベータへ向かって歩いてくる女の子が目に入った。もはや条件反射のように、私はそのまま絵馬と一緒にエレベータへ向かった。
「お姉ちゃん。ボタン押してくださる」
澄ました笑顔で見知った女の子が言う。隣にいる似非お嬢様の絵馬よりも違和感もなく可愛い。
「きゃぁぁ、かわいい。なになにこの子、小夜子の妹？」
「違うっつーの。この子は近所の子。っね」
女の子は笑顔の見本のように笑った。
エレベータで一階に下りるまで、絵馬はすっかりこの女の子が気に入ったようで始終、お持ち帰りしたいな、とか危ない事を呟きながらじゃれていた。
それに対して上品に対応した女の子の方が、ずっと大人だ。賢い。
一階ロビーに到着すると女の子はお礼に告げて颯爽と駆けていった。遅れてエレベータから下りた私たちは、正面ロビーへと向かう。
「あ、そういえば。今日ここに来るとき意外な人見たわ」
唐突に絵馬は思い出したように言い出した。
「小夜子知ってるかな、一年上の明神先輩」
「え――？」
まさか。その名前を絵馬の口から聞くとは夢にも思っていなかったから、その驚きで歩みが一歩分止まった。けど次の瞬間には、どうしてその名前を聞いて、私はこんなに動揺してしまったんだろうという疑問が浮かんだ事が驚きだった。
「う、うん。もちろん知ってるよ。だってほら……我が校の四天王の一人だろ」
「ああ、そうだったわね。ま、四天王のうち一人は希代のナルシストバカだけどさ。っけ」
絵馬が露骨に嫌そうな顔で吐き捨てた。
「明神先輩。私がちょうどマンションに入ったときにさ、入れ違いですれ違ったのよ。もしかして、先輩ってここに住んでるとか。小夜子知ってる？」
「え、あ、いや、違うんじゃないかな……」
咄嗟に戸惑いながら私はそう返した。

今、私たちが立っているロビーに明神先輩が居る、という想像が頭の中に浮かんで一瞬で霧散するほど現実味のない話だった。
まるで幽霊話と同じレベルだ。
明神先輩がもしこのマンションに住んでいるなら、今まで顔を合わす機会は沢山あったはずだ。もしかしたら他の棟かもしれないけど、少なくともこのマンションには住んではいないはず。
「ふぅん、そっか。だったら見間違いかな私服だったし、お父さんと一緒だったみたいだし。……でも父親にしては若いか。それにスーツだったな、まさかカレシか。なんか待ち合わせっぽかったな。逢い引きか。あ。ねぇ、ところでさ。明神先輩と神籬って付き合ってるの？　なんか知らないの、マネージャでしょ」
「それは違うみたい。神籬が前に弓道部にいてすぐに止めたらしくて、その腕前が惜しくて、戻るように説得してるんだって、礼慈が言ってた」
「へぇ、そうなんだ」
もとからあまり関心がなかったように、絵馬はそう流すように頷いた。
そしてそのまま黙って玄関の自動ドアが開くのを待った。
「あれ？　でも……」
顔だけ振り返った。
硝子のドアがスライドして開かれる。
暖かい空気が、抜けて押し押せる。
そして絵馬越しに、
「弓やってたの、礼慈のほうよ」
その頭痛を伴う言葉越しに、
私の眼は、
陽射しの下を横切る男――榊あやめの父親――榊宗一郎――ストーカーの姿を捉えていた。
悪寒が、全身を蝕む。

◇

自宅に戻ると、玄関の郵便受けにA4サイズの白い封筒が入っているのに気づいた。郵便物は一階の郵便受けにあるし、玄関のポストだってただの飾り。だからいつもは気にもしないその穴に、それが入っているのが不思議だった。そして、その封筒にはただ『一之宮小夜子様』とだけしか書かれていなかった。
差出人の名前はない。裏は白紙。
それを見て、脳裏にストーカーの姿が過ぎった。
封筒を持って部屋に戻り、破るように封を切った。
中身をふるい落とす。
パラパラと数枚の紙が床に落ちた。

拾い上げてまとめて、一枚見てみると、パソコンで書かれてプリントアウトされたようにな、まるで事務書類めいたものだった。番号が振られている。その順番に並べ直して読んだ。

最初の一行を読んで、送り主が分かった。

レイヴェンだ。

ざっと読み流してみると、書いてある内容は先日教えて貰った呪術の方法が詳しく書かれていたもので、最後の一枚には注意書きが書かれていたが、それは大した内容ではなく、要約すれば、誰にも見られるな、という事だ。

すでに昨夜、教えて貰った『丑の刻参り』を行っている。だから今更、詳しい作法と言われても手遅れの感がしたが、参考程度に覚えておくことにした。

「人を呪う方法を親切に教えてくれるってのは、優しいんだか怖いんだかな……」

不吉な予感が去った安堵に。そんな独り言が出た。

その直後。

「あれ……？」

骨の髄まから、

「なんで、一之宮小夜子を知ってるの――――？」

骨が軋むような寒気を感じた。

知っているはずがない。

私の本当の名前をどうして知っているの？

知っているはずがない。

私の住所をどうして知っているの？

知っているはずがない。

私は、レイヴェンには『一夜』なんだから。

だから、知っているはずがない、分かるわけがない。

私は一言も、私を教えていないんだから。

親切な贈り物が、急に、汚らわしい物に変わった。

投げ捨て、後退り。後ろの机にぶつかり、その衝撃でスリープモードだったパソコンが起動した。

痒い。

紙を持っていた手が痒い。

不意に視線を感じた。

不明の視線を感じた。

姿が見えない。

だけど、誰かに見られている視線が、痛いほど感じる。

見渡す。

見慣れた部屋。私の部屋だ。私しか居ない。

さっきまでの絵馬が居た。楽しい空気が残留している。

それが不穏な雰囲気に呑まれていく。

息が、呼吸を止めて視線を探る。

二秒。誰もいない。居るはずがない。
静寂。無音。耳鳴り。
自分の心臓の鼓動が、やけにうるさい。
裏腹に、頭はすごく冷静だ。
冷静に、何かを探している。
姿がみえない、何かを。
静寂。無音。外の音が届くほど静まった。
突然、パソコンが鳴った。新着メール受信を知らせる音。
三秒。画面を凝視してマウスを動かした。
メールを開く。
レイヴェンから。
『手紙届きましたか。
注意書きを一つ書き忘れていたので、メールさせていただきました。』
窓硝子が鳴る。
カン、カンと釘を打ち鳴らすように。
そして、聞こえてきた。
『一度呪ったら、後戻りできません。
もしやめたら、呪いが返ってきますよ。』
ヒューヒュー、と何かが鳴いていた。

◇

夜を待って、日付が変わった頃に家を出た。
昨日と同じように音を立てずに忍び出る。
昨夜に比べたら、緊張はしなかった。
ただ、不安がつきまとっていた。
それを拭いきることが出来ないまま、
私はまた、丑三つ時の深山へやってきた。
「はぁ……はぁ、はぁ……」
夢中にペダルを漕いだ身体が酸素を求めている。
好きなだけ乱れて、好きなだけ清らかな空気を吸わせて、
欲しいだけ与えて、与えて、遊ばせて、
満足する寸前で、押し殺す。
「はぁ、っぅう……。はぁはぁ」
参道を早足で抜けて、石段を意地を張るように駆け上がったら、喉が
乾いて痛くて、境内にある屋根がついた水道で喉を潤した。
そして呼吸を整えながら目を瞑って、心を静める。
静かだ。まるで嘘のように静かだ。
鳥居を抜けただけで、この場所は明らかに外界とは異なった場所になっ
ている。

私達が住んでいる場所は沢山の人達が集まって、生活の様々な匂いや音、賑やかに、それこそまさに祭りの賑やかさを彩られ、その中で暮らしている。けど、ここは胸が張り裂けそうになるほど、不安になって悲しくなってしまうほど静かだった。

祭りの後の静けさ、とでもいうのだろうか。

何もかもが終わってしまったような。日々の暮らしの中では忘れてしまっている、実感することを避けている『死』を無性に連想させる静けさを、この神社は宿している。

本能が、ここに居る事を嫌悪している。

でも、死を連想させる場所なら、呪うには打って付けではないか。

だって、呪い殺したい人がいるんだもん。

潤った唇を舌で拭う。

闇に慣れた眼で、樹海を見つめる。

行こう。

迷いなんてなかった。

――後戻りはできません。

後戻りするつもりなんて、初めから無かった。

――もし、止めたら、

そんな仮定の話は、無意味だ。

私は止めない。

どんな事があって。

止めたりしない。

必ず、果たしてみせる。

決めたんだ。

呪うと決めたんだ。

だから、私は呪う。

呪ってやる。

呪い殺してやる。

「は、はは……」

社を抜け森に入り、木々と竹林を潜り、老木に磔にされた藁人形の前に立つと、笑みがこぼれた。

綻ぶ唇に朱を塗る。

純白の衣に身を包む。

白銀の鏡を胸に。手クシを飾り、蝋燭の灯火で結界を作る。

まだ傷ついていない藁人形を片手に。もう一方には頭のない釘と金槌。

朽ちかけた老木に人形を磔にして、一本一本、呪いを込めて金槌で釘を打ち込む。

カン――死んでしまえ、と釘を打つ。

カン――死んでしまえ、と打ち鳴らす。

カン、カン、カン、カン、カン、カン、カン。

釘を打つ。

鳴らす。

反芻(はんすう)するように呪いを唱えて、打ち込む。
「死ね。……死ね。……死ね。……死んでしまえ！」
カンと打ち鳴らす。
響く音に、呪いを乗せる。
カンと呪いは樹海に響き渡る。
響く。
「死ね！」
響き渡る。
「死ね！」
響く。
「死ね！」
響け。
吐き気がするほど清らかな空気。
自分の醜さに嫌気がする。
吐き気がする。
――アンビラケンウンソワカ
――ナムウオウショウジュウ
――ニショウコンゴン
真言を唱える。呪文を唱える。恨みを唱える。
それでも、それも私だ。どうすることも出来ない。
認めたくなくても、どんなに否定の言葉を重ねたって。

どうしたって、私は私だ。
私は私のために呪う。
「死んでしまえ！」
呪いを吐き続けて、
釘を打ち鳴らす。
――アンビラケンウンソワカ
――ナムウオウショウジュウ
――ニショウコンゴン
この樹海に響き渡らす。
呪いよ届けと、槌を鳴らす。
「ちくしょう！」
腕が千切れるほど振り上げ、
渾身(こんしん)の力で持って、打ち下ろす。
響く。
カン――ン。
淀みのない残響が波紋を描くように、
それは糸を張り巡らすように細く、
美しい呪いの音が、
美しく咲ひらかれらる
――はずが、
「それはいけない。木が可哀想だよ」

静謐（せいひつ）な幼い声に、両断された。

「――――――ッ！」

驚きは、声よりなによりも全身を襲った急激な冷気だった。空気が氷結されたような、氷水に放り投げられたような寒気が襲う。

背後から。

気絶しそうなほどの驚きに、振り上げた槌（つち）を落とした。

それを拾う余裕なんてない。

振り返り、暗闇を見渡しす。

誰も、何も、ただ闇にとけ込んだ木々だけ。

「だ、……誰？　……誰、か……いる、の？」

声を絞りだす都度に、心臓が怯えるように震える。

周囲の木々。空間を埋め尽くす夜闇。さっきまでそれらは、ただ私の周囲にあるだけだったものが、今は、まるで私を包囲して焦らしながら詰め寄っているように感じる。

息を呑（の）む。

音がした。

上空から。

雲が動く音がして、幽（かす）かな月光が闇を削る。

それは一瞬のこと。

「ダメだよ。そんな事をしても、君の呪術は成功しない」

幼くも厳しい言霊が、蒼い光りと共に降ってきた。

見上げる。

その時、黒い雲が月光を遮り、声さえも隠してしまった。

「誰！」私の叫びだけが、独り響く。

姿が見えない。

そして、どこか深いところから風が迷い込んで、

足下の蝋燭の灯火を連れ去った。

一切、闇。

「誰！　……いるなら……出てこい！」

加速する心臓の鼓動。不安が増殖してくる。

それらを誤魔化そうと声を荒げあげる。

惨（みじ）めな叫び声が、見窄（みすぼ）らしく消沈する。

そして、それを待っていたように、

「白衣。下駄。胸には鏡とくし。……へぇ、蝋燭は結界か、それとも見立てかな……。老木に藁人形、そして釘。しかも頭がないね。随分と、凝ってるなぁ」

幼い声が聞こえた。

背後だ。

振り返る。

大きな老木が立っているだけで、人影なんて無い。

でも、確かにそこに誰かがいた。

いや、居る。

寒気が収まらない。冷気が漂う。
「誰？」
抑えた声で問いかけても、声は返ってこない。
不安が凝結して嫌な汗と一緒に肌に張り付く。
周囲を警戒しながら落ちた金槌を手にして、辺りを見渡した。
「丑の刻参りだね」
落ち着いた声が、頭上から落ちてきた。
見上げる。
数多の木々の無数の枝と葉の天蓋が空を覆う。
誰もいない。
「しかも、多分に我流まじりのようだね」
誰もいないはずの空から、声だけがこぼれ落ちる。
心臓が今にも窒息死してしまいそうだ。
「どこ、に――――」
いるの、と口にする前に、
「君の呪術は、誰にも届かないよ。無意味な儀式だ」
鈴を鳴らすような声で、私を断罪した。
「な――――――」
それは重厚な呪いの言葉だった。
「無意味……？」
頭が真っ白になった。

五秒。
「そんな、こと……」
絶対にない。
無意味だなんて事、ない。
絶対に、違う。
「誰だ！」
間違っていない。
私は間違っていない。
正しいんだ。
呪いは、無意味じゃない。
「どこにいる！　出てこい！」
絶対に成功する。
絶対に叶う。
絶対に届く。
「隠れてないで、姿を見せろ！」
私は何一つ間違えてなんかない。
間違えてない。間違えてない。
だから、
「私は、何も間違ってないんだ！」
呪いは必ず届く。
呪われて、死んだ。

絶対に……絶対に呪われるんだ。
「私の呪いは――――」
呼吸を止めた一秒。
世界が闇に同化して静粛。
その静寂を、
「――絶対に叶うんだ！」
空気が漏れる壊れた管楽器のように喉が鳴る。
ひゅーひゅー、と息が鳴る。
周囲の静寂に取り残されて、私だけが乱れている。
滑稽なほど、醜いほど乱れていた。
胸が焦げるほど熱くなる。
燃えそうだ。骨が溶けてしまいそうな熱が生まれた。
「絶対に、間違ってない。……間違って、ないんだ」
残り火のような声で繰り返し唱える。
それは風となって私の中の火を焚きつける。
「そうだ……私、何も間違ったこと、してないじゃん」
は。
「この呪いだって、私が悪い訳じゃないんだよ」
は、はは。
「私は何も悪くないし、何一つ間違ってない。全部、正しいんだ」
は、はは

はは
あははははは。
「呪いだって絶対に成功する。間違ってない。あいつは絶対――――」
五寸釘を握りしめ、藁人形に刺す。
金槌を振り上げる。
これで呪う。
これが呪いだ。
これで正しい。
これで呪える。
これで呪うんだ。
これで――。
「死ぬんだ――――――――ッ！」
振り下ろす金槌。
釘は深々と突き刺さり、
金鳴りは呪いを届ける。
金槌を振り落とす。
寸前、
「――呪われますよ」
耳元で、怖ろしい声がした。

「え――――――？」
呆気に声を漏らし、振り返ると、
蒼い瞳が私を射抜いた。
「ぁ――――――」
白衣。黒髪。蒼い瞳。――子供。
子供が悲しそうな顔をして、睨んでる。
眼が合った。
その瞬間、死んだと思った。
視界が急激に朧になる。
急激に体温が失われる。
ただ、冷たかった。
ただ、怖かった。
一瞬。瞬きをする暇もなく、
身体と意識を繋ぐ糸が八つ裂きにされ、
暗く閉ざされていく。
傾く。
身体から何かが抜けていく。
傾く視線。気づいたら夜空しか見えない。
傾く身体。地面にとけ込んでいく脱力感。
遠のく意識。不思議と何の疑問もなく、死ぬんだと分かった。
霞む。世界が朧になって行く中。

白く幽かな影が夜空を遮り、
明星より美しい蒼い眼で、私を見下ろしていた。
そして私の意識が絶える寸前、
哀れむように何かを言った。
「人を呪わば穴二つ掘れ。呪いは――――――」

６／九月二十日（月）

目を覚ますと、そこは鳥の森の中だった。

まるでフルマラソンをしたように身体は重く、気怠さと虚脱感に包まれていた。身なりをみれば白衣を羽織りったまま、どうやら気絶したまま朝を迎えたようだと、ぼんやりと理解できた。

どこか怪我をしているわけでもなければ、何かが無くなっている訳でもなかった。地面には灯火が消えた蝋燭、老木には釘で磔（はりつけ）にされたままの藁人形。ただ闇はなく、木々の葉や枝に遮られながらも、どこまでも照らそうとする健気な朝陽が差し込む。その違いしかなかった。

まるで、夢だ。

なにが、夢？

服を見れば、ここで丑の刻参りをしたのは確かだ。

でも、その後の事――――思い出そうとして、記憶が霞む。

「なんだったの……」

そんな一言から、私の一日が始まった。

立ち上がる。たったそれだけのことなのに、歯痒（はがゆ）いほど身体が思い通りに動かない。現実味のない。まるで他人の身体のよう。

白衣を脱ぐ。この森に来たときの服装に戻る。

一つ一つの行動。身体を動かす度に、摩擦によって不快な焦げ臭さがただよう気がした。

森から出る。少しひんやりとした空気に包まれた境内は、まるで世界中から、私以外の人間が消えてしまったような錯覚を感じるほど静かで、穏やかだった。

錆びた足を引きずるように、まず水汲み場へ向かった。ただ水を飲むだけなのに、高級そうな石柱に屋根までついたなんとも大げさな物だ。

どれだけ喉（のど）が乾いていたのか。私は蛇口から出る水を両手で掬（すく）いながら、するように息が苦しくなるまで飲み続けた。

息継ぎして、もう一度。

顔を付けるようにして冷たい水を飲む。

「なにやってんの、朝っぱらから」

突然背後から声をかけられ、驚きで溺れかけた。

咽（む）せた。這（は）い上がった水が鼻孔を痛める。

咳き込みながら、振り返る。

「え、絵馬……？」

まだ見る前から分かった。私が知る限り、フレンドリーに人を小馬鹿にしたような事を朝っぱらから言う女は、奥津城絵馬しかいない。事実、見れば目の前に制服姿の絵馬が仁王立ちしていた。

寝癖でアンテナのように逆立ったアホ毛、それでも朝陽を浴びて濡れたように艶（つや）やかな黒髪、対照的な黒を基調とした見慣れた制服が新鮮に見える。そしてトレードマークのように、黒タイツを隠すようなウエスタンブーツで大地を踏みつけ佇む。

なんというか、ここまで仁王立ちが似合う女子高生というのも、いかがなものか。
「何してるの？」
絵馬は怪訝な表情でそう言うと、その視線で私を見回して、哀れむ表情を浮かべた。
「小夜子……、水くさいじゃない」
「はぁ？　……」
「家出して泊まるところがないからって、うら若き女子高生が人気のない神社に野宿するなんて……。一言言ってくれたら喜んで歓迎してあげたのに」
思いっきり捨てられた子犬を見るような目で視られてしまった。
「ち、違うって。家出でも野宿でもないって」
絵馬に同情されるなんてプライドが傷つく。だから否定してみたものの、野宿というのは間違ってはいなかった。
「だったらなんで朝から、うちの神社にいるの？　見れば、一緒に学校行こうって格好でもないし」
「そ、それは……」
追求されて上手い言葉が浮かばない。
「もしかして、朝の参拝？　あんたに信仰心なんてあったの？」
「そう……そうなんだよ、参拝だよ朝のジョギング兼ねてね。ははは、なんかさ、急に神社仏閣に興味がでてさ……あは、はは」
口から出任せもいいところだ。我ながら、自分の臨機応変のなさと嘘のつけない清廉潔白な性格を一瞬恨んだ。
「ふぅーん。殊勝じゃない」
だが絵馬は口を尖らせながらも納得したようだ。
「それはいいとして。どうするの学校？　もしかしてその鞄の中に制服とか用意してあるとか？　だったら一緒に行く？」
言われて、私はある事を失念していたことに気づいた。
絵馬が起きている、事だ。
「絵馬、今何時？　あんたが起きてるってことは、遅刻ギリギリ？」
内心、もうお昼近いのではないかとさえ思った。
「む、なによ人を遅刻常習犯みたいに。まだ七時前。今から格ゲーできるぐらい余裕があるわよ」
ほっと胸をなで下ろしす情報だが、同時に信じられない事でもあった。、確かに、絵馬は遅刻常習犯ではないが、寝起きが犯罪的に悪い女、として有名なんだ。
その女がすっきりと眼をさましているのだから、一日の半分が終わっていると思うのは当然だろ。
「なんで、そんな早起きなんだよ。そっちこそ怖いことするなよ」
「失礼ね。私は餌をやりにきたのよ」
そういって絵馬は食パンが詰まったビニル袋を挙げた。
「餌って、ペット？　絵馬ってなんか飼ってるの？」

「まぁペットというか、飼ってるようで飼ってないような。野良犬みたいなもんかな。いや、猫かな、どっちかといえば」
若干表情を曇らせながらそう言って、絵馬はくるりと背を向けた。
「という訳で私は用があるから。小夜子も早く帰った方が良いわよ。遅刻するから」
「あ、いや、私は……今日は休むわ」
そう口にすると、忘れかけていた虚脱感が蘇ってきた。まるで筋肉痛のように立っているだけで軽い痛みがする。
「ズル休み？」
円らな瞳で首を傾げながら振り返った絵馬の姿が、見た目よりずっと幼く見えた。悪戯好きな悪ガキみたい。
「違う。身体がダルイから、帰って安静にするんだよ」
「なれない事するからよ。陸上部だからって小夜子はマネージャーなんだから。あの超人馬鹿ズの真似する必要ないわよい」
絵馬が呆れた風に言う超人馬鹿とは、考えるまでなく礼慈と神籬なんだろうな。思い出したら、気分まで悪くなってきた。
「ちょっと大丈夫？　家に帰れる？　なんだったら車呼ぶよ。パトカーでよければ」
「それは嫌。それにこんな事でいちいち警察呼ぶのはダメだって……」
「いいのよ。警察は市民のために有るんだから、ちゃんと給料分の働きさせないと、あの女には」
「いや、マジ遠慮する。……それに自転車で来てるから。家まで帰るまでは大丈夫だって、帰ったら速攻で寝るから」
「そう？　……小夜子がそう言うなら」
「うん。心遣い感謝。あんがと、じゃあね」
言って私は鞄を持って境内を後にしようとした。
絵馬も、じゃあね、と言って竹林の方へ向かっていこうとしていた。
このまま帰ろう。だけど石段まで来て私は振り返り、絵馬を呼び止めて一言だけ最後に言い残した。
「絵馬。神あやめには気をつけなさい。騙されちゃダメよ」
絵馬の反応を見る前に、私は鳥の森を後にした。

◇

マンションに到着して、最初に声をかけてくれたのは家族ではなく、近所の見知った女の子だった。

「お姉ちゃん。大丈夫？」

亀の速さで進む自転車のように、ぐらぐらと倒れそうになりながらも、マンションまで辿り着いたものの、肉体の疲労は意識までも朦朧とさせるほどまで浸食していた。

呼吸を止めて根性で自室まで駆け込んでベッドに倒れ込むという魅力的な願望が頭の中でなんども再生されたけど、私の根性は柳のようにしなやかだった。

自転車を不法投棄するように駐輪所に停めて、裏口から伸びる花壇のベンチの誘惑に負けて、レンガの上に腰を下ろした。

項垂れ、足下をじっと見つめた。それは一瞬だったのかそれとも数十分か分からないほど、身体は眠りかけていた。

だから声をかけられるまで、その女の子の接近に気づかなかった。

「お姉ちゃん。……寝てるの？　大丈夫？」

中々顔を上げないから、女の子の声はどこか不安そうに小さくなっていた。

「う、うん、大丈夫、大丈夫」

笑顔を作りながら顔を上げると、やっと女の子は笑ってくれた。

見れば、女の子は赤いランドセルを背負っている。もしかしたら学校に行く途中だったのかもしれない。そう訊いてみると、女の子は首を横にふった。そして同じ質問を返されてしまった。気まずい質問の受け流し方を心得ている賢い子だ。

私は、適当に曖昧に大人の誤魔化し方で、質問を受け流す。あまり賢くない子だな、私は。

女の子は、ふぅーんと頷いて、円らな瞳で私を見つめる。無言で、綺麗な水で潤った無垢な眼で見つめるものだから、息が詰まってしまう。

まるで私の汚い部分を掘り返して、並べられているような気分がする。

「お姉ちゃん。……お家が嫌いなの？」

女の子は躊躇うように、悲しそうな声で訊いた。表情は本当に悲しそうで、その円らな瞳から涙がこぼれてしまうのではないかと思えた。

「ううん。そんなことないよ。……どうして？」

私は、だから努めて笑顔で返した。

「だってお姉ちゃん……イエデしてるんでしょ？」

女の子は表情を変えずに訊いた。

その言葉の意味をしっているのか分からない、言い慣れていない口調に、私は一瞬戸惑い、一瞬思考に空白が生まれた。

「……家出って。…そんなことしないよ。家を出なくても、独りぼっちなんだから」

わざとらしい笑い声を交えて答えてみると、女の子の表情は悲しみから驚きに一瞬変わった。

「どうしてひとりなの？　パパとママいないの？」
「いるよ、パパもママも。でもね、顔合わさないんだよね」
「どうして？　パパとママ……嫌い、なの？」
「ううん。そんなことないよ」
自分の口調が段々と、教育テレビの歌のお姉さんのようにハキハキとゆっくりとしたものに成ってきた。
「でも……お姉ちゃん、さびしくない？」
そう訊いた時、女の子の表情は悲しそうで、私が笑顔でいるのが不思議に思っている風でもある、複雑な顔をしていた。
私の家庭事情の話をすると、どうしてか誰も彼も、寂しくないの？とか訊いては、勘違いな同情や哀れみを浮かべる。
その度に私は言う。もしかして寂しいのが嫌い？　と。
同じ家に住んでのにバラバラの生活している家族は不幸？
毎日顔を合わせない親子は不幸？
一家団欒がない家族はみんな不幸？
親子は会話しなくちゃいけないの？
家族は団欒しなくちゃいけないの？
家族は足並み揃えてみんな同じリズムで生活しないと不幸なの？
家族のために自分の幸せを諦(あきら)めるのが当然なの？
そんなことが、家族にとって大事？
その質問に答えてくれる人はいなかった。そんな事すら考えずに、ただ当たり前のように家族が大切だと思いこんでいる人達だけが、寂しさを嫌っているのだから。
でもね、みんながみんな、同じ家族じゃないんだから、同じ人間じゃないんだから、一つの家族の形だけじゃくくれない家族だってある。
だから私は、悲しそうな顔をしている女の子に教えてあげた。
「お姉ちゃんね、パパもママも大好きだよ」
他の人から見れば寂しい家族で、不幸かもしれないけど、
私はこの家族が好きだし、不幸だなんて思わない。
それって、いけない？
「ねぇ、君は、自分の家族みんな好き？」
私は尋ねた。すると女の子は頷いてやっと笑ってくれた。
「うん。良い子だね」
女の子を頭を撫でて、私は立ち上がった。
なんだか元気が出てきた。ほんの少し、ほんの少しだけだけど、家に帰ろうと思って、歩き出せる力を貰った気がした。
そして、女の子はランドセルを背負って学校へ、私は反対側の入り口へ向かって歩き出そうとして、私は気まぐれで振り返り、女の子を呼び止めた。
「ねぇ！　名前、教えてちょうだい」

ふと急に、この可愛らしい隣人の名前が知りたくなった。いままでだって知る機会はあったし、知らなくたって別に困ることはないだろうし、知る必要なんて本当はない。だからこれはきっと、私の気まぐれなんだ。

「レナ！」

女の子は元気の良い大きな声で、自分の名前を嬉しそうに私に教えてくれた。

「お姉ちゃんのお名前は？」

「小夜子よ。さ、よ、こ」

私はレナちゃんのように大きな声を出すことが出来なかった。

それはただ単に疲れているからでもなくて、ただ恥ずかしかったからだ。だから張りのない声でしか言えなかった。でも女の子は、

「ばいばい、小夜子お姉ちゃん！」

元気一杯に手を振って私を呼んでくれた。

そして走り出した。

私も負けじと、エレベータホールまで走った。

そしたら後は、ベッドまであと少しだ。

◇

呼び鈴のメロディで目が覚めた。

怠惰を貪るように甘ったるい夢に浸かっていた頭は、カーテンの隙間から入り込む飴色の夕日を浴びて、夢と現実の区別が付かないまま覚醒した。

呼び鈴が鳴る。

枕元のメガネをかけて、時計を見ると五時を指していて、数秒、早朝の五時か夕方が判断つかなかった。

眠り続けてざっと九時間近くになるな、と準備程度に頭を動かして、緩慢な動作でベッドから抜け出し、玄関までお化けのようにふらふらと向かう。小さなレンズ。のぞき穴から魚の目の外を見ると、枯れ木のようなシルエットが見えた。

どちら様、と乾いた口で鍵を開け、チェーンをつけたまま扉を少し開けると、二秒沈黙を置いて応答してきた。

「一之宮か。神籬だ」

隙間からでも入ってこれそうなほど、細身の男が顔を覗かせた。

三秒思考がフリーズ。寝起きの頭の許容量を超える予想外の来客。

「……元気そうだな。今日休んだから心配したぞ」

観察するような眼をして、前屈みになった姿勢を直しながら神籬が言う。その間に私の思考も再起動。
「神籬？　なんで？」
「なんでって。そうだな、お見舞いだ」
「だからって、あれ、どうやって入ってきたの？　うちのマンション、オートロックなんですけど」
「裏口の非常階段から、奥津城に教えて貰った。このマンションのオートロックて意味無いな」
それは不法侵入だ、と返したが、神籬は悪びれることはなく、だったら奥津城も同罪だ、と言ってのけた。
「ところでさ。中に入れてくれないか？」
「はぁ？　なんで」
こっちはか弱き乙女なんだぞ。しかも今、家には私しか居ない状況で、超人男子を家の中に招くほど、私はおまえを信用していない。むしろ、警戒している。だから、断る、と一言言おうとした。
その前に、
「早く入れてくれ。ずっと後つけられてる。オマエのストーカーに」
神籬は真面目な顔をして私の口を制した。
その言葉を訊いた瞬間、神籬の背後にストーカーがいる、そんな幻視をしてしまった。寒気がする。条件反射のようにドアの隙間から廊下の左右を見た。
「安心しろ、中まで入ってない」
今はな、と意味深に言う。
「話があるが、玄関で立ち話だと、あいつが近づいても話に集中して気づかないかもしれない。そうなったら……まず俺が危ない、次は、言わなくても分かるよな」
言われなくても、ストーカーが神籬の背後から近づいて、まず神籬を倒して、それからこの僅かな隙間から、チェーンを切って入って、中に居る私を……。
悪夢のような想像は実に容易で克明に浮かんだ。
私は少し考えるふりをして、神籬を中に入れた。それから私の部屋に通そうかと思ったけど、ドアノブに手をかけた所で止めた。
絵馬ならともかく、一般人の神籬に、私の趣味で埋め尽くされた部屋を見せるのは、自殺行為だ。そんな事をしたら今まで築き上げてきた『一之宮小夜子』像が発破解体の如くに木っ端微塵じゃないか。
当たり障りのない、いつも小綺麗にしてあるリビングへ案内した。
「わりと長い廊下だな」
神籬は私の後ろについてきながら、そんな感想を呟いた。
いつもカーテンが閉め切られているリビングは薄暗く、それでも眩しい夕日がわずかな隙間からでも入り込んでは、怪しげな影を作っていた。
蛍光灯を付けて、神籬をソファに座らせてから、私は冷蔵庫から飲み物を持って、神籬の向かいのソファに座った。

牛乳を一杯飲んで、そう言えば朝から水しか口にいれていなかった事に気づいて、一気に飲み干してから二杯目を口にした。向かいでは神籬、も、勝手に牛乳をコップに注いでゆっくりと飲んでいた。不作法なのかもしれないけど、楽な相手でもある。

「それで、話って？」

「その前に、一之宮。もしかしなくても寝起きか？」

「そ、そんなこと……なんで分かった？」

「見りゃ分かる。寝癖、閉じかけた目、むくんだ顔、あとヨダレの跡。顔洗った方がいいぞ」

冷静に乙女の醜態を指摘して不敵に笑いやがった。

怒りが急加速で沸点に達しかけたが、私は顔を腕で隠しながら黙って洗面台へ駆け込んだ。

鏡をみると、本当にヨダレの跡がある。

乱暴かつ早急に洗面を済ませ、何食わぬ顔でリビングに帰還。

ソファに座ると、向かいで神籬が笑いを我慢していた。

「で、話ってなに？」威嚇めいた口調を意識して訊いた。

「ああ。まず、今日学校を休んだ理由が知りたい。詳しくはいい。ただ、まぁなんだ……ストーカー関係かどうか気になってさ」

ためらいがちだったけど、神籬の口調はハッキリとしていた。

「どうなんだ？」

「どうって、それは、違うけど。……今日は、ちょっと体調が悪かったから休んだだけで。……別に怪我とかそういうのじゃないから……」

比べて私の返答は、どうも歯切れが悪い。嘘をついているわけではないけど、隠している部分があるからだろう。

神籬はその隠している事を探るように、じっと細めた眼で、私を見つめる。そして険しい顔をして、

――いつまで、と。

重たい声を発した。

「いつまで、あいつを放置するつもりなんだ」

まるで私は罪深い罪人であると告げるおうに、神籬は厳しく言う。

「いつか言ったよな。あのストーカーを放置し続けていると、今日にでもオマエに被害が及ぶ、明日にも周囲に危害が及ぶかも知れない。だから、手を打てと。それなのに、オマエ、何もしてないんだな。今日、学校の校門でアイツを見て驚いたぞ。放置じゃないか。しかも、俺を尾行した辺り、おまえだけじゃなくて、おまえと接点がある奴のことまで嗅ぎ回ってる節がある。これがどういう事か分かるか？　危ないんだよ一之宮、おまえも、おまえの周りの人間も」叱責（しっせき）は静かに重い。

タカのような鋭い目は、一時も逸らさず私を射抜き、重たい声の一言一言が鎖になって私を身体を縛りつける。神籬の露骨なまでの敵意は、冷たく、肌が焼けるように熱い。

浴びせかけられる言葉に、反論があふれ出る。
「わ、私はちゃんと――――！」
だけど口に出せたのは一言だけ。それすら最後まで言えない。私の口を押さえつけるような威圧感を、目の前の男子が放っているせいだ。
「ちゃんと、なんなのさ」
「だから、私はちゃんと手を打ってる！」
「へぇ。なのにストーカーさんは、平然とストーキングを続けてるぜ。ほら、そこの窓から外を見下ろしてみろよ。きっといるはずさ」
私の叫びに、神籬は冷笑する。腹立たしいのに、だけど私は膝の上で両手を握りしめて睨みつけることでしか抵抗できなかった。
「何もしていなんだな。最悪だオマエ」
傷を抉るような残虐な声が響く。
返す言葉がでない。
そんな事ない、ちゃんと手は打ってる、もうすぐ……もうすぐアイツは死ぬんだ、と心の中で吠えることしか今は出来ない。
だって、それは言ってはいけない。
それは、決して知られてはいけない。
呪いは成就しないから。
「何か言いたそうだな。いいぜ、言えよ。反論ならいくらだったら聞いてやるからさ」
歯痒さを噛み殺して口を塞ぐ。
神籬から視線を逸らした。
神籬の顔を見ていたら我慢できずに叫びそうだった。見続けながら我慢してたら、怒りで気絶してしまいそうだったから。
「っふ。……思惑があるようだけどさ、それは一体いつになったら結果が見られるんだ？　何とかしないといけないってのは馬鹿じゃないんだから分かってると思うけどさ。それなりに考えてるんだろ。……でも、それが効果を発揮するのは、いつだ？　いつになったら、君のストーカーさんは消えるんだ」
まるで私が今やっている秘密を見透かした上で、まだ揶揄するような口調で、醒めた表情で神籬が訊く。
少し戸惑うように口籠もり、その間に私は昂ぶった感情を冷却させてから答えた。
「……一週間ぐらい。一週間以内には、あいつは消える。一週間続ければ、必ず……」
私が教えて貰った呪術は、丑の刻参り。それは午前一時から午前三時までの間に、神社の老木に相手の名前を書いた紙を挟んだ藁人形を頭無い四十九本の五寸釘打ち込む。それを一週間続ければ、呪った相手は、死ぬ。
ネットや怪しげな本に流布されているインチキや、新興宗教でアレンジされた偽物でもない。古来の、加工も装飾されていない正真正銘『オリジナルの呪い』の儀式なんだ。

その儀式の作法を、私は授かったている。
呪術を行う資質も、私は持っているのだ。
呪うための恨みも、私は孕んで育ってる。
必要なものは全て、私は備えているから。
一週間、儀式を続けた暁には、殺したいヤツは呪いで死ぬ。
「あと……五日。あと五日すれば、あいつは消えるんだよ。そしてら、……もう危ないことなんて、ないでしょ」
その五日後を想像するだけで、頬が緩む。
笑いの雫がロからこぼれ落ちる。
「そうだよ。……順調なんだ。何も支障なんてない、何も問題はないんだ！　アンタが口を挟むことなんて何もないんだ！　黙って見てりゃいんだよ！」
雫が滝のように勢い増す。冷めた感情が再び昂ぶる。歯痒さに閉ざされた口が開いて叫びを上げる。
面白いほど立場が逆転した。
今度は神籬が困惑する。可笑しいほど困った顔して固まってる。それは私の昂ぶりが熱を上げるほど、哀れに写った。
「ふふ……心配しなくても、あと少しで元通りなんだから。元通り……また退屈な日常に戻るんだよ。だからさ、神籬――――」
困惑に私から視線を逸らさないように、神籬を金縛りにするほど蛇のように睨み。
「あんたは――――、余計なことしないでちょうだい」
見捨てるように言い放った。
その時、神籬の表情はなぜだか嬉しそうに、密かに微笑べた。それはまるで新しい玩具を与えられた子供のように無邪気な笑み。
「そうか……。そこまで言うなら、俺からもう何も言わないし、何もしない。一之宮の好きにすればいいさ。そうさ、元々これは、オマエの話しで、主役はオマエなんだからさ。上手く立ち回れよ」
意味深な言葉を告げて立ち上がった。そして、そのまま帰るようで、廊下へ向かった。
長く薄暗い廊下に黒い学ランがとけ込む姿を見届けて、私は神籬の後を追ってソファから立ち上がった。私が追いついたのは、玄関でだった。神籬は手慣れた風に鍵とチェーンを外して、ゆっくりとドアを開けて外に出た。
礼儀というか、心配して見舞いに来てくれたのだからと、ロビーまで見送ろうと、私も外の廊下に出る。
「ねぇ。神籬って、こんなに世話焼きだっけ？」
「ん。それは何故？」
「いや、色々と気を遣ってくれてるみたいだけど、何でかなって思っただけ……なんで？」
「そうだな。オマエがスキだから、かな」
二秒。すべての運動が止まった。

「本気？」
「うそさ」
二秒。世界中のため息が聞こえた。
「心配してくれたお礼に忠告。神籬、そういう乙女心を弄ぶような言動してると、今に酷い目みるよ」
「酷い目なら昔いやほど見てるさ。でも、そうか、イゴキヲツケマス」
きっと三秒後には忘れるだろう。
案内するように私が先頭を歩き、エレベータホールまで来たところで、ちょうど向かいの廊下から一人の女の子が走ってきた。
まるで徒競走をするような勢いで走り寄って、小夜子お姉ちゃん、とにんまりと笑って見せたのは、レナという見知った女の子だった。
「こんばんは。お姉ちゃん、ボタン押してくださる？」
何度聞いても飽きない言葉に、私はすんなりと応える。
エレベータを待つ間、レナちゃんは黙って、だけど笑みを絶やすことなく上目遣いで、私を見ていた。
「一之宮。この子……」
私の背後から神籬がすっと横に出てきた。
その途端、女の子の表情が音を立てて壊れた。
それは悲鳴すら聞こえるほどだった。
絶えない笑みが、一瞬で凍り付いて青ざめた。
いきなり幽霊にでも出会ったように、女の子の顔は恐怖に染まる。

「あ、レナちゃん、こいつはね、おばけじゃないよ、怖くないよ」
見るに堪えかねて私が神籬の前にスライドして、赤ちゃんをあやすように、怖くないよと言い聞かせようとしたが、レナちゃんは脱兎の如く元来た廊下を走り帰った。
「あーあ。……神籬、あんたさ」
後ろに佇む、理科室の骸骨のような男を睨みつける。
「怖いんだよ。ほら、泣いて逃げていったよ。ただでさえ骸骨みたいなんだから、幽霊みたいにいきなり現れたら、そりゃ泣くよ」
「そうか？　……そうか。嫌われたものだな」
難しい顔で腕まで組んで、何度もそうかそうかと繰り返し呟いて、そのままエレベータの中に収まった。私は一瞬、そのエレベータが棺桶に思えた。
鉄の棺に入った神籬が、くるりと振り返り、
「一之宮」
真剣な顔をして、再び重たい声を響かせた。
「気をつけろよ。怖いのは、別にストーカーだけじゃないぞ」
不敵な笑みを浮かべた。
扉が閉まろうとする。
「それ、どういう意味？」
閉まる僅かな隙間に問いかける。
「知ってるはずさ。だから、気をつけろ――」

意味深な言葉だけを返して、扉は完全に閉ざされた。
そして、鈍く低い駆動音を響かせて鉄の箱が降下する。
私は、扉の横のディスプレイを見つめ、点滅して移動する数字が止まるまで、そこに夢を見るように佇んでいた。

◇

何の迷いもなく。
何のためらいもなく。
ただ自然と、
既に習慣と、
午前零時に蘇生するように目が覚めた。
そして一時間後には、樹海の入り口に立っている。
境内は相変わらず、清んだ空気に包まれ、息が詰まりそう。拷問のように静かで、自分の心臓の音が癪に障る。私にとっては、劣悪な環境だ。
早く、行こう。
社を迂回して裏の樹海に入り込む。道なき道も三度目となると道しるべ無しでも、迷うことなく辿り着くことができる。
散乱する木々、隙間を埋めるように密集する竹。それをすこし抜ければ、不自然に開いた窪地に出る。そして、隆起した場所には大きな老木。
バッグを地面において、中から必要な物を取り出す。まず着替えて、道具を手にもって、老木の前まで登る。
朽ちた表面に磔(はりつけ)にされた二体の藁人形。そこに新たにもう一体加える。
五寸釘を藁人形の胸に刺し、金槌で打ち付ける。
カン、と高く響く。
死ね、と深く恨む。
両肩、両脛(すね)、心臓。五カ所を打ち抜く。
恨み事の様々と共に、死ねと呪い杭を打つ。
――アンビラケンウンソワカ
――ナムウオウショウジュウ
――ニショウコンゴン
カン、と鳴り響く音さえ、呪いを奏でる。
迷い込んだ風も共に、葉を揺らして呪う。
響く響く。呪いが響く。
震え震え。ゆらゆらと震え。
穿(うが)て穿て。恨みよ貫け。
繰り返す呪いの言葉。震え続ける葉音の詠唱(えいしょう)。
深く暗い森は私の味方となって、共に、憎い相手を呪ってくれている。
だから、届くだろう。――いや、必ず届く。

カンと打ち続けて三十本目の杭。
人形の原型は無惨なほど無くなる。
止むことなく四十九の釘を打ち続ける。
呪いが届くまで、私は止めない。
私は、一降り一降りに呪いを込めて槌(つち)を振り下ろす。
それはまさに、鉄槌を下す如く。
必ずくだる。
だって私、間違ってないんだもの。
「だから――――それは間違いだらけなんだよ」
声。
幼い声が、響きと震えの呪音の隙間を射抜いて森に響いた。
あまりの鋭さに、身体が硬直した。
あまりの衝撃に、思考が一瞬停止。
あまりの既視感に、心臓が悲鳴を上げた。
息を呑む。一瞬で乱された呼吸を無理矢理にでも整えて、ゆっくりと周囲を見渡した。慎重に、小枝一本凝視する細やかさで。
「だれ――――――？」発した声は小さく震えていた。
暫く沈黙の間にも、風は木々の葉を悪戯に鳴らす。
「ねぇ、誰なの？」
声を発する度に、心臓の鼓動と呼吸が再び乱れる。
それでも平静を装い、恐怖心をねじ伏せる。

「出てきて……」
落ち着けと自分に言い聞かせる。
昨日のように取り乱したら、きっとまた繰り返しだ。
「何が間違ってるっていうの……？」
間違えなんかない。自信はある。
なのに、その声は私の心簡単に揺さぶる。
「教えて……何を知ってるの？」
姿が見えない相手に問いかける。
まるで悪魔に話しかけている気分だ。
声は未だ無い。あるのは森のざわめき。
まるで森が、一つの巨大な生き物のように呼吸をしているようだ。
「出てきて……姿、見せてよ……」
寒気がする。
声を出す度に、身体の熱を持って行かれるような寒気。
首筋に刀を突きつけられているような圧迫感と恐怖。
心臓が今にも張り裂けてしまいそう。
頭は冷静を保とうと必死になっている。
だけど、私の身体は――――命は限界だ。
「隠れてないで出てこい！」
行き過ぎた寒気が、叫びに変わる。
遠吠えは一瞬後に響きを止め、森に喰われた。

静寂が降り注ぎ、私を押しつぶそうとうする。
その間際に、それは静かに、
「静かに。――――妖しい鳥達に気づかれてしまう」
初めからそこに佇んでいたように、闇から生まれていた。
白い子供。
窪地の中心に悠然と佇む姿に、
呼吸も思考も何もかも忘れて魅入られた。
風に靡く黒髪、純白の着物とちらりと覗く同色の素肌。モノクロの陽炎。だけど帯だけは、怖ろしいほど鮮やかな朱色。
夜闇と樹海の影の中、幽鬼のように佇む。
それは異様な出で立ちだからとか、佇んでいるのが子供だからではなく、何重と巻かれ両目を隠している包帯が、そこにいる者の人の部分までも隠しているようだったからだ。
少年は、顔を少し上げて私の方を向いて、口元だけわずかに綻ばせて笑みを浮かべ、そして、ゆっくりと歩み寄ってくる。
地面を覆う落ち葉や小枝をまったく鳴らさず、静かに、まるで浮遊しているように近づいてくる。暗闇で足場の悪い森の中、両目を封じられているとは思えない優雅な足取り。
それは異様な光景だった。同時に、神秘的でさえあった。
何も出来ずに、私はそれを待っていた。
そして一瞬の出来事だったように、
現実味のない小柄な少年が私の目の前に現れ、
「はじめまして――――――シキです」
闇によく響く声で、そう言った。
呆然とする私に、少年は屈託のない笑みを浮かべる。
「これは丑の刻参りだよね。多分にアレンジが加わっているけど、骨子の部分は加工されてないみたいだもんね。すごいなぁ」
少年は、まるで物珍しいものを見るように私を中心に歩き回りだした。
地面に置かれた蝋燭に触れることもなく、
地面を踏み外すこともなく、
まるで目が見えているように、
いや、それ以上に暗闇を確かな足取りで歩いている。
そして、上半分以上影に呑み込まれている老木に手を添えて、すっと撫でるように、背伸びをして磔にされている藁人形に触れた。
「夜、午前一時から午前三時の間。白衣、胸に鏡をかけて一本下駄を履き、鉄輪を頭にかぶり、その三本の足に松や蝋燭などの火を灯し、右手に木槌、左手には人形の首を持ち、神社の年代を経た老木や神木に藁人形を釘で打ち付け、人を呪う。『平家物語』の『剣の巻』で語られる宇治の橋姫の時代には、今で言う丑の刻参りの作法は概ね出来ていたから、歴史は古い。そして時代を経て、民間にも浸透して、呪術の中でも割とポピュラーな儀式となっているようですね。それ故、時代や地方によって、様々なアレンジがなされていますが」

少年は、歳に似合わない厳かな口調で、饒舌に語り出した。
私に口を挟む余地を与えない。
少年の手が藁人形に刺さった釘を数えるように動く。
「藁人形に打ち付けられる釘に関してだけでも色々あります。
祈り釘という、呪詛用の角張った釘を鍛冶屋に作らせたり、呪う相手の年齢の数だけ五寸釘を打ったり。そして、貴女がやっている、頭のない釘を四十九本打ち込む呪法。浄瑠璃の義太夫節で知られる『俊徳丸』という物語に登場する呪法ですね。主人公の俊徳丸は河内の長者・信吉の跡取り息子だったが、五歳の時に継母が家に入り、乙若丸という子が生まれて、彼女は我が子に家督を継がせたいと考え、京都三条の鍛冶屋で『頭の咲がない釘四十九本』をこしらえさせ、同じく京都の絵師に、俊徳丸の絵姿を書かせ、それらを清水寺の柱に貼り付け、釘を打ち込んだ。そして最後の二本を俊徳丸の両目に打つと、俊徳丸は盲目となり家を追い出され乞食坊主となってしまったという話ですが。
この物語に出てくる『頭の先のない釘四十九本』は中国地方に伝承されているようです。
釘一つとっても、土地によって様々です。謂わば地方色、郷土色のようなもの。その地域特有の習慣や作法に近いのです。そして、その土地以外で、その土地の作法が行われるというのは希です。情報の共有が未発達意外にも理由があるのです。それはなぜだか分かりますか？」
饒舌な少年が振り向いて私を見た。
いや、隠された目は、だけど確かに私を捉えていた。
私はいまだに声が出せず、考えることも出来ずに首を振った。
「それはですね。呪術魔術の類は、時代と場所が重要だからですよ」
妖しげな笑みを浮かべた少年。
一瞬、目の前の子供は本当に生きているかさえ疑問に思った。
「呪術や魔術、儀式といったものは、時代や場所によってその力、有効性が左右されます。いくら形式や作法が正しく行われていても、時代と場所を間違えては、どんな呪術魔術も遊びになってしまうのですよ」
少年は子守歌を歌うように穏やかな口調で、けどその響きは刃のように鋭く、鐘楼のように響き渡り、私の深部まで届いてくる。
だから、少年が放った言葉が徐々に私の中で溶けてくる。
溶けてくる。凝固した口がゆっくりと開く。
「間違えてるの？　……違う……違う呪い方を使ってるから……ダメだっていうの」
恐る恐る口にした言葉は、少年のものとは違って籠もってしまった。
少年は、髪を乱さずに首を振って口を開いた。
「そうじゃないよ。方法が多少間違っていても成立する呪術もあります」
「だったら、場所が違うの？　時間が違うっていうの？　私はちゃんと書かれていたとおり神社を選んだし、それにこの神社は呪いをやるには最適だって――――――」

「そうだね、丑の刻参りは神社や寺院で行うものだから、間違えではないし、時間もちゃんと丑三つ時だから間違ってない。多くの文献に載っている通りの『丑の刻参り』だと思うよ」

少年は優しい口調で、心が倒れかけている私を支えてくれる。

けど、その口調は次には豹変した。

「だが――――だから、君の呪術儀式は遊びなんだ」

少年の声が、まるで地の底から叫ぶ鬼のように響く。

怖ろしい響きが森全体に共鳴する。

「君の術は間違っていない。だが呪術を勘違いしている」

容赦のない一言が貫く。

真っ向から、私を否定してきた。

私のこれまでも、これからも否定する。

いきなり現れ、訳の分からない講釈を展開した挙げ句に、この一言だ。

目眩がした。

「ふ、ふざけるな！」

あまりの怒りに頭がショートしかけた。

「おまえに何が分かるんだよ！　偉そうなこと言って、私がどんな思いで呪ってるかも分からないくせに！　知った風なことを言うな！　私は間違ってない！　見当外れなことを言ってるのはオマエの方だ！」

無我夢中で叫んでいた。

その叫びでさ、少年は動じはしなかった。

ほう、と余裕ありげな息をもらすだけ。

それがさらに頭に来た。

「随分と昔話をよく知ってるみたいだけど、所詮は子供の浅知恵なのよ。いい？　私がやっているのはアンタが言ったような昔話よりもずっと昔からある、純粋な呪術なのよ。神話の時代から伝わる儀式よ。真言っていう呪文を唱えて神様に訴えかけて呪いを成就する秘技なのよ。

……っふ。あんたみたいな子供が知ってる訳もないわね……だって、これは選ばれた人のみが出来る呪術なんだから」

嗤ってやった。

小賢しい子供の屁理屈を嗤ってやった。

揺らいでいたのはきっと錯覚。異様な出で立ちの少年に、ただ単に動揺しただけで、呪術への自信は少しも揺らいでない。絶対に成功する。

今までだって、成功したんだ。

私が呪ったものすべて、呪われた。

だから、失敗するはずがない。

こんなにも綿密で忠実に行っている術が、失敗するはずがない。

間違っているはずが、ないんだから。

相手を模った藁人形に、釘を打つ。

相手の名前に四十九本の釘を打つ。

老木に磔になっているのは人形ではなく、ヤツなんだ。

ヤツそのものに、釘を打ち付けているのと同じ。

それが無意味な訳がない。無駄じゃない。
だから遊びだなんて、決して言わせない。許せない。
「今までだって私の呪いは叶ったのよ。何度も呪って、叶ってる。こんな偶然、あるわけないでしょ」
偶然なんてない。
そうだ、誰かが言っていた。
「よく聞きなさい。この世には、必然しかないのよ」
それが世の真理だと、闇色の森に告げる。
私の声を世界に響かせろと告げた。
でも、
「――――いいえ」妖しい森は少年の声を選び、
「この世には、偶然しか起こらないのですよ」
その厳粛な言葉を、鐘楼のように響かせた。
間髪入れず私の声は圧殺される。
「ほら、空を見てご覧なさい。夜空に散らばる星は、それぞれが独立している。それを見て或る者が、夢想の線で星と星を結び、牡羊座あるいは牡牛座などと星座を思い描いた。それは個々に発生した事象を、後から理屈と夢想によって繋ぎ合わせて、必然という名を与え、妄信することと同じ。必然であるから様々な事象があるのではない。結果と過程を入れ替えて、現象の道理を秘匿する呪文、真理を追究する事を諦める呪い、それが必然なのです。すべての系には偶然性が内包されている」
少年の声が重みを増す。濃度を増す。
饒舌な語り部は、一層よく響く声を発しながら、
「君の呪い――――、解体してあげようか」
包帯に包まれた両目から鋭い視線を送り、私の口を封殺する。
息を呑むことさえ出来なかった。窒息しそうだ。
「君の呪術は神代の儀式だと言ったね。確かに『古事記』にも、呪いが用いられた記述はある。譬えば、天若日子は、高御産巣日神と天照大神から、葦原中津国の荒ぶる神たちを平定させよとの命を受け、地に下り立ったが、使命を忘れ地上生活になじみ、その上、天神が遣わした雉の鳴女を弓で射殺した。天の安河原に落ちた鳥を射った血塗りの矢を見て高木神は『この矢は天若日子に賜へりし矢ぞ』と告り『或し天若日子、命を誤たず、悪しき神を射つる矢の至りしならば、この矢、天若日子に中らざれ。或し邪き心有らば、天若日子この矢に麻賀礼』とみことのりて、矢を地上に突き返した。すると、矢は天若日子の胸を貫き、翌朝には、床で死んでいた、とあります。
高木神のみことのり全てが呪言です。特に『麻賀礼』というのが重要な呪言なのです。『麻賀礼』とは『禍れ』という意味であり『死んでしまえ』と呪っています。なるほど、神話の時代にも呪いはある。だが、神代の頃の儀式というけど、神様達は儀式はしない。そもそも儀式というのは、人が神様と接見するための作法にすぎない。仮に君が高木神を模倣し呪言によって相手を呪うというのなら、それはまた無駄な事だ」

無駄という一文を強調させ、白衣の少年の言葉は渦巻くように、私を取り囲もうと響き流れる。

「そして、君は真言を唱えるとも言っていた。それと確か恨み言も言っていたね。それらが君がしている呪術の致命的な勘違いなんだよ」

少年は口元だけニヤリと北和笑み、

「日本で真言宗といえば空海が有名でしょうね。空海が学んだ密教というのは、秘密仏教の略であり、それは教理を文字によって教えることの出来る顕教とは異なり、呪言、印契、曼荼羅といった文章では表せない秘儀を、師から弟子へと直接伝えていく仏教ですが、密教にも教典はあり『大日経』と『金剛頂経』をより所にしています。

前者は密教の知恵の部分である教理を、後者は密教の実践の部分である修法の根拠となっている。

教典の主張によれは、僧侶は修行によりを大日如来と等しい能力を得、自然の力を思いのままに操れるようになるようです。

仏と一体化する事を目的とした、仏教の中でも異色な宗派でしょう。

ま、元々仏教とは釈尊の解釈の違いによって幅が広まっていますが、その中でも密教は、呪術的要素が非常に強い。釈尊は弟子達にに呪術を遣うなと禁止したと言うにもかからわずに……」

少年がまるで慰めるように藁人形にそっと触れた。

「……そして、君が言う真言。真言の声と文字は、大日如来の秘密語とされ、ゆえに真言は師から弟子へと口伝される形で受け継がれてきた。

密教は四、五世紀のインドで誕生し、密教の呪術はバラモン教の呪術作法を色濃く受け継がれています。そこにはサンスクリット語による真言もいくつか作られ、中国で意訳されず音写しされ、そのまま日本へ伝わってきたため、難解で意味が分からずまま遣われる事もしばしばあり、けれど、それでもありがたい、とされていた。……意味が分からなくても、偽物でも、心底信じていればそれらは本物になるのですよ」

少年は意味深に力を込めて言う。

そして、五歩分の距離を保ったままなのに、まるで耳元で囁かれているように頭を揺らす。

風が吹く、立てられた蝋燭の灯火はしぶとく揺らいで、静かに消えた。

一瞬にして、闇に挟まれた。

白い影が、闇夜に浮かぶ。

――アンビラケンウンソワカ

――ナムウオウショウジュウ

――ニショウコンゴン

白い闇が呪文を唱える。

それは私が唱えていた真言と全く同じだ。

寒気がするほど同じ口調、同じ調子で唱えられた。

「これが君が唱えていた呪文。言葉には言霊があり、物事を現実化させる力があるという信仰は多くの宗教に見られれる。キリスト教の聖書にも『はじめに言葉ありき』とある。

仏教にも梵語というものがり、陰陽道、修験道、神道などにも呪文というものはあり、他の宗教の呪文と混ぜ合わせた呪文を多くあり、地方によっては語句が一部違っていたり、民間によってアレンジされたりと、膨大な種類がある。故に、時にはオリジナルとは間違った呪文のまま伝わり、それが間違いだと気づかないまま遣われることも当然ある。そう――君のように」

幽かな影が、にやりと嗤うのが分かった。

長々と回りくどく包囲するように呪文を唱えて、少年は、私の過ちを告げた。反論なんて浮かばない、けどそんなはずないと拒絶を叫ぶ。

「玄楼奥竜の『十六鐘鳴』によれば、間違った呪文でも功徳は十分あったと言われています。ですが――」

影は動じず、

――アビラウンケン・ソワカ

――オウムショウジョウ

――ニショウゴシン

代わりに、呪文が木霊した。

「ところが間違いと告げ、正しい文を教えられた途端に、その功徳が消えたと言われます。そしてこれが大日如来の真言、それと『金剛経』の句の正しい読み方です」

風が、寒いほど冷たい風が吹いて、私の躰から何を奪い去った。

寒気を伴う略奪。

白い影が悪戯を楽しむように嗤う。

奪ったんだ。

この少年は、私から呪力を奪ったんだ。

でも、まだ。

「でも、私の作法は正しい！　たかが呪文じゃない。呪文ぐらいちょっと違ってたからって、私の呪術が無意味だなんてこと、絶対にない！」

「たかが呪文、ですか。……君の呪術基盤は密教なのでしょ。おそらく降伏ですね。その中でも貴女は、大威徳明王法を遣っているのでしょ。本尊の前に三角の壇を設け、真言を唱えた後に、呪う相手の人形を作り、その両肩、両脛、心臓の五カ所に特別の祈祷を行った杭を打ち込む。その他にも降三世明王、不動明王、毘沙門天などを本尊とする呪術がありますが、それらの法すべて真言を唱えます。

呪術は仏の力を借りて行う、仏と一体化し術を成すものであり、密教の修行では『身口意』の三密行を通じて人間が仏と一体になるものだと説いています。この三密行とは、手に印契を結び、口には真言を唱え、心に仏を観じるという意味です。

つまり、真言は仏と一体となるに重要もので、これを無しに密教の呪術を成功させるのは――――――不可能です」

ざわめく葉音と少年の声。

厳しい声に、私は何も言い返せなかった。

言い返せるはずがなかった。圧倒的だ。

圧倒的なまでの呪文の波に、私は大河を流れる木の葉のように、ただ流される事しか出来ない。

それでも、容赦なく少年はその饒舌な口を閉ざさない。

「これがもし神道を基盤とする呪術なら良かったのですが、密教ならば真言というのは無視できない。ここは、神道の聖域。……間違っていると言うのならそうですね、君が密教を基盤とする丑の刻参りを遣うのに、それを神道の聖域で行うんのも、滑稽といえば滑稽だ」

無邪気に笑う声。影を振るわせ嗤っている。

もはや言葉では抵抗できない。

私の怒りが裡に籠もって、激しく燃えだし、ついに我慢ができず手にした金槌を影に向かった振り下ろした。

このッ――という怒号で金槌が影を切り裂く。

まるで影。金槌は空を切り、白い影は羽毛のように軽やかに地を蹴って、窪地の中心へと軽やかに着地した。

「もし君が呪文を軽視しているのなら、いっそのこと黙っていれば良かったんだ。そうすれば、この場所においては呪術は成功したかもしれない。密教を基盤とするのではなく、神道を基盤とした丑の刻参りなら、呪文を除いては正しい作法を行っていたのだから」

「え――？」

追い詰める口調が、一点して包み込むように優しい口調にかわり、まるで私の呪術を認め、肯定するように助言をする。

でも、それは錯覚だった。

「君の失敗はね、呪いそのものを勘違いしている事だ」

白衣の少年は、剥き出しの刃を投げるよに言葉を放った。

「な――勘違いって、そんなこと……あるわけないじゃない。呪いは人を呪って、神仏や妖怪の力を借りて憎い相手を不幸にさせるものでしょ！」

削がれかけた自信を振るわせ叫ぶ。

間違いようもない、勘違いする隙間さえない事だ。

少年は、ほう、と関心するように唸って、

「神仏や妖怪の力を借りるですか」と呟いて黙った。

間を埋めるように木々がざわつき、

どこかから鳥の鳴き声が聞こえた。

そして少年は再び、語り出した。

「呪術の定義は、江戸時代の国学者、伴信友の『方術原論』の中で『ノロヒ』と『マジナヒ』が呪術を構成すると挙げています。

ノロヒとは呪いを意味し、分かり易く言えば、念によって相手に害を与える、と言ったところでしょう。

これは君が今しがた行っていた丑の刻入りのように、怨む相手に害をなそうと一心に念じながら藁人形に釘を打ちこみ、自分の念が通れば藁人形を介して、その影響が相手にも届くという考えです。

次に。マジナヒは、まじないを意味し、物実を講へて、それにまじり肖しめむと、のろひてする術。

物実とは、呪術を行う際に用いられる呪物、その老木に磔にされている藁人形などがそうで、それに呪術的な操作を加えて効験（こうけん）を得ようとするのです。まじこりとは人に害悪、邪気を与えたり惑わしたりする行為を表し、肖しめとは、物実に加える呪法、釘を打つ、切る、焼く、埋めるなど、同じ効果を相手に起こさせる意味を持っている。そして、その呪術を大きく分類して二つあり、一つは類感呪術、もう一つは感染呪術」

少年は、一瞥（いちべつ）するように老木の方へ顔をむけた。

「君が行っている丑の刻参りは前者の類感呪術。これは、類似は類似の結果を生む、という魔術的思考に基づく呪術で、怨敵を模った人形に釘を打てば怨敵の肉体にも同じ効果が現れる事を期待している。ノロヒは怨念によって相手に害をなそうとする法、マジナヒとは類感や感染などの魔術的思考を背景に物実を用いて相手をまじこる法、その両者を併せて呪術と言うのです。丑の刻参りであれば、何がノロヒで何がマジナヒか分かりますね？」

距離が開いたというのに、少年の声はより一層よく通る。

呪文の波は弱るどころか勢いますばかり。

その渦はついには私を締め上げる。

「何が……言いたいの？」

私にはもう、反論する事が出来なかった。

その声を上げるだけで、精一杯だった。

「ノロヒもマジナヒも共に漢字で『呪』と書くことから、両者は共通のものと言えるでしょう。そして、呪うと祝う、その対極的な意味合いを持つ言葉も、同じ『祈り』でもあります」

少年は、私の問いかけに一瞥もくれず、語り続ける。

手にしていたはずの金槌の重みは、いつの間にか無くなっていた。

「祝いの言葉ならば祝詞（のりと）、呪いの言葉なら呪文。共に、神様に対する祈りです。それは君も分かっているね、君は呪いを、神仏や妖怪の力を借りて成就すると言ったのだから、君の怨みを神仏にまず届けないといけい。そのための祈りの儀式が、丑の刻参り」

少年の数々の呪文が、今、刃となって私の呪いを解体する。

『君の呪い、解体してあげようか』

その挑発通り、少年は本当に私の呪いのを解体した。

いや、違う。

少年は口はまだ閉じない。

静かに忍び寄るように私の鎧を粉々にして、守りを失って裸同然の私にまだ、きっと毒牙を立てるように刃を放つ気だ。

「神道の祈りというのはね、口に出してはいけないんだよ」

囁きのような声が、けれど風のように吹き抜けた。

少年は散歩のような軽やかな足取りで、

私の方へ再び歩み寄って来る。

「祈りの『い』は、神聖なものを意味し。『のり』とは、みだりに口にしてはいけない言葉を口にする意味です。つまり祈りには重要な意味を含む言葉であり無闇に口にしてはならず、同時に呪術的な言葉でもある。だから、それが転じて『のろい』にも用いられているのです。

祈りというのは本来、口に出して祈るのではなく、心の中で祈るもの。だから――――――」

迫る。

少年はその白衣を乱す事も汚すこともなく悠然と、

手を伸ばせば届く位置まで近づき、私を見上げた。

包帯に覆われた両目が、私を磔にし、

「死んでしまえ――――と、呪いを口にしてはいけないよ」

酷く怖ろしい声。

毒々しく鋭い刃の言葉に、私は本能的に後退りした。

呪いで弛緩しきった足がもつれ尻餅をつき、その拍子に帯びは解け、白衣がはだける。

見上げた。

同じ白衣を纏っている少年の存在は、

私を紛い物だと断罪するように、毅然と闇を従えて佇んでいた。

「君は、まず場所を間違えた。君の呪術ならば寺院を選べば良かった。そこならば多少のオレンジが加わった呪文でも、少しは功徳が得られただろうが……君はもう正しい呪文を知ってしまったから、君の呪文は既に無効だ。そして神社を選んだのならば、君は今度は呪文を口にすべきではなかった。神道において神様への祈りを口にするのは神職、禰宜の役目であり、神職でもない君が無闇に口にしてはいけない……いや、口にしたところで無為だ。

古今東西にある魔術、呪術の類というのは形式はもちろん大切だが、そんなものよりも時代と場所に依る。君の呪術は、上辺ではなかなか正統だ。形式は間違ってはいなかったが、言葉と場所を軽視し過ぎていたんだよ。見た目ばかり気にして、中身を疎かにしては駄目なんだ。そんな形骸化した儀式なんて、ただのごっこ――――――遊びだ」

闇を従えた白い少年が、トドメの言葉を振り下ろした。

その瞬間、私は目を覆った。そして痛感した。

私の呪いが、殺された。

長い長い呪文が終わった。

私のものとは違う、本物の呪文だ。

今、眼に写る私が施した呪術の痕跡。地面に置かれた三本の蝋燭も、老木に磔にされた藁人形、いつの間にか落ちてしまった鏡、そして乱れた白衣すべて、呪術において重要な意味があったものすべてが今では、滑稽な飾りにしか見えない。玩具同然だ。

少年が告げた言葉の数々が、私が纏っていた白衣を剥がすように、私から呪術を払い落とした。
後に残ったものは、惨めな虚脱感と、
今だ消えること無い怨みの強さだけの悔しさだった。
胸が痛むほど悔しかった。
頭が焦げるほど怒りが燻る。
破裂しそうなほど喉につまる恨み。
私を殺してしまいそうなほどの自分の感情を、どうしたらいいか分からず、私は地面に跪いて、縋るように白衣を握り、大粒の涙を恥じらいを忘れ流してしまった。
泣いて、鳴いて、泣き喚いた。
苦しくても泣いて、苦しくて泣いた。
私の惨めな嗚咽に共鳴してくれるように、
一際強い風に吹かれた深い森も鳴いた。
不思議と猛獣が唸るような葉音が、
今は、私の心撫でるように優しい音に聞こえる。
「……もおいいよ、呪わなくて」
幽鬼のように怖ろしかった少年の声は、今にも泣きそうな弱々しく穏やかに響く。
怖ろしかった森も闇も、少年の声も、ちっとも怖くなくなっていた。
きっと少年の呪文がそうさせたんだろう。

あぁ、この子が祝ってくれたんだ。
その時、心が静かになっていくのを感じた。
私は静かに泣けることが出来る。
森が清涼とした空気を充填させ、寝静まっている。
まだ涙が乾かないけど、私の心は落ち着きを取り戻し、今は老木の幹に身体を預け地べたに座り込んだ。
立ち上がる気力はなかったから。
白衣の子供は、目の前で膝を抱えて座り、じっと私の方を向いていた。
さっきまで饒舌だったのに、今はただ静かに黙って私を観ていた。
まるで見守るように。
少年は、何も訊かなかった。
だから私が独り言のように、勝手に話し出した。
ストーカーが鬱陶しくて怖いけど、なにも出来ずにいた時に呪いの事を知ったとか。少年に比べたら理路整然としていない、ただ短冊に書いた一文をバラバラに読み上げるような拙いお喋りだった。
それでも少年は、最後まで黙って頷きながら、私の話を聞いてくれた。
だからいつの間にか、私はストーカーの事だけじゃなくて、他のことまで話していた。ここ数日、私が感じた怖かった事や憤りを、身体から毒を抜くように話したら少し楽になって、いつもの軽い調子で最後に家族の事を話した。

「うちの両親はね、仕事大好き人間だから家に帰ってくる遅いし、同じ家に住んでるのに週に一度顔を合わせるかどうか……。おかしいでしょ。そんなんだから、きっと娘が毎晩夜中に家を抜け出してこんなことしてるなんて、きっと夢にも思ってないだろうな。もしかしたら、私がいることも忘れられちゃったりしてね。……うちは、ちょっと変な家庭だけどさ、私、一度もだって自分の家族が嫌になったこともないし、寂びしいとか思ったことないんだ。むしろ、幸せだよ。……やっぱり、変だと思う？」

自嘲気味に笑って、目の前で膝を抱えている少年を見た。

顔のほとんどが包帯で隠れているから表情は読めなかったけど、この少年もきっと私の家族を不幸だと哀れむだろうか。

だけど、少年は口元をわずかに緩ませ首を振った。

「家族の形は一つじゃないし、幸せなんか形もないよ」

厳しく叱るわけでも冷たく突き放す訳でもない、頭を撫でるように優しい声で言ってくれた。

「世界中の人達が、君を不幸だと言っても、君一人だけ良いんだ。幸せだと言えるなら、それはきっと、とても幸せなことだと思うよ」

「あ――――――」

立ち上がり、空を仰ぎながら詠うように言う少年が、誰よりも私の憂鬱を共感してくれる理解者に見えた。

だから、私はその少年の顔を、初めてちゃんと見た。

戒(いまし)めるように巻かれた包帯のせいで表情が隠れていると思ったけど、少年の表情はとても穏やかで、達観しているような雰囲気をただよわせて、何もかも愛しそうな視線を空に向けていた。そして、兎のように跳ねて窪地の中心に着地してそのまま歩き出した。

別れも告げずに、去るつもりなのだろう。でもその別れ方が、少年に似合っているような気がしたから、私は、黙って小さな背中を見つめた。

すると闇に消える前に、少年が立ち止まり顔だけ振り返った。

「ねぇ、そのすとーかー……それって、隠れんぼじゃないの？」

器用に首を傾げながら尋ねた時だけ、少年は年相応に幼く見えた。

「隠れんぼなら、呪いなんか必要ないよ。

隠れてる人を捕まえて『みーつけた』って言えば終わりでしょ」

屈託のない笑み。

私は呆気にとられて少年を見ていた。冗談で言っている訳でも私をからかっている訳でもなさそうだけど、あまりにも気の抜ける言葉だった。

少年はそれ以上なにも言わずに、私の返答も聞かずに霧が晴れるような儚さで、深い。深い森の中へ消えていった。

白い影が完全に見えなくなって、私は目一杯、息を吸い込んで魂を抜けるほど息を吐いた。

頭がぼんやりと、だけど爽快なほど冴える。

見上げた空の澄み切った黒に、私はようやく気がついた。

◇

残った物は、鬱陶しいほど溜まった焦りと悔しさ。まるでゴミのように集積されたそれらは、どこへ捨てればいいか分からないまま、やはり、そのまま私の中で溜まり続けるしかないのかもしれない。

空がまだ暗い内に、私はようやく自宅のマンションへ辿り着いた。白衣こそ今はバッグの中にあるけど、私の足取りはまるで怨めしく柳の下に佇む幽霊のように、ふらふらだった。機械的に足を左右交互に動かして歩くだけで、彷徨っているのと大差がない。

眠気のせいだろうか、それとも身に溜まった焦りや悔しさのせいだろうか、酷く意識が朦朧としていた。地に足が着いていない感覚。

半身夢に浸かったように、点滅する幻想と現実、不連続の意識を引きずりながら自宅のドアを開け、入って閉める。

静まりかえった長い廊下。自分の足音がやけに響く。ドアを閉めると外の幽かな明かりさえも拒んで暗闇に。それでも自分の部屋のドアはどこに有るかはよく分かっている。

ドアを開けて入る。

部屋は出て行った時同様に真っ暗闇のまま――――のはずが、眩しいほどの光が部屋の一角から放たれていた。

部屋の闇を呑み込むような青白い光りは、お気に入りの化粧台の上のパソコンから放たれている。

「……電源、切って出たはずなのに……」

電源を入れた覚えはない。ましてや数時間触れていなかったらスリープモードになるように設定されているのだから、こうして煌々とディスプレイが表示されているはずがない。

バッグを落として、パソコンに近づく。

ディスプレイはデスクトップが表示された状態。なにかバグかエラーだろうか、と思いながらマウスを動かしてみた。しばらく異変がないか調べてみたけど、変わったところは無かった。誰かが勝手に操作様子もなかったから、きっと消し忘れか何かだろうと思って、パソコンの電源を落とした。

そして、静かにディスプレイの明かりが落とされ、部屋が仄かな暗闇に戻った。

ドンドンドンドンドン――――ッ！

「ッひ――――――――」

爆発めいた音が響いた。

突然の轟音に、呼吸が一瞬止まった。

何か厚い物を叩くような音。それがけたたましく響いて、止まった。

心臓がびっくりして、痙攣したように震えるように脈打つ。

「な、なに……？」

一人呟き、ドアの方を振り向いた。音は私の背後から、部屋の外から聞こえてきた。そのくせ、その破裂するような音はハッキリと聞こえた。

ドンドン！　ドンドンドンドン！

再び響く音。

二度目の音に、私はようやくそれが玄関の戸を叩く音だと推測できた。

音は響く。木霊する。

豪雨のような勢いで叩かれる音。

それは鬼気迫るものさえ感じる。

尋常じゃない音が響く。

廊下に出る。そして、玄関の戸と真正面で向き合うようにたった。

ドンドン……ドン……ドンドン。

玄関の戸が鳴る。だけど、その音は徐々に弱々しく。

「誰――――ですか？」

まだ夜明け前。こんな時間の訪問者なんて検討がつかない。

不安が廊下の闇に混じって濃度をます。

ドン……ドン……、

戸が鳴る。

人の声は返ってこない。

玄関に近づく。

眠気なんてもう綺麗さっぱり消えていた。

「誰？　誰……誰なの？」

同じ言葉を繰り返す。

すると、

ドン……ドン……とん――――。

戸を叩く音は、息絶えたように途絶えた。

不気味な空気を残して、急速に静けさが包む。

呆然と玄関の前に立ちつくす。まだ誰かがいるような気がした。また

ドアを叩くのではないかと思った。

でも、何も聞こえない。そのうち、気配すらなくなった。

私は恐る恐る、ドアののぞき穴から外を覗いた。

魚の目の視界には、汚れた蛍光灯の明かりに照らされたクリーム色の

廊下だけ。

不気味なほど静かだった。

さっきまでの響いていた音さえ、錯覚だと感じるほど。

ああ、もしかしたら本当に気のせいかしれない。

疲れているな、と薄ら笑いをこぼしながら、玄関戸に背を向けて、自分の部屋に戻ることにした。

つい一時間前に樹海にいたことさえ、もしかしたらベッドの中でみた夢ではないかとも思えるほど、実感が稀薄だった。

だから、気のせいだろう。

長い廊下を渡る。

その時、背後から

ヒューヒューヒューヒュー

そんな壊れた管楽器のような鳴き声が聞こえたけど、

それもきっと気のせいだろう。

７／九月二十一日（火）

気怠い眠気を引きずったまま、ベッドから起きて朝食を適当に摂って、見飽きた通学路を通って、飛んで火に入る夏の虫の如く学校に行く。その習慣は、簡単には変わらない。世間じゃ通り魔殺人事件が騒ぎになっているようだけど、私には関係のない話なわけで、私は私で、色々と頭を悩ます事件を抱えたまま、消化しきれず胃もたれを起こしてストレスが臨界点に達しそうな感じで、連日の寝不足と、私のキャパシティを超えるような出来事が追い打ちをかけ、ついには我ながら情緒不安定のまま登校することとなった。

教室につくなり、自分の机に頭突きをしたまま硬直して、そのまま目を瞑った。頭の中が、ゴミ部屋のようにごちゃごちゃしている。

その原因は、やはりストーカーの事だった。

昨日まで一番の対抗策と思っていた呪いは、昨夜の不思議な少年によって無駄になった。今までの苦労は水の泡。

そのショックはかなりでかい。なんせ、それが一番の対抗策だったんだから、他の安なんて考えもしなかった。いや、他になかったから、それが一番の方法だったんだ。だから、疑うことなくそれが成功するものだと思っていた。だから、これからどうしたらいいか分からない。

昨日、神籬に大きな事をいった手前、協力を求めるのも悔しい。かといって他に案が有るかと言えば全くない。

私の呪術は、間違えだったんだから……。
「……間違え、……だった？」
水飴のように粘性が高い霧がかかった思考が、一瞬で晴れ渡った感覚が全身を走った。
「間違えだった……だったら、やり直せばいいじゃん」
全身に稲妻（いなずま）が迸（ほとばし）るような感覚と、爽快な風を浴びたような感覚が同時に訪れた。
私の呪術が間違いだと、あの少年は言った。ただ間違いだと言うのでなく、何が間違いで、何が正しいかと、教えてくれたではないか。
正しい呪術なら、成立する。
だったら、あの少年が指摘した場所だけ変えて、正しい呪術を行えば、それは間違いではなく、必ず成功する呪術という事になる。
「そっか……。あは。簡単じゃない」
発送の転換だ。
昨日までの呪術は間違い。今から正しい呪術をすればいいだけの事だ。
悲観することなんて、なにも無いじゃないか。
むしろ、無駄に間違いを続けなくて良いんだ。
あの少年は、私の呪術を否定した。
同時に、正しい呪術を私に授けてくれたんだ。
「今度こそ。間違いなく……」
呟く決意に、眠気なんて霧散する。

なにせ、今度は正真正銘の呪いなんだから。
本物の呪いなら、ストーカーも……。
「おはよう、一之宮さん」
思考を遮る声。
顔を上げると、目の前に、榊あやめがいた。
「あ……お」息を呑んだ。その瞬間に脳裏に鮮明に蘇った土曜日の夕方。断面的に過ぎる映像。すべてが赤い写真のように、血と肉が写っていた。そして、
「おはよう……榊」
私に微笑みかける、無垢で無害を装う女の子、が狂気に染まった姿が映っている。
それを悟られないように、私も装う。
この制服、この場所での一之宮小夜子は、榊あやめの良いお友達なのだから。微笑んで挨拶を返した。
――そうだ、こいつも……。
微笑みに隠れて、私の心に邪な囁きが零れる。
この女のも、あのストーカーと同じなんだ。
こいつが居るだけで、周囲が危険になる。
特に、すっかり騙されている礼慈が危ない。
礼慈だけじゃない、絵馬だって危ないんだ。
見た目の無害さに騙されて、油断すると危険だ。

そう――――危険だ、この女も。
それに気づいてる人はいない。
気づかないから、危険なんだ。
知っているのは私だけ。
そうだ。私が守らなきゃいけないんだ。
私が、やらなきゃダメなんだ。
「どうしたの一之宮さん。なんか怖い顔してるけど」
「え？　ああ、ううん。なんでもない」
そう、と頷いて自分の席に戻っていく榊の背中を睨みながら、私は自分の役目、使命というものを心に刻み込んだ。
私が呪って、救わなければならない、と。
大丈夫。必要なものはすべて揃っているんだ。
慌てることなんて何もない。
だから、昼間ですこし仮眠を取ることした。
四時限目の授業終了のチャイムの音が鳴り終わる前に、絵馬に起こされた。起こされたというより、後頭部を叩かれた。
「何すんだ」と謝罪を要求すると、絵馬は「愛情表現よ」と悪びれることなく言った。以前から思っていたが、この子は間違いなく加虐嗜好者だ。しかも重度の。
絵馬に強引に屋上に連行された。別に決闘の申し込みとか愛の告白とかいうイベントではなくて、お昼を食べるためだ。
いつも私たちは屋上でお昼を食べる事が決まりになっていた。もちろんそこには榊もいる。それだけで微かな緊張感が私を包む。
屋上にあがる途中、見計らったように神籬と礼慈に遭遇した。正直、私は二人の顔を直視出来なかった。絵馬はそんな私の様子に気づくはずもなく、二人もついでと言わんばかりに屋上へ連行していった。まるで魔王の行進だ。
フェンスによりかかるように一列に並ぶ。私は一番外側に陣取った。隣には絵馬が座っている。
いつもはコンビニ弁当だけど、今日は家にあった嫌いなカレーパン。それを見て大食漢の絵馬が、少なすぎ、と文句を言ってそっと自分の弁当からおかずをわけてくれようとしてくれたが、生憎とそんな茶色一色のレトルトに食欲が沸くわけもない。
そうして、嫌いなカレーパンと格闘。
隣では絵馬が声を荒げて、まるで口喧嘩でもしているような口調で喋っていた。耳を傾けると相手は、神籬のようだ。
相性が悪いだろうな二人は、と私は思った。
人をカラカウような飄々（ひょうひょう）とした神籬と、真正面から挑む攻撃性の高い絵馬とでは、まともな手合いにはならないだろう。一方は空中戦で、一方は白兵戦タイプなんだから。拳上等主義の絵馬がイライラするのは当たり前だ。
そんな不毛戦に、礼慈の冷静な声が加わった。

「奥津城。亀じゃなくて鴨だ」
「いいでしょ。鴨より亀の方が縁起良いんだから。うちの神社は縁切りが得意だから、喧嘩にはちょうどいいわよ」
そして、榊のおどけた声まで加わった所で、絵馬が何かを語り出した。最初の辺りは聞き流したが、縁切りがどうとか言っているようだった。しかし、途中から違和感を感じた。
違和感……というより、既視感？
似てると、思った。
「うちの神社、鳥の神社っていうのは、なんていうか『死』や『黄泉』とかっていう、あの世に関係する神様を祀ってたらしいのよ。この世とあの世って別世界でしょ。それにそういう『死』に纏わるものって、日常生活からなるべく遠ざけるものだから、自然とうちの神社には、罪汚れや忌諱するモノを日常生活から遠ざけるっていう御利益が広まったらしいの」
実家の神社の事を喋る絵馬が珍しく、聞き入った。
同時に、やはりこの口調……というか雰囲気を私はどこかで、つい最近、感じた気がしてたまらない。
「ま、簡単に言えば、ゴミ捨て場ね。だからさ……時々、呪いの人形だの心霊写真とか動物の死骸とか捨てるバチ辺り名連中いるのよね。困ったものよ」
ため息混じりに絵馬が言い捨てる。
違和感が輪郭を表してきた感覚がする。もう少しで分かるような気がした。それは同時に、緊張と不安が入り交じっていた。
似ている。まるで昨日、あの少年から聞いた話とどことなく、似ている気がした。
「ねぇ、絵馬。縁切りって、嫌いなヤツを呪ったりするのも、そうよね」
私は、絵馬の横顔を見つめながら訊いた。
絵馬は一瞬、私の質問が意外だったのか、目を見開いて数秒考えるように顎に指を添えながらが答え始めた。
「そうね……。どうなのかしら。私、呪いや儀式とかって詳しくないのよね。爺やか、それよりもシ――――あ、いやいや。……呪いって丑の刻参りみたいなの？」
話の途中で声が途切れたが、それを気にせず私は絵馬の質問に、頷いた。すると、
「それだったら、意味無いわよ」
絵馬はあっけないほど、そう言い放った。
「え……。どうして、意味が、ないの……」
絵馬の言い方は、似てる。
脳裏に白いモノがボンヤリと浮かぶ。
「だってね、呪いって誰かの手を借りて成就するものでしょ。精霊とか式神か妖怪のさ。……でも、うちの神社ってそんなのいないのよ」
ぐらりと、私の、何かが崩れ出した。

「これも爺やからの受け売りだけど。呪いとは言葉で、儀式じゃないの。だから、無意味なのよ」

さらりと放たれた絵馬の言葉に、私の頭は真っ白になった。

だって今、絵馬は呪術そのものを完全否定したんだ。

「それ……どういう……。呪いじゃないの？」

縋(すが)るような声。

本能が訊いてはいけないと言うのに、訊いた。

「私もよく分からないのよ。こういうの。一言に呪いって言っても色々有るみたいで、呪う方と呪われる方で、また意味が違うみたいだし。人だったら呪いだけど、神様だと祟りになるみたいだし。……あまり関わりたくないぐらい複雑らしいの」

困ったような表情をしながら語る絵馬が、次の瞬間、何か蔑(さげす)むような表情になった。

「ま、ともかく悪口は呪いだけど、丑の刻参りっていうのはただの自然破壊みたいなモノよ」

ジワリジワリと浸食してくる絵馬の言葉。

それが似てるんだ。

「そんなの夜な夜なするぐらいなら、呪いたいヤツをぶん殴った方が手っ取り早いってことよ」

それは、暗に私を蔑むような言い方だった。

そして、絵馬は言った。

「祈りなんて結局――――ただの自己満足よ」

不敵な笑みで、言い捨てた。

「祈る暇があるなら、努力しろ」

それはあの不思議な白衣の少年に、よく似ていた。

焦らすように追い詰めていく言葉の刃。トドメは風が流れるように軽やかに放つ。それが似ている。

似ているのだから、絵馬の言葉も、刃であり呪いだった。

容赦なく、壊れる。

私の希望が壊れた。

夜に壊され朝に縋った希望が、今、完膚無き(かんぷな)までに壊されてしまった。

間違った呪術は無駄だと、少年は言った。

正しい呪術さえ無意味と、彼女は言った。

私が、唯一縋ったモノを、二人は殺した。

「なにそれ。結局……独りじゃない」

何も頼れない。誰も頼れない。結局、振り出しに戻る。

ただストーカーの存在に、怯えるだけに成り下がる。

何も出来ず、ただ何かが起こるまで、不幸になるのを待つことしかできない。こうしている間にも、危険は堂々と浸食してくる。

ああ、私の呪いは死んだのに、私への呪いは生きている。

希望にはほど遠い、不安や恐怖、憤怒や悔しさが渦巻く。

そんな不条理なものに、私が殺されそうな気がした。

それが頭が壊れそうなほど、我慢できなかった。許せない。
逃げるように、立ち上がって去る。
何も出来ない、と脳裏で誰かが囁く。
とにかくここに居たくない。
屋上から校内に避難する。
傍観を決め込んだように廊下の空気は静か。そのまま下の階に降りれば一層と傍観者を決め込んだ他人の喧騒が廊下を包んでいた。
苛立ちに、髪を掻く指の爪が頭皮に食いこむ。そのまま項に爪が刺さる。歯軋り。鋭利な痛みと窓から差し込む陽射しが、周囲の笑い声に混じって私を追い詰める。
逃げられない、と脳裏で誰かが囁いた。
不幸になる、と脳裏で誰かが笑った。
狂ってよ、と脳裏で誰かが甘える。
本当に気がおかしくなりそう。
でも、私は悪くない。私は何一つ悪くはないのに。私に罪はない。私は異常じゃないのに、どうして私ばかり不幸を押しつけるの。不条理にも程がある。理不尽にも程がある。あんな狂った奴に、どうして私はこんなにも、苦しまれなくちゃいけないんだ。
「私は悪くない私は悪くない私は悪くない」
精神安定剤を飲み込むように繰り返し唱える。
私は悪くない。悪いのはすべて、ストーカーと――――。

「待って、一之宮さん！」
憎たらしいほど緩い声が、私の背中に当たる。
足を止め振り返った視線の先には、雨晒しになった子犬のような表情の榊あやめが、息を切らせて立っていた。そのあまりにも無防備で無害な弱者を演じる姿が、怨めしかった。
「なに……？」
絞りだすように吐いた声に、榊が一歩後退した。けど、それよりも更に一歩踏み込んで、祈りを捧げるシスターのように両手を組んで、潤んだ瞳を上目遣いに、私を見つめながら、
「あ、あのね……最近、元気ないから心配になって……。何かあったの？」
そんな巫山戯た事を、こいつはさらりと吐いた。
は。
はは。
可笑しかった。腑が煮えくり返りそうなほど可笑しかった。
「何かあったの？　……はは、あんたが、それを言う？」
自分の笑い声が身体の中で反響する。
おかしい。心底、可笑しかった。
「一之宮さん？」
その弱々しい声さえ、滑稽。
「一之宮さん……どうしたの。変だよ。いつもの一之宮さんじゃないよ」
黒目がちの瞳を、嫌悪と忌諱で潤ませ振るわせ、

「――――オカシイよ」
よりにもよって異常殺人者が、私をそう蔑んだ。
それも呪いだった。刃だった。刃だったから激痛が奔った。激痛が奔ったから当然、頭は怒りで白くなった。白くなった頭に理性なんてない。
白熱した本能は、ただ、怒りにまかせて足を動かし、正常な一般市民を装う女に近づいて、歯軋りを鳴らし骨が軋むほど、刺し殺す気概で、その女を突き放した。
風に流されるゴミのようによろめき、壁に寄りかかる榊が、どうして、と往生際が悪く、頭が悪いことを呟くものだから、
「狂ってるのはオマエだ！」
暴れる怒りのまま、獣のように吠えた。
周囲の温い喧騒などもう聞こえない。
周囲の傍観者などもう気にならない。
周りの事なんてゴミ同然。空気以下。
ただ私は、目の前の女が、
「善人ぶってんじゃねよ！」心底、憎かった。
ありたっけの憎しみと妬みを乗せて睨んだ。それでも萎んだ花のように、あくまでもか弱い女の子でいる榊の姿の滑稽さに、冷笑をうかべ、
「心配？　――――っは。よくもそんなことが言えるね」
怒りを加熱させる。
私は被害じゃなの。私は関係ない。
私は悪くない。
まるでそう哀願しては、守ってと訴える様な姿に、
「なにもかも、おまえのせいだろ！」
殺してやりたいほど憎悪がした。
だって、異常なのはコイツだ。
だって、狂ってるのはコイツ。
だって、オカシイのはアイツ。
だって、悪いのは榊の家族だ。
それなのに。
「私がオカシイだって？　――――ふざけるな！」
この女は、私を異常だと言う。
「オカシイのはオマエだ！　オマエの家族が狂ってるからだろ！」
かつん、と近づく。
「気が狂って変になってんのはオマエだけだ！」
揺らぐ。
「なのに、なのに……」かつん、と近づく。
この期に及んでもまだか弱い女の子を演じる榊。
一人だけマトモぶって、あの――――吐き気がするほど醜悪な本性を隠して、周囲を狂わせる悪魔のような女。

とっくにバレている悪性を偽善で秘密にして、
私を悪と罵る女に、心底、腹が立った。
苛々する。
腹が立つ。
ムカつく。
鬱陶しい。
うるさい。
憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。憎い。
私を壊そうとするす女が、ひどく、憎い。
「巻き込まないで！　あんたの祟りに私に巻き込まないで！」
狂うなら一人で狂って死ね。
祟られるなら一人で祟られろ。
巻き込むな。
道連れにするな。
一人で、祟られろ。
一人で、呪われろ。
一人で、死ね。
家族で、祟られろ。
家族で、呪われろ。
家族で、狂って死ね。
まき散らすな。巻き込むな。道連れをつくるな。

自滅しろ！　自爆しろ！　自壊しろ！　自殺しろ！
不幸になるなら、勝手に不幸に溺れて死んでしまえ！
他人を巻き込むんじゃない。
そう、壊れた人形のように壁によりかかって、唖然と弛緩しきった顔のまま、不幸に汚れてしまえ。
助けを求めるように腕を伸ばす榊。厚かましく私に触れようとする。
私まで狂わせようとする。
「触らないで汚らわしい！」
その手を思いっきり叩き払った。
「いち……のみや、さん……？」
凝り固まったような声を出す、女。
その肩向こうから、アイツが足早に近づいてくるのが、朧気に見えた。
かつん、と近づく。
怯えるような表情で榊が、私を見る。その普通すぎる表情に腹が立つ。
無害を装う円らな瞳にイライラする。生温い幸せに包まれた姿にイライラする。それが静かに棘と毒を帯びる。
だから顔を耳元まで近づけ、
「知ってんのよ。あんたが――――」
かわいい女の子のコスプレをする、
「家族を殺したってこと」
残虐な異常殺人者に囁いた。

その瞬間、他人の心が壊れる音を聞いた。
とても小さな音を立てて壊れて、その残骸を吐き出すように榊の両目から涙が溢れる。
なんで、と呟く。その弱々しい姿に吐き気がする。
私が知ってる榊あやめは、そんなに普通の女の子じゃない。
「そうやって善い子のふりしてれ、隠し続けられるとでも思ったの？　……っは。馬鹿にしないで！　他の連中は知らないけど、私は騙されないわよ！」
知ってる。私はこの女の悪性を知っている。
忘れもしない。この女のおぞましい本性。
家族を殺したんだ。
骨と皮しか残っていないような弱々しい老婆を、
この女は殺した。その手で解体したんだ。
脳裏に蘇る暗く赤い光景。
現実味を帯びて再生される。
あの匂い、あの暗闇、あの色、あの音、あの悲鳴、あの笑い声。あの狂気。あの鳴き声。
この女はあの時、心底、愉しそうに笑っていた。
小柄な少女の身体には不釣り合いなほど無骨な鉈（なた）を手にして、祖母の首を切り落としたとき、零れる血がつくった赤い昏気楼の中、恍惚（こうこつ）に喘（あえ）ぎながら、妖艶に嗤っていた。
まるで、祖母を殺せて嬉しそうに、嗤っていた。
心底、人を殺して解体するのが嬉しそうに嗤っていた。
でも。
「私は簡単に殺されない！」
「え――――――？」
榊の仮面が凍る。その仮面の下に隠している狂気を疼（うず）いているんだ。
私を殺したんだろ？　オマエの秘密を知ってるから殺したんだろ！
榊だけじゃない、榊あやめだけじゃない。狂気を潜めている異常者は他にもいる。いや、榊の家族全員が狂った異常者なんだ。
「すごい家族よね、あんたちって。どうしてるわ、狂ってるのよ！　秘密がバレたらまた壊すんでしょ。メチャクチャに呪って壊して殺すんでしょ！　分かってるのよ！」
人形のように感情を止めた表情。
何もかも知ってる。だから殺したいんでしょ、榊。
でも「私は殺されない！　もちろん――――」
榊あやめの背中に迫る男子生徒に、視線を移す。
険しく、致命傷を負ったような苦悶の表情の男子に、榊も気づいて、肩を振るわせながら振り返ろうとする。
私は、呪文を告げた。
「あんたも気をつけなさい、礼蕗」
私と榊だけの空間に、礼蕗が入ってきた。

それで周囲のざわめきと息を殺す沈黙が広がる。
榊が、死にそうな表情で礼蕊に、違う違うと哀願する。
礼蕊は、それを黙って見つめていた。
だから榊は、狂ったように首を振って違うと叫ぶ。
違う違う、と叫ぶ度に榊が壊れていって、
「違う違う、違うの」
寸前の所で留まって、二人は一言だけ言葉を交わした。
周囲の人間の好奇心の眼差しと、礼蕊の揺るがない冷徹とも言える眼差しに晒された榊は、ようやく本性をさらけだしたように、
「私は――――――違う！」
狂気じみた叫びを、鈍感な生徒達にまき散らして、逃げ出した。
すぐに後を追う奴はいない。私は逃げ出した榊の背中を、呪うように睨んだ。
「一之宮……おまえ、榊になにをした」
榊の背中に向けて伸ばされていた腕を降ろして、険しい表情のまま振り向いた礼蕊の視線には、怒りが滲(にじ)んでいた。
神籬の例え話を思い出した。
ああ、なるほど。確かにこれは榊の心を奪われている。
榊あやめに呪われているとしか思えないほど盲目的に、榊を擁護(ようご)しようとしている。

「私からは何もしてない。何かしたのは榊よ。礼蕊が榊をどう思っていようがね、これだけは確かだから聞きなさい」
私は歩み寄る。礼蕊は動かない。
礼蕊にしか聞こえないように近づき、小声で囁いた。
「榊あやめは、人殺しよ」
はっきりと明確に、呪いの言葉を植え付けた。
表情は見えないけど、礼蕊が息を呑むのが分かった。
嘘だ、と礼蕊が纏う空気が私を拒絶しようとする。
「ホントよ。私、見たんだから。土曜の夕方、あいつが自分のおばあさんを殺して、解体するとこ。――――楽しそうだったわよ」
石化したように固まる礼蕊から離れる。
私はそのまま踵(きびす)を返して、礼蕊の視線の先へ向かった。
数秒後。背後で誰かが駆け出す足音がした。足音だけで誰なのか分かるほど、聞き慣れたリズムと強弱の走りだった。
教室から顔をだしている鈍感な同級生達が、馬鹿みたいに狼狽(ろうばい)えながら騒いでいる。それに構うことなく自分の教室に戻る。
このまま午後の授業を受けて、夕方まで時間を無駄に浪費する気もない。そんな余裕はない。そんな猶予(ゆうよ)はなかった。
鞄を手にして教室を出る。親しげに慌てながら話しかけてくるクラスメイトを無視する。そして教室を出た直後、目の前に神籬と絵馬という珍しいツーショットが立っていた。

絵馬は何か言いたそうに私を見ていた。
けど何も言わない。
神籬も何も言わない。だから、私からも何も言うことはなかった。
二人の間を抜ける。
すれ違う間際、絶妙なタイミングで神籬が、私の耳に言葉を放った。
「急げ。あいつが動いた」
その真意を問い返すこともせずに、私は足早に下校した。

◇

いつものように裏口からマンションに入ろうとして、私は少し離れた場所で、数分、呆然と立ちつくした。
「なに、これ……」
気の利いたセリフなんて出てこない。でも、訳が分からない事が起きている、と言うことは何とか理解できた。
マンションの裏口、非常階段の出入り口にはテレビでしか見たことのない黄色いテープでバリケードが作られ、その前には数人の制服警官がカカシのように立っていた。数台のパトカーが路上駐車。黄色いテープの外には数人の野次馬が、警官とにらめっこしながら、がやがやとゴミに群がる鴉のように声を飛び交わしていた。
黄色いテープの向側では、スーツ姿の大人が険しい顔して階段を上ったり、せわしなく動いている。
私は、それよりずっと離れた所。黄色いテープと道路との中途半端な位置で、一人ぽつんと立ちつくしていた。
非常階段を上り下りする警官らしき人達を目で追うように、顔を上げた。外からも見える廊下。十階建てのマンションの内、七階の廊下だけが他の階より人口密度が高かった。それは、ちょうど私が住んでいる階だった。
「ちょっとそこの君」

何が起こったのかまだ分からないまま、やけに挑発的な口調の声が聞こえて、視線を地上に戻すと、私の数歩前にまで迫ったサラリーマンのような男性が近づいてきた。
「学生か。学校は？　サボってまで野次馬とは関心しないな」
そんなつまらない事を言った男の人は、警察官なのだろうか。そんな疑問がわくほど、どこにでもいる大学生がスーツを着たような印象だった。
私が不審な顔で見ていたせいだろうか。その人は上着の内ポケットから警察手帳を取り出して「僕は鳥口、一応刑事だよ」と優しい口調で名乗った。
「信じてくれた？　どうも威厳がないのかな、刑事になかなか見られないんだよね。パトカーから降りてきても、警察手帳みせても、どっかの学生に間違えられるんだよ。何がいけないのかな、顔かな？　……まぁ、それはさておいて、僕は正真正銘の刑事だから、安心して」
どこか緊張感のない青年の口調に、私もこの青年を疑う大勢の一人として、警察手帳を見せられても簡単には信用できなかった。そもそも、何を安心すればいいんだ。
「で、話しを戻すけど、君は？　学生だよね、その制服は知ってるよ。あそこの制服は凝ってるよね、それに可愛い子が多いし……変わった子も多いしね」
苦笑いを浮かべる、鳥口刑事。

この人は一体何が言いたいのか、何を訊きたいのか分からない。同時に、私はどうすればいいのかと、立ち往生していた。
そこに、黄色いテープのバリケードの向こうから他のスーツ姿の男の人達とは格が違うと言わんばかりの異彩を放つ人物が、かつかつと規則正しい足音を立てながら近づいてきて、
「鳥口。ナンパするほど暇か。だったら過労死するほど仕事をやるぞ」
青年の背後で、加虐的な響きを奏でた。
その時の鳥口刑事の表情は、初対面の私でも同情するほど哀れだった。この世の終わりを悟ったキリギリスのようだ。
「お、お……鬼束（おにつか）警部補！」
バネが入っているように機敏に振り返り硬直。その動力源はあきらかに恐怖だと私にも分かる。私は少し体をずらし、その露骨にまで他人に畏怖を与える人物は見た。
深い赤色のスーツがスレンダーなフォルムを模り、炎のような赤毛をポニーテールに纏めたキャリアウーマンのような女性だった。
どう見ても二十歳前後の幼さが微かに残った顔立ちをしていたけど、その目は、あきらかに狩人のそれだと一見して理解できる。大型肉食獣、百獣の王たるライオンさえ凌ぐ強者。大の大人が震え上がるのも分かる。この女は、泣く子も窒息死させる女だろう。
「今日は検死の安売りだ。さっさと結果を貰ってこい。それから地域課の隠居を引っ張ってこい。その前に私の車をもってこい。一分以内だ」

生まれついての強者の貫禄だろうか。女刑事は、傍若無人な命令を告げて、鳥口刑事をその場から退散させた。哀れ、青年はまさにライオンから逃げる兎のように、脱兎の如く走っていく。

「さて。……君は誰だ」

今初めて私に気づいたのだろうか。女刑事は、鋭い目つきで私を睨み、職質というより因縁を吹きかけるように問いただした。

逆らってはいけないと理解した。だから、私は素直に自分の名前を明かした。ついでに学校は早退した事を、訊かれる前に答えた。

「そうか。だったらさっさと帰れ。これ以上無駄に死体を増やすような事はするな」

とても刑事とは思えないが言葉を突きつけて、さっさと去れと目で威嚇する。

「あ、あの……私、ここの住人なんですけど……」

完全にこの女刑事のプレッシャーに負けて、弱々しく尋ねた。裏口も非常階段も封鎖されている、きっと正面玄関も同じなのだろうから、どこから入っていいのか、そもそも家に入れるのか不安だった。

「このマンションの住人か。部屋は何階だ」

さっきまで邪魔者を見るような目から、獲物を見定めるような目つきに変わり、

「えっと……七階の、右端の部屋です」

私がそういうと、今度は敵を見るような鋭い目で見た。

そして、その視線で私を分析するように凝視して、ついて来なさい、と拒否を許さぬ物言いで腕を掴んで、連行されてしまった。

そのまま裏口に向かい、黄色いテープを潜った。連行されている私も当然の如くそれを潜る。近くにいた警官は見て見ぬふりだ。

「あ、あの、どこに行くんですか」

女刑事は無言のままエレベータに乗り、ドアが閉まって動き出してから、少し事情聴取をさせて貰う、とだけ口にした。その後は無言だ。エレベータは七階で止まった。

扉が開くと、目の前に廊下を右往左往とする警察関係者が何人もいた。だが、女刑事が廊下に一歩踏み入れると、彼女の前を堂々と横切るものは居なくなった。それどころか、この階の緊張度が一気に上がった。

「さて、君の部屋はエレベータから出て右手の端。一之宮……か。確か719号室だったはず。間違いないな」

エレベータの正面、廊下の真ん中に引っ張り出されて解放されると直後に尋問めいた口調で質問された。私は、素直に頷いた。

「そうか。ではここからが重要だ。正直に答えろ。偽証は許さん。命がけで思い出せ。事実だけ言え。分かったか？」

「は、はい……」

私はもしかしたら暴力団の姐御に捕まったのではなかと一瞬思った。思って、抵抗を諦めた。正直に答えますから、早く解放してください。そう願いながら、女刑事の言葉をまった。

そして、女刑事は簡潔に、
「昨夜零時から朝方まで、どこに居た」
私を絞め殺すような質問をした。
「あ、あの……どういう意味ですか？」
女刑事は視線を逸らさない。見透かしたような目ではなく、虚偽は許さないという圧倒的な力の目だ。
「意味など考える必要はない。何をしていた」
威嚇するような目。威圧的な口調。見下すような態度。何もかも、生理的に拒絶してしまう。
「あの、えっと……、寝てました」嘘をついた。
女刑事は目を細めて、そうかと呟いて事務的に次の質問を口にした。
「君は一度寝たら朝まで爆睡する方か。それとも眠りが浅い方か」
「え、あ、あの……浅い方ですけど」
意図が読めない質疑に、戸惑いながら答えた。
「途中で何か騒ぎや物音が聞こえなかった。近所でなにか騒ぎがあったとか、大きなモノが落ちたとか、――誰かが助けを求めるようにドアを叩いた、とか」
女刑事は一切容赦なく繰り出した言葉に、私はどきりとした。
昨夜、神社から帰ってきてから、確かに不審な出来事があった。でも、それはきっと取るに足らない、他人に言う事ではない、私の気のせいなのだろう。

電源を落としはずのパソコンが起動していたとか、誰かが何度もドアを叩いていたとか。きっと眠気で頭が朦朧としていたのだろう。もしかしたら夢だったのだろう、という逃避を、目の前の女刑事は阻もうとしている。
「い――いいえ。なにも」私は、逃げることを選んだ。
「……本当か」女刑事は容赦なく威嚇の視線を突き刺す。
それでも私は、何もありませんでした、と頷いた。
「よかろう。では、最近この周辺で不審者が度々目撃されているようだが、見たことはあるか？」
「え――？」脳裏に瞬時にして浮かんだ。
その不審人物は十中八九、私を狙っているストーカーの事だ。私だって気づいたんだ、他の住人がまったく知らない訳がない。
「はい。なんどか……」
「そうか。姿や人相、その他特徴のようなモノは分かるか」
「いえ。……遠目でしか見たことが無いですし、いつも暗かったですから」
「……なるほどね。今のところ、そいつが最有力なんだがな。どいつもこいつも人を見る目がない。事件が増える一方じゃないか、クソッ」
悪態つく女刑事。
「あの、事件って……」
「あ、……事件とは我々の仕事の事だ。それより、他に何か不審な出来事、不審な奴、妖怪を見たとかないか」

「え、妖怪？　い、いいえ」
「……ならばもういいぞ。さっさと部屋に帰って、我々が撤収するまで出てくるな、邪魔だ」
ご苦労さん、と一言残して、刑事は左側へ歩き出そうとした。
待ってください、と私はその人を呼び止めた。
女刑事は不機嫌そうな表情で顔だけ振り返って、何だ、と睨んむ。
一方的に質問だけされて、訳の分からないまま帰るのも癪だった。
「あの。ここで何があったんですか」
私は簡潔に尋ねた。
女刑事は本当に面倒くさそうに苦虫を噛んで、
「殺しだ」
臆することなく物騒な言葉を、一般人に放った。
「だ、誰が……」
殺されたんですか、とまで言えなかった。
それでも、質問の意図は通じたのだろう。女刑事は半身回転させ、左側の通路の奥を指さした。
その時、女刑事の脇を元気一杯に駆けってくる見知った女の子を、幻視した。
「７０３号室の儀藤一家だ。室内で両親が殺されたたんだよ。それと、娘がいるが――――」
知らない名前の家。
知らない家族の惨劇。
そんなものには、やはり関係ない。
だというのに、鮮明だった。
女刑事の脇を走り去り、エレベータのボタンの前でにっこり微笑む見知った女の子の幻が、どうして、鮮明で脳裏からはなれない。
女の子は小さかった。
だからエレベータのボタンに手が届かなかった。
だから私に、いつもこう言うんだ。
「娘の名前は儀藤レナ」
――――お姉ちゃん。
いつも私にお願いしていた。
だから、私がいないと女の子は、ボタンを押せない。
女の子は一人では、この階から出られない。
「娘の方は逃げ出したようだが、ちょうどここで殺されたようだ」
一人だから逃げられなかった、と言う。
その時、私がいなかったから女の子は殺された。
逃げられなかった。
寒気がした。
昨夜、ドアを叩く音が身体の奥から響く。

どんどん、と内側で響く。
もしかしたら、と吐き気がする想像が過ぎる。
どんどん、とドアを叩いていた。
私はそれに応じなかった。
開けて、というお願いを断った。
「ああ、あとな。娘の方の死体。まだ見つかっていない。まだ近くにあるかもしれん。拾ったら交番に届けろ」
女刑事は規則正しい足音を鳴らしながら遠ざかる。
まだ近くにあるのだろう。
近くにいる。
少女の幻は、今も、微笑みながら私を見つめいる。
そして、
――――お姉ちゃん。ボタン、押してくださる？

◇

人は疎ら。人類は絶滅寸前なのかもしれない。
駅の近くの小さな公園には、私しかいない。
見上げると、黒い雲が星の輝きを覆っていた。
雨がふるかもしれない。
風は強く生温い。嵐になるかもしれない。
時計を見た。午後八時を半分過ぎていた。
影に占領されたベンチに座りながら、深呼吸。
それから、自分の姿をみた。
出来上がったばかりのコスチュームは、このままどこかのパーティにでも出かけられそうなほど、カジュアルな洋服とは一線を画いているドレス。ふわりと膨らんだフリルのスカート、まるで童話のお姫様。お人形のように実用性より装飾性の高くて、日常的な装いではない事は一目瞭然。
ゴシック調のドレス。けれど喪服のように黒い。
袖を通すと、自然と残虐な気分に酔いしれ、だけど頭の芯から冷たくなっていく。
夜の同じ色の服は、容易に闇に同化する。
毒のように色鮮やかな人工灯に照らされ、幻のように人々の前に現れては、再び闇に潜む。これを着ている時、私は姿なき悪魔。

沸点を超え、溶岩のようにドロドロと渦まく攻撃的な感情を握りしめ、深呼吸をしてからベンチから立ち上がった。

そして何をするか、それは数時間前に決まっていること。

だから私はポケットから携帯電話を取り出して、プッシュボタンを押して、数時間前の電話相手にコールした。

まだ警察関係者で行き交う中、マンションの一室、自分の家へ帰った時、まるでどこかで監視していたようなタイミングで電話が鳴り響いた。自分の部屋に直行して、子機で取った。

電話の相手は、神籬だった。

『よう、おかえり』

飄々(ひょうひょう)とした口調、重苦しい声が電話口から聞こえる。

『俺が言った意味、分かったか？、一之宮』

まるで私を叱るように厳しい声だった。だから少し頭に来て、分かるかバカと怒鳴り返した。すると小さなため息が聞こえた。

『マンションで殺人事件が起きてただろ。しかも、おまえんちの近所だ。――知り合いじゃないか、殺された一家。あの女の子の家だろ』

「っう。そ、それがなんだっていうの！」

『分からないか。俺は前々から忠告しただろ。オマエは呪われてるようなモノだ、呪いはオマエ一人じゃなくて、オマエの周囲の人間に危険が及(およ)ぶ、ってさ。まさか忘れたわけじゃないだろ、自分が置かれている状況を』

「だ、だから、何が言いたいの！　いつもいつも回りくどいんだよ！言いたい事があるならハッキリ言えよ！」

『分かった、ハッキリ言おう』

息を呑んだ。

『儀藤一家を殺したのは、オマエのストーカーだよ』

吐いた息を呑んだ。

『もう見てるだけじゃない。これからは、襲ってくるぞ』

視界が点滅した。

『周囲からじわじわと、忍び寄ってくる。近所の住人、友人、家族、そして最後は――――』

頭が真っ白になる。

『最後はオマエだ、一之宮小夜子』

どんどん、とドアが響く音が聞こえた。

どんどん、とその音が不思議と耳元で聞こえた。

『うかうかしてると、一之宮。おまえ、殺されるぞ』

身体が弛緩(しかん)する。受話器が手から落ちる。

膝(ひざ)が挫けて、床に座り込んだ。

今まで避けていた未来を、ハッキリと告げられ、嫌が応にも想像してしまった。周りの人達がどんどん殺されて、最後に殺されていく自分の姿を。

床に落ちた、受話器から声が聞こえる。

『一之宮。昨日言っていた対策はどうだ、順調にすすでるのか。大丈夫なのか。本当に、大丈夫なのか。間違いないのか』

「あぁ――――」

そうだ、私は、昨日神籬に言ったんだ。余計な事をしないでって、大きな事を叩いたんだ。神籬の好意さえ、私は突っぱねて拒絶したんだ。

その結果が今のこのざまだ。

結局、大口叩いていた対策は間違いだらけの方法で、無意味な妄想の産物だった。

他力本願もいいところだ。神様に祈る方がまだ救いがある。私はその祈りさえ間違えていた。

だから、何もない。

今の私には、抗う力はなにもない。

「助けて……」

縋るように受話器を握って、気づいたらそう零していた。

「どうしたら……わたし、どうしたらいいの？」

私には何もない。

どうすることも出来ない。

だって呪いは壊れてしまった。

私に出来ることなんて、もう、何一つないんだから。

『午後九時。伏木駅の三番ホーム』

突然、受話器からそんな言葉の羅列が聞こえた。

『余計なお世話かもしれないが、変態の思い通りに事が進むのは癪だったから、逆ストーキングした』

「え……逆、ストーキング？」

『ああ。素性は掴めなかったけど、行動パターンは掴めた。アイツは四六時中おまえを尾行している訳じゃない。ちゃんとした生活をもった社会人で、時間を見つけてはストーキングしていたんだよ。まだ確証はないが行動パターンはつかめた。おそらく、今夜九時に伏木駅の三番ホームにアイツは現れる。そこからアイツの家まで行くか、人目のない所まで尾行しよう。一之宮は変装して来い。普段、着ないような服装で、黒系が良い。もちろん俺も一緒に行くから。用意しとけ』

「え、な、なに……」

矢継ぎ早に繰り出される神籬の言葉に、その意味が全く掴めないまま、私は置いてけぼりをくらったように、色々の事が勝手に決まっていく。

「神籬、何をするつもりなの？」

走り去るような神籬の語りに、私はしがみつくように訊いた。

すると、鼻で笑って、不敵で挑戦的な声が耳もとで囁かれた。

『直接対決だ。――――覚悟を決めろ、一之宮』

待ち合わせの時間は過ぎている。

焦る気持ちは苛立ちに分けられ、混ざり合いながら歯軋りを鳴らす。

手にした携帯電話を耳に当て、何度目かのコールで私は腕を降ろした。

「なにしてんだよ、あの馬鹿」
一人愚痴る。公園の墓標のように刺さった時計を見た。もうすぐ九時になってしまう。約束の時間は過ぎている。
今夜で終わらせる、という高揚感。
ストーカーに会う、という緊張感。
その他大勢の付属のマイナス感情。
一つの箱に詰め込まれた渦巻き混ぜて、心臓を圧迫し続ける状況に、もう数時間も浸かっている私は、今か今かとそれらから解放を待っていた。早く早く、と待っていた。
ポケットにしまっていた携帯電話が震えた。
反射的に取り出して、耳に当てた。
「もしもし、神籬？」
抑えきれない苛立ちをそのまま声にした。
そのまま罵倒するように言葉を続けようとした。
けど、
『一之宮。悪い、今夜は中止だ！』
逼迫した神籬の声が遮られた。
「え、な、何、中止って。何で！」
一方的に命令だけして、電話を切られた。
「な、なによ！」
文句を言う頃には、耳もとでは電子音しかしなかった。

「何があったの……」
苛立ちは、すぐに神籬らしからぬ言葉で不安に変わった。どう考えても異常事態とし思えない。理由さえ説明する暇もなく、こっちの質問にも答える余裕もない言動に、神籬の身を案じてしまう。
だけど、だからと言って神籬の命令に頷けるモノではなかった。今夜は中止だ、すぐに帰れと言われて、はいそうですかと従うほど、余裕がないのは私も一緒だ。
「ここまで来て……帰ってたまるか！」
今夜は中止、そしてこのまま帰ったら、それこそ相手の思うつぼだ。神籬は分かっていない。これはそんなにノンビリとしられる状況じゃない。　アイツが何時何所に現れるか分かっているなら、そこで終わらせなければならない。これは、そういうものなんだ。
「今夜で、終わらせるんだ。でないと、また……」
神籬は正しかった。アイツは私だけではなく、私の周りにとっても危険なんだ。私はそれを甘く見ていた。
結果、あの女の子は殺されてしまった。
顔も知らない家族の惨劇なんて、朝陽の印象より薄い他人事だけど、あの子はそうじゃなかった。
あの女の子は、私に助けを求めてドアを叩いた。
だけど私は、見殺しにしてしまった。
だから、どこにも逃げれずに、殺されてしまったんだ。

あの、ストーカーはついに、私の周りに牙を向けた。
次は、私の友達からもしれない。次は、私の両親かもしれない。次は、私自身かもしれない。
そんな危ない爆弾を抱えたまま、放置して誰かが巻き込まれてしまうのを待っているだけなのは、もう嫌だ。
すべての元兇は、すぐ近くにいる。
恐れることなんて、無いんだ。
相手は、ストーカー。
臆病で卑怯なストーカー。
こそこそ隠れているだけだ。
だから――――――、
『ねぇ、そのすとーかー……それって、隠れんぼじゃないの？』
隠れんぼと同じ。
見つけ出して捕まえて晒してやればいい。
私は鬼なんだ。
鬼が恐れる事なんてない。
隠れ潜む時間は十分与えた。
だから、精々怯えろ。
今から、見つけに行ってやる。

「もーいいかい……」呟くと、笑みまで零れた。
時計を見る。もうすぐ九時になる。
私はすぐに駅に向かって駆けだした。
暗澹（あんたん）とした公園を抜けると、眩しい外灯が疎らに乱立して、まるでバリヤのように夜闇を侵入を防ごうとしているようだ。そして駅の入り口はもっとも明るく、そこには闇はない。その中に、闇と同化していた私は駆けた。
切符売り場で入場券を買って、廃線寸前の田舎駅のように疎らな人の往来からの視線を無視して、ホームに入った。
ホームの時計を見た。あと十分弱で九時なる。時刻表では九時とその十分後に三番ホームに電車が到着すると表示していた。
三番線は改札口から二つ線路を挟んだ向側。陸橋へ向かい、階段を駆け上がった。ホームにいる人はスーツ姿の大人が数名と派手な服の女性が数名。人気がない。そのせいか、天上から吊される照明が、やけに暗く感じる。
三番ホームを示された階段を駆け下りる。線路を挟んで向こう岸には人はいない。無人駅のよう。フェンスがある。その向こうは完全に暗闇。まるでぽつりと切り抜かれたように、三番ホームは、暗闇から電車が来るのを静かに待ち受けていた。
屋根から吊されている時計を見た。あと七分弱。
私は自動販売機の影に隠れた。

緊張が心臓を苛める。どくんどくん、と過剰なほど血液を循環させる。
高揚感に、口元が緩む。
もうすぐ、もうすぐ、もう少し。
早く来い、早く来い、見つけてやるから。
自動販売機の影で、拳を震わせ待った。すると電車の到来を知らせるベルが鳴り、すぐにけたたましい音を立てて電車が駅に入ってきた。それは三番ホームではなくて、別の、ちょうど向かい岸のホームだった。
電車は少ない乗客を数人降ろして、潔く去っていく。
時計を見た。あと五分。
遅速な秒針より、心臓の鼓動が何倍も早く脈打つ。
握った拳が汗ばむ。額に汗が流れる。
喉が渇く。呼吸するたびに痛い。
待っているだけで気絶しそう。
まだかまだか、と今にも暴徒と化そうとしている感情の群れが、私の身体を熱くする。
まだか、と時計を凝視する。あと三分。
何も到来しないホームは静かで、誰かが陸橋を駆け下りてくる足音さえ響く。自動販売機の影から、焦げ茶色のスーツ姿の男が急ぎ足でホームに駆けてきたのが見えた。そして、電車の到着を、私と同じように、今か今かと待つよう顔を左右に振る。
「っあ――――――」
瞬間、私は思わず悲鳴をあげそうになった。
脳裏にフラッシュバックする。写真。
「あ、ぁ、あ――――――」喉が痙攣する。
土曜日の昼。誰かの財布に入っていた一枚の写真。そこには家族らしき人達が写っていた。その中に写っていた。
「あぁ、ぁ、ぁぁ」
ストーカーが、今、私の前に現れた。
「――――――ぁ」全身が強ばり、声が出ない。
無人のホームに現れ電車を待つ後ろ姿のスーツの男性。体格は痩せていて、好青年風で、一見善良な一般人。けど、左右に首を振る一瞬に見える目は、細く陰湿だ。
間違いない。
間違いなくこの男が、榊宗一郎――――ストーカーだ。
「っく――――」歯を食いしばる。歯軋りが鳴る。
ストーカーは善良そうな風袋で、
幸せそうに笑みを零して電車を待っている。
脳裏に浮かぶ。
幾度となく目撃した不明瞭な追跡者の姿。まるで濃霧に覆われていたような姿が、今、明瞭と現れた。
今までその存在に恐怖や不安が付きまとっていた。
だけど、今はもうない。

脳裏に響く。
見知った女の子。罪のない子。レナちゃんの声が響く。お姉ちゃん、
と私を呼ぶ声に親愛が籠もっていた。愛らしい響きと声を、奪った。
ヤツが――――。
脳裏を焦がす。
誰かが言った。私は呪われていると。
誰かが言った。私を呪っているのはアイツだと。
誰かが言った。私が呪われている限り周囲も呪われていくのだと。
誰かが言った。だから、始末しろと。
脳裏を突き抜ける。
不思議な少年が言った。
呪いなんて必要ない、と。
たった一言の呪文で終わるのだと。
身体を突き動かしたのは、快楽の期待だった。
影から抜き出る。唇を舐める。
細長いホームには二人だけ。
逃げ場を無くすように、
逃げる隙をあたえずに、
背後から、ゆっくり忍び寄る。
今までの仕返しとばかりに、忍び寄る。
そっと、気づかれないように、息を潜めて。

だけど、加虐的に笑みが零れてしまう。
嗤(わら)いを噛み殺す。
噛み殺したら歯軋りが鳴る。
握りしめた拳が震えて、肩まで振るわす。
一歩。忍び寄る。
一歩。忍び寄る。
一歩。まだ気づかない。
あと、三歩。
ふ。
一歩。フリルのスカートが風に靡(なび)く。
脳裏で呪文を再生する。ここで唱える呪文、
ふふ。
一歩。口を開ける。喉が鳴る。目が焼ける。脳が溶ける。
難しいことじゃない。真言でも祝詞でもない。恨みでもない。
たった一言。それで終わる。
ふふふ。
一歩。手を伸ばせば触れる事が出来る。
嗤った。
恨み、辛み、憤怒、憎悪、殺意は無かった。
その瞬間、私は嗤った。
心底、

「　榊　宗一郎　」

微動して、骨を軋ませ振り返る男
を、唇を恍惚に濡らし、

「み――――つけ、た」

終わりの呪いで、捕まえた。
凍結するように世界が遅速する。
驚愕と恐怖の二色に男の顔が変貌していき、餌を求める愚魚のように
口を繰り返し開閉しながら、零れそうなほど瞼を開いて、一之宮小夜子、
をまだ見続けようとしている。
ふ。
ふふ。
滑稽だった。
「やっと会えましたわね、ストーカーのおじ様」
ふ。
ふふ。
一之宮小夜子ではない、私が微笑みながら呪う。
男は震えていた。極寒の地に放り投げられたように震え、肉の少ない
頬が痙攣し噛っているよう。

ふ。
ふふ。
無様だ。
「ねぇ――――、おじ様」
私が一歩近づく。
男が一歩下がる。
風が吹き抜ける。微風。
それだけで男は酩酊したようにふらつき、簡単によろめく。
私は一歩近づく。
男は千鳥足に後退し、白線を越える。
渦巻き暴れる感情を忘却し、
この黒い幼服に相応しい微笑みを浮かべ、
口元の三日月を広げ、

「――――死んでしまえ――――」

最後に、私は呪った。
最後だ。
最後だった。
男が私の呪いから逃れようと身を翻す。
骨が砕けたように揺れる足が、男の身体を後ろへ逃がす。

白線は既に超え、退路は崖。
だから男は逃げた先は、崖の向こう。
「へ――――？」
壊れた玩具の様に間の抜けた音を鳴らし、弛緩しきった顔をそのまま
に、男はホームから転落した。
私の視界から男が消えた。直後、けたたましいベルが鳴り響く。線路
上から這い上がってこない。ホームに這い上がってきたのは、
「うぁぅあぁうあぁぁぅあぅあぅあぁあぁぁうぁうあぁ」
聞くに堪えない男の絶叫だけ。
思わず耳を塞ぎたくなる。
壊れた管楽器に暴風を吹き込むような音が、ホームに、いや、駅全体
に空気を伝って感染せんと響き渡る。
眩しいライトが轢いた。
聴く者全てを切り裂く轟音が轢いた。
そして最後に、圧倒的な重量の鉄槌が、
線路上の男を、その聞き汚い断末魔ごと轢き裂いた。
「――――あ？」
男が残した最後の音さえ、すぐさま駅にいた人々の悲鳴にかき消され、
この世から消えてしまった。
は。
はは。

ははは。
口もとを手で押さえた。
悲鳴の合唱と甲高いブレーキ音の余韻が反響する。
その中、私は沈黙、言葉を発せず俯いた。
その時、ホームに飛び散った斑な鮮血が目に入った。
は。
はは。
ははは。
口もとを手で押さえた。
深く息を吸った。
左右から駆け寄ってくる駅員と競争するようにスタートダッシュ。
全速で惨劇協奏曲が鳴り響く駅を駆け抜けた。
走った。
両手を大きく振りかぶって。
走った。
両足を大きく振りあげて。
走った。
面白いほどの速度で私は走っていた。
眩しすぎる人口灯のバリヤは、闇色の私を拒絶するように背中を押し
てくれているのだろう。
駅から出るまでジェットコースターのように風景は掠れて流れた。

そして跳躍するように駅を出る。
夜闇が同胞を歓迎するように向かい受ける。
着地。その瞬間にすこし足を少し滑らせたが、そのまま走った。前方には色鮮やかな花が逆さまに咲き、風景はノイズが走ったように掠(かす)れていた。
頬(ほほ)にぶつかる雨粒。
雨が降っていた。
黒い雲から零れた透明の雫に、黒い服が一層黒く染まる。
走る。
逆さに咲いた花をかい潜り、走り抜けた。
呼吸の仕方を忘れた。
走る。
思考の仕方を忘れた。
走る。
その前の事(過去)を忘れた。
走る。
この後の事(未来)を忘れた。
走る。
苦痛と怒りを忘れて。
走る。
ふ。
ふふ。
ふふふ。
走る。
走った。
見慣れた長方形の群れが、闇夜に浮かぶ。
広すぎる庭。駆け込む。曲がりくねった道。
今にも息絶えそうな外灯の明かりが、かき消された。
雷鳴。
天蓋のような黒雲が地上を白々と一瞬照らし、轟音を伴って軋んだ。
それにも怯むことなく、私は走った。
そして、マンションの正面玄関に駆け込み、口を開けて私を待っていたエレベーターに飛び込んだ。
そこで、懐かしい酸素を大きく吸い込んだ。
すると、走っている途中に忘れていたモノが、戻ってくる。
ふ。
ふふ。
ふふふ。
右手の甲を噛んで口を塞いだ。
低い駆動音を響かせ、箱が上がる。
乱れた呼吸を整える暇もなく、エレベーターは七階に到着した。
廊下に出る。

不気味な静けさに耳を傾ける気はない。
誰かのために待つ事もしない。
誰かのためにボタンを押すこともない。
見知った女の子はもういないのだから。
たった十メートル弱の廊下を全力疾走。
同じような扉が並ぶ。中に何が入っているか分からないビックリ箱のように、静かに開かれるのを待っている。
一番右端の扉を開けた。
乱暴に開け、それ以上に乱暴に閉めて、
その場に崩れるように座り込んだ。
そして、ようやく――、

「ふ――っふぁあははっはははは――ッ！」

嗤った。
「っあっあっはははっははははははははははははははっは」
嗤えた。
「はははははぁはぁははああぁぁはは――ッ」
心底、心壊れるほど嗤った。
「はぁあぁははぁはははぁぁはぁぁはああぁはは――ッ」
乱れた呼吸に喉が壊れそう。

痛む喉を気にせず、大声で嗤った。
誰もいない家の中で、独り嗤った。
生温い雨水の抱擁さえ快感だった。
ひんやりとしたドアの硬さが心地良い。
目の前には暗澹（あんたん）とした暗闇しかないのに、
身体が捩（ねじ）れるほど可笑しかった。
だから、嗤った。
「はははははぁはあっあはっああははっは――」
嗤った。
「っは、はは」
嗤って、
「あ、ははは」
嗤って、
「っふ、はは」
嗤って。
「はは、あ、ぁ、ぁ――v」
窒息するほど嗤って、
「あぁぁぁっぁぁぁぁぁっぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁっぁぁぁっぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁあぁっぁぁ――」
泣いた。

悲鳴のように、
絶叫のように、
断末魔めいた声をあげて泣いた。
濡れきった顔に暖かい水が生まれる。
泣いた。
顔が崩れていく錯覚さえするほど泣いた。
泣き声をあげる度に、脳裏では声が聞こえた。
――お姉ちゃん、と声がした。
聞こえてくるはずのない声が。
いるはずのない女の子の姿が。
涙を流すほど、鮮明に脳裏に浮かぶ。
あと、一日。
たった一日。
もう一日早ければ、女の子は――――。
私は泣いた。
無様なほど泣いた。
馬鹿みたいに泣いた。
喉がかれるまで泣き続けた。
黒い黒い部屋に響く。
私は独りで泣いた。
響くのは私の泣き声。

何もかも枯れるまで、涙を流し。
何もかも嗄れるまで、泣き喚く。
ごめんね、と私は泣いた。
ごめんね、と独り泣いた。
許してね、と泣いたけど、
女の子の返事は有るわけが無い。

８／九月二十二日（水）

やっと――――終わった。

そんな達成感で目が覚めた。

鬱陶しかったストーカーは消えた。私の目の前で、私の目の前から消えた。死んだ。間違えなく死んだんだ。

死んでしまえ、と呪ったら本当に死んだ。

微かな恐ろしさはある。けど恍惚的な歓喜が今、私を包み込んでいる。

今日から、やっと元通りの生活に戻れる。

私は退屈な日常生活を謳歌すべく、死んだように静かな我が家を出た。

朝まで雨が降っていたのだろうか、アスファルトの上には水溜が点在している。降り注がれる朝陽、吹き去る微風、何もかもが不思議と爽やかだ。

けど、そんな爽やかな気分も、教室に着くと五分とせずに鬱陶しさに潰されてしまう。

初めは気のせいかと思っていたけど、クラスメイト達のひそひそ話に、どうやら私が使われている様だった。先週は絵馬が標的にされていたのに、なんとも節操のない奴らだな。

そんな事を思いながら、多少の鬱陶しさを我慢していると、クラスメイトの女子が一人やって来て、挨拶もなく開口一番に、榊と三角関係の修羅場ってホント？　と尋ねてきた。

その質問の破壊力たるや、失神級だ。訳が分からない所で、昨日の榊とのいざこざが、そんな風に解釈されていたようだ。訊いてみたら、どうやら昨日、事態の収拾に乗り出した神籬がそんなデタラメな事を言ってみんなを納得させたらしい。

「あんにゃろ……吊す」

不名誉な噂をばらまいた責任を追及するために、一時限目が始まる前に神籬のクラスに向かった。けど、神籬はどうやら今日は欠席のようで、同じクラスの礼慈の姿もなかった。

そして、一時限目の授業が始まっても、絵馬と榊は現れなかった。

不意に、私独りが取り残された気がした。

それは酷く気持ち悪かった。

だけど、そんなのはやっぱり錯覚だ。

昼休みなると、いつものように屋上に誘われた。

ただ、今日は予想外にも神籬が私を呼びに来た。

「一之宮。おまえは無事だったんだな」

神籬は私の顔を見るなり、安心したように安堵の息をもらしながらそう言った。そして、一緒に屋上に来てくれと、私の返答を待つことなく、腕を取った。

そして、そのまま屋上へ連れ込まれる形で到着すると、白々としたコンクリートの上、白々とした陽射しの下に、私たちを待ちかまえるように、礼慈が立っていた。

礼蕊だけしかいない。しかも礼蕊も神籬も、楽しく昼食を食べましょう、なんて雰囲気ではない。どこか切迫した、息苦しいほどの緊張感を醸し出していた。その空気は、私にも感染する。

「ねぇ、絵馬は？」

息苦しい雰囲気の中、救いを求めるように神籬に尋ねると、首を横にふっただけ。

「一之宮。真面目な話しがある」

神籬はそう呟いて、私の腕をとったまま礼蕊の所まで進んだ。

私は正直、礼蕊の顔をまだ直視したくない。おどけて、重役出勤か、とでも言えれば、多少は気が楽になったかもしれないけど、この雰囲気はそんな軽口を許してはくれそうにない。だから私は俯き気味に、二人の足下を見ていた。

一之宮、と礼蕊が呼ぶ。つい、顔をあげて礼蕊の顔を見てしまった。

「聞きたいことがあるんだ」

そう言った礼蕊の顔は、いつかここに呼び出された時のように厳しい表情をしていた。けど、あの時のように覇気はなく、見ている方が胸を痛めてしまうほど辛そうな苦渋の表情だった。

「その前に、榊のことで話がある」

そう前置きを言った。

きっと、昨日の事を追求する気なのだろう、と責められる言葉を拒むように顔を背けた。すると神籬が音もなく背後から近づいてきた。

「榊が行方不明になった」

低い声を、私の耳に落とした。

「え？　……なんて？」

唐突の降ってきた言葉を上手く拾えなかった。

「昨夜。榊の祖母と両親の死亡が確認された。そして、榊あやめだけが行方不明だ」

神籬は、まるで資料を読み上げるように抑揚のない声で、私が聞き逃さないようにハッキリと言った。

「うそ……。冗談でしょ」

理解できなかった。受け付けられなかった。

苦笑いを浮かべて二人の顔を見ると、まるで葬式の席のように心痛な表情を浮かべたまま俯いている。

「それ……マジなの？」

「ああ、全部本当さ」

もっとも辛い言葉を神籬が言う。

礼蕊はただ何かを堪えるように口を閉じていた。

「でも、なんで……」

「理由はまだ分からない、そんなの犯人に聞くんだな。今分かっている事は、榊一家が、例の連続箱入り殺人事件に巻き込まれたって事だけさ。今のところ理由なんて、天災や祟りと同じだよ。呪われて死んだって噂してるヤツもいるぐらいだ」

「のろ、い――――？」
不穏な言葉が脳裏を掠(かす)める。
寒気がした。
榊一家が呪われていたのだとしたら、呪ったのは、
私だ。
「祖母と母親は殺害され、父親は昨日の夜、伏木駅のホームで電車に轢かれて死亡」
抑揚のない神籬の声が響く。
そう、死んだんだ、と感慨なく思い出す。
そう、呪ったんだ、私が。
私が、榊の父親――――榊宗一郎を呪ったんだ。
死んでしまえ、と呪った。
「一つの不幸が周りに感染したように、一家全滅だ」
呪いは感染する。呪いは呪われた本人はもちろん、周囲にも及ぶと言ったのは、誰であろう、神籬だった。
神籬の言葉は、まるで私を咎(とが)めるように硬い。
オマエが呪ったから、榊一家までの呪われたんだ、と。私の罪を見透かして上で、知らん顔して、断罪するように神籬は言う。
「いや、全滅じゃないな。榊あやめは生死不明の行方不明だ。今、警察が捜してる。奥津城も今日はそれで休んでる」
神籬がフェンスの向こうを眺めながら言った。
「絵馬が？」
「ああ。どうも奥津城が第一発見者らしい。俺も礼蕊も、奥津城から事件の事を聞いた。それが今朝のことだ。奥津城は家に残ったけど、俺と礼蕊は用があるから、さっき登校した」
「二人の用って……それも榊に関係あること？」
「ああ。重要な用件だ。話しを聞かなくちゃいけない」
神籬はそう言って、礼蕊の方を見た。すると礼蕊が話を引き継ぐように顔をあげ重い口を開いた。
「一之宮。何か知ってるんじゃないのか、榊の事」
礼蕊が動いた。一歩踏み込んだ。苦渋な表情を私に見せつけるように、近づく。
「昨日のあれ……。一之宮が何を言ったか分からないけど、あやめは凄く動揺してた。……何を言ったんだ、何を知ってるんだ一之宮。……俺、正直まだ信じられないんだ……なにもかも、何がなんだか、分からない」
礼蕊の表情は痛々しいほど苦悶に満ちていた。絶望を背負っているようにさえ思えた。声にも覇気がない。
どうして礼蕊がそこまでショックを受けているのか、容易に想像がついた。榊はきっと、礼蕊を受け入れたんだ。二人は、寄り添う事を許したんだ。礼蕊が榊を『あやめ』と呼ぶようになったのは、違和感を伴いながらも、それらの事を察するには十分な変化だった。

「榊あやめはな、行方不明になる直前、奥津城に電話で告白したんだ。お母さんがお婆ちゃんを殺して、その死体を一緒に鳥の森の樹海に捨てたって」

今にも崩れそうな礼慈に代わって、神籬が言葉を繋いだ。

言葉の内容は悲惨で血生臭いのに、抑揚のない神籬の声が、まるでどこか遠い場所の知らない他人の出来事を語っているように聞こえる。

でも、その魔術は一瞬。言葉の違和感に、私は目眩がした。

「な、なに、それ……。本当、なの？」

他に言葉が出なかった。常套句のように確認するばかり。神籬もそうだと頷くだけで、私の理解を置いていくように話しを続けた。

礼慈の顔は真っ青だ。

「奥津城が言うには、月曜日に祖母は殺害されたらしいだけど。どうやら検死の結果、死亡推定日時はそれより一、二日前なんだ。殺人と死体遺棄なんて告白をしておいて嘘をつくのも、おかしい。……榊の自白と事実が一致しない。その理由を俺と礼慈は探しているんだ。ま、礼慈はあの通り、ショックを受けてるから思考をストップしてる状態だが」

神籬が親指で指さす礼慈からは、今にもフェンスを乗り越えて屋上から飛び降りそうな雰囲気さえ感じる。

「一之宮。おまえ、何か知ってるな、榊の秘密を」

神籬の問いかけは、命令に近かった。私が、榊の秘密を知っている事を前提に、それを話せと強要するような力強い声だ。

なぜそんな言い方をするのか、イラっとしたけど、すぐに納得した。だって、榊の秘密を暴けと助言したのは、目の前の男なのだから。

「俺の推測だと、土曜日の夕方に、榊家では何か起こったはずだ。それを、一之宮は目撃したんじゃないのか。あの後からだろ、オマエの榊に対する態度が変わったの。敵意や警戒心を持ったんじゃないかの、あの榊に。それほどのものを、オマエは見たんだろ。榊の秘密はなんだ」

低く重い声。

きっと神籬は何もかも、お見通しなのだろう。

鷹の目に似た鋭い視線は、一挙一動すら見逃すまいと、私から離れない。どうなんだ、と恫喝めいた追い込みをかける。、

「そ、それは……」ちらりと礼慈の表情を窺った。

すぐに視線を逸らす。死刑判決を下された囚人のように魂の抜けかかった姿を、長くは見ていられなかった。

まるで私と神籬が、礼慈を追いつめているようではないか。でも、私は今から礼慈をさらに追い込むような事を口にする。

「礼慈の事は気にするな。覚悟してるからここにいる。だから、おまえの話を聞かせてくれ」

神籬は私の不安を察して、そう促した。

だから、私は躊躇いながらも土曜日の夕方に見た、榊家の惨劇を私が見たまま言葉にして、二人に話した。

私が感じた榊の自白の違和感。それが何であるかは明白だった。

祖母を殺害したのは母親、と榊あやめは自白したらしい。
けど、私が見た現実は違っていた。
祖母を殺害して解体したのは、榊あやめ本人だった。
その事実を全て話した。途中、礼蕊の顔を何度か一瞥した。
「なるほど。……警察の情報とも一致するな。それがきっと真実なんだろうな」
始終黙って話を聞いていた神籬が冷静に、私の話にピリオドを打った。
それがトドメとなったように、礼蕊はふらふらとフェンスに寄りかかるように崩れ落ちた。意気消沈した姿は、痛々しかった。普段の彼を思えば、それは一層辛い。
「参考になった、ありがと一之宮」
神籬は素っ気ない言葉を残し、礼蕊の元へ歩み寄っていく。
所在なく突っ立っている私も、少し遅れて神籬の後を追った。
「礼蕊。気持ちは分かるが、しょげてても仕方がない。まだ受け入れられないなら待つが、拒むことは出ないぜ」
神様へ祈りを捧げるような格好で項垂れる礼蕊に、神籬は優しいのか厳しいのか分からない言葉をかけた。
礼蕊は苦しそうに、どうして、なんでだ、と繰り返し呟くばかり。私は何も言えなかった。ここで優しい言葉や慰めの言葉を言ってあげられたら良かったのに、私はそんな聖女の素質はなかった。
聖女の代わりに、魔術師が言う。
「榊の婆さんは、祟りを恐れて呪術めいた事をやっていたらしい。近所でも目立つほどにあからさまに。あの座敷童も言ってただろ。呪術は隠さなければならない、人に見られた呪術は、己に返ってくる諸刃の刃だってさ」
二人に近づこうとした私の足が止まった。
「榊の婆さんみたいに、人目に触れた呪術は呪術者を呪う。そう言ってただろ。安易に呪いなんて訳わかんない物に手を出した挙げ句に、自滅したんだよ。今の段階じゃ、そういうことさ」
神籬は礼蕊に向けて言っている。
だけど、その言葉はまるで私を蔑んでいるように聞こえた。
「どんなに理不尽な事があっても、呪いに頼るヤツが愚かなんだよ。人柱だの生け贄だの、そんなことで幸せになれると信じてる奴等なんか、救う価値も未来もない。呪いは、受ける方も放つ方も、双方必ず不幸にする術だからな。榊は、それに巻き込まれたとしか言いようがない」
神籬の冷たい言葉に、俯いていた礼蕊が怒りを露わに、今にも殴りかかりそうな勢いで上がった。
止めて、と咄嗟に間に入ろうとしたが、それを、神籬が冷静に制した。
「やっと、やる気になったかよ。今、オマエがやるべきは、落ち込む事じゃない。榊あやめを救い出す事じゃなかったのか。事件は警察に任せておけばいい、祟り呪いはあの座敷童に任せて、俺達は俺達のやるべき事をしないといけないだろ。違うか、礼蕊」

「……ああ、そうだな。ごめん」
「行くぞ。情報集めたら奥津城と合流するんだろ。それとも午後の授業うけるか？」
「いや、奥津城の所に行こう。ここには、もう用はない」
礼蕗の表情が豹変した。それはいつもの彼の顔だ。真っ直ぐで硬い眼差しが戻った。生き返ったように力強い声を発している。
「一之宮。ありがとな」
そして、やっと私を見て声をかけてくれた。礼蕗はそのまま歩き出し、出口に向かう。神籬も後を追うのかと思ったけど、突っ立ったまま動かない。
「礼蕗、悪いが先に行っててくれ」そう言って、礼蕗を先に行かせた。
そして、礼蕗が屋上から退散して、私と神籬だけが残された。神籬は一度空を見上げてため息をついてから、私の方に振り向いて、昨日はすまなかった、と謝った。
「え、あ、ああ。うん、いいよ、もう。うん、いいの」
深刻な表情で謝る神籬に、私は少し戯(おど)けたような笑みを浮かべて答えた。私にとっては、神籬の謝罪は今はもう意味がないのだから、深刻な事ではなかった。元凶のストーカーは、死んだのだから。
「ところで、一之宮」
だけど、神籬は深刻な表情を崩さず、
「オマエ。昨日の夜、ストーカーと会ってないよな」
まるで尋問するような声で訊いた。さらりと放たれた言葉が、私の心の奥深くを抉(えぐ)るように届いた。
「俺、すぐに帰れって言ったけど。あの後、どうした？」
「ど……どうしたって……」
「まさか、一人でストーカーに会ったのか」
厳しく問い詰める神籬。生半可な嘘なんかつけば即座に看破(かんぱ)されてしまう。黙秘も虚偽も許さない雰囲気に、私は昨日会った女刑事を思い出した。だから、ためらいながら恐る恐る頷いた。
「バカか、オマエ」
用意されていたような罵倒が飛んだ。
「約束を破ったのは謝るけど、だからって何で一人でそんな危険な事をすんだ！　危ないから俺がついて行くって言っただろ！　いくら焦ってたからってそんな無茶……何かあったらどうするんだ！」
「ご、……ごめん」
驚いた。ここまで激しく叱られた事より、冷静な神籬が感情を露わにして、声を荒げている姿に驚きもし、戸惑った。
「それで……見たところ無事みたいだけど。どうなったんだ」
けどそれは流れ星のように一瞬。神籬はスイッチが入れ替わるように冷静な態度に戻った。
「もう、大丈夫なのか？」
神籬の問いに、

「うん。もう、終わったから」
私は結果だけを告げた。
「そうか、よかった」神籬が安心したように息を盛らした。
「だったらもう安心だな。俺はこれから、礼慈の方を手伝うから、もう行くけど、何かあれば言えよ。俺は一之宮の味方だから」
「うん。あんがと」
神籬は満足げに微かに笑って、礼慈の後を追うように歩き出した。私は何かに急かされるように、咄嗟に呼び止めた。
「ねぇ神籬。さっきの話しだけど……」
「さっきって、何さ？」
「えっと、呪いがどうとか言ってた話し」
「ああ、あれか。ほとんど受け売りだけど、それがどうしたんだ？」
「……あのさ、呪いって……、受ける方も、放つ方も呪われるって、本当なの？」
言って、自分の未練がましさに嫌気がする。もう私は、呪いを捨てたんだ。呪術なんか関係ない。私は正真正銘、自分の力でストーカーと決着を付けたんだ。デタラメな呪いは役に立たなかった。今なら認める、私の呪いは失敗したんだ。失敗したものの残骸に、私は何を求めているというのだ。
「あ、いや、なんでもない。忘れて、どうでも良いことだからさ」
笑いをつくろえて、ほら礼慈が待ってるんだろ、と退却を促した。
神籬は首をかしげて納得しないない風だったけど、そうか、と呟いて歩みを再開させ、ドアの方へ向かった。
「どうでもいいなら、ついでに答えるが」
神籬が、顔だけ振り返って、
「呪詛返しってのがあるらしい。呪術を見られたら、その呪いがそっくりそのまま、自分に返ってくる。だから、呪術を見られたら、逆に呪われるってことさ」
飄々と妖しげな言葉を残して消え去った。
厚顔無恥な陽射しが、私の心をあぶる。
くすぶっていた不安が、深いな匂いを放ちながら焦げていく。
なにか、失念しているような気がして、
ふと、後ろを振り返った。
何も、誰もいない後ろを。

◇

神籬の言葉が取り憑いたように、耳から離れい。
それから、何か調子がおかしい。
今朝の爽やかな気分などもうない。
放課後、学校を出てからだ。
何度か立ち止まった。何度か振り返った。
何度も、聞こえた。
私の歩調に合わせたような足音。
まるで後を付けられているような気配。
「気のせい……もう、消えたんだから」
何度もそう自分に言い聞かせた。
私の背後の居たストーカーは、もう死んだんだ。
だから、誰かに尾行されているなんて私の錯覚。
つい癖で、背後に誰かがいるような気がするだけなんだ。
帰宅するまで、その気配は離れなかった。
マンションに着くと、昨日とは打って変わって野次馬もいなければ静かな、一日で平穏な日常が戻ったようだった。何事もなかったように。
エレベータホール。待ち合わせのように、私はすぐにはボタンを押さなかった。もしかしたら、あの女の子が、どこからともなく元気よく駆けてくるのではないかという希望が、あったのかもしれない。

終わったモノの残骸が、今もここに、確かにあった。
感傷に浸っているのか、それとも余韻なのか、その区別はつかないまま。後始末をすることはない。
無人の我が家に帰宅。外気に当てられ空気が淀んでいた。自室に直行して、鞄を適当に投げ捨てて化粧台に向かう。そしてMacを起動させ、メールをチェック。二日もチェックしていなかったから、溜まっているかと思ったが、メールは一通しか届いていなかった。少し残念だけど、安心したのも束の間、そのメールの差出人が、レイヴェンだと知って息を呑んだ。
「今更……なんで……？」
もう関係ない人からのメール。レイヴェンは親身になって私の悩みを聞いてくれ、呪術まで教えてくれた。それだけは純粋に感謝してる。
だけど、レイヴェンの呪術は結局間違いだらけの偽物だった。そしてその偽物の呪術を、私はとっくに捨てた。だから、使い捨てみたいな言い方だけど、用はない。でも、それでも一言ぐらいアリガトとでも送って終わろうと、レイヴェンからメールを開いた。
そして、吐き気がした。

＞ おめでとうございます。
＞ ストーカーを呪い殺した感想は？

背後からいきなり金槌で殴られた様な衝撃に、呼吸が詰まる。目眩がする。吐き気がした。

「な、なんで……そんなこと――――」

知ってるの、と呟く唇が震えている。

マウスを持つ手が固まる。なのにカーソルは震える。

耳鳴りがした。直後、メール着信を告げる電子音が響く。

画面に出てきたメール。差出人は、レイヴェン。

ためらいながらも、メールを開いた。

＞ よかったですね。

＞ 間違いなく死んでますよ、電車に轢かれて。

呼吸が上手く出来ない。

不気味な悪寒が抱きついてくる。

「なに……なんなの、これ」

分からなかった。

「なんで知ってるの……」

意味が分からない。不気味。吐き気がするほどこのメールは不気味だった。離れなかい。その場から離れて、遠ざけたかった。でも、足が動かない。股関節から先が無くなったように感覚が麻痺している。

再び着信音が響く。

まるで、チャットしているように。私を監視しているようなタイミングでメールが届く。そんな比喩が思い浮かんで、寒気がした。

＞ 貴女は私が教えた通り、ちゃんと呪ったようですね。

＞ でも、残念です。

＞ 次は、貴女が呪われる番です。

＞ 貴女の呪いが、そのまま返ってきますよ。

＞ 一之宮小夜子さん。

「私が……呪われる――――？」

なんで？

「いや……気持ち悪い……」

なんで？

「どうして……だって！」

あんな呪いは、偽物なのに。

成功するはずのない偽物だ。

それなのに、どうして、私が呪われなくちゃ……。

「なんでよ……なんでよ！」

机に投げつけたマウスが大きく跳ね返って、化粧台の鏡を割った。不細工な蜘蛛の巣が鏡の右下に出来上がった。その亀裂が鏡に映る私の顔を傷つける。

着信音が響く。
乱れてしまった呼吸を整えて、マウスを拾ってメールを開く。
差出人はやはり。レイヴェン。

＞ 今夜、お会いしませんか。
＞ 会ってお話したい事があります。
＞ 会ってくださったら、お教えしましょう。
＞ 呪われない、方法を。

簡潔な文章。どこか魅惑が潜んでいそうだった。
「会うって……レイヴェンに？」
誘っている。まるで罠に導くように。
だけど、罠と分かっていても真意が分からない。
本当に教えてくれるのだろうか。
もし本当に私が呪われるのだとしたら。
嫌だ。呪われたくない。
嫌だ。死にたくない。
死にたくない呪われたくない。
願望が私を惑わそうと騒ぐ。
目眩がする。誘惑するような彩りの目眩。
理性が断われと、関係ないと叫ぶ。

それ以上に、呪われたくないと私が叫ぶ。
指が、誰かに操られているようにキーボードを打つ。
そして、教えてください、と哀願の文を綴って送信した。
返信はすぐに来た。

＞ では今夜零時、伏糸公園の噴水前で待っています。
＞ 呪われない方法は、会ってからお教えします。
＞ 安心してください。とても簡単で、すぐに出来ますから。

文面の向こうに、したり顔で微笑む姿が見えそうだ。
私は少し後悔した。何も考えず、ただ流されるままに口車に乗せられたマヌケじゃないか、と。自己嫌悪で血管が破裂しそうだ。
だけど、欲しい情報だけ聞き出したら終わりだ。
そしたら金輪際（こんりんざい）こんなヤツとは関わることはない。
関係ない。利用して切り捨てればいいんだ、と言い聞かせた。
気分がわるいから、届いたメールを全て削除しようと思ってマウスを動かす。その時、またメールが届いた。
差出人は確認するまでもなくレイヴェン。
もう必要なやりとりは終えたのだから、読む必要はない。
だけど、どうせ最後だし、と思ってメールを開いた。

〉言い忘れてました。
〉榊宗一郎は死にましたが、
〉貴女の背中にべったりととり憑いていますよ。
〉後ろに、誰かいませんか？
〉聞こえませんか、彼の、最後の声が。

寒気が背中を撫でた。
振り返った。
誰もいない。
誰もいないはずなのに。

ヒューヒュー、ヒューヒュー、と。

どこからか鳴き声が聞こえた。

◇

午前零時。
駅と学校、そしてマンションの三点の中間辺りにぽっかりと穿(うが)たれたように作られた公園。その広さは小さな学校が一つまるまる入るのではないかというぐらい、公園としてはあきらかに過剰面積。
そして、その大半はまだ青々とした葉を纏った木々に占拠されている。林なのか公園なのか分からない区域は、夜になれば面積に対して、明らかに不足な外灯によって斑模様(まだらもよう)に明かりを灯し、ゴーストタウンめいた静けさを醸(かも)し出していた。
街のど真ん中にあるというのに、ここはまるで隔離されたように静かで人気というものがない。夜遊びをする若者や酔っぱらいにホームレスが一人や二人はいそうなものだが、公園には人の気配も、生命の息遣いさえ無かった。
そして木々に包囲され、どこかのテーマパークにありそうな豪華な噴水の前で、私は待ち人を待っていた。
午前零時。
ここから見える外灯は五本程。申し訳程度の明かりは、周囲十メートル程まで闇を押しのけるのがやっと。
遠くからは車の音が聞こえる。
賑(にぎ)やかな繁華街の音もネオンも遠い。

何もかもが遠い世界の出来事のように、ここだけは静か。
緊張しているように張り詰めた空気。
ここの構成物は、神社のそれと良く似ているような気がした。
午前零時はすでに回った。
日付は変わり、約束の時間も過ぎた。
だけど、人の気配はない。
待っています、という言葉は嘘になった。
一分でも待たされると激怒するという性格ではないけど、私はかなり苛々しているようだ。
午前零時を過ぎた。
公園に到着して何度も時計を確認している。
じっとしていられずに犬のように噴水の周りを何周と動き回った。
苛立ち。焦り。自己嫌悪による自虐。
噴水の水飛沫が周囲の音をかき消すから、背後から急に誰かが現れるのではないかと戦々恐々(せんせんきょうきょう)として、さらに不安も加わって苛立ちに拍車をかける。
ここに居続けるのは精神衛生上よくない。
そう判断して、帰ろうと思った。
その時だ、私の携帯電話が鳴った。
ディスプレイを見ると、見覚えのない番号だった。
不審に思いながらも、少し悩んで電話に出た。

もしもし、と問いかける。
するとノイズが聞こえ、それに紛れて声らしき音が聞こえた。
電波が悪いのだろうか、と少し歩きながらもう一度問いかけた。
数秒、間をあけ、
『はじめまして、一之宮小夜子さん。レイヴェンです』
クリアな音声が鼓膜を揺らした。
吐きかけた息を呑む。足が止まる。
「れ……レイヴェン……さん？」
不覚にも臆して、言葉につまった。
『はい。ごめんなさい、遅れてしまった』
スピーカから聞こえてくる声は、
綺麗で優しそうな女性の声だった。
『もうすぐだから、そこから動かないでね』
まるで友人と話すような軽い声と、
走ってきているのだろうか、乱れた息づかいが聞こえる。
「あ、あの、今どこですか」
私はその場でくるりと回って周囲を見渡した。
『もう　すぐよ。大丈夫、貴女の　姿は見　えてるから』
電話の向こうの声が、上ずって聞こえる。
楽しそう。
『もう　少　しだか　ら……じっ　と、待っ　てて　ね』

声だ乱れている。
レイヴェンの呼吸が不規則で荒い。
「あの、大丈夫ですか。なんだか、呼吸がおかしいですよ」
スピーカーから聞こえてくるのは呼吸音だけ。
しかも獣のように早く荒い呼吸だ。
『平気よ。それよりも　うちょっと　外灯に近づいて　くれないかしら』
「は、はい。いいですよ」
私は言われるまま、近くの外灯に近づき、明かりのサークルの中に入った。
『そう、そこで、待ってて……』
ノイズのせいか乱れた呼吸のせいか、声が掠れて聞こえる。
直感だけど、それは運動によるモノではないように思えた。
何か大きな怪我をしているとか、
苦痛を耐えている時の喘ぎ声に近かった。
「大丈夫ですか。無理しないでください。今どこにいるんですか。教えてくれたら、私がそっちまで――――」
走り出そうと光りのサークルから足を踏み出す、
と同時に、
『　うごくなッ！　』

怒号、
硬直、
金縛り、
え――――？
瞬間、
しゅん、と、
耳元を掠(かす)めた音、
通過、
遅れて鋭痛、
カン、と金属音、
何かが弾けて、落ちた。
一瞬の、
え――――？
出来事。
「な――――に？」
一瞬の金縛りから解放されると、頬に痛みを感じ、触れると手にうっすらと血が付いた。
「なに……？」
頭がまだ金縛り。
ボンヤリと緩慢に振り返った。
すると足下に、細い鉄の棒が落ちていた。

それが、矢だと分かるまで三秒弱。
「なんなの……これ」
状況を理解するまで更にかかる。
でも、それを待たず、
『じっとしてろ！』
耳から話した携帯電話から、怒号が響く。
次の瞬間、――――しゅん、と矢が地面に刺さった。
「え――――う・そ」
まさか狙われてる？
そうと分かった時、また空を貫く音が私を通り抜けた。
その矢を見届けず、走った。
兎に角この場から逃げ出した。
『ちょろちょろ動くな！』
割れるほどの怒号を発する携帯電話を投げ捨て走った。
しゅん、と走り込もうとした先に矢が刺さる。
急いで方向転換。
どうして狙われているのか、そんな理由を考える暇なんか無かった。
とにかく怖かった。矢が当たるのが嫌だった。
走った。

外灯が有る場所をさけ、何本かの矢から逃れて、私は林の中に逃げ込んで、すぐに木の陰に身を隠した。
「はぁ―はぁ―っう……はぁ―、はー」
混乱と同調して呼吸が乱れる。落ち着かせる事なんて後回しにして、兎に角、酸素を貪るように吸った。
木の陰から噴水や外灯の下を覗き見る。誰もいない。何事も無かったように、公園は平穏を頑固にまで保ち続けている。
矢が飛んでこない。
「なんなの……なんなのよ！」
不可解な展開に溜まっていた苛立ちを芝生や細い枝にぶつけた。
分からない。
「なんで？　なんで、なんでなんでなんで」
命を狙われてる？
「私が、何したっていうの！」
思わず叫んでしまった自分の声に驚いて、両手で口を押さえた。わざわざ自分が隠れてる場所を教えている様なモノだ。
「なんでよ……なんでこんなことに……」
声が、喉が震える。崩れるように震える。
「なんで……」頬に傷が染みる。
「私が、なにしたって……」涙が血に混じった。
「お願い……誰か……」

視界一杯の闇が、ふやけて歪む。
「助けて――――――」
全身をふるわせた声が、
ヒューヒューヒューヒュー、
背後から壊れた管楽器のような鳴き声に、切り裂かれた。
「ぁ――――――ッ」悲鳴さえ呑む。
襲いかかる悪寒に引きずられ、振り返った。
すると、闇に白骨の顔が浮かんでいた。
「ッヒ――――ッ」
表情のない能面。
骸骨(がいこつ)。
嘴(くちばし)。
闇だ。
闇色のマント。
気体のように軽く。
ゆらゆら揺れる。
幾重もの衣は、翼のように翻(ひるがえ)る。
まるで大きな鴉。
大鴉が、鳴いている。

ひゅーひゅー、と鳴いている。
壊れた管楽器のような細い声。
それが白骨の能面から漏れる。
「ぁ、あ、ぁ――――――」言葉が出ない。
逃げる事さえ出来ない。
金縛り。全身が弛緩して動かない。
眼球が痺れるほど、その闇を見る。
ひゅーひゅー、
「――――みーつけ、た――――」
ひゅーひゅー。

大鴉が、人間みたいな声を発した。
しかもそれは、ひどく聞き覚えがある声。
思い出せない。誰だ。
誰の声？
「なんでじっとしてくれないかなぁ……。片手だと上手く狙えないんだからぁ……」
無表情の骨の面とは対照的に、人間らしい声。
粘性の高い甘えるような声。
聞き覚えがある。

知ってる。
私、知ってる。
ひゅーひゅー、
「でも、もう逃がさないからぁ、かくれんぼは、お、しま、いぃ」
能面から笑みが零れる。
そのギャップが滑稽なほど、悦に浸った喘い。
ひゅーひゅー、
壊れた呼吸が漏れる。
闇の羽根がふわりと膨らむ。
半身を木の陰で隠して大鴉が、身を露わにした。
近づく。私に、近づく。
動けない私は、見上げていた。
跪き、許しを請うように見上げていた。
闇から白い腕が蛇のように現れる。
細い腕。まるで子供のよう。
その手に、無骨なボーガン。
鉄の茨。矢先が私の眉間に触れる。
そっと、優しくキスをするように、冷たい鉄が当たる。
「あ、あ、ぁぁぁぁぁ、あ、あ、　あぁ」
嫌だ。一秒後の未来。嫌だ。
ヤダ。一秒後の自分。ヤダ。

止めて、許して、お願い、止めて。
願いが言葉にならない。声が出ない。
まるで喉が壊れたように、震える。
涙で、喉がつまる。
呼吸がおかしい。
ひゅーひゅー、

「呪われない方法、教えてあげる、約束だもんね」

ヒューヒュー。
大鴉の頭蓋骨から、その外見に不釣り合いなほど可憐な声が零れた。
知ってる。やっぱり、この声、私、知ってる。
思い出さなきゃ。思い出さなきゃ。思い出さなきゃ。
誰の声？　誰の声？　誰の――、

「呪術は見られたらイケないの。
もし見られたら、呪いは自分に返ってくる。
呪ったら、自分も呪われる。見たヤツが呪うんだ。だから――」

誰だ――――レイヴェンは、誰だ。

「だから、呪われる前に、呪術を覗き見したヤツを殺す」

ひゅーひゅー、ひゅーひゅー。

矢が額に食いこむ。

動けない。逃げなきゃ殺されるのに躰が、動かない！

「貴女が悪いのよ。私の呪いを覗くから」

ひゅーひゅー、ひゅーひゅー。

大鴉の細い指がボーガンの引き金に触れる。

止めて、と叫んだ。

許して、と叫んだ。

イヤだ、と叫んだ。

だけど、声が出ない。

喉が壊れるまで振り絞った。

声、出て！　出て！　声を出して！

ひゅー、ひゅー、ひゅー、ひゅー。

「一之宮小夜子さん。私の代わりに死んでちょうだい」

大鴉が、額に矢を突きつけたまま顔だけぬっと近づけ、

「私――――――呪われるの嫌だから」

悪戯の加虐と艶やかな吐息を零し、囁った。

――嫌だ。

そして、引き金がを引く。

――死にたくない。

鉄の矢が私の脳を貫く。

――誰か、誰か。

その一秒前、

「助けて――――――――ッ！」

命を引き替えに、最後の絶叫をあげた。

叫びが終わるまでに、矢は貫く。

軋むスプリング。

引き延ばされた弓が、矢を放つ。

その刹那の前に、

「――――一之宮――――ッ」

ありえない奇跡を聞いた。

走馬燈か、幻聴か。

私を呼ぶ声が、たしかに聞こえた。

そしてそれは、

「一之宮！」　咆吼（ほうこう）だった。

放たれる矢を突きつけられたまま、視線が呼び声に答えるように、移動した――瞬間、額と繋がりかけた矢の感触が消えた。

視線を戻そうとすると、眼前まで迫っていた白骨の面がものすごい勢いで右へスライドした。
目で追う。
大鴉は闇の中を飛んだ。そしてそのまま地面に投げ捨てられたように不時着し、枯れ葉のように転がった。
一瞬だ。刹那の差だった。
瞬きの間に、
「生きてるか、一之宮」
豹のフォルムを体現した神籬安良が、現れた。
魔術めいた奇跡を起こした男は、中腰で獲物を狩る獣の体勢のまま、私を一瞥した。
「ひ、ひも、ひ、ひも、ろぎ……？」
どうしてここにいるの、とか。
どうして早く助けてくれなかったの、とか。
本当に神籬なの、とか。
言葉にしたいことは沢山あったけど上手く喋れず、彼の名前を言うことで精一杯だった。
「怪我はないか？」
神籬の声は緊張していた。厳しい。
私は声も出せず頷いただけ。
「あ、あれ――――」
数メートル先まで飛ばされた大鴉を指さす。
おそらく神籬に蹴り飛ばされ、何度も地面を転がって木の幹にぶつかって、胎児のように躰を丸めて倒れている。そして大きく痙攣するように微動していた。
「あ、れ――――なに？」
私はきっと知ってる。
その正体を知ってる。
だけど、今は分からない。
神籬は大鴉から視線を外す事なく言う。
「あれが、オレと礼慈が追ってる――――――」
猛襲の、
ひゅーひゅー、
あぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁっぁぁぁっぁぁぁっぁぁッ！
ひゅーひゅー、
咆吼と共に、
「――――殺人鬼だ！」
大鴉が生き返り、俯せのままボーガンを私たちに向けた。
殺される、戻ってきた恐怖に私が身を竦ませた瞬間、
まるで暴雨風に巻き込まれたように、投げ飛ばされた。
激動する視界。思わず閉じる。
首根っこをつかまれ、投げ飛ばされた。

「ぎゃーーッ」
私の悲鳴と、空の断末魔が響く。
目を開けると、神籬はそこには居ない。
矢がさっきまでいた木の幹に刺さっていた。
神籬はどこ――――？
視線を動かし探すと、すぐに視界に入る。
跳んでいた。
豹のような影が、僅かな助走で高々と跳躍ていた。
滞空時間は、三秒とない。
でも、飛行しているように見えた。
それは、滑稽な光景だった。
地に伏せている大鴉よりも、高く飛び上がった高速の豹の方が、翼を持つに相応しい獣だったのだからだ。
飛べない大鴉のボーガンが、上空に向けられた。
矢を放つのに一秒といらない。
だけど遅すぎる。
宙を駆けるは最速の獣を体現した人型。
それは鷹のように急降下し、細長い足を突き落とした。
当たれば骨を砕く鉄槌。
大鴉はそれを転がって咄嗟(とっさ)に避けた。だが、神籬はまだ地についていない片足を、ボールを蹴るように蹴り上げた。
一拍と開けない連撃。
それも這うようにバックステップをした大鴉だが、リーチを読み切れなかったのか、肩を掠めさらに後退を強いられた。
そして、二人は間合いを取って静止した。
「ぁ、――――」私は息つく暇も、瞬きさえ出来なかった。
それどころかまだ地面に蹲(うずくま)ったまま、二つの獣の影を見ていた。
ひゅーひゅー。
息苦しい。
酸素をすべて二つの影に奪われたように、呼吸をするのが厳しい。
奪われた酸素の代わりに、敵意が張り詰める。
拮抗。
停滞。
静止。
牽制。
睨み合い、
そして、大鴉が動いた。
無骨なボーガンを構えて照準を獲物に合わせた。
神籬がびくりと動き、走り出した。
狙われた。
逃げなくては。
殺されてしまう。

あの矢が刺さる。
だから、走れ！
狙われてた――――。
「逃げろ！　一之宮！」
私が狙われた。
動かなくちゃ殺される。逃げなければ矢が貫く、と分かっているのに、分かっているのに身体が動かない。矢が刺さるのを待つだけの的になってしまっていた。
跳躍（ちょうやく）と疾走（しっそう）を駆使して神籬が、私にもとへ。
でも、いくら豹のように早くても神籬より、
ひゅーひゅー。
高速で放たれた矢が何倍も早かった。
スプリングの軋む音が耳に届いた時には、
矢は神籬を追い抜き、一直線に私に迫った。
ひゅーひゅー。
そして、
「ぁ――――」悲鳴ではなく溜息を漏らした。
死んだ、と目を瞑った。
痛みはなかった。
怖さも忘れてた。
意識が遠ざかるのを、待った。

死ぬとどうなるのかな、天国にいけるのかな、なんてマヌケな事を思って、私は最後の息をゆっくり吐いた。
「おい一之宮。しっかりしろ！」
神籬の声がした。彼には悪いが、最後に聞く声が神籬なのはちょっと残念だな。どうせなら……。
「気をしっかりもて！　矢は外れたぞ！」
「へ――――？」
目を開ける。目の前には神籬。目が合うと安心したのか大きく溜息を漏らした。そして、私をそっと抱えるように上半身を起こす。
「妄想で死ぬなバカ。よく見ろ、矢は外れてるだろ」
そういって指さしたのは、丁度私が倒れていた数センチ横の地面だった。矢が刺さっている。私の胸ではなく、地面に斜めに刺さっていた。
「あ、あ、あの、わ、わた、し……」
「生きてるよ。悪運のつよい女だよ、おまえさ」
あきれ顔の神籬には、もう緊張感がなかった。
「あ、あの、えっと、あれ、あい、アイツは？」
「アイツなら逃げたよ。逃げられたクソッ。……でも、一之宮の死体を見なくてよかった。相手が下手でよかった。相手がもし、礼慈や手嶋（てしま）だったら、まず助からないがな」
洒落にならない事を飄々と言って、神籬は立ち上がり、立てるか、と手を差し伸べた。私はその手を取って、立ち上がろうとしたが。

「あ、ダメ。……腰が、抜けちゃってる、は、はは」
緊張の糸が途切れて、こんな事でも可笑しかった。
仕方ないな、と呟きながら神籬は屈んで背中を向けた。どうやら背負ってやる、と背中が語っていたから、私は甘えた。
「神籬って、結構なんていうか……」
神籬は軽々と立ち上がった。密着した背中は贅肉がなく、ごつごつと背骨が胸に当たる。だけど、骸骨みたいな外見とは違って、実際には硬い筋肉に覆われていた。ガリガリの躰ではなくて、無駄を削ぎ落とした、本当に豹のような躰だった。そして熱い。
「ねぇ、神籬……」
苦もなく歩き出した神籬は、なんだ、と穏やかに返事をした。何事もなかったように落ち着いている。
「ありがとね」
そっと、細くて硬い背中に囁いた。
うん、と寡黙な彼は頷いた。
「なんか、かっこよかったよ。深くにも惚れちゃいそうだった、かな」
恐怖の余韻を戯けた声で誤魔化しながら、神籬の背に乗せられたまま微かに明るい公園を横切る。
「不覚か、それは失礼だな。……しかし、絶体絶命のヒロインを救い出したヒーローに惚れるっていうのは、そりゃちょっと、乙女チックすぎやしないか」
「そう、かな……」
「ああ、そうだよ。……いや、だけど――」
公園の出口が見えてきた。
まるで秘密の園との境界線のように、茨を纏ったアーチ。
そこを潜ったら、元の世界に戻れる。
ここでの出来事は鏡の国のお話だと、安心して眠れるはず。
だから、溜まった涙を拭って公園に捨てた。
神籬は、深い絨毯の上を歩くように軽やかな足取りで、私を公園から連れ出して、少し振り返って、言いかけた言葉を口にした。
「乙女チックっとは、なるほど、君に良く似合ってる」
そして、初めて子供のように笑った彼を、見た。

９／九月二十三日（木）

見渡せばコンクリートが剥き出しの壁と床。正方形の箱の中。まるで逃亡者のように部屋にはモノが少ない。テレビもオーディオ機器もない。部屋の片隅のノートパソコンが唯一時代を特定できるアイテム。ベッドと卓袱台がもっとも大きな家具で、あとは台所に冷蔵庫があるだけの、質素なワンルーム。

無機質な部屋に大きな窓硝子。そこから入り込む明かりは、冷たいブルー。床に敷かれた絨毯の深い青色のせいかもしれない。

「まさか、初めて外泊した男の部屋が……神籬になるとはな」

簡素な部屋の真ん中で、ベッドに腰掛けながら、緊張感から解放されて、ついそんな本音をもらししまった。

「悪かったな、嫌なら帰れ、この不良娘」

愚痴に悪態で返した部屋の主の手には、コップが二つ。それをテーブルの上に置いてから、絨毯の上ではなく、剥き出しのコンクリートの上に座った。

「イヤ。あんなあと、一人じゃちょっと怖いし……」

壁にかけられた時計を見ると、午前二時を過ぎていた。

公園を出て、私は自宅のあるマンションに戻らず神籬のアパートに半ば強引に移動した。

家に戻ってもひとり。あんな怖ろしい事があった後で一人でいるのは嫌だったから、だからと言って神籬を私の部屋に連れ込むのは嫌だったから、ならばと神籬の部屋に行くことになった。

だけど、てっきり家族と一緒に暮らしているのか思ったが、神籬はこのアパートの一室で一人暮らし。それが誤算と言えば、致命的な誤算だ。

「ま、何もない部屋だけど、身の安全は保証するさ」

その一言で私は、あっさりと神籬の部屋に入ったのであった。

そして現在、娯楽のない部屋で神籬と向かいあい、数分の沈黙を超え、神籬が口を開いた。

「それで、あの殺人鬼とオマエはどういう関係なんだ」

薄々予想していた質問を、あっさりと口する。

「どういう関係って……言われても……」困る。

「だったら質問を変える。一之宮は、なんであんな時間に公園に、しかも一人でいたんだ？」

私が答えを渋るものだから、神籬は迅速に質問を変えてきた。声は落ち着いていて冷静だけど、何か焦っているようにやや早口。

「えっと、それは……待ち合わせしてたんだよ、人と」

「誰とだ？」

「……初めて会う人で、ネットで知り合って、メールのやりとりしてたんだけど、今日、急に会う事になって、その待ち合わせ場所が、公園だったんだ」

「ネットで、ね……。時間を指定したのは、向こうか」
「え……？　あ、うん。そうだけど」
「深夜の零時過だろ。妖しいぞ。オマエもよくそんな時間に待ち合わせようなんて約束したな」
「だ！　だって……」
妖しいのは十分分かっていた。だって元が妖しい話なんだから。
「教えろ。その待ち合わせしたヤツの事」
神籬の声に容赦がない。矢継ぎ早に繰り出す問いかけには、焦りがやはりある。そして敵意さえ感じられた。
「ちょと待って！　さっきから神籬ばっか質問してるけど、私にも教えてよ。――殺人鬼って何なの？」
神籬は、あの大鴉を一目みて『殺人鬼』と断言した。なんでそうだと分かったのか。それともう一つ。俺と礼慈が追っている、とも言った。その意味を問いかけると、神籬は壁に背中を預けるように座り直した。
「そのままの意味さ。殺人鬼は人を殺す鬼。人殺し。殺人犯、殺人者」
明かりのない部屋に、神籬の声がよく響く。
「この街で起きてる連続箱入り殺人事件。殺害された死体がバラバラになって箱にはいった状態で発見される事件が今、確か七人ぐらい犠牲者が発見されてる。一日に一人のペースで人が殺されている。中にはまだ発見されていない箱もあるかもしれないし、行方不明って事になってる人もいる。その行方不明者の一人が、榊あやめだ」
「あ――。それ、学校で言ってた……」
「そうさ。だから俺と礼慈が、殺人鬼を追ってるんだ。それで今日、奥津城からその殺人鬼がどんなヤツなのかってのを聞いて、そのに一致するヤツに、オマエが襲われてた訳だ」
「……ちょっと待って。なんで絵馬が殺人鬼の姿なんて知ってるの？」
「そりゃ見たからに決まってるだろ。状況としてはオマエと一緒らしいぞ。今夜はオマエ、昨日の夜は奥津城が殺されそうになったらしい」
「え――うそ、なんで？」
「そんなの俺が知るか。ともかく、殺人鬼の姿を見て生き残った数少ない目撃者なんだよ、奥津城もオマエも。もっとも奥津城は襲われはしたが返り討ちにして、殺人鬼にかなり大けがを負わせたらしいからな、そのおかげで一之宮は助かったもんだろう。よかったな。悪運が強くて凶暴な友達がいて」
神籬がニヒルに笑う。褒めているようで、揶揄してるようだ。
「だが。一之宮も見た通り、殺人鬼は仮装している訳だ。見ただろ、和製ドラキュラ伯爵みたいなマントに仮面だ。殺人鬼の姿は判明したが、その正体は今だ不明なんだよ。だから、さっき正体を暴いてやろうとしたんだが……」
語尾を濁す。取り逃がしたのが口惜しいのだろう。
確かにあの場では、神籬が優勢だった。

相手はボーガンを持っていたけど、それでも接近戦に持ち込めば、神籬が圧勝していたと思う。なにより神籬には脚力がある。我が陸上部が隠す秘密兵器としてのジャンパーは、その脚力を発揮して、実際に容易に間合いをつめていたのだから。あそこで殺人鬼を取り逃がす事はなかった。殺人鬼に逃げられた原因は言うまでもない。

「ごめん……私がいなかったら、捕まえられたのに」

私というお荷物がいたせいだ。

「いや、一之宮は悪くない。それよりも、さっきも言ったが、殺人鬼の姿は分かってるけど、正体不明なんだ。だからさ、もし一之宮が殺人鬼の事を知っているなら教えて欲しい。ことによっては重要な手がかりになるからな」

どうなんだ、と神籬は前乗りに問いかけた。暗闇に神籬の目が鈍く煌めく。とても冷たい煌めきだ。

「オマエは、誰を待っていたんだ」

暗闇に善く通る声。私は一度目を瞑って、深呼吸をしてから話した。

「私が待ってたのは、本名は知らないけど、レイヴェンっていう人で、前から何度もメールのヤリとをしてたの」

私はレイヴェンとの関係を簡潔に話した。決して呪いという言葉は入れずに、ただメール友達とだけ。

「レイヴェン……。それで、そのレイヴェンってヤツに怨まれる事や、何か不審な言動やとかなかったか」

「不審な言動って？」

「これは俺の勘だけどさ。そのレイヴェンが、あの殺人鬼だとしたら、どうもそいつは、オマエを執拗に狙ってる感じがする。今まで、通り魔みたいな殺人鬼が、そんな手の込んだやり方をしてる。なんかオマエに対して特別な理由があるんじゃないかって思うんだ。ひどく個人的な理由がさ」

「……あ」

――貴女が悪いのよ。私の呪いを覗くから。

「あ……まさか……」

脳裏で蘇る言葉。それが答えだ。それ以外にアイツが、私の命を狙う理由なんてない。

「あるんだな。……一之宮」

神籬が中腰のまま壁際からテーブルまで移動し、身を乗り出して私の眼をじっと――私の眼を探るように見つめる。

そして、いつもの飄々とした口調で、

「オマエを付け回っていたストーカーは、レイヴェンじゃないのか」

神籬はおかしな事を言った。

「え――？」

一瞬頭の中が真っ白になった。

数秒。視界が閉じた。何も聞こえない。
脳裏には、昨日の夜の出来事がフラッシュバックする。
「な、なんで……」
「オマエを殺したい程の理由が、レイヴェンにはある。これが動機だ。だけどメールでしか相手の事を知らないから、色々と手を尽くして、相手が何者かを知らなくてはいけない。その過程が、オマエが知ってるストーキング行為だったんじゃないのか。……そもそも、どうしてレイヴェンが、一之宮を知ってるんだ。教えてないんだろ、自分の本名や素性は」
「あ、――」
教えていない。教えるはずがない。
だけど――思い返せば、どうして。
突然私宛に届いた、レイヴェンからの封筒。
知ってるはずのない、一之宮小夜子を知っていた。
そうだ――思い返せば、どうして。
いつもタイミングのよく、私が求める言葉を。
まるで私をいつも見ているように、
私を知っているような魅力的な言葉を贈ってきた。
どうして――気づかなかったんだ。
「でも……違う、私のストーカーは……違う……」
ストーカーは死んだ。
あの男は死んだんだ。
呪った。
私の呪いで、死んだ。
「違う……そんなこと、ない……違う、違う……」
何度も見た。
何度も確認した。
マンションの中庭で木陰に隠れて監視してい男を、私は確かに確認した。はっきりと覚えている。
ストーカーは、榊宗一郎だ。
だから、
「違う。レイヴェンじゃない、レイヴェンじゃないの――」
だから私は、呪ったんだ。
死んでしまえ、と呪った。
私と、私の周囲に危険を及ぼす男を。
あの可愛らしい隣人を殺した男を。
私は呪ったんだ。
ストーカーを呪った。
そして、昨日の夜。
なにより、その時、あの男の顔がすべてを物語っていた。
ストーカーだと、白状するほど狼狽(うろた)えて動揺して、
そして、死んだんだ。

だから、ストーカーは間違えなく榊宗一郎なんだ。
間違いない。絶対に、そうなんだ。
でないと、私――ただの人ごろ――。
「落ち着け一之宮！　ほら水を飲んで、冷静になれ」
強引にコップを渡され、私を水を一気に飲み干して大きく息を吐いた。
「混乱した頭じゃ何考えたって無駄だ」
「……で、も――――」
とても眠れなる状態じゃない。
フラッシュバックする。
榊宗一郎が……線路に落ちて……電車に轢かれ、
それから、
それから、
そらから――――。
「わ、たし……だめ……だめ！　……」
「一之宮！」
神籬に両手をつかまれ、初めて震えているのに気づいた。その震えを止めるように、ぎゅっと掴む。
「痛い……神籬……うで、痛い、よ」
「一之宮。ベッドかしてやるから寝ろ。怖いなら電気付けてままにしておいてやるから、とりあえず寝ろ。続きは明日だ。いいな？」
「う、うん――――」

頷くと、神籬はそっと手を離した。そして、空になったコップを持って台所へ行き、小さな瓶を持って戻ってきた。
「ほら、眠れなかったらこれを飲め。良く効くぜ」
そう言ってテーブルの上にコップと、薬瓶を置いた。
なにこれ、と聞くと神籬は、精神安定剤だ、と答えた。
「なんでそんなもの持ってるの……？」
神籬はコップと瓶を置くと、どこからか毛布を取り出して、それを持って、また壁際に座った。
そして、毛布にくるまって目を瞑って、
「そりゃもちろん。俺が精神不安定だからさ」
息を引き取るように静かに言った。
本当に、死んでしまったのかと思うほど、神籬は私を置いてさっさと寝てしまった。

◇

呪われろ。
呪われろ。
死んでしまえ。
呪ったな。
呪ったな。
よくも、呪ったな。
死んでしまえ。
殺した。
オマエが殺した。
呪われよ。
オマエが呪った。
呪ったね。
オマエのせいだ。
呪われろ。
呪われている。
『今、一之宮は呪われている』
オマエが悪い。
『オマエを中心に呪いは拡大して――』
オマエが悪い。

オマエが不幸にした。
『呪われているのと一緒ですから』
呪われてしまった。
殺した。何人殺した――？
人殺し。人殺し。
殺人鬼。殺人鬼。
『箱入り殺人事件は、あなたの呪いの産物ですよ』
どうして殺したの？　オマエが殺したんだろ。
なんで殺したの？　オマエが悪いんだろ。
どうやって殺したの？　呪ったんだろオマエが。
ずっと殺し続けたんだ。
オマエがずっと殺し続けたんだ。
今も、昔も。
『八年前、伏木町は呪われていたのさ』
オマエが呪ったんだ。
『ヤタガラス様の祟り、だとね』
オマエのせいで、祟りがおきた。
すべてオマエの意志で。
オマエは選んだ。
『呪いますか、呪われますか』
呪うことを、オマエ自身が選んだ。

――呪います。
オマエの意志だ。オマエの誓いだ。
言い訳するな。転嫁するな。逃れるな。
隠すな。
無駄だ。
秘密は暴かれる。
『醜い悪性が現れる』
オマエは悪い。
オマエは醜い。
オマエが死ね。
死ね。死ね。死んでしまえ。
――いや、だ。
殺したくせに。
呪ったくせに。
暴(あば)いたくせに。
――ごめんなさい。
許さない。
許さない。
絶対に、許さない。
『最悪だオマエ』
そうだ、最悪だ。

オマエは最悪だ。
人を呪うオマエは、最悪だ。
呪った。呪った。呪った。
呪って人を殺した。
呪い殺した。
呪い殺したんだろ。
思い出せ。
オマエは無防備なそいつの背後から近づいて、
言っただろ。
呪いを。
死んでしまえ、と。
オマエの呪いだ。
――ちがう。
オマエの言葉だ。
――ちがう。
オマエの呪いだ。
――ちがう。
人殺し。
隠しても無駄だ。
人殺し。
見ているぞ。

人殺し。
知っているぞ。
人殺し。
オマエが呪ったと知っている。
人殺し。
オマエの呪術を知っているぞ。
人殺し。
オマエは楽しそうに呪っていたじゃないか。
人殺し。
楽しそうに人を呪っていたぞ。
人殺し。
――違う。私じゃない。
人殺し。
嘘つき。
知ってるぞ知ってるぞ、オマエが呪ったと知ってるぞ。
『呪術は見られたらダメなの』
見たぞ、見たぞ、オマエの呪いを見たぞ。
『もし見られたら呪いは自分に返ってくる』
――知らない知らない、そんなの知らない。
見られたな見られたな、呪いを見られた。
『自分も呪われる』

死ぬ、死ぬ、呪われて死ぬ。
呪いを見られたんだ、呪われるぞ。
『見たヤツが呪うんだ』
見られた、見られた、呪いを見られた。
呪われる、呪われる、呪い殺される。
待っている。
待っている。
必ず、
必ず、
呪ってやる。
■が、呪ってやる。
――だれを？
『　はじめまして――――――、シキです　』

◇

目が覚めると、まず顔と背中に付着した汗の不快感に嫌気がした。そして目を開けて、ぼやけた視界が鮮明になるとコンクリートの天井に驚いて、はっと身体を起こした。

周囲を見る。

コンクリートの壁。生活感のない部屋に、朧な陽射しが差し込んで、僅かに水が残っているグラスを輝かさせていた。

ここは、どこだろう。

それを思い出そうとしたら、

「起きたか。……素晴らしくエロい寝相だ」

部屋の奥から声がして視線を移すと、神籬がビニル袋を持って立っていた。

「あ、……そっか。ここ、神籬の部屋か」

低速で回転する頭がぼんやりと思い出した。

「そうだよ。今何時か分かるか？　もう昼過ぎだ。どうやら薬がよく効いたみたいだな。半日も寝れば十分だろ」

部屋の奥……台所から二つのグラスを持って、神籬は私が座っているベッドの向かいまでやってきて、ビニル袋の中身とグラスをテーブルの上に置いた。昼食だ食べるだろ、と言って指さしたのは、菓子パンとフランスパン一斤だった。

「あ、うん。ありがと……」

いただきます、とまだ明瞭としないまま用意してもらったパンを食べた。もちろん、私は菓子パンを選んだ。フランスパンは、神籬の主食だというのは了解していたから。

食事中はお静かに。神籬は何も話さなかったから、私からも何も話はしなかった。その間に、昨日の事までは思い出せて、頭もハッキリしてきた。先に食事を終えた私は洗面台を借りて顔を洗った。

そして本格的に目を覚まして部屋に戻ると、フランスパンを完食したであろう神籬が、陽射しを避けるように影になっている壁際まで後退して、瞑想をするように座っていた。

私はとりあえずベッドに再び座る。

「一之宮にとって悪いニュースと、俺にとって悪いニュース。どっちから聞きたい？」

神籬が唐突に問いかけた。

まるで説教をするように腕を組み、深刻な声で、部屋の雰囲気に緊張感を作り出す。

私は少し迷って、私にとって悪いニュースから、と言うと神籬は立ち上がり、深刻な空気を引き連れ近づいてきた。そして目の前まで近づくと、ポケットから見覚えのある小さな長方形のプラスティックを取り出して、

「さっき、公園で見つけてきた。これ、一之宮のだろ」

それを手渡して更に、
「ご愁傷様。基盤からポッキリいってる」
合掌して元の位置に戻った。
そして私の手に戻ってきた。携帯電話だったもの。折り畳み部分が壊れ、トドメにプッシュボタン部分が割れている。ぐぅの音も出ないとはこのことか。
「次に、俺にとっての悪いニュースだが……」
冷淡な神籬は、私の失意を無視して話を続けようとする。でも私が聞いていないのを察したのか、
「これは一之宮にも関係あることだが……」
そんな思わせぶりな前置きをした。私はそれに簡単に釣られ、手の上の携帯電話の残骸から神籬へ顔を向けた。
神籬はそれを確認してから、間をおいて言った。
「殺人鬼が死んだ」
「え――――？」
「いや、正確には殺人鬼らしきヤツが死んだ、だ」
「どういう、こと？」
神籬が話し出すと同時に耳鳴りがした。
それも一瞬。
神籬は心底残念そうに、それでいて困ったといった風に、私より長い髪を掻きながら溜息をついた。

「どうもこうもないさ。今朝、オマエが寝ている間に鳥の森神社に、昨日の事を報告に行って、その時、今回の事件を担当してる刑事から聞いたんだが……」
私が聞いているか確認するように一瞥して、殺人鬼の格好を覚えているか、と訊いた。
思い出すまでもなく、連想するように脳裏に過ぎった。
大鴉。
忘れてしまいたい。
「……嘴がある白い仮面と」
白骨だ。
「黒いマント」
翼だ。
「その二つが殺人鬼の特徴だったんだがな」
それが大鴉。
「今朝、死体が発見された」
それが殺人鬼だと、神籬は言う。
「で、っでも……それが本当に……」
思考が停止しようとする。急ブレーキの摩擦熱が吐き気を誘い出す。ぐっと全身に力を入れて堪える。神籬は私の言葉の続き聞かずに返した。
「確かに……それが分からないから俺にとって悪いニュースなんだよ。死んでるから、死人に口なしだ」

くそっ、と不満をあらわに大きく溜息をついて、壁に背中を預けた。
そして、だがな一之宮にとっては良いニュースだ、と言葉を紡ぐ。
「昨日、一之宮を襲ってきたヤツ。アイツ、片手を怪我していた事に、気づいてたか」
「え……怪我？」
「たぶん、奥津城にやられたんだろうな。ほら、思い出してもみろよ。アイツ、片腕しか使ってなかったぜ。ボーガンなんか結構な重さだから片手じゃ上手く狙いが定まらないだろ。だから、何度も外したんだよアイツ。でなきゃ一撃で致命傷だったぜ、悲鳴あげる暇もなく撃たれて即死だ。それなのに、助かったのは、オマエの逃げ足のすばしっこさじゃないって事だ」
それで、と神籬は仕切り直すように姿勢を正した。
「今朝、発見された死体の片腕には裂傷……刃物でバッサリ切られた傷跡があったらしい。まだ新しいもので、二の腕辺りを切断寸前ぐらいの傷らしい」
視界が一瞬、ぐらりと揺れた。
「死体が発見されたのは早朝で、死亡推定時刻は発見から二三時間前……午前三時から五時頃。……そして、死体が発見されたのは、俺達がいた、あの公園だ。どういう事か分かるか」
試すように神籬が問う。
考えるよりまず、頭の中は大鴉の姿で一杯だった。
考えられるはずがない。
だけど、私は直感している。
声が出なかった。
言葉に出来なかった。
どんな言葉で言えばいいのか、
私はどんな顔をしているのか、
これは現実なのか幻想なのか、
疑問が影を作る。
視界が、思考が、黒く陰る。
まるで箱に閉じ込まれたように、
蓋を閉められていくように徐々に、
何もかもが、黒く黒く陰る中、
神籬が、その顔に似合わない邪悪な笑みを浮かべた。
違和感に、気づいた。
それは、
「おめでとう、一之宮。君を呪ったヤツは死んだよ」
笑っているのは、私なんだ。

◇

コンクリートのアパートから出ると、薄い影が街全体を覆っていた。まだ、日没にはまだ早いのに、まるで我慢しきれず夜が出張ってきたようだ。

風が湿っぽい。

気分が一層と萎える。日陰で萎んでしまった花の気分が少し分かった。

どれぐらい歩いていたのか、気づいたら私は、自宅のあるアパートの前まで到着していた。

意識が点滅する。

しっかりと地面に足を付けて歩いたはずなのに、そんな実感がひどく稀薄で、まるで幽霊みたいだ、と呟きを零してしまった。

習慣に従った身体がエレベータで七階に登り、そのまま今だ黄色いテープで一部封鎖された廊下を渡って部屋まで歩く。

玄関のドアを開ける。

長い廊下はすでに夜の暗さ、ドアを閉めれば闇。

淀んだ空気が籠もっていて、外気に炙られて腐臭が漂っていた。

それから逃げるように自分の部屋に入る。

部屋はまるで泥棒でも入ったように荒れていた。

脱ぎっぱなしの服に、投げ捨てられた鞄。割れてしまった化粧台の硝子。散乱した小物や本。足の踏み場ていどを残してはいる。

掃除しなきゃ、と思ってもそんな気力は無かった。他人事だ。

ベッドに仰向けに倒れ込む。

「死んだ……」呟き声さえ淀んでいる。

死んでしまった。

死にました。

死んだんだよ。

繰り返しても、実感なんかわかない。

当然だ。それは本当に他人事なんだから。

幽霊みたいなものなのだから。

でも、何が幽霊みたいなのだろう。

その人の生？　それとも死？

「死んだ……」

脳裏は闇。黒い靄に包まれて夜の闇。

浮かぶ。ぼんやりと再生される。

大鴉。迫ってくる。何か、言ってる。

呪うように、何かを言っている。

その声は聞き覚えがあるのに、どうしてだろう、誰だか分からない。

闇の中。

――貴女が悪いのよ。私の呪いを覗くから。

――私の代わりに死んでちょうだい。

――私、呪われるの嫌だから。

大鴉は、確かに言った。
私が悪いと責めた。
だから死ねと告げた。
呪われたくないと言った。
「なのに……死んだ……」
白骨の仮面の下。顔も知れない他人が死んだ。
蘇る言葉は、私を責める。
おまえが悪いと。
オマエのせいだ。
オマエが死ななかったから。
「呪われたの……本当に……」
声が聞こえる。
呟き声。掠れた声。うめき声。鳴き声。
気のせいだと無視する。
だけど、無視できないほどその声が近づいてくる。
ひそひそ、と。
ひそひそ、と聞こえてくる。
視線を感じる。
誰かが近くにいるような気がした。
ひそひそ、と声がする。
ぺたぺた、と近づく気配。

なのに、姿がない。
堪らずベッドから起き上がった。
乱雑した部屋の中心に、佇む。
見渡す。姿はない。声がある。
心細さに苦しくなり、足が部屋から抜け出そうとして踏み出した瞬間、
パソコンが鳴った。
唐突の音に、転びそうなほど驚いて、薄暗い部屋の中で唯一目映い光
りを放つディスプレイに近づいた。
新着メール。
マウスを動かしてメールを開く。
そして数秒、頭が真っ白になった。

『こんにちは、レイヴェンです』
レイヴェンからのメール。
なのに、それは生き生きとした文章だった。
その違和感に、頭痛がする。
そんなはずは、ない。
誰かの悪戯だ、という必死で否定して自分に言い聞かす。

『よかったですね。素敵なお友達のおかげで生き延びられて』

そんな幼稚な否定は一瞬で消え去った。
本当に、レイヴェンからだ。
メールアドレスも同じ、文章も、レイヴェンのモノ。
本物のレイヴェンからメール。
だから、吐き気がした。
だって、

『残念ながら私は、死んでしまいました』

レイヴェンは、死んでるのだから。
メールを打てる訳がない。
語る事が出来る訳がない。
死んでしまいました、なんて言える訳がない。
だけど、ディスプレイには紛れもなくレイヴェンのメールが映し出され、綴(つづ)られている言葉は、生きているように語りかけている。
だけど画面が切れる。
スクロール。

『一之宮さん。
どうして私が死んでしまったのか、分かりますか？
どうして私が貴女を殺そうとしたのか、分かりますか？
どうして今更こんなメールを送ったのか、分かりますか？
分かるはずないですよね。
だって、貴女はいつも他人に縋(すが)ってるもの。
他人の言葉に身を委ねて、それを自分の意志だと勘違いして、そのくせ失敗すれば、他人のせいにして責任は放り投げる。
そうやって綺麗な自分を、汚れないように必死で他人を利用して、いざ汚れてしまえば、それも他人に押しつけて自分は綺麗なままだと思いこんでいる、哀れな人。それが貴女の本性なのですから。
分かるはずがないですよね。
貴女の言葉は、借り物。
貴女の意志は、ニセ物。
貴女の考えは、逃避。
貴女は貴女の真似をしているだけ。
その顔、身体、感情、意志、言葉、すべて真似。
貴女は、他人が見ている貴女のコスプレをしているだけ。
中身が空っぽの箱なのよ。
そんな貴女に、分かるはずがないわよね。
一之宮小夜子さん』

言葉が、出るわけがない。
それさえニセ物だと言っている相手に、
死んでいる相手に、何が言えるんだ。
だけど、私には届くのだから。
それは、紛れもなく――――。
続きを。
スクロール。スクロール。

『最後だから、教えてあげます。
どうして私が貴女を殺そうとしたか、知りたいでしょ？
でも、それはもうとっくに教えてあげましたよ。
約束したとおり、教えたじゃないですか。
そう、私が貴女を殺そうとした理由は、
貴女が、私の呪術を見た、からですよ』

スクロール。スクロール。

『だから、貴女を殺すしかなかったの。
そうしないと、私が呪われてしまうから。
そんなの、嫌でしょ？
だから、殺そうとしたのよ、貴女を』

スクロール。
『でも結局、私は死んでしまった。
どうしてだか、分かりますよね。
そうよ。私、呪われたの。
誰に呪われたか、分かりますか？』
スクロール。

――――私を殺したのは、一之宮小夜子。貴女よ。

スクロール。
『貴女が殺したの。
貴女が呪ったの。
私が教えた呪術で私を呪い殺すなんて、ヒドイヒト。
私、すごく悔しいです。
文句の一つや二つ言わないと、死んでも死にきれません。
だから、メールを出しました』
スクロール。

『私からの最後のメールです。
でもね、勘違いしないでください』
スクロール。

『決して、怨念を送ろうとした訳ではありません。
貴女を呪ってやろうなんて思っていませんよ。
だって、そんな必要ないのだもの』

スクロ〜ル。
スクロ〜ル。

『見られましたね、呪術を。
貴女も見られた。呪いを』

スクロ〜ル。
スクロ〜ル。
スクロ〜ル。

『一人じゃ何も出来ない貴女は、
ただ呪われるのを待つだけ。
もうじき死ぬのよ、貴女も』

スクロ〜ル。
スクロ〜ル。
スクロ〜ル。

　スクロ〜ル。

——貴女も、もうじき呪い殺される。

　スクロ〜ル。

――すぐに、迎えにいくから。一之宮小夜子さん。

スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。スクロ〜ル。
空白。空白。空白。空白。空白。空白。空白。
空白。空白。空白。空白。空白。空白。空白。
空白――――ドンドン！　ドンドン！

「ひゃっ――――ッ」
吐き気を伴う衝撃が奔る。
室内に鳴り響く轟音。
静寂を硝子のように割った乱暴な音が、徐々に、憎しみが込められ殺意さえ感じる程に強く、激しく、禍々しい音になって突き刺さる。
ドンドン、鉄のドアが鳴る。
鳴り響く。鳴り続ける。鳴りやまない。
呼吸器官が瀕死。足が竦(すく)んで動かない。振り返ったまま、ドアを向いた顔は硬直。視線が、痺れる。
痺れる。音がなる。
ド、ドドン、ドン、ドンドドン。
語りかけるようなリズム。

足が、動いた。
吸い寄せられるように、足が動く。
歩いた。
ドアへ。
部屋を出た。
長い廊下。
右はリビング。左は玄関。
暗い廊下。
ドン、ドンド、ガ、ドドン、ドン。
吸い寄せられる。
頭が麻痺する。
痺れたまま足が動く。
歩く。
ドアが鳴る。ドアが鳴る。ドアが呼ぶ。
歩く。
ドン、ド…………鳴りやんだ。
チェ〜ンを解く。
鍵を開ける。
ドアがゆっくりと、開く。
密閉された匣が、開かれた。
そして、我慢できなくて。

◇

火ぶたを切ったように家から飛び出た。
玄関のドアをぶち破るように開け放ち、走り出す。
狭い廊下を全力疾走。
急勾配の階段を全力疾走。
衝突することも、転んで傷つくことも怖くない。
――殺される。
だから走った。
外は雨。白昼の余熱を含んだ雨が降り落ちる。
濡れる事に戸惑いはない。
――早く。
一分一秒でも早くと身体を急かす心。
なりふり構ってられない。
踏みつけた水溜の泥に汚れようが構わない。
――速く。
身なりも他人の視線も眼中にない。
振り付ける雨がノイズのように視界を犯す。
身体を打ち雨粒が周囲の音を潰す。
心臓の鼓動が際だって騒がしく、うるさい。
――急げ！

過ぎ去る風景に興味はない。
面白みのないネオンの誘惑。
頭が悪すぎる善人達の歌声。
退屈なタイルの羅列と信号。
眠気を誘う雫と雫の心中劇。
甘ったるい風が縋ってくる。
――殺される。
穿（うが）たれたような水溜を蹴る。
先が隠す闇を剥いで捨てる。
線路の様に連なる道を無視。
――走れ。
呼吸をする暇もなく走った。
流れる情景。見覚えはある。
だけど、ただそれだけの事。
道も、橋も、川や町並みも。
ただ過ぎ去るだけの風景だ。
――呪われる
走れ走れ、もっと速く、と。
速く速く、もっと跳べ、と。
跳べ跳べ、さらに高く、と。
高く高く、遥か彼方へ、と。

彼方彼方、もうすぐだ、と。
――走れ！
高速で血管を駆けめぐる血。
生きるための機関が壊れる。
死にたくないと壊れていく。
――死にたくない。
「はぁはぁッ、ぅ、はぁはぁあ」
呼吸器官が獣の息づかいを真似る。
雨の温度が下がる。肌が冷たくなる。
なのに、身体は熱い。燃えるように熱い。
生きるために燃え上がる。
――呪われたくない。
拒絶の雄叫びが体に鳴り響く。
不鮮明な視界と不連続の吐息。
水滴のヴェールと艶やかな闇。
かき分け踏みにじり、駆ける。
人の気配がない闇に私だけ獣。
アスファルトの道を駆け抜け、
人々がつまった家々を抜けて、
往来が途絶えた通りを避けて、
濃厚な闇と甘い雫が集う森へ、

私は、夢中で走った。
口を開いて向かい入れる樹海。
潤い満ちた木々のトンネル。
黒ずんだ朱色の鳥居。
――速く、急げ、急げ！
目線は既に石段の頂上へ。
だけど足はまだ石畳の上を走っていた。
――急げ。早くしないと！
気持ちが焦り、躰（からだ）にむち打つ。
過剰な毒に躰が飛ぶ。
石段を駆け上がる。
数段先は闇。
雨水で清められた石段に足を取られた。
数段転び、四つん這いになりながらも這い上がる。
獣のように、石段を登る。
「ハァぁーはぁはっぁっはぁっぁっぁッひゅ――――」
石段を這い上がり夜闇の門を抜け鳥居をぬけた時には、もう手足の感覚がなく、ただ熱い痛みだけが、まだ生きている死にたくないという衝動だけが身体に残っていた。
「っひぁはぁはぁはぁひぃぃ――――ハァハァハァ」
境内を見渡せる所まで進んだ所で視界が停止。

ドクンドクンと心臓が呼吸する間もなく脈打つ。
呼吸の仕方が分からないほど、息が乱れる。
乱れたものを整える余裕はない。
――どこだ。
私の意識は、私のすべては探していた。
降り落ちる雫の微かな煌めきを頼りに、
黒く統一された境内のなか、異色を探す。
――ないと。
伸びる石畳。石灯籠。灯り。拝殿に樹海。
雨のノイズ。暗闇のフィルタ。朧気な霧。
――さないと。
呼吸。心拍。脈拍。筋肉。神経。信号。
乱れ乱れ。叫び叫び。喚き喚き。五月蠅(うるさ)い。
――あいつを。
「――――――ああ」
私の眼球が、闇色の世界に、純白を見つけた。
瞬間、すべてが静止した。
拝殿の前に、白い着物を着た少年が佇んでいる。
――あいつを。
「はぁ、っはぁはぁ……」
霞んだ視界にも、それは鮮明な白。
足が、自然と歩み始めた。
「はぁ、はぁ、はぁ――――――」
息を殺す。心音を殺す。足音を殺す。
――早くアイツを。
躰の中が静粛し、雨音の騒音が脳髄に響く。
歩く、近づく、忍び寄る。
番傘を指し、後ろ向きに佇む白い着物の少年。
気づかれないように、静かにに。早く、早く。
「はぁはぁはぁ――――はは」
ポケットから取り出す。
それを強く握りしめる。
震える右手を左手で縛る。
焦る右足を左足が引っ張る。
――早く、アイツを。
焦る気持ちに、躰を焦がす。
――さないと。
貫くほど睨む眼球が痺れる。
――呪われる。
「はぁ、ハァっう……」
息を呑む、息を殺す。
気づかれずに背後に忍びよる。

だが、あと少しで手が届くという距離で、
ゆっくりと、
――嫌だ！
白衣の少年が振り返ろうとする。
「あ――――」気づかれた。
――殺せ！
完全に振り返る。
その前に、
一息で駈け寄り、
白い背中に、
「あぁぁぁっぁぁぁっ――――――――」
小さなナイフを突き刺した。
「あああああぁぁぁあっぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁっぁ！」
私の叫びが埋め尽くす。
握りしめたナイフを深々と突き刺す。
冷たいナイフに熱が宿る。
火傷しそうな程熱くなる。
少年に刺さったナイフから、筋肉の収縮、血潮の流動、細胞の絶叫が
ひしひしと、気持ち悪いほど私の手に伝わってくる。
「っく――――あぁぁぁぁあぁぁぁぁ」
ナイフを押し返そうとする圧力。
押し返す叫び。
押し倒す。
突き放す。
白い着物が翻る。
番傘が落ちる。
包帯が揺れる。
白い人が地面に倒れる。
水飛沫（みずしぶき）。
舞い上がり。
血飛沫（ちしぶき）。
舞い散る。
「はぁ―、はぁ―、はぁ―、ぃ―、ぃ―」
白い着物が、灰色に滲む。純白が鮮血に汚れる。
呻（うめ）き声さえ聞こえない。雨音を突き刺さる。
小さなナイフは墓標のように突き刺さったまま。
血が、着物を染め、溢れて、水溜に零れて朱に染める。
「は、」
――死んだ。
「は、はは」
石畳の上に俯せに倒れた白衣の少年は動かない。
血に染まり。

雨に濡れて。
死んでいく。
間違いなく、死ぬ。
「は、はは――――」
死んだ。
ようやく。
やっと。
これで。
「ふ、ッファッハハハハハハハハ――――」
嗤った。
「間に合った――間に合った！」
歓喜に嗤う。
「これで私の秘密は守られる！」
高々と叫ぶ。
「殺せた！　私を呪おうとするヤツ全員死んだ！」
爆ぜる悦びそのまま叫ぶ。
「私が殺したいやつ、みんな死んだ！　みんな――」
取り巻く闇。
落下する雨。
横たわる白。
樹海の住人。

手を広げ、胸を張り、空を仰ぎ、
すべてのものに、高々と宣言するように、
「みんな、呪い殺せた！」
身体を振るわせ叫んだ。
伸び上がる歓喜の嗤い。
「は、ははは」
燃え上がる悦び。
「ふ、ふふふ」
頭の奥が痺れる。
「あははははっはははははははは」
ひとしきり嗤った。
満ち足りた悦びを胸に抱いて嗤った。
そして、足下で横たわる白い着物の少年を最後に一瞥して、私はその場を立ち去った。
来るとき同様に急いで走り去る。
石段を下り、石畳を渡り、鳥居を抜け、樹海を出る。
そこで、小さく微笑んだ。
胸が張り裂けそうな衝動。
毒のように身体を蝕む苦痛も快感。
無機質な住宅街まで着て、今更ながら乱れた呼吸は安堵の息に落ち着き、だけど躰はまだ熱く、雨も冷たさも心地よいほど。

見飽きた景色。黒く濡れた光景。雨に潰された視界。
すべてが、どうしてだろう、新鮮に見えた。
生まれ変わった。解放された。自由の優越感。
私を包み込むものは、すべて優しい。
私が捨てたもの達は、すべて卑しい。
私に残ったモノのみ、わたしを許す。
私を取り巻く闇の黒、それすら輝く。
足取りは軽く、胸は高鳴り、笑みが零れる。
何度か通った道を足早に。
何度か渡った橋をスキップで。
見慣れた町並みにがひどく愛しいく思えた。
気持ちは大らかに。優雅なほど穏やか。
どんなに残虐な罪も、どんなに悲惨な事件も、
どんなに理不尽な罰も、どんなに狂った人々も、
それが他人事ならば、今はすべてを許してあげるわ。
どうせ知らない人達のお話。
どうせ遠い国の出来事。
どうせ閉ざされた真相なら。
私は正義感や真実の探求心で、その匣を開けはしない。
触れない。
遠目に見える人々には触れず、私は戻る。

帰るんだ。
元の日常に戻るんだ。
呪いなんてない日々に。
帰って眠って、明日が来て学校に行って、またバカみたいに話をして、勉強でもして、時間になれば家にもどってコスプレしたり、漫画を読んだりして一日を潰す。退屈だけど、居心地が良い日常に戻ろう。たまにはママとも話をしよう。パパにもわざとらしく甘えてみたりもしよう。
ああ、そういえば、もう何日も二人の顔を見てないな。
思い出せなくなる前に、すこし夜更かしして、二人の帰りを今夜は待とう。そして、おかえりって出迎えるんだ。
家族なんだから、たまにはそれぐらいしないと。
――帰ろう。
見慣れた道を通って。
――帰ったらシャワーを浴びて。
無人の川沿いの道。
――それから、新作のコスを考えて。
小川の激流を眺め、近づくマンションへ。
――その前に部屋の掃除を。
雨に濡れて黒ずんだ煉瓦の小径。
緩やかな下り道をスキップするように駆け、オモチャのブロックのような飾り気のないマンションの裏口へ。

――――それから、それから……。
開放感に緩む頬をそのままに微笑み、軽やかな足取りで硝子張りの裏口からロビーに入る。
あと数メートル、そこで私の両足が凍った。
硝子張りの自動ドアが開く。
私を向かい入れるためではない、マンションの中から誰かが出てきた。
「一之宮小夜子、だな。貴様を拘束する」
硝子に写る赤い後光。
マンションから出てきたのは、赤いスーツを着た女刑事だった。
「抵抗するな。大人しくしていれば五体満足で生かしてやろう」
雨を凌ぐ屋根の下、その女は、何か黒光りするモノを私に向け、やはり威嚇するような強者そのままの態度で、そう告げた。
「な、きゅ、急に何、を……」
言うのですか、と唇は最後まで動かなかった。
その必要はないと、女刑事には、雫が滴る眼鏡のレンズ越しにも分かるほど、威嚇と敵意が視線に込められている。口答えするな。抵抗するな。問答無用だ、と女刑事は無言で私に語りかけている。
「なんで私が！」
だけど私はそれを強く拒絶するように叫び問う。
そんな抵抗すら赤いスーツの女の逆鱗に触れた様に、帰ってきた声には棘があった。
「二時間前は貴様を重要参考人として任意同行してもらう予定だったんだがな。後始末が面倒だが抵抗してもいいぞ。ただし、その場合は四肢は諦めろ」
「な――――ッ」
女の声は無慈悲だ。
息を呑むほど、高圧的な命令だ。
全身が縮むように硬直する。
既に拘束されたよう。
だけど女はゆっくりと、黒光りする何かを私に向けたまま、雨の中に悠然とした足取りで出てきた。ゆっくり、いや、私を脅すようにじわりじわりと近づいてくる。
「来るな！」堪えかねて叫んだ。
「私は何もしてない！　何も知らない！　私はそんなの関係ない！」
悲鳴に近かった。
女はそれを哀れと見下し足を止めた。
「まったく、貴様も取り憑かれているのか」
溜息混じりに毒気を吐き捨て、蔑むような目線をくれた。
「貴様が知ろうが知っていまいが、それこそ関係ない。私が貴様を拘束すると言った以上、それは絶対だ。言っておくがな、これは任意同行じゃない、強制だ。今の貴様は、重要参考人ではなく容疑者だ。もっとも、ほぼ確定だがな」

女刑事が極悪人のようにニヒルに笑う。
「よ、容疑者って、私なにもしてない。そんなの……濡れ衣です！」
両手で庇うように胸の前で構えて、逃走にはほど遠い後退りをしていた。それを冷ややかに女刑事は見届けている。どうせ逃げられる訳がない、と哀れむように眼差しで、濡れ衣ねぇ、と呟いた。
「一之宮小夜子。貴様には殺人未遂の容疑がかかっている」
女刑事が一歩踏み込む。
「さ……殺人――？　私が？」
知らない。そんなの知らない。
私は殺してない。
私が殺したんじゃない。
「そうだよ。知らぬと惚（とぼ）けるか？　それとも黙秘するか？　どちらにしても、賢い選択ではないぞ」
カチャリ、と女が握る何かが鳴った。
「知らない！　私、誰も殺してない！」
私の声が荒れるに比例して、女刑事の声は冷たく。
「知らないね。そうかい。こいつを見ても、そう言えるのか」
私に向けた腕とは別の腕を横に伸ばし、何かを指さした。
カラン、と雨音に混じって乾いた音がした。
女の指先を辿るように眼球が動く、軋む。
顔が振り向く。項の芯が小気味悪い音を立てて軋む。

ヒューヒューと喉が喘（あえ）ぐ。
瞼（まぶた）が、絶叫するように大きく見開いた。
星くずのような水滴の煌めきで濡れた闇の中に、

――人を呪わば穴二つ掘れ。

白い包帯。白い着流し。
白磁のような肌。帯だけが赤い。
純白の少年を、見つけてしまった。
「あ――ぁ、あぁ、――」
衝撃に頭が割れかけた。沢山のモノが躰の裡から絶叫を挙げた。
「貴女の呪術、は無効だと言ったはずです。なのに貴女はまだ、そんなくだらないモノに魅入（みい）られ、夜鳥なんてものに取り憑かれてしまったのですね。一之宮 小夜子さん」
雨の中乾いた音を鳴らし、呪文を唱えながら、白衣の少年は、奇跡のように静かで穏やかに現れた。
それが、悪夢のようだった。
「ぁ、ぁ、ぁ――う…そ……」
うそだ、うそだ。

「そんな、はず、が――――」
あり得ない。
あり得ない。
あり得ない。
「だって……たしかに――――」
死んだ。死んだ。死んだ。呪い殺した。
死んだ。死んだ。死んだ。呪い殺した。
死んだ。死んだ。死んだ。呪い殺した。
呪い殺した、はずなのに――――。
「なんで――――――？」
少年の白衣は、朱に染まることなく純白のまま。
どこも汚れては居ない。
どこも傷ついてはない。
死んではいない。
しっかりと地に足を付けて歩いてくる。
「いや……そんなはず、ない」
頭が壊れそう。
躰が拒絶反応で後退りする。
逃げたい。
こんなの現実じゃない。
悪夢だ。

これは現実なんかじゃない。
「どうした一之宮小夜子。顔色が悪いぞ。そんなに怖ろしいか。たしかに殺したと思った相手が、目の前に現れて」
少年に対して直角の位置の女刑事がニヒルに微笑み、また一歩踏み込んできた。
少年は、風にゆれる木の葉のように近づいてくる。
迫る。
二方向から、悪夢が迫ってくる。
走り去ることを許さない悪夢。
後退(あとずさ)りする足が、ひどく痛む。
ひゅーひゅー。
耳鳴りがする。深いな音が頭に響く。
「い、いや……」
ひゅーひゅー。
誰かが泣いている。誰かが鳴いている。
「いや……」
耳を塞ぐ。
ひゅーひゅー。
だけど鳴りやまない。
「イヤ――――――ッ」
耳に張り付く鳴き声が、頭をふるっても落ちない。

眼鏡が落ちる。
イヤだ、イヤだ、何もかも拒絶の呪文を唱えた。
「鵺にとり憑かれましたね」
その中、少年の声だけが貫くように通る。
「妖怪・鵺は、滅多に姿を見せぬという怪鳥の一つ。ですが『太平記』や『画図百鬼夜行』にはその姿、頭は猿、手足は虎、尾は蛇のような凡そ鳥とは言えぬモノ。ただ似ているのです、その鳴き声がヌエという鳥に」
場違いなほど穏やかな声。
「ただ鳴き声が似ているというだけで、鵺という名を与えられてしまった。そして鳥に似ぬ姿でありながらも、怪鳥と謳われる。姿が見えない、というたったそれだけのことで、人々は怖ろしげな姿を、或いは現れた僅かな手がかりに相応の姿を想像したのです。鵺に限らず、以津真天、青鷺火、波山、送り雀もそう。皆、夜闇に鳴く妖怪、決して鳥とは限らない。そして、すべてが全く違う種とは限らない。ただ現れた僅かなモノ……鳴き声が異なる事で、まったく別の妖怪の姿を想像し、名を与えられた。それは同時に、不可解な現象、謎、不思議というモノ達に都合の良い解釈と答えを与え、訳の分からぬモノとしてブラックボックスに放り込む事と構造としては非常に似ている。
一之宮小夜子さん。貴女が恐れているモノ……貴女に取り憑いた鵺は、決して謎でも、不可思議な存在ではない」
少年が呪文を、不思議な言葉を唱えながら近づく。
来ないで、と拒絶するように後退り。
「何言ってるの、分からない、知らない、私、そんなもの知らない、そんな訳が分からないモノなんか私に憑いてない！」
だからこれ以上来るな、と腕を振って払う。
少年は悲しそうな声で、私の名前を言う。
「一之宮小夜子さん。貴女にそれを直視する勇気と覚悟があるなら、鵺が纏う暗雲を取り払い、その姿を白日の下に晒す事が出来る。決して呪いや祟りの類ではない、至極単純な姿をしているんだ！」
だから諦めないでください、と少年は叫ぶ。
これ以上、私を呪わないで、と私が叫んだ。
「シキ。悠長に呪いを解く暇はない。こいつはそんな生優しい状態じゃないことぐらい、分かるだろ」
オマエは下がれ、と女が叫ぶ。
それでも少年は下がらず近づいてくる。
「一之宮小夜子さん。誰も貴女を呪ってなどいない！」
少年は雨よりも激しく叫ぶ。
「呪いを受け入れる素養も、それを体現する器でもない」
少年は零れる雫より静かに囁く。
「貴女は誰も呪ってなどいない。そして誰もが誰かを呪い祝っている」
少年は女刑事の静止を無視して更に近づく。

「呪いに呪術は要らない、祝うための儀式も必要ない。誰もが口にする一言一言が、呪いにも祝いでもある。そのたった一言を、呪いにするか祝いにするか、それはその言葉を受けた者が決める。言葉一つにだって、何通りの解釈がある、その内どれを選択し決定するかの権利は、常に受け手にある」

少年は歩みを止めた。

四メートルほどの間合い。私はじりじりと後退り距離を広げているのに、その距離はどんどん縮まっていくように感じる。

少年は叱咤するように私の名を叫んだ。

「貴女の呪術は成就しない！」

雨粒が弾ける。

「貴女の呪いで人は殺せない！」

刃のように迫る。

「すべての理不尽を呪いに押しつけ逃避したところ何も救われない！すべての不幸を呪いによって救われようとするのは諦めだ！　不都合な事実を呪いで隠そうなど、そんなものは蒙昧無知で愚昧な勘違いだ！」

それを認めなさい、という怒号に継ぎ、

「貴女が呪いで隠しているモノを直視するんだ！」

目を背けるな、と叫ぶ。

そして、目に見えない刀を突き刺すように、

少年は間合いに踏み込み、

「貴女を呪っているのは――――、貴女自身だ！」

その幼い声を厳かに闇に響かせた。

その瞬間、世界中の音が途絶えた。

うそだ、と呟く否定さえ聞こえない。

そんなはずない、という拒絶さえ突破して、脳裏に浮かぶ映像。

――人気のないホーム。

私はアイツの背後に近づいて、

その忌々しい背中を、この手で押した――――？

違う違う、と突き放す。

来ないで、と身を震わせた。

――ナイフを持ったのは私の手。

その手が、刺した。

確かに、■■を私がナイフで刺した。

銀色の鉄を辿って流れた血が手に触れて、

それが火傷しそうなほど熱かった――――。

「うそだ、うそだ……私、私が、そんなこと……」

するはずがない、と呟えた。

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ、うそだ――――ッ！」

内側から壊れていく音が聞こえた。

それを塗りつぶすほどの叫びで頭が割れそうになる。

「一之宮小夜子！」
女刑事の怒号に身体が跳ねた。
これ以上、何か言われたら死んでしまう、と思った。
思う寄り前に躰は逃げ出す事を選んだ。
「待て！」という誰かの叫びを振り切って逃げ出した。
背後から肉食獣が駆けだしてくる水飛沫が聞こえた。
猛禽の獣から逃げる野ウサギのように、命がけで逃げた。
一度でも躓(つまず)けば捕まる。捕まれば壊されてしまう。
だから、逃げた。
どこへ――――？
非常階段へ走り込んむ。
螺旋(らせん)階段を駆け上がる。
コンクリートの階段を蹴る。
張り詰めた音が喧しく鳴り響く。
一つ、二つ、交互に鳴る。
それが二階まで上がり切る前に増えた。
女が階段を駆け上がってくる。
振り返る暇はない。
駆けた。
壁のような手すりに何度かぶつかる。
構いはしない。
躰が傷つくことを躊躇う余裕はない。
一段一段丁寧に登る気品は必要ない。
飛ぶように駆けた。
跳ぶ。
走る。
駆ける。
登る。
駆け上る。
待て、と突き上がる地獄からの叫び。
落ちないように、必死に登った。
追いかけてくる。
地獄からの使者。私は地獄から天国へと逃げる亡者。
それでも構わないから、駆け上る。
二階、三階、四階。プレートが過ぎ去る。
足が痛い。股をあげる度に筋が幾つも断線していく。
痛みに悲鳴をあげそうになる。そんな余裕はない。
そんなものは余分。悲鳴をあげる力があるなら駆ける。
もっと速く。
もっと高く。
もっともっと上へ。
五階の踊り場へ辿り着いた頃には、呼吸をすることさえ忘れていた。

身体はすでに五階と六階の間の踊り場へと駆け上がろうとバネのように屈んで、踏みだそうとしていた。

その時、銃声が響いた。

「ひぁ――――――」痙攣した悲鳴。

たった一息もらしただけで、私の身体は、その場に崩れて夢から覚めたように熱が失せた。

「止まれ一之宮小夜子！」

振り返ると、五階と四階の踊り場で女刑事は仁王立ちで黒光りする鉄の塊を両手で構えていた。それが銃だと気づいたとき、全身の力が抜けていく。

「逃走はもっとも賢くない選択だ」

女刑事はまるでたった今ふと現れたように呼吸をスーツを乱れることなく、銃口を私に向けたまま一段一段上がってくる。

「手足が大事なら動くな。そうすれば少しは手厚く拘束してやる」

サディスティックな言葉を吐きながら、女がじわりじわりと近づいてくる。

動けない。絶対的な強者の眼力に、筋肉が弛緩してしまって呼吸一つすらマトモにできない。

一段、また一段と女が階段を上がってくる。

黒い銃口が、まるで獅子の口のよう。

あと数歩で、喰われてしまう。

その数歩は、無いに等しく、私は既に獅子の牙にかかっているようなものだ。

だけど、諦めきれず立ち上がろうとした。

同時に、女の銃口が軋みあげる。

瞬間、銃声と

「危ない！」

切迫した怒号が響いた。

目を瞑った一瞬。

銃声は余韻を残さず消え、目を開けると、私に銃口を向けていた女は、白い少年に覆い被される格好で地面に平伏していた。

そして私は、まだ生きている。

「シキ、貴様何を！」

「虎子さん伏せて！」

立ち上がろうとした女刑事を少年は組み伏せた。

それとほぼ同時、女刑事の横の壁に何か辺り、コンクリートの破片が宙に舞った。遅れて微かな銃声。

「狙撃！」女が一瞬で状況を掴み、少年の襟を掴んでバックステップで踊り場まで跳び退いた。

その移動を狙うように、再び銃弾がコンクリートの壁を打つ。

都合三発の連射。

女が身を屈める。

その瞬間、私の躰が爆ぜるように達上がった。
それを女が見逃さない。
「待て！　止まれ！」女の銃が火花を鳴らす。
既に駆けだそうとした私の右股を掠めた。
悲鳴を上げなかった。止まらない。
これが最後のチャンスだと、私は感覚すらなくなった足を置き去りにするように上へと駆け上がった。
下から怒号が響く。
それでも止まらない。
止まってはいけない。
止まってたまるか！
狂ったように手足を振るわせ。
狂ってしまえば楽になれるのに。
狂ってでも帰りたかった。
駆け上がる。
何度か階段を踏み外して膝を打った。
何度か壁にぶつかって手を打った。
何度か這い蹲って立ち上がった。
何度も泣きて助けてと叫びたかった。
何度も、ママ、パパと嗚咽した。
7のプレート。

登り切り、平坦な道に上り出ると、足が縺れて転げてしまった。
痛みが全身に響く。
嗚咽（おえっ）で溺死しそう。
手足の先から千切れてしまいそうな痛み。
這って。
跪（ひざまず）き。
痛みしかない足で踏ん張って、立ち上がる。
壁に肩をあずけ。
壁を手がかりに、
壊れかけの足を引っ張って、
私の眼はすでに一つのドアへ、
そこへ、はやく、はやくと気持ちが躰を引っ張る。
体が重い。体が邪魔。体なんて要らない。
はやく帰りたい。
はやく帰りたい。
家に、帰りたい。
帰りたい。
そこは、私を拒まない。
家に帰りたい。
そこには、パパもママもいるから。
それだけで、すごく安心できた。

「パパ……ママ……」
なぜだか、すごくパパとママに会たかった。
いつもはそんなことも思わないのに。
小さい頃は、よく泣いていたけど、
そんなことが日常になると、私は泣かなくなった。
パパとママは私のために働いているんだから、泣いちゃダメだって自分に言い聞かせて我慢してたけど、本当は一緒にいて欲しかった。
仕事なんかより、私にもっとかまってよ。私を見て。私と話しをしてよ。一緒にご飯食べたり、どこか行ったり、どんな事でいいから、三人一緒に話を――――本当はもっと、もっと一緒に居たいと思ってたんだ。
だから、嬉しかった。
パパが帰ってくるのが。ママが帰ってくるのが。
だから私は、ベッドに入っても玄関が開く音をずっと待ってた。
知ってたんだよ。パパとママが夜遅くに帰ってきて、リビング行く前に、そっと私の部屋の覗いて「ただいま」って言ってること。だから私も、行ってきますって、パパとママを起こさないように、だけど玄関でちゃんと言ってるんだよ。
「パパ……ママ……」
夢見た宝物のように、ドアノブに手を伸ばす。
「パパ……」
それを手がかりに体を引き寄せて、

「ママ、……」
重たいドアを僅かに開けて、隙間から家の中へ転がり込む。
倒れた拍子に靴が散乱。ドアはその重みでゆっくりと閉じる。
バタン、と閉まって途端に外の音が途絶えた。
家の中。匣の中。外と隔絶(かくぜつ)された世界。
安堵に乱れた呼吸をそのままに、大きく息を吐いた。
途端に何かが途切れたように顔が熱くなって涙が出た。
「はぁ―、ぅっう、はぁ、あ―、パパ……ママッ」
這(は)って、壁を這うように立ち上がって歩く。
床に足が触れる度に、全身に激痛が奔る。
痛くて、痛くて、もう歩きたくない。
だけど、長い廊下の先のリビングへ行きたかった。
リビングに、パパとママの部屋があるから、そこにはきっと二人がいるから。
長い廊下が、目眩がしそうなほど長く感じる。
遠い雨音。
薄暗い廊下。
長い長い暗闇。
微かな光はゆらゆら揺れる。
意識を蝕む痛み。
気が遠くなる。

気が薄れていく。
気絶してしまいそうだ。
きっと、何度か気絶している。
だけど、足は止まらない。
リビングのドアが見えた。
寄りかかってドアを押し開ける。
カーテンを閉め切られて夜闇も暗いリビング。
いつも小綺麗にしている。
ソファにはパパの背広が投げられたまま。
テーブルにはママのお気に入りのバッグ。
パパとママが帰ってきている合図。
「パパ、ママ……」
――怖いよ。
倒れそうな体で、リビングの端へ。
「パパ……」
――痛いよ。
ドア一枚隔てて、パパとママの部屋がある。
「ママ……」
――寂しいよ。
いつも閉められた部屋には、パパとママが。
――だから、

その扉を開いたら、きっと二人がいるから。
――私を独りにしないで。
「た……」
今日だけはパパとママに思いっきり甘えよう。
――ぎゅっと抱きしめて。
いつも我慢してたんだから、今だけ甘えさせて。
――怖い夢が覚めるまで。
お願いだから、今日だけは子供みたいに甘えさせて。
――ずっと一緒にいて。
せめて、私が泣きやむまで、私だけのパパとママでいて。
「ただいま――」
震える両手で扉を掴んで開いた。
重く硬い扉が弾ける。
翼を広げるように手を広げた。
そのままパパとママに飛び込むように、
「パパ　ママ――」
敷居を踏み込んで部屋の中へ入った。
風が吹いた。
「っぅう――――！」
その風は腐っていた。
吐き気でその場に屈んだ。

腐臭。生臭い。鼻孔を抉るような鉄の匂い。
吐き気が喉元までこみあがる。口を押さえた。
息を止まる。
ひゅーひゅー、と鳴く。
風が鳴く。
生臭さが脳髄を犯す。
点滅する意識。
ヒューヒュー、と鳴る。
埋め尽くす雨音。
微かな光。
圧倒的な暗闇。
ベッドがある。白い壁紙。机。タンス。絨毯。暴れるカーテン。パパとママの匂いが微かに残るこの部屋。
カーテンは千切れ。絨毯は黒く固まってる。タンスに幾つもの切り傷。机は倒れ、椅子は壊れ、白い壁紙には黒いペンキが爪痕のようにぶちまけられ、ベッドには大きな黒い染みがあって、
その上には――――二つの匣があった。
蓋が開いた匣から、
一つは長い髪が生えていた。
一つは二つ腕が生えていた。
「パパ……？　ママ……？」
二つの匣は黒い血に濡れている。
それが誰の血なのか、
「っう……」
分からないのに
「あ、あ、ぁ、ぁぁぁ……」
どうしてだろう、
「アァァァァッァァァッァァ――――――」
涙があふれてくる。
「パパ？　ママ？　あ、あ、あ、あ、れ？」
足を支えていた糸が途切れて、崩れ込む。
「あ、え、あ、な、なん、で？　パパ？　ねぇ、ママ？」
口元を抑えていた手の糸が途切れて、
生温い息と唾液が顎から喉へ垂れる。
「あ、あ、な、んで、う、そ、でしょ……」
私を支えていた糸が途切れていく。
家族を繋ぐ糸が途切れた。
パパとママの糸が途切れてる。
幸せを吊した糸が途切れてる。
ヒューヒューと風が糸を切る。
最後には、理性を繋いでいた糸が途切れて、
「パパ！　ママァァァァァァッァァァァァ！」

獣のように吠えた。
だらしなく舌を出して、
腐った息を吸い込み、
唾液と涙で顔を汚して、
雨音風音塗りつぶして、
躰が壊れるまで、叫んだ。

「　一之宮さん　」

絶叫の中、声を聞いた。
教室で言葉を交わすように呼ばれた。
振り返る。
風に靡くカーテンと暗闇の間に、女の子が立っている。
乱れた長い黒髪。白いワンピース。小柄で、小動物のような円らな瞳は潤い揺らめき、蕾（つぼみ）のような唇を真っ赤に染まった三日月を真似て、可愛らしい微笑みを浮かべている。
喉が壊れて、名前を言えない。
けど、私はその女の子を知っている。
小動物のような女の子の皮を破って、
凶悪な毒虫の舌で唇を舐める人殺し。
「さ、か……き、あやめ――――――？」

榊あやめが暗闇と死体と私の間で、笑みを浮かべていた。
艶やかな煌めき放つ無骨な刃を持った女の子が、微笑む。
とても嬉しそうに。
待ちわびた笑みを零すように。
とびきりの、毒々しい笑みを浮かべている。
擦りきれた音。
混ざり、
響き、
溶けて、
「一之宮さん――――」

ヒューヒュー。
黒く染まり、
闇に染まって、
「――――みーつけ、た」

私を、呪った。

第二章　黒い呪い　（了）

カクレアソビ／幕間

降り続けてた天雫は、誰かの悲鳴で霧散してしまったように細切れにされ霧となり、暗雲から仲間が訪れるのを待つように群れとなって地上に浮遊して、外灯の灯火を甘く溶かしている。

無機質なブロックの長方形。幾人の人達がつまった匣。白濁色のマンション群の一角に、幾つもの赤い光りが霧のなかゆらゆらと揺れていた。

マンションの入り口には黄色いテープが再び張り巡らされ、無闇に人が立ち入らぬように結界を成し、その結界の外縁をパトカーがバリケードのように固めていた。

その白黒の車の列に、一台だけ朧気な空気の中でさえ尚も鮮烈にありつづける赤いスポーツカーが停車している。

運転席は空席。この赤い車の主は、今、何人もの警官達を睨み捨て、規則正しくアスファルトを忌々しく踏みつけながら車に戻ってきた。そして後方へ周りトランクに上着を投げ入れ、タオルを持って運転席へ向かい、ポニーテールに纏めていた髪を解きながらシートに飛び降りるように座り、乱暴にドアを閉めた。それからタオルを頭にのせ、もう一枚のタオルを助手席へ投げた。

助手席には少年が、何かに怯えるように膝を抱え猫のように背中を丸めて置物のように座っていた。

中学生か小学高学年ぐらいの発育途中の華奢で小柄な体格、骨が浮きでた白い肌にはそれよりも白い紬がべたりと張り付き、目元まで伸びる黒髪も艶やかに濡れ、その雫が少年の顔の上半分を覆うように巻かれた白い包帯に染みこみ、流れる幾つもの筋がまるで少年が涙を流しているように見える。

少年は置物のように微動だにしない。投げられたタオルは少年の膝上に置かれたまま。それを不機嫌そうに鬼束虎子は少年の頭に無理矢理かぶせて何度か撫でるように髪を拭いた。その自分の行動にさえ苛立ちを覚えたのか、鬼束は舌打ちを鳴らした。

「死人が溢れているぞ、クソ」

忌々しげに鬼束は押し殺すように言った。

「悲しいです、とても」

感情を押し殺しように本心が読めない声で少年は返した。

「誰が死んだか知りたいか」

本心を探るそぶりすら見せず、鬼束はそう問うと少年は沈黙した。肯定なのか拒否なのか判断がつけ難いが、鬼束は溜息まじりに、勝手に喋り出した。

「まだ断定はできないが、一之宮小夜子の両親が殺された。おそらく、手口からして、例の連続通り魔殺人事件のものだろう」

ちらりと鬼束は助手席の少年の反応を見た。

その視線に気づいたように少年は、そうですね、と呟いた。

そして、震える体を締め付けるように両膝をかかえ、少年は静かに深呼吸をして、震えた声を絞り出した。
「虎子さん。し……死体は、見つかったのですか」
たったそれだけの言葉を、少年は病魔に冒されたような声で尋ねた。
その病が感染してしまったように一息遅れて、虎子の表情はまるで己の死を宣告されたように戦慄に染まった。
「シキ……おまえ……」震える声を飲み込み「なぜ……」と囁いた。
「大丈夫ですよ、僕は。自分の呪いさえ解けないのに他人の呪いなんて解けないでしょ。……ありがとうございます。だけど、教えてください。一之宮小夜子の両親の死体のこと」
虎子は自身を抑制するように数秒瞼を閉じ、開けば凜とした眼差しを少年にむけ、要望に応え話し始めた。
「その二つの死体はリビングに放置されていた。しかも場所は廊下の真ん中に。不可解だが……どうしてか、そこにあった」
少年は覗き見るように微かに顔を動かした。
助手席の少年が感慨深げに息を吐き、まるで前代未聞のウイルスで日本が滅亡したかのような苦悶の表情を浮かべ、額を両ひざに当てるように顔を伏せたのを。
鬼束は言い終えると同時に、少年の反応を窺い観た。まるで何か意見や推理がないか、と尋ねるような視線に、
「不可解なことなどありませんよ」
少年は、良く通る声を発した。
「儀藤家の殺人と、儀藤レナの死体遺棄は別のモノだと思います。犯人が別かはともかく、別の思惑が……いや、思惑は一つでは無かったと言った方が近いでしょう。それと一之宮小夜子の両親が、その殺人に荷担していないでしょう。もちろん、死体が廊下に遺棄されていれば、住人であれば嫌が応にも気づくでしょうが、ご両親はそれに気づかなかった」
「ほう……それはなぜだ」
鬼束は腕を組み話をするより、少年の話を聞く体勢に入った。
「ご両親は、死体を発見するよりも先に、殺された可能性があるからです。検死を行えばそれは分かることでしょう。僕の考えがもし正しければ、儀藤家と一之宮家の事件は、同じ場所で起きた、まったく別の思惑の下で起きた事件だと思います。そして儀藤レナ、一之宮小夜子の両親の死体も、僕たちが部屋に入る直前に、運ばれたかもしれません」
納得できないと言うように、鬼束の目は細くなる。
「……確かにその可能性は否定できないが。だがな、なぜそんな面倒な事をする。隠すなら他にもある。このマンションは空き部屋だって幾つもある。なぜ、一之宮家の部屋に、それも隠そうともせず堂々と放置したと言うのだ。そんな事をして、何になる」
沸き上がる疑問をそのままぶつけるように、鬼束は早口で問いかけるが、少年はペースを乱さず、

「一之宮小夜子に対する呪い、だったのかもしれません」
幼い声を低く響かせた。鬼束の見開かれた眼が、猛獣のようにギラリと煌めき少年を捉えた。不愉快感と憤怒が込められたような視線だ。
「シキ。貴様は、呪術は無効だと一之宮小夜子に熱弁したはずだろ。それがなぜ、呪術などと言う」
鬼束の刺すような声に、シキと呼ばれた少年は膝を抱えていた片手で口を押さえ、俯いた顔を上げ遠くの方を眺めるように答えた。
「確かに言いました。でも、それは一之宮小夜子が行っていた呪術が無効だということであって、呪術そのものには、有効に働くモノもあります。神社の神木に藁人形を打ち付けるのはただの自己満足。あくまでも相手に対して何かを発信し、相手がそれを受信しなければ、呪いは成立しない。だから、ただ悪口を言うだけでも、それは呪術になります。たとえば、僕が毎日毎日ことある事に『大橋は不吉です、とても危険だ』と言えば、虎子さんはどうしますか？」
「そうだな……オマエの忠告なら用心して大橋をなるべく避けるかもしれんな。執拗に言われれば誰だって、意識はするだろうよ」
「それは虎子さんの意志ですか」
「そうだ。私に命令出来るヤツは、この町には二人しかいないからな」
「それが呪いであり、呪術です。ある事柄を意識させ、ある行動を本人の自由意志によって選択させ実行させる。たとえ僕の話になんら根拠がなくとも、あらかじめ虎子さんが僕の忠告を真摯に受け取ってくれる関係を形成し、虎子さんに有効な言葉を選択して発信することで、ある程度の呪術は成立するのです。無論、呪術は言葉だけではありません。強制力を伴わなず、相手の選択肢を狭める環境を作り上げる事も呪術です。一言に呪術と言っても、多種多様とありますが、いずれも呪術として必要なのは、人為的な刺激を与える事です。言葉にしても環境にしても。だが、一之宮小夜子が行った呪術は、人為的な刺激を与えず、超自然的な作用によって相手に刺激を与える事を期待する類の呪術なのです。少々文学的ですが、少なくとも、そう装わなければ呪術として成立しない呪術を一之宮小夜子を選んだ。もちろん、僕が例えに使った呪術も、装うと思えば、超自然的な力だと騙る事もできますし、それが有効的に働く場合もあります。無根拠な発言でも本当に大橋で何か事故があり、僕の忠告で虎子さんが助かっていたら、僕が、神のお告げですと言っても平時に比べれば信憑性を得ることが出来るでしょう。虎子さん。もっとも簡単な呪いって何だと思いますか？」
突然の問いかけに完全に聞き手に回っていた虎子は一瞬戸惑い、
私ならそんなまどろっこしい事せず殴るな、と答えた。
「明快ですね。でもそんな事をしたら『虎子さん』が『殴った』その結果『怪我』をしたんだと分かってしまう。それだと『呪い』ではなく『暴行』になってしまいます。もっとも簡単で効果的な呪いは、相手に自分が呪われている、と自覚させる事です。君は呪われていると執拗に言い続けるのも良いでしょう」

「なんだ、たったそれだけのことか」
「それだけですが、四六時中、自分は誰かに呪われている、と思いこんでしまったら辛いですよ、きっと。何か起きても、小石につまずいて転んでも、これは自分に対する呪いだ、と解釈してしまう思考が続いたら、躁鬱状態になるのは時間の問題です。虎子さんが答えてくれた、相手を殴るという単純明快な答えを使わせてもらえば分かるように。
『呪い』はあくまでも『呪い』でなければダメなんです。呪いが暴行では成立しません。当たり前の事を言うなという風な顔をしてますね？
はい、当たり前の事です。肝心なのは相手が『誰』で『どうやって』呪っているのか『分からない』事なのです。相手の正体と仕組みさえ分かってしまえば『呪い』は呪いではなくなってしまう。正体を暴き道理を明らかにし、その理由を作るのが『解呪』なのです。僕は、それを彼女に行おうとしていた。なぜなら、一之宮小夜子にかけられた呪術は、まさにこの類の呪いだったからです」
静かに詠うように、
「一之宮小夜子には、鵠がとり憑いている」
シキの声が密室に木霊する。
「おそらく一之宮小夜子は、周囲の人達の言葉に翻弄され、吹き込まれた呪術を妄信し、周囲で起きる悲劇に自分との関係性を作り、その原因は自分が呪われると思いこみ、確信してしまう言葉を聞いたのでしょう。声だけ囁きかけ、被害妄想や強迫観念を煽っていたのです。決定的な呪術をかけるため、暗雲に姿を隠しながら。鵠の正体を暴く事は難しい事ではありません。でも一之宮小夜子には、誰が自分を追い詰めていたのか、それは特定させないように呪いをかけたのでしょう。彼女は誰が呪っているのかに執着した結果、呪いの正体……鵠の姿を暗雲から引きずり落とす事をしなかった」
シキは沈み込むような声で言い終えて、細く息を吐いた。隣では鬼束もまた感嘆の息を吐いた。
「あぁ――――それでか。なるほどな。……だがシキ。やはり貴様の話は回りくどい。端から一之宮小夜子は何者かにマインドコントロールされ、被害妄想で自滅したと言えば簡単だろ」
「そんなに割愛したら虎子さん、文句言うじゃないですか」
「ともかくだ。どんな手を使ったかは概ね了解したが、目的はなんだ。一之宮小夜子を精神的に追い詰める目的は何だと言うのだ。もちろん、分かっているんだろ。シキ」
恫喝めいた問いかけに、シキはいいえと首を横に振った。
「鵠の目的なんて分かりません。今の話だって、僕は鵠の軌跡から推理しただけの、戯れ言のようなものなのですから。目的なんて本人に聞いてください。鵠の真意なんて、僕にはわかりません。でも、一之宮小夜子がどうなったかを見れば、途中目標は分かりますよ」
シキは初めて鬼束に顔を向けた。そして包帯に覆われた両眼で鬼束を睨むように捉え、よく響く声で言った。

「一之宮小夜子は行方不明になった。そして、榊あやめが発見された」
「そうだ。それも不可解な点だ。なぜ行方不明になっていた榊ああやめが、よりにもよって、このマンションで発見された。保護した警官によれば、茫然自失したようにふらふらと六階の廊下に突っ立っていたと言う。おまけに、一之宮小夜子は……どうやって我々の前から姿を消したんだ。狙撃から逃れるためにエレベータをつかって七階まで上がるまで、せいぜい三分弱かそこらだ、長くて五分以内だ」
「虎子さん。たしかマンションの周りには見張りを立たせていたのですよね」
「ああ、数名だがな。鳥口はロビーに立たせていたからエレベータは使っていないだろう。だが、ベランダも外から見張らせていた。だから、一之宮小夜子が自宅に逃げた時点で、あの部屋は密室だというわけさ。逃走経路などないし、後から押し寄せた警官の群のせいで逃げる隙などあるわけがないはずなんだが。これではまるで……」
鬼ごっこか隠れんぼだ、と鬼束は抑制した声で怒鳴った。
「まさか、一之宮家の事件と榊家の事件の犯人は同一人物か」
彼女の部下ならば呼吸停止しかねない鋭い声の問いに、シキは微動だにせず答えなかった。
「一之宮家での唯一の生存者の榊あやめが、あの三人を殺したのか」
その問いにも、シキは答えなかった。
「一之宮小夜子はどうやって逃げた。どこにいる。誰が呪った」
徐々に苛立ちが込められた声にも、シキは沈黙を続けた。
「この事件は匣事件の一つなのか、それとも祟りの事件なのか」
沈黙し続けるシキに、鬼束は殴るようにシキの胸ぐらを掴んで引き寄せた。ヌイグルミようシキの躰はいとも簡単に体勢を崩され、鼻先までシキを引き寄せて、
「シキ。どこまで真相を見えている！」
鬼束は押し殺しように道号をぶつけた。
「今、この街で起きた幾つもの事件。連続匣入り事件、榊家と一之宮家、儀藤家の惨殺事件、ネバー・モア売人殺人、明神家に蕪木（かぶらぎ）家殺しの班員は誰だ。なぜ鳥居礼慈が殺されなければならない！　誰が誰を殺した、誰が誰を唆（そそのか）している。シキ。――――――犯人は誰だ」
答えろ、と鬼束が詰め寄る。
怨敵を目の前にした敵意と殺意さえ込められているような鋭い眼光を浴びせられながらも、シキは黙し続けた。
「シキ。私は、この町で起きているすべての事件には、どうも同じ意志が、組織的なものを感じる。これは私の直感だ。根拠など無い。だが、偶然では起こりえないほどの共通点や関連性があるのだ。誰かが裏で糸を引いてるとしか思えん。これは私の思い違いだと思うか？」
「いえ、虎子さんの直感は素晴らしいと思います」
シキは不敵に微笑み言った。
「この世に起こる事象すべて偶然しかない。

そして、人の手が加わることで、必然が生まれるのです」
「あぁ――――」鬼束は、悩めかしい息を漏らした。
「虎子さんが仰る通り、僕もこの事件には、誰かの意志が共通してあると思います。一之宮家の事件にしろ、榊家、儀藤家、ネバー・モア、匣入り殺人、すべての事件の実行者は違えど、おそらく同じ人物の思惑をすべての実行者に届けている者がいるでしょう。それこそが夜鳥です。
姿は見えないが、声だけは聞こえる。夜鳥の系譜は、鵺、以津真天、青鷺火、波山と聞く者によって様々な姿をなし、あたかも全く別のモノが複数いるようで、だが、すべてがまったく別のモノだと言い切れない。この事件に隠れる夜鳥に限れば、鵺であれ以津真天であれ、青鷺火であれ、すべて同じ夜鳥です。糸で操っているのなら絡新婦（じょろうぐも）ですが、夜鳥ですから誰かの願いを運び届けているのです。そしてその願いがもっとも強く現れているのは、匣入り事件なのでしょう」
シキは言う。
「匣の中には、願いが隠されている」
塞がれた両眼は姿の見えぬ鳥を射抜くように、
「匣は、夜鳥が持っている」
明瞭な言葉で告げられた。
「黒幕は――――――真犯人は誰だ！」
鬼束のすり切れた怒号に、シキは落ち着いてくださいと促した。
そして、暫く沈黙して震える声で言った。
「虎子さん。急いで神社に戻ってください」
脈絡のないシキの言葉に、鬼束は面をくらった様に目を丸めて、なぜだと理由を訊いた。
「もしかすると、夜鳥が現れるかもしれない」
「なに――――――？」
唖然と口と目を大きく開ける。思考が一瞬、シキの言葉についていけなかったのかもしれない。
「なぜ、鳥の森神社に……」
「僕の予測が正しければ……外れていて欲しいのですが。僕の罠を知った夜鳥が次にとる行動は、いや本命はおそらく、姉さんかもしれない」
「……馬鹿者！　なぜそれをもっと早く言わん！」
突き離すようにシキの胸ぐらを放し、その手は瞬時にハンドルを握りしめた。そしてエンジンをかけタオルを助手席に放り投げ、アクセルを踏み込んだ。
「シートベルトをしろ、舌を噛むぞ」
そう早口に告げて、爆発するようなエンジン音を響かせ、弾けるように車を発進させた。
赤い車が過ぎ去った所からは悲鳴や怒号が湧いたが、それさえも凄まじいエンジン音に押しつぶされる。車内とて、それは響いて声など聞こえるはずもない。
だが、シキの声はそれでも鬼束の耳に届いた。

「虎子さん。夜鳥が誰なのかは、まだ確証はありません。でも、すべての事件の契機となった人物なら……」

シキの突然の告白に、鬼束は少年を一瞥し険しい表情を見せた。

「契機……元凶か。それで、その極悪人はどこのどいつだ！」

鬼束は獲物を狩る獣めいた険しい目つきで前方の暗闇を睨みながら、アクセルを更に踏み込んだ。

シキは深呼吸をし、まるで大切な人を失った心痛な思いを噛み殺すように、閉じた口をゆっくりと開いた。

「シキ――――――」

とても穏やかで静かな声が、激奏の渦の中、鋭く響いた。

「――――――僕が、すべての元凶です」

（了）